思い出で綴るチエテ郷土史

拓魂のうた

拓魂のうた発刊委員会

思い出で綴るチエテ郷土史

拓魂のうた

序文

河合　武夫

今回、香山氏の編纂された「拓魂のうた」に序文を書くようにとの御依頼でまことに光栄であるが、一応原稿に目を通してから彼と面談の際、とくに「追憶編」から強い印象を受けた旨話すと、「あれを纏めるのに、まる二年間を費やしました。それぞれの執筆者を納得させて、慣れないペンを執らすのは大変ですよ、そして変わった話題を語らせる・・・」　私共はこのチエテ移住地にきて、このような経験をしましたが、何十年かして今はこのようなことになってと言う叙述と共に、彼らをブラジルに移住させた組織やその組織の中で夫れ夫れの役を演じたのは、どのような人々であったかに視線をあて鮮明化を試みる歴史編を、同時に発表するこのような着想を遅疑せず実行するのも、幼少から実生活で叩きあげた彼らしいとの感を深くした。

とくに日本力行会長永田稠氏、現地の輪湖俊午郎氏等の抱負や長野県知事梅谷光貞氏の活動を語り、海外協会から一転して実業家平生釟三郎氏、宮坂国人氏、加藤好之氏を中心とするブラジル拓殖組合の実務的な移行を語って間然するところがない。

筆者もこの歴史編に記載の三重県海外協会員大瀬東作氏（わが郷里隣村の村長）の話を聞いてブラジル移住を決意したのであった。

前述のように追憶編はとくに生彩に富み、チエテ移住地名物のペスカ（釣り）に関する記事が多く、わが生涯の道楽でもあるが、

筆の滑りすさまじく、二十メートル、三十メートルの大蛇スクリーに出会わした御愛嬌の記事も出ている。
ただし学会では、大きさ十メートルに達する爬虫類の現存生息を実証すれば何万ドルかの賞金をうけることになっている筈であるからこのところは御抑制を、・・・。

「拓魂のうた」発行に寄す
ペレイラ・パレット文化体育協会

会長　金　子　　堅太郎

我がチエテ移住地はペレイラ・パレットの名のもとに来年は七〇周年を迎えようとしております。
いまや日系社会は大きく変わり、世代は二世、三世の代となりつつある時、チエテ移住地の存在も世代の交代と共に忘れられて行くのではないかと深く憂慮されていたのが当地出身の一人、香山栄一氏であった。
同氏はこのような心情から不自由な身でありながら二ヵ年に亘り、一切を傾注して思い出を綴るチエテ郷土史の記述の編纂にあたり、この度「拓魂のうた」の上梓を見るに至ったことは誠に時宜を得た壮挙であり、同氏は本懐これに過ぎるものはないでありましょうが、我々チエテ人として最愛の郷土七〇年の尊いこの郷土史の発行こそ、次の世代への最大の贈物と言えます。
ここに同氏の偉業に対し深甚なる敬意を表する次第であります。

一九九七年七月

MENSAGEM:

O HOMEM DA TERRA LANÇA A CORRENTE DA EVOLUÇÃO, BUSCANDO CAMINHAR NA DIREÇÃO DA PAZ, FAZENDO BROTAR OS ACONTECIMENTOS HUMANOS QUE O LEVAM AO DESENVOLVIMENTO, AO PROGRESSO.

O PRESENTE LIVRO REVELA A FIRMEZA DE CADA UM DOS GRÁFICOS, CUJAS LINHAS TRAÇADAS COM PRECISÃO, MOSTRAM A LUTA, A PERSEVERANÇA, A PACIÊNCIA DE UM POVO QUE HOJE É O ORGULHO DE PEREIRA BARRETO, CONSTITUINDO O EXEMPLO VIVO QUE LOGROU O ENALTECIMENTO DE TODA SUA GRANDE ESTRUTURA MORAL.

AGRADEÇO E ME SINTO HONRADO PELA OPORTUNIDADE CONCEDIDA, ONDE MANIFESTO, DE CORAÇÃO, ESTA MENSAGEM. PARABÉNS AO REDATOR "EIICHI KAYAMA" POR ESTE LIVRO, QUE, COM CERTEZA, LEVARÁ MUITAS ALEGRIAS AOS LARES PEREIRABARRETENSES.

PEREIRA BARRETO, 28 DE JULHO DE 1997

JORGE YANAKA
PREFEITO MUNICIPAL

懐かしき移住地チエテ

写真説明

一九二四年のルッサンビーラ駅（上）
一九二九年五月 チエテ移住地ブラ拓事務所建築中（中）
移住地時代の唯一の行楽地 イタブーラの滝（下）

写真説明

▽一九二九年四月、ブラジル拓殖組合設立披露の翌日、組合事務所にて武石潜蔵、輪湖俊午郎、梅谷光貞、畑中仙次郎、杉山英雄、松岡又一、アンドラーデ（順不同、上）・▽一九二九年五月、新造のバルサで輸送力を倍増させたチエテ河の渡河（中）・▽一九二九年五月、パラナ河本流のウルブブンガ大滝、滝下には大小の魚群が飛び跳ねていた。（下）

写真説明

▽上右＝櫓の上から写した建設中の橋の眺め
▽上左＝両岸の櫓
▽下＝両岸の櫓とアーチの骨組

▽右上 1929年5月、チエテ移住地前地主ジョーナス氏宅庭にて、向かって右から輪湖俊午郎、ジョーナス・デ・メーロ、梅谷光貞、▽右下1929年5月、ウルブブンガ下流で釣り上げた魚、前列向かって右から梅谷、ジョーナス、輪湖、▽左上架橋地点を調査する輪湖、梅谷、▽左下1929年5月、移住地内ペローバ樹木の原始林にて、向かって右から梅谷光貞、不明、輪湖俊午郎。

写真説明

上＝多数の移住者を迎えたルッサンビーラ駅
中＝移住地内のアルゴドン畑
下＝一九四四年、ブラ拓が建設したベレイラ・バレット市役所

写真説明

▽上からアーチの完成後片側の櫓を取り壊したところ、▽真ん中は橋桁建設中　▽下段は完成したノーボ・オリエンテ橋

写真説明　▽チエテ婦人会の国防献金のための棉つみ作業

写真説明 ▽一九四〇年、チエテ会館前にて、チエテ産業組合役員会

「拓魂のうた」目次

序文　河合武夫　１０
メッセージ
ペレイラ・パレット市長
田中ジョージ
「拓魂のうた」発行に寄す
金子堅太郎
写真集　５
懐かしきチエテ移住地
ルツサンビーラ駅、森に繁るペローバの大樹、広大なアルゴドン畑、水豊かなパラナ河、その支流に架かる太鼓橋、ボンテ・ノーボ・オリエンテ、自然と近代が美しく織り成す、懐かしくも麗しき茫々の我らが郷土

歴史編

伯国に於ける日系移民の概要　杉谷茂一　１４
チエテ植民地創設　香山栄一　２４
初期ブラジル移民の歩み／笠戸丸来る／東京シンジケートから海興まで／チエテ河畔最初の邦人／海外移住組合連合会の設立／連合会からブラ拓

設立まで／梅谷専務理事報告演説要旨／土地購入の辛苦／ブラ拓の功績／移住地のパイオニア／平生釟三郎時代／梅谷光貞略歴／輪湖俊午郎略歴／チエテ移住地年表　87

ブラ拓とチエテ移住地　湯朝　信助　104

チエテ産業組合とブラ拓との関係　／ブラ拓製糸工場のこと／ブラ拓事業に就いての感想／備考

チエテ河とバンデイランテ　岡井　二　郎　117

バンデイランテの発生理由　／チエテ河の沿革／インジオの生活を見る／バンデイランテの出発／バンデイランテの行路／チエテ河下航記／バイアグワス族の襲撃／バンデイランテに関する挿話

追憶編

チエテ移住地の思い出（河合武夫）　149

移住地の挿話　（湯朝信助）　157

忘れ得ぬチエテ　（末原久開）　174

入植初期の思い出　（岡井二郎）　185

チエテ移住地の追憶（八木修平）　192

思い出のあれこれ（吉井　厳）　198
チエテ移住地の追憶（古川知則）
サンジョゼ小学校時代（小野寺郁子）
遠い思い出（石井かず枝）　210
青年学校設立（前田伊一郎）
或る日の青年会の出来事（堀石明雄）
チエテ時代の思い出（重岡・森川光子）　227
チエテ橋沈下惜しみて写す友（奥野精一）
青春の尊かりし頃（江頭末一）
チエテの思い出（栢野桂山）　244
入植当時の思い出（高山晴郎）
私と俳句とチエテ（佐藤桃生（秀逸））
農業落第生（菅井進一）　259
遥かなるチエテ移住地ドラード区（大石武司）
入植当時の思い出（上原萬平）　276
チエテ入植思い出の雑感（土屋一治）　279
思い出あれこれ（広田栄一）
チエテ移住地と産組（原田　寛）
チエテと私（工藤・輪湖政子）　289
チエテ移住地の三重殺人事件（藤堂光義）
木村先生の思い出（前田　撲）
追憶記（坂中喜旭）　300
移住地を偲ぶ（東　喜三）
チエテ愛媛村（田中幸一）　316
ベラフロレスタ初期の句会に憶う（倉内　孝一）　340

歌人志津野華絵と「寄生木」（藤田朝寿）　３４５
ベラフロレスタ俳句会の句友達（秋山蛙声）　３６０
剣道に情熱を燃やして（山田　実）　３７３
回想チエテ産組（芝　忠夫）　３７８
私のチエテ入植（大関昭夫）　３９０
遠い思い出（吉原　源）　４０７
入植当時の想い出の人々（小番哲郎）　４１４
思い出で綴るチエテ（田中秋好）
望　郷（浦旗都家子）　４３０
サント・アンドレ教会の思い出（岡井二郎）　４３６
サント・アンドレ教会史年表
ノーボ・オリエンテ橋（伊木実信、岡井二郎訳）　４４４
＜座談会＞出席者＝念腹、蘇拙、草南、渡南、三珍、徳衛、いさを、蛙声、季青
イーリャ・セッカ縦横談　３６４
執筆者一覧表／編集後記　４５６
付録、地図（チエテ移住地全図）

表　紙　題字「拓魂のうた」福島　甲子
絵「小　憩」半田　知雄
（ブラジル日本移民史料館所蔵）
ポ語表紙　写真ポンテ・ノーボ・オリエンテ

歴史編

伯国に於ける日系移民の概要

杉谷　茂一

ブラジルの国土は大きい。ざっと日本の二十四倍である。この広大な土地に日本人が移住したのであるが、その移住の型は時代の情勢により異りその経過内容は様々である。

移住を大きく分けて戦前移住即ち第二次世界大戦勃発までを前期とし、そして戦後移住が再開されてから今日までを後期と分けられる。そして開戦中を移住空白時代としている。その空白時代は在伯邦人が独自の働きをしていた時代、即ち日本政府と絶縁状態にあり、我が国の移住政策に何ら影響されなかった時代である。

戦前の移住は一口に言えば日伯両国間の話し合いにより進めて来たと言えるが、戦後は国際状況の大きな影響と国内の国粋主義の風潮に刺激され種々の制肘を受け今日に及んだことを知らねばならない。

そして戦後の移住をみる前に、移住政策を述べる前に戦前の移住者の動きと移住政策を見る必要がある。概略を述べるとブラジルに日本人が最初に移住したのは一九〇八年六月笠戸丸によってである。当時伯国は甘蔗栽培にアフリカ土人を奴隷として使役した時代は既に過ぎ、聖州に於いて大耕主が珈琲栽培に人手が不足していた時代であった。

邦人移住者は、未だ伯国の言語、風習皆目わからず、唯輸送機

関と耕主間に結ばれた契約により耕地労働者として彼らの言うままに珈琲園に送られた。そのため現地に到着してから非常な困難に遭遇した。

移住者の送り出し斡旋に当たって、当初は皇国移民会社とか名称は堂々たるものであったが、名ばかりで資本金など皆無で渡航者の供託金を使って糊塗し、着伯後言を左右にして返還しなかった。為に移住者は大いに苦しんだ。

漸く軌道に乗ったのは戦前の海外興業株式会社（海興）と称する政府の御用会社であった。戦前の移住者の大半はこの海興により渡伯したものである。

当時の移住政策は唯単に国内に於ける人口の捌口政策と言えよう。即ち海興は「行け南米へ」の標語のもとに移住希望の家族の内容など問題にせず一家族でも多く送り出し、手数料を稼いだと言えよう。即稼動力の条件に沿わぬ場合は独身者で移住希望者を押し付け、又は戸籍上だけの養子縁組をし渡航させたり、それが為渡伯後種々の悲劇を巻き起こしたが、殆どうやむやに立ち消えとなった。

昭和の初め半官半民の「ブラジル拓殖組合」が設立されて現地に於いて直来移住者を導入するため所謂移住地造成となり、チエテ、バストス、トレス・バラス等の移住地が造成され、その後アリアンサ移住地も前記ブラ拓の傘下に含まれ海興と共に二つの大きな移住者導入パイプ役となった。

それ以前一九二〇年頃、海興は聖州政府より無償、聖州南西地帯に土地を譲り受け移住者を導入した。これが現在のイグアペ、レジストロの開拓地帯であった。

昭和の初期には既に北伯にも移住者は入植しつつあったが、その時代は未だ確たる産業もなく唯漠然とアマゾン開発の名のもとに渡伯していたと言えよう。

ブラ拓初代現地代表梅谷光貞氏が在職時代、チエテ、バストス両移住地に直来移住者が入植しかけた昭和五年頃、ミナス州政府より、サンフランシスコ河の上流沿岸に邦人移住者を導入し開発目的で一万アルケーレスの土地の無償提供の話があり、調査団が組織され現地に向かったものの問題があり中止されたが、若しその時ブラ拓が手をつけていたらサンフランシスコ河周辺地の開発が叫ばれている今日、どうなっていたかと思う。

昭和の初め故国は国内の不況から海外移住熱が盛んになりつつあった時で、伯国に於いてもリオ大使館付武官中西陸軍大佐が盛んに北進論を称えコロニアの注目を浴び、他方サンパウロに於いて日伯新聞社長三浦鑿氏が南進論を強調、連日火花を散らしコロニアを沸かせた。同時に三浦社長は時のサンパウロ総領事中島清一郎と移住政策に意見を異にし、おまけに総領事夫人の私行をあばいて火に油を注いだ状態となり、ついに伯国の内政干渉と官憲侮辱と言うことで国外追放となり、アフリカのカナリヤ島に流された。在伯邦人は挙って彼の帰伯運動をし、一旦サンパウロに戻ることが出来たが、戦前故国を訪れ、終戦後伯国に戻ろうとしたが外務省は査証せず、彼はついに栄養失調で東京で逝去された。昭和の初め南三州に比べれば北伯は全く未開地であったし、聖州には開発の余地が十分あり、何も邦人を苦しめるため北伯に入植させる必要はなかったと言う意見であったろう。

その当時、ある知識階級の一邦人が「アマゾンに行けば猿になる」と言い、当局の物議をかもし、彼が訪日しようとした時、一時許可が出なかったと言うエピソードがあった。

渡伯移住者は益々多くなり戦前年間二万人前後の数字に達すると共に日本政府の援助も活発となり、移住地のごときはさながら本国の一部の感があり、心ある伯人は法律的に次第に制肘を加えるようになり、所謂黄禍論を称える者も出てきた。即ち立憲国である外国に移住し、余りにも日本式に振舞ったことに対する非難の声であった。

元来伯国の移住政策は一九三九年頃、移民法案が議会に提出され喧しく論議された通り、伯国への移住者はヨーロッパ系の文化を継承される者を基調とした所謂民族性、言い換えれば伯国に果たして同化するかどうかで将来伯国が日本移住者を受け入れるかどうかと言う大きな問題が出現した。その結果が林大使時代に二分制限となって現れた。

その頃になると聖州内の珈琲樹も漸く古木となっており、土地も弱りそれに降霜が屢々あり、産業の移動が著しく現れてきた。即、棉作が脚光を浴び始め伯棉の生産は邦人の手により増加の一途を辿っていった。

北パラナ方面には邦人移住地は既に在住し珈琲樹栽培、雑作に従っていたが、英国シンジケート会社が北パラナに所有する肥沃地約五十二万アルケーレスを次々に分譲するや、聖州より移動する家族夥しく、南米土地会社の所有地一万アルケーレスも分譲と同時に忽ち売却済みとなった時で、今日の北パラナの開拓と繁栄に邦人移住者の大いに与かって力あったものである。

日支事変は益々悪化深みにはまり込み抜き差しならぬ事態となるばかりか、英米との国際関係も険悪の一途を辿っていった。

一九四一年太平洋戦争が始まり、外交官、商社駐在員は交換船で帰国、在伯邦人の頼りとするところは自力以外になかった。

伯国は連合国側で、一方的に宣戦布告し在伯邦人は一瞬にして敵国人となった。為に国防上の見地から国境及び港湾近く住居していた者は追放となり一切の財産を放棄して奥地に追われ、特にサントス在住者の被害は甚だしく、当時の金で一億円を越すと言われた。国境近くも同様、殊に南大河州に戦前海興が苦心して入植させたサンタ・ローザ植民地の在住者も追放された。今日、該地を訪れると立派な耕地になっており、移住者の建てた住宅には現地人が住んでいる。

不動産の売買、旅行など一切を禁止された状態となり、然しそれが為却って農業者は営農に励み増産、戦争のため生産物の値上がりにより産をなした。収容所に収容されても伯国人は日本人を特に敵視することなく、恐怖心など更に感じず戦前の生活と殆ど変わりなかった。

一九四五年終戦、日本は海外の全ての領土を失い、国外に在住していた人々は日本に戻ったが、国内は人が溢れ、食料欠乏極度の困衰に陥った。

そして一九五二年対伯移住再開となり戦後の移住が始まった。

国策の中には国民の声の反響が入っていなければ本当でない。特に移住政策にはその移住国に在住する同胞の経験から生まれた

希望や反省が含まれねばならない。

戦前の移住政策と言うものは確かにあったが、その政策と言うものは本国に於いて外務、拓務、農林の三者によって作られ、そして外務省が対外的の施策実施の実権をとっておった。最近のように在住移住者の意見など入っていなかったし、現地側も意見など出さず、全て天下りであったと言ってよい。

然らば戦後はどうであったかと言えば、改良された点もあるが、総体的に言えば移住者の送り出し、受け入れ、定着など旧態依然、むしろ時代の流れに従って言えば退化したと言えるのではあるまいか。即、前車の轍を再び歩いているように思う。送り出し例から言えば移住再開時代の状勢上致し方なかったと言えばそれまでであるが、移住者の選択など無論なく、無定見に受け入れる土地があればどんな僻地にも入れたし、苦しい経験をした既移住者の意見など受け容れず、予算予算と縛られて調査もせず不良の土地を平気で購入し、それが後日コロニヤに幾多の難問題を惹起させた。

戦後移住者が余りにも多くの問題を起こしたのに驚き、当事者は盛んに「量よりも質」と念仏のように称えているが、送り出し機関は旧態依然の送り出しの仕方、コロニアの信用を落とし、対日感情を傷つけた。それより希望を持って渡伯した移住者を苦しめた罪は大きい。

一九五二年対伯移住が再開され、東北伯また麻州に五千、四千家族と導入枠を獲得し、北伯には直来移住者、麻州には新日系移住者導入に力を注いだ。一方南伯はどうであったか、一九五四年

海外移住連合会（海協連）が設立されてから南伯への移民導入が始まった。そして一九六三年までに移住振興と海協連が合体して海外移住事業団が生まれ、海協連は移住者の送り出しと現地に於ける受け入れ業務を行い、移住振興は移住地の造成を行ってきた。その経過を概略述べてみる。

海協連は当時、新移住者の導入は第一に未だ珈琲園就働家族が主で受け入れ希望者があれば導入したがその受け入れに先立って現地の実情を殆ど調査していなかった為、サントス上陸後、移住者は入植条件が異なると種々問題を惹起した。例えば、現地に到着したが未だ住宅が用意していなかったり、物資の配給が不十分であったり、その為集団して強硬に抗議して、埒あかずと総退耕するところ続出し、総領事館、海協連は責任上種々対策に頭を悩ました。

その最も甚だしかったのは、南大河州亜国国境のウルガイアーナ耕地に米作移民として入耕した熊本県より一村を挙げて移住して来た者で、耕主の契約不履行を理由に総退耕を決行した事件であった。

その結果移住地政策の転向となった。即、新移住者のコーヒー園導入は不適、雇用農として既移民者に斡旋、それに南大河州に於ける分益農の受け入れ（家族及び単独青年）となった。

既にその当時コチア産業組合の組合員に単独青年の斡旋、又建設省の産業開発青年隊の導入が行われていた。

直来移住者の導入は益々盛んとなり、パウリスタ養蚕組合が五百家族導入の枠を獲得したのもその当時で一九五〇年代であった。

他方移住振興は移住地造成目的で土地を購入したが何れも素人

の移住地造りに終わり、莫大な資金を投入、移住者は計画に齟齬を来し営農意の如くならず、資金を使い果たし、融資は受けたが借財は増える一方という状態で、悉く失敗に帰したと言える。原因は何かと一口に言えば立地条件が不良の上、確たる営農方針がないばかりか営農指導不十分という具合である。何と言っても先人の意見を尊重せず、所謂官僚独善主義の現れで、その罪は決して軽くない。こんな状態であったから移住地の独自造成など全く絶望となり、今日に至っている。

しかし悪い点ばかりでなく、立派に育成された移住地もあり、集団地もあるが、それは第三者の協力援助があったから出来たものである。

今日漸く基礎も出来、将来に希望を見いだしたと言うが戦後十余年多大の犠牲を出し、負債を負わせ、莫大な国費を消耗したことを思えば、決して受け入れ機関は得意然としておられない。

従来、移住政策、移住行政は官憲が主体となり民これに従うと言う伝説を生んできたが、戦後これが次第に改められて在住者の声が入って来たのは矢張り民主主義の影響と言うことができる。

外務省の出先官憲である総領事館が移住懇談会なるものを開き、在伯有識者、経験者、移住機関の代表者を集め、一堂に会し時の移住者側の声を聞き、希望を汲むと同時に、開かれる中南米移住会議にその声を反映させた事である。然しこれも最初非常に情熱に燃え真剣に討議したが、次第に熱が冷め、最近は通例役員会というような定期例会となり、大切な移住の議論となる提案もなく、その場限りの申し合わせの様なものになってしまった。本会を主催する総領事館側より、寧ろ在伯の出席する代表者側に責任があ

ろうと断じたい。

移住の情勢は時勢と共に変化し、農業移住に代わり技術移住者の導入が次第に盛んとなった。時恰も伯国は工業振興の時代で、急激に技術が要求された時代と重なり合った。雇用農導入は故国の異常な経済成長のため国内に於ける入手不足より渡伯者激減となった。

尤も伯国に於ける農業経済の不安定と労働法の改正は常に労働者側に有利になり、人手に代わる機械農の発展は更に農村に於ける人的要求を退けたと言えよう。

そこで移住政策は移住の振興より一変して既移住者の援護対策に代わり、その為の具体案が立てられた。

一方に於いて第一回の東畑博士の移住理論に次いで第二回の水上達三氏により内閣審議会に答申され盛んに経済提携、国際協調の精神を高揚し移住に対する心構えも唯移住者の送り出しと受け入れ国間の問題でなく国際的になり、唯移住先国で働くと言うような単純なものでなくなった。

それにしてもあの答申文は全く素晴らしくその通りであるが、政府が果たしてその主旨を尊重し、理論通りに動くか疑問に思っている。簡単に言えば、移住の目的は移住者を幸福にすると言うことであり、その幸福とは精神的と経済的に安定することと思う。されば自ら経済提携も考え国際協調も自然と出来てそれこそ好ましい移住者となり、移住先の国に同化し真の目的が達せられると思う。

一九六〇年代には、その他大きな動きとしては北伯開発懇親会

がある。

これは日本政府の移住政策ではない。在伯邦人有志の声に、大使館、総領事館が後ろ楯となり新しい移住地の方面を見つけ開発を研究したものである。ごく簡単に述べれば一九六七年、時の大使田付景一氏の力添えで、細江医師が団長になり、諸般の部門に別れ、それぞれ専門の立場で調査が行われ発表があったが、具体化しなかった。当時の輿論として早く具体案と実行案が作成されねば時期を逸するとの声が高かったが、如何にせん資金の問題で手も足も出ず、一時は事業団の移住地造成、その他これに従属する諸般の業務成果が挙がらぬので資金など出すはずがなく、唯単に第十四号国道の調査というだけに止まった。

この開発はついに調査外れとなった。当時十四国道に沿う優良な土地は他国人の占有するところになっていたと言う。

第二回は近藤総領事時代、笹川良一氏より資金の提供により官民合同の調査団が派遣されたが結果は、これも具体的に何ら発表する所なく、どちらかと言えば評判倒れとなり終わってしまった。

思うにかかる未開発の地帯の開発は、どんな立派な調査団と言えども、そう短日月の間に具体案が纏まる筈はなく、資金と時間と人を得なければなし得るものではない。

そこへゆくと北米などの調査団は人知れず専門家が周到な計画の下に調査をなし、これならばと初めて開発するもので、到底僅かな民間の資金で成し遂げられるものではない。机上の計画は誰でも出来るが、実行となれば中々手は出せない。殊に実行に当たって未開発地に身を犠牲にして飛び込もうとする意気のある人がいなければ初志を貫徹することは出来ない。この第一回調査団

でこれが最後であろう。

少々前に戻るが移住政策は従来の農業移住者導入から企業移住者、技術移住者導入になってきた。

農業移住者導入は時代遅れ、今後は技術移住者導入に力を注ぐべしとし、事実、技術移住者の渡伯が急に増加しつつ新しい方面の伯国経済に貴献しつつある。これも時代の要求で当然であろう。

然し、農業移住者導入をおろそかにしている訳ではない。未だまだ農業移住者の発展する余地は十分あり、殊に邦人移住者のごとく研究心に富み、勤勉な移住者は他国の移住者に見いだすことは出来ない。

殊に最近のように日伯両国間の経済交流の波に乗って、益々企業方面に伸びることは間違いなく、大いに期待されている。

一九八〇年記

チエテ移住地創設

香山　栄一

初期ブラジル移民の歩み

日伯修好通商航海条約が調印されて今年は一〇〇年になる。いまサンパウロを中心とする在伯日系人は、この歴史的な年を記念して協力委員会を結成し、官民一体となって記念事業を次々に推進している。

ブラジルは中国（当時清国）との間に修好通商条約を締結した一八八〇年、日伯両国間にも修好条約締結の前提協議があったが、立ち消えとなった。その後二年、カラード駐支ブラジル公使が訪日の際、修好条約締結の再交渉を日本外務省は提案したが、ブラジル側の気乗りうすで見合わせとなっていた。それから一三年後の日清戦争も済んだ一八九五年十一月五日、日伯両国間の修好通商条約はフランスのパリーにおいて調印された。

その時の日本全権委員は駐仏日本公使曾根荒助であり、ブラジル全権委員は駐仏ブラジル公使 Gabriel de Toledo Piza e Almeida であった。

同条約の批准書が交換されたのは一八九七年二月一二日、パリーに於いてであった。この批准書は交換後直ちに実施された。

駐伯初代日本弁理公使に珍田捨己が総領事を兼ねて赴任し、リオのペトロポリスに公館を設けて発足したのが一八九七年八月二一日であった。

又駐日ブラジル特命全権公使として Ｈｅｎｒｉｑｕｅ Ｃａｒｌｏｓ Ｒｉｂｅｉｒｏ Ｌｉｓｂｏａ が赴任して、ようやく国交が開かれたのである。この人は先年ジャセグワイ少将副全権の中国派遣に、書記として渡日した人であった。なお、当時のブラジル大統領は三代目のプルデンテ・デ・モラエスであった。

日伯間に初めて移民問題が持ち出されたのは修好条約締結前の一八九四年、サンパウロのプラード・ジョルドン商会の代理人が日本に渡り、吉佐移民会社代表佐久間貞一との間に移民輸送契約をしたのに始まる。

然しこの契約は条約締結前であったばかりでなく、珍田公使の同

意も得られず、実行されなかったが、これを契機として日本国内にブラジル移民に対する胎動が始まった。

吉佐移民会社はその後日本郵船の近藤廉平、加藤正義などの有力者が参加して東洋移民会社の発足の母体となり、日本政府が許可しなかったジョルドン商会と契約を実行するため、代表青木忠橘をブラジルに派遣して交渉を纏めた。渡伯した青木はプラード・ジョルドン商会の信用確認などを済ませ、労働移民二千名の輸送を契約し、「交渉まとまる」と会社に打電した。この報に接した会社側は俄然活気づき、在横浜のプラード・ジョルドン商会のミッドルソ代理人と本契約を締結した。

丁度その頃ハワイ移民がアメリカに起こったアジア人排斥運動のため上陸禁止になったので、これをブラジル移民に切り替え、日本郵船の土佐丸で神戸から送り出すことになっていたが、出発直前にプラード・ジョルドン商会から「コーヒー暴落のため、契約の移民引き受け難し、出帆中止されよ」との電報を受け取り、出国は中止することになった。

神戸埠頭に乗船待機中の千余の移民たちは、又々悲惨の状態に陥ってしまい、移民会社側の損害も二九万円を越えたと言われている。移民会社の担当員佐久間貞一はこの損害の保証を珍田公使に要請したが、当時の日本政府の経済状態としては無理だと判断した公使は、この要請を拒絶している。

この時コーヒー値は前年の半値以下の暴落振りで、その後ヨーロッパからのイタリア移民なども半数以下に激減している所を見ると、ブラジル経済に与えた影響は少なくなかったようだ。

これより前、榎本武揚らが設立した海外植民協会から根本代議

士が一八九四年メキシコ、ペルー視察の帰途ブラジルに立ち寄り、かなり広範囲にわたって調査した結果、ブラジル移民の有望性を報告している。そういうことがあってから初代珍田公使の着任となったが、彼は赴任の翌年六月二日病弱をたてに帰国した。また彼は何故か在任中常に対ブラジル移民に悲観的な意見を本省に報告していた。

一八九九年七月、二代目の駐伯公使として大越成徳が赴任したが、この人も「移民会社のブラジル宣伝は極力これを警戒すべし」と報告書に記している。そんな状況であったので外務省は、当時リオ首府の移民勧誘員マルシャル・サンツの日本に於けるブラジル移民宣伝に対し、次ぎのような警告書を各府県知事に発し、移民の旅券不許可を命令していた。

「近頃伯国移民募集の為同国より渡来し、各地移民会社に募集方申入居り候もの有之候由に聞及候処、当省に於ては目下の処同国移民は渡航許可せざる方針につき貴県へ認可出願候者有之候はば認可相成らざるよう致したし」

これではブラジル移民の道は閉ざされたようなものである。サンツは日本で岡山の帝国植民会社や和歌山で更生移民会社と移民の輸送契約を結んだものの、この為にみなお流れになってしまった。

こうした機運のみなぎっている一九〇五年四月、三代公使杉村濬が着任した。彼は就任にさきだち、有能な堀口をブラジルに赴任させる条件を外相にのませて乗り込んできた。直ちに堀口書記官を同伴してミナス州、サンパウロ州のコーヒー地帯の視察を済

ませ、サンパウロ州農務長官と接触し、移民問題に関して次の質問を発した、

一、家族連れの制限を励行するのも良いが、当州における現行法の家族連でなければ旅費を支給しないと固守すれば、日本移民は難しいかも知れぬ。臨機な考案はないか。

二、サンパウロ政府は移民旅費を幾許まで支給しうる見込みか。政府支給の外に、雇主より支給の道はないか。

三、右旅費は、後日返済しなくとも良いか。

これに対し農務長官は即答して、

一、日本移民に限り最初は特別法を設け、独身者でも旅費を支給することにしよう。しかし、独身者は移動が容易だ。雇主を困らせることが多いので三～五人一組とし、一家屋に寝泊まりさせ、耕地から容易に出られないようにしたい。なお日本移民の着伯は、コーヒー収穫初めの四、五月頃が最適。

二、ヨーロッパ移民には距離の差で旅費も多少があり、大体六ポンドだが、日本は遠い。だが一人七ポンド位は政府として給与する見込み。

後日改めて書面で協議しよう。

三、支給した旅費は後日返済する必要はない。

ということである。

返答を受けた杉村公使は早速外務大臣小村寿太郎に長文の報告書を送った。その報告書の要旨は「サンパウロ州では至るところで大歓迎を受け、奥地の視察には政府の貴賓として歓待され、便宜を与えられた。これは日本が日露戦争で大勝したのがブラジル人の尊敬するところとなったもので、この機会を利用して日本は

ブラジルと通商移民関係を開くべきである」と述べ、同時に次のような概要の視察報告書を添えた。

「サンパウロ州は南部の四州の一つで、面積二六万方キロメートル（本邦の本州と四国を合わせたものと略同じ）である。本官が一二時間も汽車で奥地にはいって視察した結果では、広漠たる州内の地形はゆるやか波状がつづき、水流がその間を縦横に流れている。　主要産物としては第一にコーヒー、甘蔗、棉、米、玉蜀黍など種々の農産物がある。なお各種の果樹に富む土地である。

両三年前の調査によれば世界のコーヒー輸出量は大凡一九五八万俵で、その内一六二四万俵はブラジルに属し、なお一二〇〇～一三〇〇万俵はサンパウロ州の生産である。鉄道網も完備しており、そこ此処に都市が勃興し、中には人口二～三万人に及ぶものもある」と述べ、「当州に対する日本移民は土地、気候、及び州民の歓迎気分、ヨーロッパ移民の不成績などから見て非常に有望である。当州政府の望む永住的家族移民を送るなら発展は間違いない。又、商業の面でもブラジルで最も発達した州であるから日本製品の売り込みも可能である」と言う意見を述べ、今までのブラジル駐在公使とは異なった見方をしたため、外務省も次第にこれまでのブラジル観を変え、ブラジル移民に関心を持つようになった。

また同年帰国した堀口書記官は東京で国内の企業家多数を集め、ブラジル事情講演会を開いて彼らの関心をひいた。なお杉村公使の報告書が大阪朝日新聞紙上に大々的に報道されたことは、日本のブラジル熱を益々高める結果になった。

杉村報告書を新聞でみて感激した京都大国町の大国風呂屋の三

宅栄二郎は、第一番に外務省に単独旅券下附を申し出た。彼は一九〇六年二月九日の旅券をうけとり、同年四月四日備後丸で横浜を出港した。続いて阿波丸が五月に出港し、堀口書記の東京でやった講演会で感動した仙台の貿易商藤崎三郎助が支配人野間貞二郎、後藤武夫、佐久間重吉、田中正雄の四店員をブラジルに派遣し、サンパウロに開店して日本品を売り始めた。この藤崎商会は当時日本品の珍しさもあり、かなり繁盛したようだ。

また鹿児島地方裁判所判事の熊本県人隈部三郎も、旧藩主や同国政治家佐々木友房などの激励をうけて全家族を伴い出発した。隈部は東京のイギリス法律学校の卒業生で、夫人五百子は青山学院出身である。彼が学校を出て、鹿児島区裁判所判事を拝命したのが明治二二年であった。

十年後に判事を辞して弁護士を開業、その後渡伯まで一七年間職を続けたということになる。判事、弁護士だといえば当時の日本では上層階級に属するのである。それが杉村公使の「ブラジル珈琲園視察報告」を朝日新聞で読み、長年もち続けて来た海外雄飛の決意を固めたのである。隈部のこの志望が鹿児島新聞の特種のニュースとして、大きな活字になって現れると、安田良一、九玉吉蔵などが響に応ずるように集まってきた。だがブラジルにおける現実は隈部には余りにも苛酷であった。サンパウロのアスヅルバル・ナッシメント街のみすぼらしい借家の一室で、青山学院出身のインテリな、眼鏡をかけた五百子夫人が先頭にたって娘たちを督励しながら、曾て夢にも想像しなかった煙草巻きをはじめたのである。その後手掛けた仕事もことごとく失敗に帰し、はてはガス会社の門衛までやりながら一家の糊口を凌がなければならな

かった。

同じく鹿児島から本田武治が三青年を同伴して乗り込んだ。本田自身はロンドンにとどまり、安田良一、九玉吉蔵、長井某の三青年は明穂梅吉と合流してブラジルについた。この中の安田良一は、日系最初の閣僚安田ファビオの厳父である。

日本当局のブラジル宣伝に対して初期に動いた人達はこの程度であった。

その頃アメリカでは排日機運が次第に濃厚となり、移民はもっぱらペルー、メキシコなどに向けられていた。メキシコには一九〇六～七年の二年間に八千人余が渡航して炭工夫、鉄道工夫、砂糖耕地の労働者などとして働いていた。ペルーには森岡商会が一九〇三年から四回目の笠戸丸まで二千数百人の移民を送っていた。

こうしてブラジル移民熱が高まりかけると、皇国移民会社社長の水野龍はブラジルに日本移民の端緒をひらく絶好の機会であると活躍しはじめたのである。

笠戸丸来る

ブラジル日系移民の創始者であり、またその恩人とも言うべき水野龍（りょう）は、安政六年（一八五九年）一一月一一日、亀子（かめす）次男として、土佐国高岡郡佐川町に生まれた。同藩は著名の学者、医師、勤王家など多数輩出し、奨学心をもって聞こえた土地である。水野は板垣退助を始め高知県出身の諸先輩が各方面に活躍するのを見て奮起し、明治二年一八才で高岡郡北原村の小学校教員を辞め、東海道五三次を徒歩で東京に出たが、間

もなく家兄の訃報に接し帰郷。一九才で再び上京し、苦学の末慶応義塾を卒業したのが明治二一年（一八八八年）であった。

その後水野はしばらく政治に熱中したが、事情があって政界を断念して殖産興業に身を転じ、国民の海外発展に留意した。

明治二四年（一八九一年）一二月最初の移民会社吉佐移民合資会社が創立されると、次々に雨後の筍のごとく多数の移民会社が族生した。

以前から邦人の海外発展を叫びその実現に努力してきた水野は、朝鮮、満州から南米、南アフリカ方面などまでを対象に研究を重ねた。彼は日露終戦後の失業者の問題を予見し、その解決策として南米移民の送り出しは時宜を得た策として、朝野の諸先輩の意見を伺ったり、東京駐在ブラジル公使にも面接してその賛成と激励を得ている。その結果今後の移民の発展地は南米殊にブラジルであるとの結論をだしているのも、杉村公使の報告書にあずかる所が大きいと思われる。

水野が実地視察の目的をもってブラジル行きを決行したのは明治三八年（一九〇五年）十二月、彼が四六才の時であった。当時日伯間に直航路の便がなく、東洋汽船会社のグレンファーグ号で太平洋を斜めに航破してペルーに至り、外国船に乗り換えチリに渡って上陸し、そこから雪中道なき道を騾馬に跨がってアンデスを越え、ブエノス・アイレス経由でブラジルに入ったのは翌年の三月一七日であった。

水野はこの航海中鈴木貞次郎と出会い、チリ行の彼を説得してブラジルに同伴したのである。そして南リオグランデ州を視察し

てリオに入り、直ちにペトロポリスの杉村公使を訪れた。公使は意気頗る盛んで腹心の三浦書記官を水野に同道させ、四月一五日サンパウロに着き、ベント・ブエノ移民会社や州知事、農務局長などと接触して確信を得、ペトロポリスへ赴いた。だが杉村公使は不幸にも脳溢血のため倒れて病床にあり、水野にできたことは七昼夜看病に努めることだけであった。

杉村公使はあれほどブラジルが日本人の移住に有望であることを唱え続けたが、その実現を見ることもなく一九〇六年五月一九日の四時三〇分永遠に帰らぬ人となった。

同年七月水野は杉村公使遺族と共に帰国し、その視察報告というべき「南米渡航案内」を東京で発行してブラジル移民の宣伝に努めた。

翌年水野はニューヨーク経由で再度ブラジルに渡航した。リオに着いた水野は既に着任していた杉村公使の後任の内田定槌公使を訪れ、積極的な彼の援助で多忙な活動を始めた。移殖民法第二〇条に基づいたサンパウロ州との契約の要点は、向う三年間に日本農業移民三千人を毎年千人ずつ誘入すること、第一回は一九〇八年五月中に、第二回及び第三回は一九〇九年～一九一〇年の四月中にサントスに到着することであった。外にリオ政府とも日本移民を入れる計画があったが、これは実現しなかった。

皇国殖民会社の社長水野はサンパウロ政府との契約を履行するため直ちに帰途につき、一九〇八年一月三日横浜に意気揚々と上陸した。しかしその後の諸手続きや移民募集、輸送船の調達、諸般の準備など短い契約期間内に整えるのは容易なことではなかった。

移民一千人の募集許可は外務省から受けたものの、会社側の必死の努力にも拘わらず、初めてのブラジル移民でもあり、殊に時日切迫のため辛うじて七七九名集めたに過ぎなった。県別にみると、沖縄県を筆頭に鹿児島、福島、熊本、広島と続くのだが、亜熱帯地方のサンパウロ州に就働するには、日本中では沖縄県人が最も適すると認められた。それに沖縄県は古ぐからハワイ方面に多数出稼ぎをしていた経験上などから、ブラジル移民には主に沖縄県人を募集したので、その数は三二三名に達した。このうちから一三四人がアルゼンチンに転住したというのも、当時のアルゼンチンのペソがブラジル通貨よりも強いこと、労働賃金が日給で二～八ペソ、家内労働者が食住込みで月四〇ペソ以上、料理人や車の運転手は食住込みで月二〇〇ペソ前後だったことが魅力だったのであろう。

輸送船は当時東洋汽船会社に所属していた笠戸丸を、日本最初の飛行家滋野男爵の母堂の出資によって往航だけの臨時傭船として使用することになった。

こうして笠戸丸の神戸出港は四月一八日ときまったが、そこに又問題が起こった。それは殖民会社が外務省に積立てる移民輸出許可保証金一〇万円の調達である。

当時国内には多数の移民会社があり、小資本の移民会社による弊害も現れていたことから、政府はこの保証金制度を実施したようである。皇国殖民会社という立派な名の会社ではあったが、内容は頗るお粗末なものであったらしく、水野はこの保証金の捻出に行き詰まった。彼は政友会の代議士に依頼して外務省に泣きつき、一〇万円を八万円に減額、更に急場の対策として移民たちの

携帯金を、ブラジルに着いた時点で払い戻すという条件で一時会社に預金させた。この払戻しを会社側は金詰まりから履行できず、着伯後問題をおこしている。

こんなことから出港が延々になり、四月二八日ようやく笠戸丸は動きだした。船中の総取締に水野龍社長と、ブラジルにおける皇国殖民会社代理人の帝大法学士上塚周平も乗船した。

この六〇二〇トンの笠戸丸は一九〇〇年英国の造船所で進水した日露戦争当時のロシアの病院船「KAZAN」だった。それを旅順港内で座礁していたのを日本海軍が捕獲。満州から日本内地へ復員する将兵の輸送船に使った。

南米移住者輸送に従事するのは一九〇七年のペルー移民の輸送からで、翌年の六月にはブラジル第一次移民を運んだ。大正時代は大阪商船の日台航路の定期船、昭和二年には特設病院船として中国の揚子江へ派遣されている。太平洋戦争中もまだ健在だった。船齢が四五年だったから現役も既に二〇年も過ぎていたが、漁業会社の船としてカムチャッカ西海岸で積荷中、突然のソ連参戦で出港予定日の前日八月九日、ソ連軍に撃沈された。

明治四一年二九〇八年）六月一八日午前九時半、サントス港内に入った笠戸丸の移民たちは、翌一九日午前七時タラップを降り、ブラジルの地に歴史的第一歩を踏み出した。

東京シンジケートから海興まで

皇国植民会社の送り出した第一回移民のカフェー耕地における成績は、当時のサンパウロ政府や日本官憲から不良という結果が

でた。移民の耕地労働の不良などの理由でサンパウロ政府はその後日本移民に対して態度を硬化させたし、日本政府は、皇国植民会社の移民携帯金の預金（外務省へ保証金の一部に流用した金）の払い戻しの不能や、当社の伯国移民輸送独占に対する他移民会社の羨望策動もあって、外務省は皇国植民会社に第二回移民募集を許さなかった。

水野は最後の策として同郷土佐の素封家竹村輿右衛門を訪れ、移植民事業は国志的事業であると説得に努め、移民契約の一切の権利義務を竹村に譲り渡した。竹村の資本に信をおいて外務省も承諾し、サンパウロ州政府と第二回移民輸送に関する契約が最初の契約を改正して調印され、ようやく一九一〇年六月、第二回九〇九名の移民送り出しに漕ぎ着けたのである。ところが水野はこの第二回の契約改訂に際し、惜しいことに前期の契約書の植民地契約に関する権利を放棄してしまった。水野にすれば、これは州政府の要請に基くものだと言うが、当時の彼は第一回移民の就労後の不成績や皇国植民会社の閉鎖で自信を消失していた矢先でもあり、州政府の提案を諾々と承認もたようにも思われる。内田公使は「このような大事な特権を放棄してしまうとは、取り返しのつかぬ損失である。日本移民の定住発展の為にこれほど高価な特権はない。どうして無断でそんなことをしてくれたか」と水野を叱責したほどであった。

水野はサンパウロ州政府と契約を交わす以前に、リオデジャネイロ州政府と四〇年十月土着移民導入のための候補地の契約調印をしている。

その候補地の対象には、

一、マカエー郡サント・アントニオ耕地。
二、サンフランシスコ・デ・パウラ郡インベーの官有地。
三、その他便宜に応じ指定せられる買上地又は官有地。
となっている。だがこれも水野の資力が伴わず同じ運命におわった。サント・アントニオ耕地には前述の熊本県人の元判事隈部三郎一家六人と、片岡治義一家三人が入植して米作を試みたが、作柄そのものは良い成績であったと言うが、交通不便な僻地に孤立して労力、生産資金などの不足と戦わねばならなかった。こうして一時耕地を縮小して只管会社の方針の決まるのをまったが、終に水野はこの計画を放棄してしまい、隈部らの努力は徒労に帰した。

明治四〇年、水野が第一回移民送り出しに奔走している頃、大浦兼武子爵を中心に工学博士長谷川芳之助、当時の内務省地方局長床次竹二郎、青柳郁太郎他数名の有志間に植民事業の話合いが進んでいた。水野たちと同じような希望のもとに、当時の日本の国情から植民事業の実行方法を研究していたのである。ただ彼らは労働契約移民の送り出しではなく、植民地を建設して移民の定住を計画したのである。

明治四一年七月第二次桂内閣の農務大臣として入閣した大浦は、桂総理、平田内相を説き、青柳に総理あて長文の意見書を提出させた。この意見書で青柳は我が国の現状に鑑み、外国の事例をひいて植民事業の重要性を力説した。それに対して平田内相から種々の諮問があったので、青柳は更にブラジル進出の具体案を説き、もし今これに着手せざるにおいては悔いを千歳に遺すであろうとの趣旨を強調した。だが何故か小村外相は外交的見地からこ

れを強硬に反対し、閣議をもって方針を一定せんとした企画は不成功におわった。

そこで大地主大沢幸次郎と数名の資産家の協賛をえて「東京シンジケート」と称する企業組合を設立した。この時大浦は農務大臣であったので、女婿堀貞の名義で出資している。

この組合は設立後直ちに行動に移り、青柳は明治四三年六月三〇日シベリア経由でドイツに至り、移民問題を調査研究し、さらにブラジルに向い一八ヶ月間この地に滞在した。その間パラナ、リオグランデ・ド・スール、サンタカタリーナの視察並びにこれらの州の独伊植民地の調査を終え、尚サンパウロ州の各地を視察した。その結果サンパウロ州の南海岸地帯のリベイラ河の沿岸からカナネア方面が、植民集団地を建設するに最も適当と認め、明治四四年二月一四日、官有地の五万ヘクタールの無償譲渡をうけるため州政府に請願書を提出した。それから一年余、幾多の紆余曲折を経てようやく契約書の調印に漕ぎつけ、その結晶を携えて帰国、明治四五年五月一日付で東京シンジケートに提出した。

幸いにその年の一二月二一日第三次桂内閣が成立し、桂総理は外相を兼任して大浦は内相となったので、桂の仲介で当時の日本銀行総裁高橋是清、一流実業家渋沢栄一を始め三〇名の企業家を外務大臣官邸に招き、この事業の社会性、国益性を説き、余り損益に拘泥することなく賛成するよう要請し、躊躇する者には桂自ら説得勧誘に努めたのでようやく一同納得したと聞く。その結果直ちに澁沢を委員長とする会社創立委員会が結成された。

次いで三月一〇日資本金一〇〇万円の「ブラジル拓殖株式会社」が創立され、酒井忠亮子爵が取締役会長、川田鷹が専務取締役と

なった。青柳は急遽サンパウロに戻り、八月二日前述の州政府と東京シンジケート間の契約をブラジル拓殖株式会社が継承するべき諸手続きを終え、本格的に植民事業に着手した。

この地帯は古くからの土地占有者（ポッセイロ）が多く、地区整理には予想外の手間と費用がかかった。とくにレジストロ市街予定地二〇〇町歩の買収は多くの失費を要したようだった。その結果実際に交付された面積は最初の計画より著しく減少した。

こうした青柳たちの努力によって移民受け入れの準備は整って行ったが、初期の資金不足や戦時中で内地労力の需要が高まった為、また移民募集機関が未だ不完備でもあった理由から、移住者の渡航は振るわなかった。然しこの間題もその後の時代の推移とともに好転し、欧州戦乱から好影響を受けた日本は全てが躍動的となってきた。

大正六年七月の臨時議会では拓殖会社法の改正を行い、勝田大蔵大臣は関係移植民会社の代表を宮邸に招集して移植民会社の合同促進の要を力説した。かくして大正六年一一月二一日、全移植民会社の合同成って、資本金一〇〇〇万円の「海外興業株式会社」が設立され、青柳は重役に選ばれた。爾来多年辛苦のイグワッペ植民地はこの新会社の経営に移り、業績も向上していった。

当時既に約二万人の移民が渡伯していた。コーヒー園の労働契約を済ませた人達はブラジル生活にも慣れ、多少の自信もできていた。奴隷解放後数十年の耕地にはどこに行っても奴隷であった黒人の群がいたし、コロノ生活はいまだ強制された生活であった。一層よい生活へ、自由へと志望する移民たちにとってはコーヒー耕地は長居するところではなかった。一日も早く独立して農業を

営み自らの生産によって富を獲得しなければならないと言う機運が漲っていた。これに答えるかのように各地方に大小様々な植民地が現れた。ノロエステ沿線にはビリグイ植民地、平野植民地を始め無統制な邦人集団地が多数族生して開拓に従事したし、ソロカバナ線には星名謙一のブレジョン植民地、バイベン植民地などがあった。サンパウロ近辺もモルンビー、コチアなどに集団が始まっていた。

その頃イグワッペ植民地に入植していた輪湖俊午郎、北原地価造等によって、新しい植民地建設の計画が芽生えていたのである。

チエテ河畔最初の邦人

一九〇八年の第一回笠戸丸移民の五人の通訳の一人である大野基尚の率いる沖縄県人を主とした一団が、チエテ移住地付近に踏み込んだ最初の日本人である。

大野は第一回沖縄移民の総代城間信二郎に引率された二六家族と共にイツーのフローレス耕地に入ったのだが、樹齢を過ぎた当耕地のカフェーは生産性が低く、移民たちは結局儲からずに退去して大部分サントス方面に散っていった。大野自身も六ヵ月後見切りをつけ、サンパウロのカルロス・ゴーメス街にある皇国移民会社のブラジル事務所に入っていた。狭い会社の二階の二部屋には仁平嵩、香山六郎、嶺昌などが上塚と雑居しており、そこに大野夫婦が割りこんでいった。当時支店長上塚周平法学士の月給は五〇〇ミルレースであり、彼は一日千秋の思いで本社の水野からの送金を待ったが、諸経費はおろか、彼の給料さえも送ってこな

かった。窮余の策として上塚が玩具製造を思い立ち、マンジョーカの粉のダンゴでどうにか命を繋いでいたのもその頃であった。

矢張りそのころ適当な仕事もなくブラブラしていた鈴木南樹は、ある日なにか良い働き口はないものかと移民収容所の職業紹介所に行き、ノロエステ線の鉄道工事に請負師サンパイオ・コレイアが労働者を募集していることを知り、早速大野に薦めた。大野はこういう仕事には沖縄県人が適しているとの認識から、サントス方面に流れて行ったフローレス耕地の脱走組を訪れ、ヅーモン耕地の落伍移民を含めて二三家族五二名の多数を集めた。工夫の日給五ミルが人気を呼んだようだ。

大野の引率したこの一団が行ったノロエステ線鉄道工事は、バクリー駅、コトベロ駅（ノーバ・ニッポニア）、イーリャセッカ駅付近のチエテ河に沿うた低湿地で、マラリアの巣窟と言われた地帯であった。沿線に寝泊まりする彼らは忽ちマラリアの洗礼をうけ、殆ど全員が寝込むような悲惨な状態に陥り、熊本県人の出口伊三次と沖縄県人の比嘉善太郎の二人の犠牲者を出す結果になった。大野の妻松子までマラリアに冒され、就労しうるものは毎日十名以下であったという。

一九〇九年七月から年末まで、ようやく半年を過ごした後、彼らは這々の体で引き上げてしまった。これは大野の失敗でもあれば、この工作をした鈴木の失敗でもあった。

その後多少の金を握った大野は、サンパウロに家を借りて戻った。松子夫人のマラリアは軽かったが、生まれて一年にも満たない大野の女児は、婦人の必死の看病にもかかわらずこの世を去った。

こうして大野等がチエテ河畔から退去して九ヶ月後の一九一〇年九月、北米カリホルニアから渡伯した中年の小野寺謙助が組長となり、高桑治平、三宅栄次郎、岸本介三郎、佐藤市四郎と妻及び幼児二人、それにアルゼンチンの伊藤農場から移ってきた鹽川伊三郎と藤田克己の一団が日給五ミルレースに魅かれて鉄道工夫に応募した。この二人の青年は当時山形県出身の伊藤清蔵博士がドイツ留学中に知り合ったドイツ人女教師オルガと結婚してブエノス・アイレス州のボリバール市で牧場を経営し、母国から青年達を呼び寄せていた内の二人である。

その頃鉄道工事はイタプーラ駅を突破してジュピア駅に向かって軌道を進めていたが、マラリアは依然として猛威を奮っていた。その後もパラナ河を越えて耕地から退去した人達が集まってきた。日本人工夫の労働振りは敏捷で勤勉、ブラジル人工夫の数倍の能率をあげたので、敷設工事の請負会社では大満足で信用も厚かったが、彼らには苛酷な重労働であった。この四〇～五〇人の日本人の工夫たちは一ヶ所にアカンパメントを作り、女性は炊事、洗濯などを引き受け、風呂は青年達が当番で毎日焚いたと言う。こうしてノロエステ鉄道敷設工事はカンポ・グランデへ向かって進んで行った。

海外移住組合連合会の設立

明治三〇年、牧師島貫兵太夫は東京で雑誌「救世」「軍人と基督教」などを発行し、あわせて「東京労働会」を設立して北米渡航者の指導周旋をしていた。この会が三年後「力行会」と改称され、

多数の青年達が同会の斡旋により北米に移住した。

永田稠は力行会員となって渡米していたが、島貫兵太夫牧師の遺命をうけて帰国し、力行会長となり、力行会の運営方針につき色々の角度から考慮した。当時の力行会は基督教中心の社会事業団体で、苦学生の世話や青年たちの渡米の指導をしていた程度であったが、永田会長は日本国内の行き詰まった農村問題を海外発展によって解決の一助とすべく、活動を開始した。前述のレジストロ植民地にも自作農植民の募集をしたので、その方面に希望者が相当にあったようである。

大正九年三月、永田は南米一巡の目的で横浜を出帆し、北米に立ち寄り次第に強まってきた排日活動を身をもって体験し、六月一日リオデジャネイロに着いた。先ずモジアナ方面に向い、リベロン・プレット領事館分館の多羅間の案内でコーヒー耕地などを視察し、その後ノロエステ方面の既製植民地などを視察してその有望性に魅せられ、更に海興のイグワッペに至り輪湖俊午郎、北原地価造などと接触している。恐らくこの時点で植民地建設の腹案は練られいたのであろう。輪湖はこの日の永田の訪れをどんなに待ち焦がれていたことであろう。永田は彼の著書「国見する者」でその時の情景をこう述べている。

『私は北原地価造君の所へ一泊して一ト晩中語り明かした。弊衣破帽の輪湖俊午郎君が、四ミルの日給で、道路工事の監督をしていたが、「永田さんがきたと聞いて、顔も洗わず、隣家の裸馬を無断で拝借して乗り付けた」と言うのである。私はここで会社経営の移住地と言うものにつき、突き込んだ視察をすることが出来たのみならず、将来ブラジルで仕事をするに必要なる人物を見いだ

したのであった。アリアンサ移住地が輪湖、北原両君の手になり、さらにブラ拓が出来て、梅谷氏がその巨腕を振るうにあたり、輪湖君が如何に重大なる役割を演じたかは、知る人ぞ知るでありましょう。』

こうして永田は長野の故郷に帰り、思わぬ難題に遭遇するのだが、たゆまぬ努力であらゆる障害を乗り越え、大正十年末日比谷の陶々亭に国勢院総裁小川平吉、長野県知事岡田忠彦、貴族院議員今井五介、信濃教育会長佐藤寅太郎、信濃県会議長笠原忠造、宮下琢磨、輪湖俊午郎の八名が集合して信濃海外協会組織実行の決議をし、輪湖が実務に当たることになった。

輪湖は当時流行の「鴨緑江節」を得意の美声で高唱し、県庁の隣にあった巡査教習場の巡査を驚かしながら社会課の片隅に一脚の机と椅子を与えられてその事務的敏腕を振るい、大正一一年一月二九日には信濃海外協会の発会式を挙行するまでに進捗させた。

こうして信濃海外協会が成立され、永田は輪湖の作成したブラジル移住地案を岡田総裁に提出したが、二〇万円の資金が必要のため、岡田は容易に同意しなかった。輪湖は金の問題は永田が奔走して解決すると踏んだのか、今井五介から旅費万端の支援を得て、信濃海外協会伯国支部長として移住地候補地選定の大任をおびてブラジルに帰って行った。

当時海外協会のあった県は和歌山、岡山、広島、香川、山口、熊本と上記の信濃の七県のみであった。それまでこれらの海外協会の間には連絡はなかったが、信濃海外協会の提案により大正一二年一月、地方長官会議の際に前期の七県の知事が協議の結果同年二月九日「海外協会中央会」の設立となり、永田はその幹事に就

任した。

中央会ができると地方協会の設立、助成という項が発動しはじめ、各府県に積極的に呼びかけたので永田はその応援に席の暖まる間もなかった。その効あって地方海外協会が四四にも達し、その組織のない府県は僅か二、三県ととなり、日本全国の海外発展運動に多大の貢献をした。

信濃協会、熊本、鳥取、富山は独自で植民地経営を計画していたが、貧弱な海外協会では色々困難をきたしていたので、どうしても国家の法律をもってこれを奨励しなければならぬと言うことになった。そこで既存の産業組合法に基づいて移住をやればと言うことであったが、これには農林省内に反対があったので、単行法として小平權一が移住組合法を起草した。これが昭和二年(一九二七年)一二月一日に創立せられた海外移住組合連合会である。

連合会からブラ拓設立まで

大正一一年(一九二二年)の帰伯までの一ヶ年間の輪湖の日本滞在は妻をブラジルに残して単身赴任であり、その間に彼は長男病死の訃報に接し帰心矢の如くの思いで過ごしたことであったろう。然し彼の植民地建設案は岡田知事時代の冬眠を経て次の本間知事の時に至って俄然目覚めたのである。本間知事は大正一二年五月一三日県下の郡市長を招集し、植民地建設の大宣言を行ったのである。永田はその後この計画具体化の見通しがつくと若干の金をバウルー領事多羅間鉄輔に電送した。イグワッペ植民地に入植していた輪湖、北原の両人は多羅間の通知で直ちに行動に移り、輪

湖はバウルーに移転して土地調査に、北原は植民地経営の予備知識の修得にと準備を整えていた。その頃の地価は需要増から値上がりの傾向にあり、一人視察に行けば一割地価が騰ると言われていたので、輪湖はこの調査を「北西年鑑」編纂の資料集めという名目で歩いたという。

こうして待つことしばし、大正一三年八月の半ば過ぎの或る深更、バウルーの輪湖宅の戸を叩くものがあった。起き出てみれば、待ちに待った永田協会幹事ではないか。永田は開口一番「土地は見つかったか」「ようやく見つかった」、これが両者の挨拶であった。

輪湖宅で一休みした永田は、輪湖の選んだアラサツーバ奥のロドルフォ・ミランダの土地検分に多羅間、輪湖、北原の三名同伴で八月二五日バウルーを出発、時あたかも革命の最中で交通が混乱して汽車の運行はあてにならず、仕方なくアラサツーバからは案内人と土地事務所の事務員の二人の伯人を加えて二台の自動車に分譲し、悪路をおかしてミランドポリス経由、二七日目的の土地を横断してルッサンビーラに到着、チエテ河畔に記念すべき第一歩を印したのである。大野基尚等が鉄道工事に就労してから一五年間邦人の足跡を見ることがなかった地帯であった。

その後永田は種々検討を重ね、送金の遅れなどで極度の心労の末体調を崩し、ようやく大正一三年一〇月一日に売買契約書の調印を済ました。

その後二ヶ月間輪湖の手厚い看病をうけつつ移住地建設計画を進め、後事を彼に託し、高岡博士の止めるのも聞かず痩せ衰えた大躯を引きずるように一二月八日帰国の途についた。

一方海外移住組合連合会が設立され、専務理事に本間知事の後を継いで長野県知事となりアリアンサ移住地の建設に尽瘁した梅谷光貞が選ばれた。さらに主事として元サンパウロ駐在領事斎藤和を、嘱託に永田稠、青柳郁太郎等を選任し陣容を整えた。

こうして連合会は海外移住組合法及び施行細則の規定に基づいて事業方針を定め、各府県の移住組合にたいし融資の途をひらき、県別に移住地を経営し、毎年二〇〇家族の移住を計画した。先ずこの事業の基礎となる土地の選定を急ぎ、創立間もない昭和二年一〇月二四日急遽梅谷専務に移住地の選定購入及びそれを分割する権能、ブラジル国内の一般視察や植民計画上の参考資料の収集の任務等を与えて派遣した。梅谷は武石潜蔵を秘書に、イグワッペ植民地の創立者青柳郁太郎を嘱託として横浜を出帆、一二月一〇日輪湖に迎えられてリオに着き、直ちにサンパウロに至りリベロ・バダロ街一〇三番地に海外移住組合連合会出張所を開設したのがその年も暮れに迫った二〇日であった。

当時の赤松祐之サンパウロ総領事は有力な梅谷の相談役であった一方、事業進行には信濃海外移住組合の理事としてアリアンサを主宰していた輪湖俊午郎を引き抜いて企画の枢機に参与させ、カルロス・モラエス・アンドラーデ弁護士及び公認翻訳人杉山英雄の両人を法律顧問とした。

更にサンパウロ領事館移民部嘱託の畑中仙次郎、同仁会の測量技師古関徳弥を起用して土地の調査にあたらせた。

日本内地においてはその頃すでに移住者の送り出しを急ぎつつある状態であったので、何を措いても土地選定が優先されたので、一応陣営を整えた梅谷は土地踏査には最も困難の雨季にも拘わら

ず敢えて年末から土地選定に出発したのである。梅谷は年内にパウリスタ沿線を視察し、翌年初頭は州内南海岸地帯、次にノロエステ線、マットグロッソ州のボリビア国境まで調査した。この調査の途中の一月二六日にはチエテに立ち寄り広大な未開発の密林に魅せられたようだ。

尚北パラナ、ソロカバナ沿線、アララクワーラ沿線を調査し、更にミナス州リオドーセ流域を視察し州有地契約のためベーロ・オリゾンテまで出張している。

こうした超人的な行動を続けた梅谷であったが、彼がブラジル到着後から意外とし、また当惑したことは、日本における連合会の考慮し計画された事柄がブラジルにおいては容易に受け入れられない事であった。

その計画の内容がさすが内務省人に相応しく甚だ一方的であり、まるで日本国内で実施される形態のような感じであった。外務省の出先官憲にすれば、内務省が他人の縄張にきてやれるものなら遣って見ろという官僚特有の縄張り意識もあったかも知れないが、事実その内容は現地にはそぐわないものであった。それがため明日からでも土地を購入し、直ちに入植準備を進めなければならない梅谷理事の立場は誠に同情するべきものであった。

以下、帰国直後の昭和三年一〇月二五日の午前中、内務省社会局会議室において行われた「梅谷専務理事伯国内土地調査状況報告会」の速記録の一部であるが、これにより当時の彼の心情を伺い知ることができる。因にこの報告会の列席者の氏名も列記する。

三重県海外移住組合理事　　大瀬東作

同　　書記　　榎保

岡山県海外移住組合理事長　原　澄治
同　名誉理事　原　保雄
同　書記　奥原丘烝
和歌山県海外移住組合理事　毛利清雅
同　嘱託　小瀧徳五郎
同　社会課長　貴志二彦
同　属　辻田亀之助
広島県海外移住組合専務　中村良三
同　嘱託　山田筆三郎
同　書記　間所卓郎
山口県海外移住組合理事　中田義介
愛媛県海外移住組合理事　中村元治
福岡県海外移住組合専務　古川静雄
同　嘱託　藤原茂
鹿児島県海外移住組合専務　松田徳太郎
熊本県海外移住組合専務　阿倍野利恭
富山県海外移住組合専務　中田徳治郎
鳥取県海外移住組合理事　山口亨
社会局事務官　安積得也
同　属　田口管次郎
同　属　加藤義明
同　属　三浦陽・大久保静夫
海外移住組合連合会理事長　田付七太
同　理事　藤山雷太
同　理事　内田嘉吉

同　理事　井上雅二
同　理事　今井五介
同　主事　斎藤　和
同　主事　平田光雄
同　書記　部奈恭一
同　嘱託　青柳郁太郎
同　同　永田　稠
同　同　近藤孝太郎
同　同　末松　緑

梅谷専務理事報告演説要領

私は昨年十月の理事会の決議により昭和二、三年度に成立せる移住組合の移住地の選定購入及びこれを分割する権能を与えられ、その他ブラジル国内の一般視察、植民計画上の参考資料の収集など重要なる任務を帯び一〇月二四日横浜を出帆いたし、インド洋を横切りアフリカを経、大西洋を横断してブラジルに着いたのは一二月の一〇日で、この後引き続き彼地に滞在すること八ヵ月、その間任務の遂行に努力しまして去る一〇月一一日約一年振りに日本へ帰って参ったのであります。

私はブラジルに行く前には行きさえすれば直ちに土地の購入を決定し、従って入植計画も直ちに樹立することを得るものと信じておったのであります。実地を見れば即時にやってのける事ができると私は考えておりました。その積りで渡航いたしました。皆さんも又さよう御考えになっておられた事と存じます。しかし実

際に彼地にいって見ると全然予想を裏切られたのには驚きました。何処に土地がある位のことが分かる程度で、しかもその土地も良いか悪いか全く不明という始末で、大変面食らってしまった次第であります。私は先ず着伯当時、移住組合に対して彼地に如何なる空気が漲っていたかと申しますと、移住組合連合会の会頭が内務大臣であったり、その他一般に官臭味を帯びており、然もあまり日本国家的性質を加味する連合会なり組合の定款をブラジルで登記することは考えるべきことだ、国交上排日の恐れがあるという事であったのであります。その他移住組合に関して面白からざる空気が在留邦人の中に漲って居たのであります。そこでそれでは土地会社を設立することにして、在留邦人を役員に加えてやる事にしてはと言う議論も起こってきたのでありますが、会社を設立するにも造作なくできる訳でもない。土地を購入するにしても個人名義にしたらどうか、主体を定めてやるか定めないでやるかと言うことが非常な難関であったのであります。また組合を作ることは在伯邦人の利益を侵害し、寧ろ損失を招くものである。我々に対して差別的待遇や不公平な取り扱いをなすものであると言って喧しく反対する者もいたのであります。或いはまた移住組合はブラジル特にサンパウロ州のコーヒー園主の利益を侵害するものである、従来コーヒー園主は日本人の労力を利用して利益を得ていたのでありますから、移住組合から組合員を送るとその園主の利益を脅かすことになると言う反対者もあり、園主は政治的にも社会的にも勢力ある者ゆえ問題なのであります。それ故移住組合の計画はミナスなりアマゾンでは構わないがサンパウロ州に関するかぎりは差し控えたほうがいい。また大集団的植民地を作

ることは面白くない。そこで移住組合も少し考慮してもらいたい。一体移住組合は厄介千万なものだ。実に困った組合だと言う意見が多かったのであります。またアリアンサの肩代わりの問題などについても色々の議論がありました。

ブラジルにおける移住組合に対する空気というのは先ずこんな訳で、自分の立場も非常に難しかったのであります。土地の選定については皆さん各組合の方や社会局当局者の方々の立場も考えて私も深く責任を感じ、できるだけ速やかに解決したいと存じましたが、ただ今申し述べましたような理由で思うように進捗しなかったのであります。これは私の力の足りなかったことは勿論でありますが、また一方かかる困難な事情があったという事をもお含み願いたいと思います。

土地の選定に当たりましては、私は在留邦人や地方の実業家などの意見を聴き自分の実際の知識をつけると共に、自分は如何なる方面に土地を選んで良いかを考えたのであります。そこで私は汽車の通じ自動車道のある所は大抵行きました。また歩行により、或いは馬を進めて出掛けたことも度々あります。候補地は勿論移住者のいる所は特に親しく視察に参りました。

各地視察の結果移住地はどこが良いかということを見了ったのが漸く三月末のことでありました。

一体サンパウロ州は海岸地帯が開けております。モジアナ線にはコーヒー園が多く、土地も開発されており、西北部は大体において今後開けんとする傾向があるのであります。しかしパラナ州の北部、ミナス州の大部分は殆ど自然のままと言う状態にあります。そこで私は日本人が纏まって植民地を形成するにはどうして

も中南部地方においては、サンパウロ州を初めとし北パラナ、マットグロッソ、ミナス方面が一番好適であると考えました。北伯アマゾンの地は今日直接関係がありませんからこれには触れませんが、かかる方針で選択した土地が大小併せて一六ヶ所、これは机のうえで決定したのでありまして、その内有望と認められるものを八ヶ所ばかり特に選び、その土地には実際的経験家を派遣し地勢や地味、衛生、交通、気候など、植民計画上必要なる諸点を研究調査させたのであります。而してその内実際交渉を開始したものはサーレス、マルチンス、バストス、フランコデメーロ、チエテの土地でありました。所がサーレスの地は代償の点で駄目でありましたし、マルチンスは地権が不確実なため途中で交渉を打ち切りました。次にバストスの土地でありますが、これは総面積一万二千アルケールスが一アルケール当たり二五〇ミルレースで交渉が纏まったのであります。それからチエテ沿岸でありますが、この土地について話の始まったのは確か二月の末であったかと存じますが、土地に非常な複雑な関係があり、問題が色々な事情のため紛糾を極め数ヶ月を費やし、ようやく出発間際に交渉が纏まったような次第で、これについて話せば長時間を費やし徒に苦心談をする感がありますから、その経過の状況は全部省略いたします。

私がチエテをなるべく欲しいと考えたのは交通関係及び衛生状態の比較的良きこと、面積の広大なること、地味も良きこと、この辺一体の情勢よりして日本人発展の根拠とするに適しているからであります。交通関係はちょっと不便のように見えますが、汽車はチエテ河を隔てて直ぐ前を通過し、四ヶ所の停車場に画して

おりまして、私には大して不便とは思われませんでした。衛生状態はと申しますと、一般にはマラリヤが多いと申します。私も河沿いには相当あるものと存じますが、これは未開発の広大なる自然林を有する大地には免れない現象であります。決して人の言うほど恐るべきものでないのであります。河沿いの土地四キロか五キロの幅を保留しておけば害を除くことが出来ると私は思っております。チエテは地味も地勢もよろしいし、地権もまた確実であります。一二万町歩の広大なる然も交通も便利な地勢地味の揃える纏まった土地を、サンパウロ州で獲得することは中々難しいのでありますから、捨て難き土地と思って万難を排し複雑なる難関を耐え忍んでやっと取ったのであります。

（中略）

かくして移住地は選定購入しましたが、次に問題になるのは如何なる方法で経営するかと言う事であります。前にも述べましたようにブラジルで連合会の定款を登記してやることは可能なりや否や、この移住地の経営は如何なるものがこれを為すか。即ち主体には如何なるものがなるかと言うことになるのであります。現行法の建前によりますと府県組合とその組合を基礎とする連合会がその定款を伯国で登記し、外国法人として出張所などを設けてやろうと言う立前であると思います。所がそう言うことは国交上如何であるか、また排日問題の因を作りはしないか大いに考慮すべきことであります。また内務大臣、府県知事などが顔を出すということも各その定款を伯国に登記するという限りは不穏当に思われます。しからば如何なる方法でやるか、先ず土地会社ではどうだろうと言う問題も出ましたが、これは考えなくてはならない。

勿論土地会社は株式会社でなければならぬ。するとこれは営利会社であるから営利を離れた現在の組合の観念と相反することになる。合名会社や合資会社等もまた同様である。斯くの如く観念の違った機関によることは宜しくないのであります。また役員に伯国在留邦人を多数加えねばならぬと言う意見もあるが、そうすると連合会の目的通り進み得るやと言うことになります。この点については私共も互いに研究したのであります。とにかく営利的観念を有する会社は不適当と思われます。然らば何が良いかと申しますと、ブラジルにおいて現在の移住組合の組織に近いものは産業組合であります。これは公益上の見地よりみて極めて適当のように思われます。然しこれには又欠点もあります。例えば組合員が自然多数にふえてくるし、役員も多数おかねばならぬ。総会や決算の報告も必要である。これを実際にやると中々面倒があります。いま少し簡単なものは有りはしないかと研究を進めた結果、最近にできた向こうの法律によって持分組合を作ったらどうかと言う意見が纏まったのであります。これをよく研究して見ますと、会社と組合の両性質を合わせもったようなもので、社員もたった二名ででき役員の組織も極めて簡単で、二名の社員が直ちにその役員となり、又この二人にて組合を代表して業務の執行もでき、総会も決算の報告も不必要であると言う具合で、とにかく頗る簡単で社員も一人だけブラジルにおれば良いし、責任は各社員が資本額を限度に負うことになり仕事もし易いのであります。然らばそうするには如何なる方法をとるか、又府県組合とは如何なる関係をつけるかと申しますと、連合会の仕事を持分組合に任せる所謂委任の方法、そうして府県の組合も又この持分組合に委任する

の方法をとれば現在の定款を登記しないで組合の目的を代行機関で遂行するという結論に到達するのであります。大使館、領事館、在留邦人の意見もこれなら大体良かろうという空気でありました。

私はこの空気を背負って帰朝したのでありますが、これが果たして組合や連合会の実際の事情に合うか、また組合員の意向がどうか、この点はこれより追々と承りたいと思うのであります。然し私は先方において種々研究の結果これに落ち着くより仕方あるまいと言う考えをもって帰ってきたのであります。勿論現行法を破ることは出来ない。自分は現行法を全然改正してもやってゆきたい点が多々ありますが、それは直ちに行かぬ故にただ今の場合としては現行法に立脚してその解釈を広くし、その解釈の範囲内において適当な道があればその道を履むが賢明であると考えて居る次第であります。これに関しては皆さんの十分なる御研究と又隔意なき御意見とを承りたいのであります。

さて次には入植方法でありますが、これが又頗る厄介なことで、各府県に専属する土地を分割し、即ち二〇〇家族につき五〇〇〇町歩を基礎として各組合へ渡すか又土地を得れば各府県の区別なしに日本国民本位で一方から順次に入れて行く所謂混植方法をとるかが実際上の厄介な問題になるのであります。現行法の建前から申しますと土地は各府県の組合に専属し、組合がその経営に当たることになっております。これを専属主義とでも言いましょう。而してこの主義の特徴とするところは、

1、府県民団結心を固くすること。

2、地方の特色ありとせばこれを発揮するの便あること。

3、府県別に財的援助或いは各府県の有力者がそれぞれ自分の

府県民へ援助するに容易なること。

等でありますが、この専属主義を実際に施すとなると又問題になるのであります。仮に一ヶ年八組合として若し専属主義に従うときは、八組合に適当なる土地を分割譲渡しそれぞれ適当なる設備を施し、組合員を入れて行く方針を採らねばなりません。これは簡単に行くかというに、実際には中々思う通りには参らぬのであります。日本内地ならいざ知らず、ブラジルの国土は広大で交通も不便、開拓する土地は大体斧鉞の入らぬ大原始林という有様です。そんな所に一ヶ年八組合、二ヶ年なら一六組合の分譲地を設け、道路の開削をはじめとして一切のお膳立てをすることは中々容易ではありません。また地形地勢などの関係上公平に分割することもできかねる次第であります。あたかも半紙に條を引くように簡単には参らぬのであります。ブラジルの土地は大体大波状型を為しておりますが、色々の事情によりてこの土地を公平に分けることは中々難しいのであります。また各府県の経営地の主任に適任者を得ることも困難で、日本から直ぐ行った人では駄目だし、ブラジルに居る人でも一時に八ヶ所なり一六ヶ所の経営者を得ることは至難の業であります。また土地を分譲しても第一に設備が必要であります。医者も入用だし教員もいる。生産物の処分、生活必需品を搬入する方法もつけなければならないし、事務所、製材所、煉瓦工場、移民収容所その他多数の公共設備も必要で中々の厄介があるのであります。従って今仮に土地を各組合に分割したとしても、或る組合が二〇〇家族なら二〇〇家族の移住者を入れて植民計画を完全にやって行けるか、これは私の杞憂かも知れませぬが中々問題である。県により有力なる所もあれば無

力なる所もあり、すべての組合が果たしてよく二〇〇家族を予定のごとく入植させ、これが施設経営を行うことができるか。もとよりすぐ出来る県もあろうが、多数の組合は非常なる困難に遭遇するであろうと思います。植民地の完成を早くすると否とは植民計画を実際にやる上において成功不成功の分かれ目であります。各組合が自分の力で充実のできない土地を持ちあぐんでいるようなことでは植民事業の失敗であります。私は一日も速やかに充実完成させることが植民計画上の最も重要なる点であると思います。道路その他各般の公共設備をなしたる以上はかなり多数のものに利用させたく、その設備は三〇家族に対しても一〇〇家族に対しても同じであります。金というものは成るべく生かして使うことが必要かと存じます。作るのは作っても利用者のないほど不経済なことはありません。要するに植民者の充実せざる、しかしてその結果として気勢の上がらぬ植民地は不成功であってよろしくないと思います。また府県専属になりますと組合員は土地の自由選択権を行使することができません。組合の成立していない所の者は日本人としてブラジルに行くことができないのであります。これは話が脇道にそれますが、私は成るべく早く全国に組合を組織し全国から送りたいと希望しております。専属主義は各個人に立脚した邦人の海外発展という点から見れば欠点があると思います。それ故に出し得る所は三〇でも五〇でもその実力と能力とに応じて出して早く植民地の基礎を作ることが肝要であります。またイグワペ、ノロエステなどの植民地に行き各府県の者の集団地の実況を見ましたが、各方面の人の集まる所は各その特色を利用しております。例えば長野県、福島県の者は養蚕をやっているし、奈

良県の者は茶を作り、また沖縄県の者は米、甘庶など夫々地方の農業上の特色を発揮して居るようであります。それ故混植主義にするとこれらの各地方の特色を程よく調和利用させることができて互いに利益を得ることになるのであります。また専属主義は割拠軋轢の弊害を生ずるのであります。かかることはブラジルでは大禁物であります。日本人が集まることさえ考え物であるのに、さらに各府県人が別々に集団してその地方色を濃くすることは一層よろしくありません。

これが延いては色々の問題を起こし、排日の原因を作ることにもなるのであります。敢えて排日問題を恐れるわけではありませんが、排日問題ということに細心の注意を払うことはもとより当然なことであります。

伯国における排日の原因は種々ありましょう。例えば人種関係、優生学上の問題などもありましょう。また武力主義、侵略主義、帝国主義の国民であると誤解されている点もありましょうが、殊に自国の風俗習慣を墨守し到底同化し難い人種であることも有力なる原因の一つであります。

即ち余り日本色を濃くすることは考えものであるのであります。私の考えでは植民計画はかなりなだらかにし、かなり先方の国民の感情に触れぬようにし、出来得るだけ日本人の色をぼかした方が良いと思います。

故に混植主義より見て日本色をぼかすには外国人も入れる位にしなければならぬ。したがって府県の色もこんなような訳からしてなるべく薄い方が良い。異彩を放つものが沢山あることはよろしくないと言う結論になるのであります。かく考えると組合専属の

土地を作ることは幾多の欠点困難があり、又とくと考慮すべき点があるのであります。然らばこれを如何にするかという実際問題に逢着するのであります。私は何とかして色を薄くしたいと考えてきたのであります。私も最初はできるだけ専属主義でやりたいと進んだのでありますが、実際問題として愈々これを実行するに際しては慎重に考慮すべき重大なる問題であると自覚するに至ったのであります。しかし組合法の改正は種々の事情によりまして無論不可能であるから、現行法規の下に実際に適合するようにしなければならぬと存じているのであります。しかし法律は解釈のしかたで多少融通のきく場合もありますから、窮屈なる理屈一点張りでも悪いと思います。要は如何にすれば最後の目的に到達するかが主たる問題であります。

私はこの見地よりして着々実行の方面に進んでみたいと思います。この主体問題（即ち代行機関問題）と土地問題（即ち専属か混植）は植民計画上極めて重要の点でありますから、十分皆さんの御研究を煩わしたいと存じます。　（以下略）

このような状況の下でバストス及びチエテの両移住地の購入は一応梅谷個人名義で契約したが、連合会の組織及び事業計画の一部改変をしなければ実行し難いことを痛感して急遽帰国した梅谷は、極力関係者の説得に努めたにも拘わらず、海外事情にうとい当事者は容易にこれを納得するに至らなかった。

この梅谷理事の主張は大凡ブラジル事情に通じる者の共通の意見であって、当時の駐伯有吉明大使、赤松祐之総領事を始め民間関係者の強く支持するところであったので、ようやく連合会当事

者もこれを納得するに至り、暮も迫った同年一二月二六日の第五回総会で承認されたのである。追って翌昭和四年一月連合会の代行機関として「有限責任ブラジル拓殖組合」の設立を決定、直ちにこれをブラジル国内に設定すべく、梅谷は二月一二日慌ただしく東京を出発、朝鮮、満州、シベリヤを横断してベルリンに至り、ドイツのブレーメン港からブラジルへ出帆して三月二一日リオに上陸、直ちに有吉大使と諸般の打ち合わせを済ませ、二三日にサンパウロに到着した。土地代の支払い期日は三月三一日となっており、それまでに「ブラジル拓殖組合」の設立をやらねばならない梅谷は非常な窮迫した状態におかれていた。その間僅か一週間、しかも不幸にもフエリアードが二日挟まり、働ける日数はただの四日のみと言う差し迫った事情のもとで関係者一丸となって奔走、三〇日ようやく登記に漕ぎ着け、ここに念願のＳｏｃｉｅｄａｄｅ　Ｃｏｌｏｎｉｚａｄｏｒａ　ｄｏ　Ｂｒａｓｉｌ　Ｌｔｄａ．が誕生した。

こうして土地代の支払いも滞りなく済ませ、梅谷個人名義から「ブラジル拓殖組合」（ブラ拓）への名義変更も行い、すべての手続きが無事終了した。

この代行機関ブラジル拓殖組合設立と共に、原則として所謂混植主義が承認され、移住地は府県別による区画を設けず、土地の分譲はブラ拓が直接各県組合員に行い、入植は到着順に従って土地の割り当てをする等。また各府県の移住組合は日本国内的のものに止め、一組合二〇〇家族の制度を廃止して全国移住希望者の要望に応ずることになった。なお入植者を日本内地直来のみに限

らず、広くブラジル在住邦人をも誘入し、場合によりブラジル人や諸外国人にも開放するという当国の国情に沿った方針を樹立した。

尚このブラ拓設立に当たり、連合会と各府県の移住組合の閏にその経営が複委任の形式でブラ拓に委任され、更に一つの決議機関を設けてブラ拓の重要事項の決議の諮問機関としたが、これは府県組合のメンツを保つためのものであったのか、実際には有名無実の存在であったように思われる。ただこの機関構成のため各所属府県の移住組合より任務者と言われた代表者を移住地に送り、監視監督の任にあてたのであるが、この制度は却って混乱を招く結果になり、間もなく廃止となった。特にバストスに入植した和歌山県の任務者諸田八百七と広島県の小谷博俊等は「自分らは目付役で来ているのだから、移住地経営を監督して行こう」という感覚で主任以下職員一同に干渉したり批判攻撃を繰り返して梅谷理事や畑中支配人をてこずらせたと聞く。

こうして梅谷理事はチエテ移住地には輪湖俊午郎、バストス移住地には畑中仙次郎を起用して開発に乗り出したが、輪湖は畑中と異なり信濃海外協会から信濃海外移住組合への引継事務や建設途上にあったアリアンサ移住地の雑務に忙殺され、チエテ移住地の方は中島一男測量技師が主任代理を務めた。一方連合会本部では田付理事長以下斎藤主事などが率先して移住者の周旋並びに各府県移住組合に対する援助に努めたが、何分にも無経験であり、試行錯誤の連続であった。為に初期の計画と甚だしい齟齬をきたし、受け入れ準備は現地職員の努力によって曲がりなりにも進捗したが、入植は容易には振るわず、又しても障害に挑戦しなけれ

ばならなかった。

土地購入の辛苦

こうして一応梅谷の個人名義で広大な土地の売買契約は成立したのだが、かれの帰国後の報告演説では土地購入の苦心談は語られていないので、ここに輪湖の著書「流転の跡」から転載する。

四移住地の土地買収中、梅谷理事の最も頭を悩ましたのはアラサツーバ耕地即現在のチエテ移住地の購入であった。

この土地は総面積四万七千アルケーレス、チエテ河口に近く、その右岸に存在し地味豊沃、地勢平坦、近隣にイタプーラ及ウルブプンガの二大瀑布あり、更にマット・グロッソ及ゴヤスの両州に接近する将来性極めて有望な地帯である。

昭和三年一月二六日梅谷理事がボリビア国境視察の途次、この森林を一瞥して食指大いに動いたが、何分この土地は地権複雑一部には係争関係さえ纏綿し、しかも第一第二抵当を合し、債権者七名の掌中にあると言う甚だ厄介なものであった。斯かる土地はいかに有望なればとて当面の責任を恐るる者の容易に手を染め得ざるは勿論である。然し梅谷理事はこの土地に非常な執念があったのみならず他にこれに匹敵する適当な候補地がなかった為、何としてもこれを購入すべく決心したのであった。

この土地はもとイタプーラ要塞地最後の将軍ガヴィヨン・ペイショットの所有に始まり、その後地権は三回移動して当時在生中であったブラジル人ジョーナス・デ・メーロ氏の所有となったい

た。然し右のジョーナス氏は欧州大戦の終了後牛肉の暴落によって没落し、ついに此広大な四万七千アルケーレスはブラジル銀行を筆頭に元利合計七千コントスの債務に充当せられおばならなかった。

一九二四年の頃、一度この土地は英国シンジケートとの間に商談が纏まった所、不幸其取引直前偶々勃発した伯国革命に禍せられ、図らずも破約の難に遭遇してしまった。後サンパウロ商工銀行が債権者を代表して土地の切売り処分を開始したが、それも失敗に帰し、爾来そのまま放任の状態にあったのである。

一見なんのこともなく思われる此土地買収もいざとなれば、以外な邪魔が飛び出したり、利害が錯雑して容易にけりのつかぬ場合を生ずる。

梅谷理事が此土地に対し調査並びに交渉を開始してより、これが売買契約の成立まで、実に半歳の長きにわたった。今其間の苦汁を略記して移住地史の一端とする。

愈々土地の地味、地勢等の調査も済んで、本格的に地主及地権者に対し商議の交渉を開始すると、第一に現れたのは、委任状関係であった。

かねて此土地は債権者側の依頼により一有力伯人が処分することになっており、右の仲介者はこれにより相当の報酬を得られる事と約定がなっていたのである。従って此土地ブローカーは梅谷理事が地主及債権者と直接商談を進めることを拒んだのも無理はない。然しかかる仲介者が此取引に割り込んでいることは、少なからず梅谷理事に取って、土地売買価格の決定上不利なこと故、先ず地主を通じ債権者側たる銀行をして、右委任の解約をせしめね

ばならなんだ。それが漸く片付き、兎も角直接交渉に入る段に漕ぎ着けた所、今度は更に厄介な係争問題にからまる苦情が提起された。と言うのは当時アラサツーバ耕地の一部には遺産相続に関する訴訟がつき纏っており、原告側より再度銀行へ対し示談和解を申し込んでいたが、何分相手は強力な債権者であった為、一向これに応ずる様子もなく其侭停頓の形となっていた所、今日本の資本家梅谷が此土地の売買交渉を始めたということを知るや、原告は好機到れりとばかり、密かに策動を開始したのであった。一日原告側の弁護士某が梅谷理事を訪れ「此土地に対しては目下訴訟が提起されていること故、若し貴殿が商談を進めるならば此問題を解決してからにして頂きたい。万一これを不問に付して購入された場合、原告としては移住者の入地を絶対に拒む外ない」と甚だ不穏当且威嚇的な陳述をしたのである。

勿論梅谷理事は此土地に付随した右係争関係の内容も十分承知していたので「私は土地と共に訴訟事件をも購入する考えである。依って右訴訟解決は其後とするから然様御承知を願いたい」と一蹴した。示談額が無法でないならば此際後日を慮り一掃してからとも梅谷理事は考えぬ訳ではなかったが、ここに困ったことは、此間先方に加担し何ものか為にせんとする有力な日本人が介在していたかに見えたことである。

移住組合が今後此国に於いて幾多の事業を経営するに当たり、かかる日本人の為に其都度煩わされることは甚だ遺憾であり、苦々しい次第である故、このような強硬な態度に出たのであった。又一面連合会本部との関係もあり何分にも土地購入を急がねばならぬ事情に迫られていた為、梅谷理事は徒に時日の空費を恐れひ

たすら地主及債権者に対し、商談を進めんとした。
　ところが第三の問題として土地代の売買価格につき、容易に進捗を許さなんだ。それは洵々虚々実々の腹芸に属し、要するに高く売ろう安く買うということに帰着するのであった。債権者側としては地主の債務総額たる約七千コントスさえ貰えば、それで文句は勿論ないが、地主はこれでは地権壌渡書に署名するに過ぎぬので、梅谷理事にこれ以上の価格をもって購入して貰うか、さなくば債務を一部切り捨てて貰い、土地売買価格との差額を要望したのも無理からぬ。
　前述の如き内情にあったから、債務額を標準として商談を進めるならば、元より問題はないのであるが、極度にこれをこぎろうとする所に梅谷理事の苦心は存したのであった。又一方地主及債権者たる七名の銀行業者としては。此際かかる好個の買い手を失ったならば、四万七千アルケーレスと言う広大な此土地は容易に処分し得る機会もないと考えらるる所に懸念があったが、不都合にも、日本人の或る者が「梅谷は此土地を買わずに帰国はできない事情にある」と内報した者があった為、急に債権者側は強硬な態度に変わってしまった。そこで梅谷理事は一先ずこの商談を打切り日本への乗船切符を購入し、帰国を発表放送して相手の様子を見ることとした。背水の陣功を奏し、これと知って驚いたのは債権者側であり、地主は失望の余り銀行業者のにえきらぬ胴欲的態度に憤慨して、サンパウロ市を引き揚げようとした。
　突如この場面へ登場したのがアラウージョ某という政界でも名の知られた義侠心に富む一紳士であった。この人は地主ジョーナス氏没落前からの旧知で、此話を聞くに及び、地主を励まし同道

で梅谷理事を訪れた。
曰く、
「ジョーナス氏は土地を売りたいと言い、貴殿はそれを買いたいと言う。それだのに交渉が纏まらないというバカな話はないと思う。若しジョーナス氏が将来この土地の売出しを拒んだなら、銀行側はどうする積もりか。結局競売に附するより外ないが、其結果は債権者側に不利益となることは分かり切った話である。請合はでき兼ねますが、御希望とあらば私が仲に入ってお話しをしてあげましょう」
「私は最近船でリオを出発することに確定しております。此土地に対して今以て十分其意志はありますが、何分土地代価に就いては当方においても先般来債権者側に申し入れた程度が最大限の予算で、其間駆引を許さぬ実情にある次第故、貴殿がお取計らい下さるならば、右お含みの上、更に私の出発に支障を来さざるよう火急的御配慮を願いたい」「委細承知致しました」ということで別れたが、これがきっかけで談判は急転し、半歳に亘る此難交渉も、幸い当方の有利に展開し四万七千アルケーレスの土地が四千二百コントスを以て手打となり、売買登記を完了する運びとなったのである。

ブラ拓の功績

昭和四年度のチエテ及びバストスの分譲地区計画をみると、前者が四〇〇地区後者が二〇〇地区であったに拘わらず、入植者数はチエテ三六家族、バストス七四家族。入植二年目の一九三〇年

度末に至ってもチエテ六一家族、バストス二〇〇余家族というチエテ移住地の不振ぶりで、初期四〇〇家族を予定して一〇二地区の山伐と山焼きを終えて待機していたにも拘わらず、過半の地区は再生林に覆われてしまった。

この入植不振の原因としては連合会の宣伝不足などもあったが、矢張りチエテ移住地はマラリアの巣窟であるとの定評が国内のみならず日本にまで伝わっていたことによる。ために初期渡航者の入植拒否問題があったことを、内務省内で催された梅谷専務の第二回帰朝報告演説速記録から一部抜粋して参考に供しよう。

前略、「それからその次ぎにはチエテ移住地の入植を絶対に拒絶するという問題。チエテ移住地には絶対入らない、バストスに入れてくれ、との強い主張で、これは主として和歌山県の渡航者の方がご主張になった。

しかしこれは私が当地（日本）に帰ってチエテとバストスにどういう割合に移住者を送るかと言うことを相談した結果、バストスに非常に希望者が多い。チエテが四〇〇家族入ると決めているのに計画が進まぬ。

色々協議の結果、案分比例にしてやろうという協定が成り立っている。

その協定に反して勝手にチエテに行くものがバストスに行くということは許さぬ。それは一般の統制もあることであるから自分としては任意にかえる訳にはいかぬ。即ちチエテ移住地についてマラリア蚊だとか、交通関係が悪いとか、何とか愚痴を並べている者もあるが、私の見るところによると決して心配したものじゃない。マラリヤの問題もそう言う場合もあるけれども、これはたい

した問題ではない。相当の設備をし、分譲地もそれを考えてとってあるから、そう心配することはない。今入って行っても決して不利益ではない。それであるから、そういうことを言わずに入るようにされたらどうかと言うことを懇々と言っておきましたが、これは中々承知されずに、自分たちはどうしてもバストスに入れてもらうのだと言うことで、川崎稔と言う任務者の嘱託・・・、本当の任務者ではないが、任務者の仕事をとるということで命を受けてこられたその川崎君が和歌山県人と同道されて、私は足を傷めてサンパウロの病院に入院しておったが、その病床に来られて、我々和歌山県人はチエテ移住地に入るということは御免蒙る、と同時にバストスに入れてもらいたいと言うことを頻りに申した。その折りには諸田君（バストスの任務者）は同席ではなかったかと思いますが、矢張り来てそういう問題を述べたように思う。とにかく川崎君が来て、和歌山県人の態度として強硬に主張され、そうして若し我々がチエテ移住地に無理に入って、一人でも病気にかかった、マラリヤの為に死んだという場合にその生命について保証してくれるか。そういう生命の保証は難しい、それは私は出来ぬ、チエテ移住地というものはそんなに心配することはない。とにかく相当に設備はしてある積りだ。とにかく我慢して入ってごらんなさいと言うけれども、中々承知されない。それではしょうがない、私の方ではなるべくチエテ移住地に入ってもらいたい。然しどうしても入らぬということであれば、首に縄をつけて引っ張って行くことはできない。私の方は強制してチエテ移住地に入れるということはしない。任意になさい。しかしバストスに入るということは許さぬ。一般協定を破るし、そういう我がまま勝手

なことは許さぬ。それではバストスに入らず、チエテにも入らず他の土地に入って、一年か二年後入れてくれるか。それは認めない、わたしの言うことを拒んで出て行く者は将来私の経営している移住地には入れぬものとして貰いたい。しかし一体チエテ移住地に入ることが良いか悪いかということに就いては尚君らにおいて考慮してくれ。考慮の結果入るというならばいいのだが、とにかく君らの言うことを聞くわけには行かぬ。他の組合との権衡もある。チエテの移住地が実際いかぬというならば仕方がない、ただ差し当たり医者が居らぬと言うことは方便であるけれども、アリアンサの医者をやるなり、適当の方法を取っている。また場所の悪いのは多少ふべんの所があるかも知れないが、それは私の方でも十分気をつけるし、先ず入ってごらんなさいと言った。

そうしたらその翌日川崎君が来て、昨日のお話しはよく分かった、それで私共はとにかくチエテに入れてもらうことにした。それは誠に結構だ、と言うことで問題は済んだのでありますが、かなり強硬にチエテ移住地に反対した。生命の保証までしてくれなければ人らぬと言う経緯がある。

それ程までに嫌われていたチエテ移住地は今日は寧ろバストスよりも良いというような風になってきているのであります。チエテ、バストス、色々一長一短があってどれが良い、これが悪いということを申し兼ねますが、チエテに入られる人はマラリアと言っても何でもない、地形の関係から見れば却ってよろしい。寧ろチエテの方に入ろうじゃないかと言うことを私のほうに言って来ている人もある」、後略。（この和歌山県人たちは一九二九年七月一日に入植した川崎稔、立島真一、大竹忠次郎、新宅儀助、坂中喜旭、

空地光太郎の六家族）

このようにマラリアの巣窟と言われたチエテ移住地は、初期の原始林伐採の人夫募集にも困難を極めたよきだが、関係者のたゆまぬ努力の結果入植者もその後次第に増加し、十年後には一千数百所帯を擁する一大植民地に発展せしめた功績は、ブラ拓ならではの感が深い。

移住地のパイオニア

チエテ移住地最初の入植者の事情を以下「チエテ十年史」から抜粋する。

『一九二八年九月から翌年二月までの間に四家族を渡伯せしめた。この四家族が即ち現在ウニオン区（旧Ａ区）に在る大成景毅、竹内喜一、吉村權六、石田広助諸氏であって、大成氏は一九二九年一一月一七日、竹内氏は同年一二月二〇日、吉村、石田両氏は翌年四月二八日に何れもアリアンサ信濃移住地に入植している。

この関係から最初はこの四氏をチエテ移住地入植に際しては在伯邦人扱いとしていたがその後当初の事情により直来入植者として取り扱わるるに至ったものである。吉村、石田両氏は着伯後間もなくチエテの準備なって入植したのであったが、大成、竹内両氏はアリアンサに在って約半歳カッポエイラを叩いて米、フエジョン、ミーリオなどを栽培先ずブラジルに於ける農家としての第一課を習得貴重なる体験を積み、随時チエテ移住地を視察してここに入植する心構えをもつに至ったものであって、当初からチ

エテ入植と決定していた訳ではなくバストス、チエテ何れへでも組合員として入植し得るものと考えていた由で、結局チエテを良しとしてここに永住の地を決定したものであると言う。今草分けの人々に当時のことをたづねてみると、

「昭和三年（１９２８年）一二月始めころから激しい雨続きで翌四年の三月一杯降り続き、チエテ河の溢れはもとのバルサの所からずっとチエテ河側をおかして当時唯一の交通機関だったカノァはルッサンビーフ側の岸に沿うて四キロも上流へ一たん溯りそれからチエテ側へ流れ下って漸く今のオラリアから一直線に森をつきぬけた川岸の辺に着いたと記憶している。川岸の木々の枝には三メートル程の高さのところに蛇が巻き付いていた位だった。

昭和四年の三月ころ最後に様子を見に来たときは丁度製材所の基礎工事中で、元イニューマ区にいたワタヌキ君が富山移住地の人達を連れて来て盛んに土を運んでいたが、何れも降りしきる雨には閉口したようだった。私らは四年の六月一日に入植して収容所に落ち着き、それからカッポエイラを叩いて先ず家を造りにかかったが、慣れないというものは致し方がないもので僅か半アルケール位のカッポエイラを叩くのに一カ月もかかり、小屋のような家を建てていよいよ自分の地区へ移ったのが八月一七日頃だった。その当時製材所はまだできて居なかったので板類はみな手挽きのものを一ダース四十八ミル出して買う始末、瓦はバラボニータ産が一千枚五百五十ミルだった。割合に安かったのが亜鉛引鉄板（トタン）で、だからこれを利用した人も沢山あるはずだ。こんな調子だから他のことは推して知るべしで銭のかかること想像のほか、いまの人達には想像もつくまい。それでもこれがブラジ

ルの百姓だという観念から遮二無二よそ目もふらずに突進また突進でカッポエイラを叩いてコーヒー植え付けに努力したものだ。その当時伯人力マラーダを雇うとロッサが請け負いでアルケール三百ミル、後片付けにもう三百ミルくれという。山伐がおなじく五百五十ミル、みな知らんものだから言うなり通り唯々諾々として払っていたもので、今から考えると馬鹿らしくて話にならん位だ。一番苦痛だったのは井戸水の不便だったことと、医者を一々アリアンサから呼ばねばならなかったことだろう。物価の高かったことはあの当時の事情としては無理もないとして一応は諦めもつくが、この二つの不便と苦痛はちょっと忘れられない。病気は子供へくるアメーバ赤痢だったようだ二番初めにやられたのが確か和歌山県大堀藤楠君の次男正春（三才）という子供だった。これは当時まだ墓地がなかったからアリアンサの墓地まで運んで埋めた。確か七月頃だったと思う、その他急性結膜炎が多かった。どの家に行っても目を真っ赤に腫れただらした大人子供の一人や二人がおらぬ家はなかった。今から考えてみると、矢張り草分け植民として人の想像も及ばぬような苦痛をなめ、笑えぬような失敗をし悲喜交々至ると言った思い出がすべて愉快と言っては少し変だが、まぁ誇らかな感じをもって言い得ると思う」。

以上の感懐によって当時の入植者の事情の片鱗がうかがわれよう。

この四家族に次いで同年六月七日には福岡県組合の藤村市兵衛、古賀武一両氏が入植した。両氏とも日本から直接チエテ移住地目指して渡航した最初の入植者である。惜しいかな藤村氏は昭和十

三年五月一日胃潰瘍を患って他界した。多年区政に尽力しまた産業組合の幹部として重きをなし今後多々益々期待されていたにも拘わらずいまだ五十七才という働き盛りに十周年の日も持たで逝去したことは何といっても惜しい限りである。古賀氏は多年Ａ区小学校に教鞭をとり、その後直営果樹園の経営に転じ今もって健在である。氏については当時移住地における小学校の草分けであるという点で特筆すべきものがあるがこれは章を改めて述べよう。同年七月一日に和歌山県組合の川崎稔、立島真一、大竹忠次郎、新宅儀助、坂中喜旭、空地光太郎氏等六家族が入植し、次いで同月三日には和歌山県組合から新宅宝作、佐藤嘉市、東喜八郎、野中源市、堀藤楠諸氏、福岡県組合から岩下源吾、中川弘両氏、広島組合の竹本興一氏等が入植し』(以下略)。

こうして初期の開拓者たちは多くの苦難を克服しながら開発に努力したが、連合会の懸命な勧誘にもかかわらず初年度の入植者の実数はわずか三四家族に過ぎず、当初連合会が計画した四〇〇家族入植とは甚だしい齟齬を呈したのであることは前述した。しかしその後入植状況は年とともに軌道に乗り一九三四年のピーク時には直来者一五七家族とブラジル在住者二四家族、併せて一八一家族の多数に達した。その後入植一〇年目の記録では該年度までの入植者総数は一〇七五家族の多数に上り、退植者をのぞいた在住家族数は六六三家族、総人員四二二四人となっている。

平生釟三郎時代

昭和六年（一九三一年）二月二六日海外多住組合連合会第八回総会で任期満了になって辞任した田付理事長と梅谷専務の後任に会頭兼理事長として実業家平生釟三郎、専務理事として宮坂国人が選出された。

平生は関西実業界の大立者だが、中学時代学資に窮し三度も学業を放棄しなければならぬような貧困の育ち方をもており、一ツ橋高商を卒業後韓国仁川の税関吏をふりだしに神戸商業の校長となった。その後実業界に身を投じ東京海上火災保険、川崎造船所などの経営に敏腕をふるい、海外移住事業にも深い関心をもっていた。一九三五年（昭和十年）五月広田弘毅外相の委嘱をうけ訪伯経済使節団の団長として渡伯し、当時のバルガス大統領とも会見して大いに活躍した。翌一九三六年二・二六事件後の広田内閣における異色の文部大臣として入閣している。

宮坂国人は明治二二年七月一五日諏訪市豊田文出に生まれた。宮坂は諏訪で中学を中退し東京の京華商業にうつり、平生家に寄宿して家庭教師をしながら神戸高商を終えた。この間海外雄飛を志していた宮坂が平生から受けた影響は多大なものがあった。

一九一三年（大正二年）神戸高商を卒業した宮坂は平生の紹介で東洋移民合資会社に入社し、ペルーに渡った。その頃ペルーの日系コロニアでは南米最古の邦字新聞の発行が計画され、東洋移民会社、森岡移民会社、日置公使、森領事、日本人同志会などから資金を募り、日本から植字などに経験のある職工津城某を呼び寄せ、ズブの素人職工二人を二カ月間訓練してようやく年末に「アンデス時報」発刊のはこびとなった。

この時報の最初の編集責任者が東洋移民会社社員の宮坂であった。宮坂はその後約六年間のペルー移民の全盛期に移民会社において移民事業を体験するのだが、その間後年のパートナー加藤好之と親交を結ぶのである。

加藤好之は明治二一年（一八八八年）滋賀県彦根に生まれであるから宮坂より一才年長である。少年のころより苦学して明治四一年（一九〇九年）大倉高等商業学校を卒業、その後森岡移民会社に入社して翌年ペルーに渡っている。その後第一次世界大戦のころ移民会社を退社し、独立して貿易会社を経営して業績をあげていたが、戦後の不況に耐えられず倒産して帰国した。

大正九年宮坂は帰国して新しく創設された海外興業株式会社の調査部長に就任し、翌々年の一一年にはフィリピンのダバオに出張を命じられ、昭和六年には海外移住組合連合会の理事として平生理事長の下で活躍することになる。

こうして長年の希望であった宮坂のブラジル赴任が決まり、早速加藤好之を誘った。加藤はペルーから帰国後三越の大連支店や京都の丸物百貨店で敏腕をふるっていたが、熟慮の末主事として宮坂とともにブラシルに渡ることになった。続いて時の拓務省南米課長武田寛一、課員田口管次郎も渡伯し、ブラ拓の組織などを明細に検討し、改善案を提出して関係者の承認を得た。この経営の合理化による新方針により土地分譲および開拓が進められ、結果内地における組合員の募集渡航も容易になり、現地においては在ブラジル邦人の入植が旺盛になり、間もなく四移住地の中のバ

ストス、アリアンサ両移住地はほとんど満植状態になった。
昭和十年平生は訪伯経済使節団長として重要使命を帯びて渡伯したことは前にも述べたが、その機に彼の主宰する事業についても十分検討した結果、開拓事業が次の段階に進む時期に至ったことなどを考慮し、いつまでも開拓事業のみに拘らず更に経済活動を推進する必要をみとめた。
そこで帰国後この趣旨に基づき宮坂から腹案を得、関係各方面と折衝して連合会を改組し「日南産業株式会社」の創立をはかったのである。
この腹案の趣旨は各関係方面の協賛を得てついに海外移住組合連合会のブラジルにおける事業を会社組織とするための法律案が、第七〇回帝国議会に提出されて可決し、昭和一二年四月二日法律第四三号として公布された。
連合会はこの法律に基づいて昭和一三年四月臨時総会を招集してこれに要する一切の手続きを終え、七月一〇日新会社設立総会を開催し、ここに資本金一千万円の「日南産業株式会社」が設立されたのである。
これによって海外移住組合連合会のブラジルにおける事業はすべてこの新会社に移したが、移植民の発展に関しては依然かわりなく続けられた。
かくてブラ拓はここに面目を一新し、連合会の主たる事業であった拓殖事業を直接遂行するとともに、さらに日南産業株式会社の代行機関として銀行部（カーザ・バンカリヤ・ブラタク）、商事部（カーザ・ブラタク・リミターダ）、鉱業部（エンプレーザ・ミネラソン・ブラジレイラ・リミターダ）、技術部（エンブレーザ・

コンスツルトーラ・ブラタク・リミターダ）、綿花部（アルゴドエイラ・ブラタク・リミターダ）やブラ拓製糸などの傍系会社を設立した。

この傍系会社は一九四一年の日米開戦による枢軸国民資産凍結によりブラジル政府の清算管理人の手に移り、結局戦後まで生き残ることのできたのは銀行部の南米銀行とブラ拓製糸の二社にすぎなかった。

日南産業株式会社に改組されても、自作農創設の目的を逸脱することは許されないが、移住地事情は比較的急速の段階にあり、植民者の自治経営に委ねるべき時機が到来していた。昭和一三年度（一九三八年度）を一期としてブラ拓はバストス、アリアンサの両移住地を自治移行へ二ヶ年の暫定期間をかぎり整理事務所を設置して準備し、チエテとトレス・バラス両移住地は未完成ゆえ自治支配人制度をしき、チエテは昭和一四年四月支配人を責任者とする請負制度の経営に委ね、漸時移住者の自治に移行する準備を整えていった。

梅谷光貞略歴

明治一三年（一八八〇）一二月二日、兵庫県養父郡畑村の内、上谷部落において、父梅谷伊平、母コマの間に、三男三女の長男として生まれた。

明治二四年（一八九一）十才の時、朝来（あさご）郡竹田の有終尋常小学校に入学。

明治二五年（一八九二）京都府天田（あまだ）郡西部（せいぶ）

高等小学校に進む。

明治二九年（一八九六）同校を卒業するに際し、たまたま兵庫県立豊岡中学校が創立せられるや、第一期生としてこれに入学、田中勝之烝校長より誠実剛健宏大の校訓のもとに薫陶を受ける。

明治三四年（一九〇一）三月、首席をもって二〇才で同校を卒業。同年四月、両親親戚の反対に遇い、長文の書置をのこし、単身家出をして上京、第一高等学校の入学試験に応じ、優秀の成績で合格、鳩山秀夫、穂積重遠等の学友と机を並べて学を競うにいたった。

明治三七年（一九〇四）第一高等学校を卒業し、東京帝国大学独法科に進んだが、在学中胸の病を得たため身体の摂生に意を注ぎ、やがてこれを克服すると共に五尺足らずの身長にもかかわらず一八貫の体重を得、風姿堂々として別人のように健康を回復した。明治四一年（一九〇八）二八才で大学を卒業すると同時に、文官高等試験に合格し、直ちに内務省に入り、東京警視庁警部を振り出しに官界に身を投じた。

明治四三年（一九一〇）千住警察署長、万生橋警察署長を歴任。

明治四四年（一九一一）第八方面担当監察官となり、大正初年の東京における米騒動、焼打ち事件の鎮圧に当たる。

大正二年（一九一三）には三重県社寺兵事課長兼学務課長。

大正三年（一九一四）には岩手県警察部長。

大正五年　（一九一六）栃木県警察部長。

思想的には既に学生時代以来、徳富蘇峰に共鳴し、我が国の国威を世界に発揚し、日本民族の発展のために奮闘努力することを生涯の使命とする人生観を抱懐していたところ、たまたま台湾へ

の赴任をすすめられる機会があった。

大正五年（一九一六）明石元次郎台湾総督、下村宏民政長官のもとに、台湾総督府警視総長専属主事、民生部警察本署警務課長として赴任、植民地警察行政の中枢業務を担当。

大正六年（一九一七）十月より、翌大正七年七月まで、八ケ月間にいたり、英領ボルネオ島、蘭領東インド諸島、英領海峡植民地、マレー半島、仏領インド支那、フィリッピン群島、及び南支那各地へ出張を命ぜられ、植民地事情等を視察調査。

大正八年（一九一九）台湾総督府民政部警察本署長事務取扱を経て台北庁長となったが、台北庁長在任中、南方視察の経験を生かして、台北郊外に雄大な草山（そうざん）国立公園を企画し建設の緒につけた。（三八才）

大正九年（一九二〇）三月より九月まで六ケ月間、朝鮮、満州、北支、中支、南支の中国本土各地へ出張視察を命じられ、さらに進んで同年十二月より、翌々大正一一年（一九二二年）四月まで一年四カ月の期間にわたり欧米各国、アルゼリア、チュニス、モロッコ、エジプト、中央アジヤ各地へ出張し、第一次世界大戦後の海外事情、特に植民地事情を視察調査した。

大正一一年（一九二二）五月、台湾新竹（しんちく）州知事となる。

大正一二年　（一九二三）十月内地に転じて山梨県知事に就任。

大正一三年（一九二四）六月、長野県知事に就任。

大正一五年（一九二六）七月、県下の警察網整理のため三警察署及び一四分署の廃止を断行したところ、廃止をみた岩村田、屋代、中野、三町を中核とする数千の民衆がその復活を要求して大

挙知事宮邸に乱入し、知事に暴行を加える一大騒擾事件が勃発した。これを長野事件というが、その責任を一身に負って同年八月潔く退官した。

以来、東京渋谷に住居を移し、閑居の日を送るかたわら、長野県知事時代以降関与した長野県人の南米移民事業を陰に陽に支援しつつその発展に多大の関心を寄せていたが、時あたかも昭和初頭の経済不況期に際会し、我が国朝野に海外移民事業に対する期待が急激に高まる。

昭和二年（一九二七）八月、迎えられて海外移住組合連合会専務理事となり、ここに生涯の理想とする日本民族の海外発展の大事業に存分の経論を振るうべき時節が到来した。同年十月より昭和三年（一九二八年）十月までの一年間、移住地建設の目的をもって南米ブラジルへ第一回の出張。

昭和四年（一九二九）二月より翌五年六月までの一年四ケ月間、ブラジルへ二回出張をし、右二回にわたる滞在の間にブラジル全土を親しく実地調査した後、サンパウロを中心とするチエテ、バストス、アリアンサ地方等を日本人移住地建設の最適の候補地として選定し、日本政府を動かし、万難を排して総計二五万町歩におよぶ土地を購入する契約を現地において日本側代表として締結し、ここにようやく南米ブラジルにおける日本人移住地をして磐石不動の恒久的基礎を確立すると共に、現地における移住組合の育成発展のために寝食を忘れて全力を傾注した。しかも更に進んで南米各地を踏査し、パラグワイ拓殖計画の有望なるを察知し、同国に対する四三万町歩の移住地買収計画を立案して日本政府並びに海外移住組合連合会に対しつよくその実現方意見具申をなし

たが不幸採用するところとならなかった。
昭和六年（一九三一）二月、任期終了につき海外移住組合連合会専務理事を辞任。しかるに間もなく満州事変が勃発し、新たに満州移民の重要性が認められるに及び、政府軍部の要請を受ける。
昭和七年（一九三二）四月陸軍省嘱託となり、満州視察を重ね、次いで小磯国昭陸軍次官が関東軍参謀総長に転じて渡満し、関東軍特務部を創設して満州国経営に重点を指向するに当たり、同年一一月、関東軍初代移民部長に迎えられる。
昭和一〇年（一九三五）二月に特務部が廃止され退官するに至るまで二年二ケ月の期間にわたり、満州において日本人満州移民の企画実施を指導し、満州における一〇〇万町歩の土地を購入した後、三〇年間一〇〇万戸入植の移民計画を立案推進し、あらゆる障害に抗してその一部を軌道に乗せるに至った。
その後東京に帰還し、その豊富な経験と研究に基づき、ブラジル、満州に次ぐ第三の日本民族発展の新天地として東南アジア及び太洋州諸島に注目し、政府軍部と連絡をとって移民計画推進の具体的構想を練りつつあった際、在満当時に積み重ねられた苦労のあまりついに肝臓を冒された。
先には長野事件のため前途洋々たりし官界に志を果たさず、又、後年我が国の海外植民事業の実際経営の第一人者として足跡を残し、拓務大臣にも擬せられながらその時を失い、郷土の期待にも応え得ず、深く心を残した。
昭和一一年（一九三六）九月二七日、東京都目黒区上目黒八丁目六二八番地の自宅において死去。享年五五才。正四位勲二等。満州国勲二位。

真言宗本山より憲徳院殿真諦光峯大居士の院号を贈られ、遺骨は兵庫県養父郡養父町畑の生家わきの高台の墓地に葬る。

輪湖俊午郎略歴

本籍＝長野県南安曇郡梓川村。

一八九〇年（明治二三年）六月二八日、父岩吉、母琴の三男として生まれる。

一九〇六年（明治三九年）松本中学校を四年で中退、英文学研究の目的で北米に渡航。同年カナダ、ビットリア市の日本聖公会で大山牧師より受洗。滞米七ヶ年、一般労働、勉学、新聞記者。

一九一三年（大正二年）一二月北米の排日法の議会通過に憤慨し、英船ヴァサリー号でブラジルに移住。

一九一六年（大正五年）八月金子保三郎と共に日伯新聞を創刊する。

一九一七年（大正六年）移民会社の機関紙として「伯剌西爾時報」の創刊に際し、初代松村総領事の懇請により編集長として入社。

一九一八年（大正七年）五月移民募集のため帰国し宣伝、八ケ月募集に努める。

一九一九年（大正八年）三月コーヒー園移民及びイグアツペ植民一千名の輸送監督として長崎港を出帆、同港にて浅野利津江と結婚する。着伯後は耕地在住邦人子弟の教育状態調査のためモジアナ線その他を旅行。

結論として一日も早く独立農として農村を作り子弟の教育をなす外なしとして新聞紙上に論評する。

一九二〇年（大正九年）「伯刺西爾時報」を辞しイグアッペ植民地に入る。

一九二一年（大正十年）偶々南米一巡の途にあった永田稠日本力行会長と会談、会長の勧めにより単身再帰国、滞在一ヶ年、ブラジル事情の講演及び永田会長と共に信濃海外協会の設立に奔走する。

一九二二年（大正一一年）一月信濃海外協会創設と共に専任幹事となり長野県庁社会課に海外協会事務所をおく。同年帰伯に先立ちアリアンサ移住地建設案を本間利雄知事に提出し、信濃海外協会ブラジル支部長として帰伯後直ちに妻同伴でセッテバーラス植民地に入り土地を求めて植民者となる。

一九二三年（大正一二年）信濃海外協会の電命に接し移住地選定のため同地を引き揚げバウルー市に転住する。同年四月二五日セッテバラス植民地において長男ジョージ誕生。

一九二四年（大正一三年）北西年鑑を出版する。同年一一月二〇日アリアンサ移住地の建設と共に現地主任理事に就任。

一九二五年（大正一四年）一一月二〇日、時あたかもアリアンサ移住地一周年に次男彰がアラサツーバ事務所で出生。

一九二七年（昭和二年）未、移住組合連合会専務理事梅谷光貞（前長野県知事）の来伯をリオに迎える。同専務の懇望により連合会に関係し法人ブラジル拓殖組合の創立、土地買収、移住地設計など基本計画に参画する。

一九二八年（昭和三年）八月チエテ移住地買収終わる。同時にアリアンサ移住地兼任のままチエテ移住地の現地責任者として開発に着手する。

一九三〇年（昭和五年）一月統一案（信濃、熊本、鳥取及び富山の四海外協会移住地を統一してブラ拓に移管の案）を提げて帰国、滞在一ヶ年。

一九三一年（昭和六年）田付理事長並びに梅谷専務の辞任となり共にブラ拓を辞任。帰伯後は専らアリアンサ移住地の経営に努める。

一九三三年（昭和八年）二月一五日、長女政子アリアンサの自宅で出生。

一九三四年（昭和九年）アリアンサ移住地の諸問題を一応解決し、爾来チエテ移住地に入り農民となる。同年十月一一日チエテの自宅で三男光明出生。

一九三九年（昭和一四年）五月「バウルー管内の邦人」三千部印刷、好評。

一九四〇年（昭和一五年）皇記二六〇〇年に際し帰国、滞在八サ月、主な目的はこの祝賀記念事業として「ブラジルに於ける日本人発展史」の編纂で、現地ブラジルの資料を携え上下二巻の約三分の二を担当執筆する。同年外務省の勧めと満州国の招聘により外国同胞代表の一人として満州国に赴き、ブラジル在住の邦人よりの皇軍慰問袋を傷病兵に手渡す。また帰国の船中「流転の跡」の一部を著作し、日本で出版する。

一九四一年（昭和一六年）日米開戦、翌一七年二月スパイ嫌疑によりチエテの自宅で逮捕されサンパウロ収容所に一一ケ月収監

される。

一九四八年（昭和二三年）終戦直後の事でコロニアの各界いまだ混沌としていた頃、力行会支部の主立った人々が立ち上がり、二世運動を開始し、手初めに学生会を組織し、奥地の遊学生のため寮の建設を決議した。

一九四九年（昭和二四年）日本力行会五〇年史海外編の発刊に際し委嘱されて全五三五ページ中ブラジルに関する分三五六ページを執筆編纂した。

一九五〇年（昭和二五年）五月二十日長男ジョージ、東幸子と結婚。

一九五五年（昭和三〇年）一〇月一六日次男彰、榎本五月と結婚。

一九六一年（昭和三六年）七月二日三男光明、三上栄子と結婚。

一九六五年（昭和四〇年）二月七日長女政子、工藤賢一と結婚。

一九六五年（昭和四〇年）没。

チエテ移住地年表

一九二八年（昭和三年）

六月、サンパウロ総領事館移民部嘱託畑中仙次郎並びに同仁会勤務の古関徳弥の移住地候補地踏査報告書がブラ拓に提出された。

八月九日、元地主ジョーナス・アルヴェス・デ・メーロと土地売買契約を締結し、以後この日を移住地の記念日とする。

九月一六日、元ルッサンビーラ駅から輪湖の引率する一隊が渡舟地点を経て移住地中央部への道路調査完了。二五日には上記道路開削工事に着手し一一月に完成。

一二月、移住地中央部より四方に通じる連絡支路開削工事着手し、元ルッサンビーラ駅前にブラ拓仮事務所を設置、なお製材所や煉瓦工場を建設する。

一九二九年（昭和四年）

三月、昨年末から異常な多雨でチエテ河の大氾濫により渡河に支障をきたす。

五月、上記の道路が完成、入植予定地の原始林伐採や渡河用バルサが完成する。

六月一、二日に最初の入植者である吉村権六、大成景毅、竹内喜一、石田廣助の四家族の広島県人がアリアンサ移住地を経て入植。この月ブラ拓事務所兼購買部や医師住宅を起工し、市街地予定地六三アルケーレスの原始林伐採を開始。

七月六日、最初の在伯邦人が入植した。二十日堀藤楠の次男正

春（三才）アミーバ赤痢により死亡、アリアンサ墓地に埋葬した。
八月二日、最初の出生児あり。
一一月一一日、ロドルフォ・ミランダ上院議員と架橋予定地点五〇〇アルケーレスの土地売買契約を締結。同月一六日、元アラサツーバ耕地係争問題に関してモンテアプラジーベルより測量隊が入り込む。
一二月八日、当時入植していた三四家族の協同出資で「Ａ区の購買」と呼ばれた購買組合が設立された。九日には収容所の一部を教室にあてて古賀武一を聘して寺小屋式小学教育を始める。一八日、薬局主任として大坪健治薬剤師が着任。なお同月以前から計画中の架橋設計をアリアンサ在住の木村貫一郎工学士に委嘱して設計し直し州政府の補助金を出願した。

一九三〇年（昭和五年）
一月三日、会員三四名の従来の家長会が総会でチエテ会と改称され、青年団の設立もあった。四日にはチエテ河の増水でバルサが不通になる。
一三日にはブラ拓の梅谷光貞専務理事の初来植があり、一五日には移住者一同と懇談し、教育、交通、諸施設、原始林及び再生林伐採などの問題を協議する。二二日には輪湖俊午郎主任が帰朝の途につき、次いで製材所の運転を開始。
二月一日には従来の商店部の掛け売り制度を改めて現金売り制度となる。この月中旬に外務省留学医千葉正が医師として着任する。
三月五日、移住地記念日を八月九日と設定。下旬に移住地で栽

培された農作物九種目が最初の生産品としてブラ拓本部宛に送付された。

四月にはルッサンビーラ駅に郵便局が設置された。

五月五、六日の両日、移住地主務者会議をブラ拓本部で開催し、移住地経営上の諸問題を協議した。この月本多八郎来植し瓦工場を起工、七月下旬に千枚一八〇ミルレースで発売する。

六月に入ると架橋予定地点からルッサンビーラ駅間の踏査と伐採を開始する一方精米所の建設に取り掛かる。

八月二日、ブラ拓寄贈の野球道具が青年団当て届き、七日には中央小学校校庭において最初の野球試合が事務所対入植者によって行われた。

九日には最初の移住地記念祭が催され、引き続き一〇日と二日にわたってアラサツーバ、アリアンサ方面からも来賓が参列して余興が華々しく行われた。

九月二六日、木造建築であったルッサンビーラ駅舎新築工事が開始し、翌年六月九日に竣工移転する。

一〇月七日には武力政変が突発し、結局ワシントン・ルイスが失脚、ゼツリオ・ヴアルガスが政権を握る。移住地では直ちに八日一六名の政府軍兵士がルッサンビーラ駅を占拠し、さらに一〇日から六〇名増員して塹壕を作るなどしたが大事には至らなかった。

一一月、墓地敷地の選定を終えてモンテ・アプラジーベルに許可手続きを申請し、翌年四月八日に設置した。

一二月、コレゴ・ラランジャーダ流域に第一製糖工場付属甘蔗園を開設。

一九三一年（昭和六年）一月、精米所の運転開始。前年の一月一五日古賀武一を聘して寺小屋式教授を始めて以来一ヶ年を経てこの一月一五日に本格的小学校を開設する。

二月に入るとチエテ河の大増水で再びバルサが不通、ルッサンビーラ駅との交通はカノアとなり、鉄道も屡々不通となる。

二月一一日、政府は「在庫コーヒー買上、コーヒー新樹植付税法」（令第一九六八八号）を発布、コーヒー生産を統制する。この頃市街地をノーボ・オリエンテと呼称することに決定。二五日、海外移住組合連合会の役員改選により理事長平生釟三郎、専務理事宮坂国人を選出する。なお開拓当初から存在した連合会所属組合の移住地任務者の制度は本年三月未限り移住地管理一元化のために廃止となる。またこの頃Ｂ区にも小学校が創設された。

四月中旬には市街地分譲計画、水道電気事業計画などが始められた。

五月一五日、宮坂専務理事が主事加藤好之を伴って来伯、次いで二五日にはチエテ移住地を初視察する。

六月二八、二九、三〇日の三日間にわたっての降霜で、農作物に甚大な被害があり、コーヒー樹はみな根元から切断する。その頃から在伯邦人の入植を好条件で積極的に勧誘する。

七月一四日、大洪水で途絶えていたチエテ河のバルサ運航がようやく開通し、大型荷物の運搬が順調になる。

八月一〇日、ノーボ・オリエンテ小学校（グルッポ・エスコラール）が完成、次いで三〇日には病院が完成して市街地に偉観を添えた。この月の下旬には第一製糖工場が作業を開始する。

九月にはいり輪湖主任が辞職し、代って矢崎主事が支配人を兼

ね中島一男が支配人代理に任ぜられる。又この月にはペデルネーラ川の架橋工事も完成した。

一二月上旬より木本保がルッサンビーラ駅と移住地事務所間の電話架設工事着手し、同月一八日に開通、なお製氷所の建築も着手し医局や薬局も新装なった病院へ移転して着々と移民受け入れの準備を整えたが、この年の入植状況は日本の国内事情の影響もあり不振を極めた。

一九三二年（昭和七年）

二月中旬、「十年計画建直案」の内定の報があり二五日に至って正式に決定、分譲地に等級をつけ従来の一地区一率の価格を改め、一〇年間無利子の年賦払いとし、生産資金の貸し付けを行い、在伯邦人入植に適用していた土地代前払い金は廃止するなどを実施。これにより入植勧誘も頗る活発となる。

四月上旬、第一次上海事変出征軍人慰問として一コントス一九〇ミルをチエテ会より贈呈する。この月昭和五年から約二ヶ年医療に尽くした千葉医師がさり新たに八木勝郎医師を迎えた。一六日にはしばらく運休していた製材所の賃貸借契約が杉本芳之助と成立して始動する。

六月九日、ルッサンビーラ駅の新設がなって移転し同時に郵便局も新設された。また従来のチエテ会を解消してチエテ連合会を結成したのもこの月であった。

七月一日、チエテ河架橋工事が認可され同日付きコンパニア・ナシオナール・デ・コンスツルソンと工事請負契約が締結され、一五日に工事を着手したが革命のために一時中止する。九日、サン

パウロに護憲革命勃発、同月一二日にはチエテ移住地もその圏内に巻き込まれ、金融の梗塞、労力の不足、物資の不足などに悩まされる。

十月中旬頃から革命もおさまり順次製糸工場、製糖製粉工場、豚肉工場など起工し、市街地の電化事業の許可申請もした。その頃山伐請負人の賃金不支払い問題から「山伐事件」が起こり、結果中島支配人代理は辞職する。

一二月一日、斎藤幸が支配人として赴任する。

一九三三年（昭和八年）

一月五日、事務所は木本保と電気事業請け負い契約を締結、直ちにその工事に着手して点灯したのが同月の二三日であった。最初は五キロワットの直流発電機で製材所の動力を使って二七戸の電灯を供給していた。

二月にはバラボニータ区の請願により家庭医薬品委託販売制度を実施し、その後ペデルネイラ区やイニューマ区にも衛生相談所を設けて医薬品を取り扱い植民者の便宜をはかる。

三月上旬にはホテルの新設なり加藤児一郎が賃貸借して経営。中旬頃からベラフロレスタ市街地の開発が始まる。一九日に各区の青年団が結束してチエテ青年連盟が結成され、初代の委員長として土屋一治が選出される。

四月一〇日、バラボニータ区の小学校開校式が行われ、イニューマ区の収容所を商店部の出張販売店として便宜をはかる。

五月二三日にはノロエステ視察中の林大使一行が来植、二四日の歓迎会に臨席する。

六月二一、二二両日には降霜がありコーヒーや甘蔗に相当の被害があった。

八月開拓記念祭にはに青年連盟主催の最初の農産品評会や陸上競技大会が催された。

一〇月二日にはペデルネイラ区の一部に蝗群が飛来したが、被害は僅少であった。

一一月五日、イニューマ小学校において在来の区購買組合の外に全チエテ移住地を含む産業組合の設立準備会が開かれ、名称を「チエテ産業組合」と称し役員を選出する。二三日には第二市街地をベラフロレスタ市街地と正式に呼称することになり、次いで二八日にはここに医局分院が落成して大坪薬剤師が常駐し診療にあたる。

一二月七日、母子四人心中という移住地始まって以来の悲惨事が突発。

一九三四年（昭和九年）

一月中旬、ブラ拓ベラフロレスタ事務所が開設され、バラボニータ、ジュリアアグスタ両区以西を管轄することになり、同時に商店部支店も開業し、間もなくベラフロレスタ小学校も開校する。二八日にはチエテ産業組合創立総会を行う。

二月上旬には移住地の各区長、学務委員を集めて第一回教育会議を催し、政府の教育行政上の外国語教授の制約の対策を検討する。

三月上旬、A区の購買組合とチエテ産業組合の合併に関する懇談会が開かれ、その後度重なる協議の結果五月一二日に至り漸く

合意に至りここに「有限責任チエテ利用組合」が正式に組織された。これは今日のチエテ産業組合の前身である。

七月一日、チエテ河架橋工事が認可され同日付きコンパニア・ナシオナール・デ・コンスツルソンと工事請負契約が締結され、一五日に工事を着手したが革命のために一時中止する。九日、サンパウロに護憲革命勃発、同月一二日にはチエテ移住地もその圏内に巻き込まれ、金融の梗塞、労力の不足、物資の不足などに悩まされる。

十月中旬頃から革命もおさまり順次製糸工場、製糖製粉工場、豚肉工場など起工し、市街地の電化事業の許可申請もした。その頃山伐請負人の賃金不支払い問題から「山伐事件」が起こり、結果中島支配人代理は辞職する。

一二月一日、斎藤幸が支配人として赴任する。

一九三三年（昭和八年）

一月五日、事務所は木本保と電気事業請け負い契約を締結、直ちにその工事に着手して点灯したのが同月の二三日であった。最初は五キロワットの直流発電機で製材所の動力を使って二七戸の電灯を供給していた。

二月にはバラボニータ区の請願により家庭医薬品委託販売制度を実施し、その後ペデルネイラ区やイニューマ区にも衛生相談所を設けて医薬品を取り扱い植民者の便宜をはかる。

三月上旬にはホテルの新設なり加藤児一郎が賃貸借して経営。中旬頃からベラフロレスタ市街地の開発が始まる。一九日に各区の青年団が結束してチエテ青年連盟が結成され、初代の委員長と

して土屋一治が選出される。

四月一〇日、バラボニータ区の小学校開校式が行われ、イニューマ区の収容所を商店部の出張販売店として便宜をはかる。

五月二三日にはノロエステ視察中の林大使一行が来植、二四日の歓迎会に臨席する。

六月二一、二二両日には降霜がありコーヒーや甘蔗に相当の被害があった。

八月開拓記念祭にはに青年連盟主催の最初の農産品評会や陸上競技大会が催された。

一〇月二日にはペデルネイラ区の一部に蝗群が飛来したが、被害は僅少であった。

一一月五日、イニューマ小学校において在来の区購買組合の外に全チエテ移住地を含む産業組合の設立準備会が開かれ、名称を「チエテ産業組合」と称し役員を選出する。二三日には第二市街地をベラフロレスタ市街地と正式に呼称することになり、次いで二八日にはここに医局分院が落成して大坪薬剤師が常駐し診療にあたる。

一二月七日、母子四人心中という移住地始まって以来の悲惨事が突発。

一九三四年（昭和九年）

一月中旬、ブラ拓ベラフロレスタ事務所が開設され、バラボニータ、ジュリアアグスタ両区以西を管轄することになり、同時に商店部支店も開業し、間もなくベラフロレスタ小学校も開校する。二八日にはチエテ産業組合創立総会を行う。

二月上旬には移住地の各区長、学務委員を集めて第一回教育会議を催し、政府の教育行政上の外国語教授の制約の対策を検討する。

三月上旬、A区の購買組合とチエテ産業組合の合併に関する懇談会が開かれ、その後度重なる協議の結果五月一二日に至り漸く合意に至りここに「有限責任チエテ利用組合」が正式に組織された。これは今日のチエテ産業組合の前身である。

四月上旬、当時既に農耕地に三七〇家族市街地に一六四家族を算する発展を考慮しサンパウロ州政府は行政区の設定を決め、スブ・プレフェイツーラの設置に引き続き翌月にはカルトリオを設置した。この月一七日には全移住地を震駭させた三重殺人事件が勃発した。なおこの二四日の天長の佳節にさいし医局にたいし御下賜金を下付せられる。

五月、当時ブラ拓はその経営する移住地の指導精神として「ガット運動」を提唱し、この月に第一回ガット委員会を開催した。

七月三日かねて請願中の警察署が設置され、七日にはチエテ河架橋工事視察のため宮坂専務と州道路局の一行三五名が来訪した。二七日にはチエテ青年連盟の主催でガット運動の一事業として催された。

八月九、一〇両日にわたり移住地開設記念式典のノロエステ、ソロカバナ野球大会が行われた。

九月一五日、全移住地小学校生徒の陸上競技大会が催される。二四日にはフランシスコ・カンポス州交通長官及びアダルベルト・ネット農務長官が架橋工事視察のため来植し、移住地内も視

察した。

一一月三日にはチエテ連合会の後を受けてチエテ自治会が創立され、会則を定めて輪湖俊午郎を初代会長に選出した。二六日には週刊「農事旬報」が創刊された。

一二月二日にはかねて計画されていたカトリック教会が落成し、朝夕に響く聖鐘に俗塵を洗うことができるようになった。また同日青年連盟主催の弁論大会がイニューマ小学校において催された。

一九三五年（昭和一〇年）

一月一九日には自治会代議員会(総会)　がひらかれ、医務局の充実などを検討する。

四月一四日、元移住地の地主ジョナス・アルヴエス・デ・メーロ逝去。

二六日には州産業組合監督官が利用組合の業務監査に来植、組合登記手続きなど依頼する。

五月一日、市街地付近農家によって疏菜出荷組合が結成され、市場（フエイラ）が創設された。一二日には約一ヶ年半の紛糾後ようやくA区とB区の合併がなりウニオン区が成立する。八日には高岡専太郎博士が古間徳弥を同伴してマラリア調査のために来植し六月一五日まで滞在、緻密な調査や医療指導をする。

六月二六日、ノーボ・オリエンテ橋開通、開通式祝賀協議会を組織して三日間にわたって大祝典を催す。

七月二一日には第二回汎ルッサンビーラ陸上競技大会が催される。次いで二九日には聖公会ドトール・トマス監督、伊藤八十二、島貫武夫二牧師来植し中央小学校で講演を行う。その頃第三市街

地（サン・ジョゼ市街地）開設に着手する。

八月、ベラフロレスタ市街地の土地分譲を開始する。

九月二一日、ウニオン小学校が落成、二二日には中央小学校で青年弁論大会が催された。二九日、利用組合の臨時総会が行われてA区購買組合との合併が成立し「有限責任チエテ産業組合」が発足、繰綿工場賃借その他事業を拡張する。

十月一一日からベラフロレスタ市街地に水道敷設工事を始める。

一一月一日にはコーヒー精撰所の試運転で好成績をあげ、その後精米所と共に産業組合が借り受けて経営する。一一日には古関徳弥が支配人として着任し、二一日には中島夫人簾子女史が移住地に幾多の功績を残して逝去する。

一二月上旬、八木医師が辞任して帰国、間もなく後任にドトール・ダリー・フエラースが赴任、サン・ジョゼ方面は角田幸一郎医師、その後ベラフロレスタに志村みよ子医師の赴任により医局の陣容が整う。なお下旬には産業組合との間に繰綿工場賃貸借の契約が成立し、アンダーソン・クレイトン商会も参加して融資、買い付けの態勢を整える。またサン・ジョゼ小学校が落成したのもこの年末であった。

一九三六年（昭和一一年）

一月上旬、「臨時衛生部」の設置によって移住地の保健衛生に新しい色彩を加える。中旬より「黄熱病」の流行の兆しあり、州衛生局員が来植して衛生部員と対策に奔走、結果大事に至らず。二〇日には自治会定期総会が開かれ会則の一部を変更して充実をはかる。

二月九日、産業組合定期総会が開かれ改善、事業拡張計画など審議する。当時の組合員は三四八名に達した。

三月上旬には各市街地商工業者が商工組合を結成し、アラサツーバ市の計理士ジョアキン・ジーボを顧問として発足する。この月二四日サン・ジョゼ小学校が開校式を挙行。

四月一二日には青年連盟による第二回青年弁論大会や第二回少年野球大会が行われる、その頃からアンダーソン・クレイトン商会も棉花買い付けを始め移住地は活気づく。

五月五日には移住者待望の繰綿工場が試運転を行って好成績を収め、アンダーソン商会の手で操業した二七日には海軍記念日をトして移住地在住の帝国海軍出身者が「あひる会」を結成した。

六月一三、一四の両日第三回農産品評会が催され棉、籾、フエジョン、コーヒー、玉蜀黍、甘蔗、苗木など多数の出品で盛り上がる。二七日にはかねて工事中のイニューマ小学校新築工事並びに校庭改造工事が完成して落成式を行う。この日ビリグイで行われていた全伯少年野球大会にチエテ少年野球団が見事優勝する。

七月上旬、改造中であった製糸工場が竣工し作業を開始した。一九日には第三回汎ルッサンビーラ陸上競技大会がアリアンサで行われ、チエテ・チームが三年連勝の凱歌をあげて帰った。

八月九日、移住地開設八周年記念祭に汎ルッサンビーラ相撲大会が催され、チエテ選手が優勝、なお二三日には中央小学校グランドで対バストス野球大会が行われチエテ軍の勝利となる。

九月九日、サンパウロの全伯野球大会に出場したチエテ・チームが見事優勝して移住地へ凱旋し、ここにチエテ・スポーツの黄金時代を実現した。二七日、前海外移住組合連合会の梅谷専務理

事逝去。
一〇月中旬、中央小学校をグルッポ・エスコラールに昇格する件でアラサツーバの視学官来植。ついで一九日には自治会協議会を開催して外国人集団植民地、外国語教育の問題等につき協議する。
一一月二日、自治会主催で慰霊祭を行う。この月末アラサツーバの視学官により移住地内各小学校の学年末進級試験を行い、全生徒六六八名中わずか一六八名が合格する。
一二月には「ブラジル語普及期成会」が設けられ、毎週“Ｍｅｕ Ｌｉｖｒｏ”の講義録が移住地事務所から発行されブラジル語普及に努める。またこの月寄生虫検査を始め受験者一九九名に対し保虫者は九四名に達した。
因にこの年の市街地外入植者数は六七六家族四四〇九人に達した。

一九三七年（昭和一二年）
一月にはブラ拓の人事異動があり支配人代理であった古関徳弥が正式の移住地支配人になる。下旬に産業組合定期総会があり役員に多少の移動があった。また衛生部のマラリヤに関する講演が各区で催された。
二月六日には自治会代議員会総会があり、創立以来の輪湖会長等が退任して本多会長等が当選した。
四月上旬、アンダーソン商会が直接ブラ拓から借り入れて繰綿工場の運転を開始し、産業組合は手数料で棉花搬入労務契約を締結、多数の貨物自動車が景気よく棉を満載して疾駆した。中旬にはチエテ河に沿うて東西に走るボヤデーロ（牛追道）をノーボ・

オリエンテ橋付近においてルッサンビーラ駅方面へ導く新道の工事が計画された。

五月には奥ベラフロレスタに入植した愛媛県俵津村の一団が犠牲者続出により動揺する。下旬には児童消費組合を発足させて学用品の低廉化をはかる。

六月一一日～一三日に亙って農産品評会が開かれる、一七日の官報で中央小学校がグルッポ・エスコラールに昇格と発表される。一九～二〇日には中央小学校で全伯少年野球大会が行われチエテ・チームが優勝し、二九日には全チエテ陸上競技大会がベラフロレスタ小学校校庭で行われてウニオン軍が優勝する。

七月一〇日には日南産業株式会社が設立されたが現地ではブラ拓が一切の経営を代行することになる。一八日には第四回汎ルッサンビーラ陸上競技大会が中央小学校庭で開催され初めてチエテ・チームが惜敗した。

八月二日～八日の間、青年連盟主催の中堅青年講習会があり農事一般の講習及び修養方面の鍛練を行い、出席青年四〇数名に達し得るところが多かった。一〇日の移住地開設九周年には海外移住組合連合会創立一〇周年も兼ねて大祝賀宴を催す。月末には以前から請願していた棉採種場の設置が許可され、同時に農務局委嘱の棉花試験場もイニューマ区に設置される。

九月上旬、日南産業株式会社の「カーザ・ブラタク」「カーザ・バンカリヤ・ブラタク」の二部門が設置され、前者は主に貿易方面の活動で後者はチエテ移住地に古関支配人を銀行部監査役としてノーボ・オリエンテ支店が設置された。これが現在のバンコ・アメリカ・ド・スール（南米銀行）の前身である。一七日にはリ

ンス駐在教育普及会主事の葛岡唯雄が来植して学校協議会を招集し移住地の教育問題について意見の交換をする。

一〇月上旬には前述のボヤデーロが完成して州政府へ引き渡した。二〇日には産業組合がブラ拓商店部の委譲をうけ業務を開始する。

一一月上旬には南部棉花株式会社と産業組合間に実棉買付労務契約が成立し、繰綿工場は当会社即ち東洋棉花株式会社が経営に当たる。

一二月にはグルッポ・エスコラール最初の卒業式が男女一三名の卒業生で行われた。この暮全チエテ俳人を網羅したチエテ俳句会が生まれ、佐藤念腹指導のもとに二〇名を越える句友たちが句作にふける。

一九三八年（昭和一三年）

一月一六日には養豚家一〇〇余名が主になって畜産組合が設立される。

下旬にはサンジョゼ墓地が完成し使用が許可される。

二月上旬の自治会総会では再び輪湖俊午郎が会長に当選して「チエテ十年史」編纂を決議する。なおバウルー領事館管内連合日本人会に参加を決す。一二日にはブラ拓ガット参謀部計画のサンタ・カタリーナ州視察旅行団にチエテ移住地から輪湖、武田、杉谷が参加。また繰綿工場が南部棉花株式会社（東洋棉花株式会社のブラジルにおける事業主体）に賃貸されて経営されることに決定されたのもこの月であった。

三月上旬には旧アラサツーバ耕地係争問題が一〇年振りに高等

法院で勝訴となり解決。なおその頃サンタ・カタリーナの視察団も無事帰植し一九日には事務所の主催により視察講演会を開く。

四月、青年連盟主催の第四回弁論大会が催された。

五月、全チエテ野球大会開催。

六月、全チエテ陸上競技大会開催。

七月二日～一〇日の間に第二回中堅青年講習会がアリアンサからも参加して開かれる、ウニオン区では青年学校が成立し、一四才以上の子弟に週一回青年教育を与える。なお一五日開かれた自治会協議会では長らく懸案であった「チエテ会館」建設の件が具体的に協議された。

八月八、九両日には汎ノローエステ陸上競技大会が若人の血と熱とを盛り上げてチエテの原頭に展開された。引き続き一〇日には移住地開拓一〇周年記念が厳粛に挙行され次いで教育普及会第六回支部対抗少年陸上競技大会が催された。何れも一〇周年記念にはふさわしい躍進の姿、向上の意味を示すものとして移住地の輝かしい将来を期待するところが多かった。

一一月三〇日、法令九七七五号によってペレイラ・パレット郡に昇格し、以後サンパウロ州の一行政区として郡政がしかれた。

【参考文献】

移民四〇年史　香山　六郎
ブラジルに於ける日本人発展史・上巻　青柳　郁太郎
ブラジルに於ける日本人発展史・下巻　永田　稠
梅谷専務理事伯国内土地調査状況報告会概要　梅谷　光貞
梅谷専務帰朝報告演説速記録　内務省社会局

在ペルー邦人七五年の歩み　ペルー新報社
チエテ十年史　チエテ自治会
南米一巡　永田　稠
アリアンサ移住地創設十年　宮尾　厚
埋もれ行く拓人の足跡　鈴木　南樹
流転の跡　輪湖　俊午郎
宮坂国人伝　角田　房子
アルゼンチンのうちなんちゅう８０年史在亜沖縄県人会連合会

ブラ拓とチエテ移住地

湯　朝　信　助

「チエテ十年史」（自一九二八年至一九三八年）後の移住地の歩みは、戦時中に警察の命により日語の書類を焼却したし、既に歳月も多く経っていて、資料が散逸していて望み通りの史料が得られず、以下は主として私の記憶と数少ない史料に基づいたものである。開拓後期中の時代（自一九三九年二月至一九四二年三月）は古関支配人の後期と阿部支配人の時代にあたり、一九三四年にブラ拓が起こした愛土永住（ＧＯＺＡ　ＡＴＥＲＲＡ）即ち「ガット運動」が奏功し移住地の経営が軌道に乗って来た時代でもあるが、コーヒーの植え付け制限下で最初の入植者が植えたコーヒー

は連続降霜の為放棄されたし、籾も値段が安くサッコ代と運賃だけで欠損となる状態であったため、初期の入植者は主作物がなく当惑その極に達したのであったが、一九三二年に在伯邦人入植者が初めて栽培した棉を五七八アローバス収穫して以来、国際商品として販路が容易で、青田借りが出来、金融面の便宜のよい棉が主作物となり、棉のチエテ移住地となり、好景気が到来し、一九四一年には五四万四九五九アローバスの最高生産量を上げたのであった。

一九三七年に最後のドラード区の分譲入植完了によって、開拓当初の計画通りウルブプンガ耕地地券面積九六九九アルケーレス全部の分譲入植を達成し得たので、移住地事務所の仕事も漸減してきた為、手透きの職員が出来る状態となり、自ら他に職を求めて退職する職員が出始めたが、南米鍍行へも手透きの職員を転用されたので、一九四一年の阿部支配人時代は事務所の職員は数人に減っていて、事務所の仕事も土地代と病院の貸し付け金の回収及び一九三九年に入植者から土地代の代わりに受け取った雌牛の飼育と、ノーボ・オリエンテ橋のあるサンジョアキン耕地五〇〇アルケーレスの牧場造成及び地券の譲渡等が主な仕事となっていた。一九四二年三月には枢軸国（日、独、伊）人の資産が全て凍結され、ブラ拓関係の総ては、伯国政府の管轄下に置かれ、日系人とその事業に警察の監視が厳しくなり、移住地の名士、輪湖俊午郎氏、自治会（日本人会）の会長吉川要治氏、副会長藤堂義夫氏、阿部弥門支配人、及び数日後に私を聖市の中央警察に拘引したため、移住地在住者に多大な不安を与えたのであった。

聖市で軟禁を解除された後、阿部氏はブラ拓聖市本部に勤務と

なり、小生は四〇日振りでチエテ移住地へ帰り従前通り執務したのであったが、日本人は測量することを禁じられたので、事務所では伯人農業技師を雇い、私はその人の責任のもとに測量を継続した。

暫くして警察より派遣されたアラルド・フエレイラ氏が事務所の監督として来着、執務していたが、間もなくマラリヤに罹り気の毒に病死した。

その後伯国政府のブラ拓管理清算人アロイジオ・マルケス氏がアラサツーバ市在住のチエテ事務所の顧問弁護士ワルデマール氏を同伴して事務所に現れ、ブラ拓は伯国政府によって清算されることに決定され、既にトレス・バラス移住地の全不動産を支配人榛葉彦平氏と同事務所の顧問弁護士及び自分の三名の名義に書き換えて清算したので、チエテ移住地もその通りに清算すると断言し、私がそれに参加するよう両人で強要したが、私は永年の間、宮坂、加藤両氏の配下で務めさせて頂いたその恩義に反すると考えられるこのような事には参加出来ない故、お二人の名義でなさったら宜しいでしょうと断ったのであった。そのためかどうか当時のブラ拓チエテ移住地の全不動産が管理解除で無傷のまま宮坂、加藤両氏へ戻ったのは幸いであったと思う。

その後暫くして、アロイジオ・マルケス氏が任命した現地管理人イザルチーノ・ボテーリオ氏が着任したが、伯人の悪癖である公私混同の行為には目に余るものがあり、閉口したのであった。彼曰く「君に休暇を与えるから、郡内にある自分の伯父の一〇〇〇アルケーレスの土地の測量をして欲しい」とのことで、私は止む無く測量した。

又ある日公私混同して、会計係の富沢君を彼が罵倒していて、Ｒａｃａ　Ａｍａｒｅｌａの発言を聞いた私は我慢が出来ず、その発言を取り消すよう激諭したのであったが、彼はそれを恨みに、私を首にしようと考え、上役に反抗したとして、警察署長に訴えた為、署長は私に一カ月間の自宅謹慎を命ずると同時に、調書を取って戦時中のみに存在したリオ市の国家保安法延に回送起訴したため、同法廷からペレイラ・バレット裁判所へ委託裁判の要請があり裁判を受けたが、その書類は再び、国家保安法延へ回送され、同法廷では同書類に基づいて判決を下す故、私はリオ市在住の弁護士に弁護を依頼し、結局無罪となったのであった。

イザルチーノ氏が退職後は後任にフロリアノ・ロッペス氏が就任したが。同氏は紳士的で公私混同も少なく、一九五一年七月一五日ブラ拓が管理から解除されるまで無難に過ごしたのであった。但しこの戦時期に当たる九年四カ月の間は事務所外部のブラ拓の仕事には日系人職員に触れさせず、日系職員は専ら事務所内の仕事、即ち会計庶務及び土地代と病院に対する入植者の負債の回収等を警察の命により出来得る限り日語を話さずに従事させられた。

伯国政府の管理から解除されると直ぐ、ブラ拓本部からセントラル鉄道のキンゼ・デ・ノベンブロ駅の土地を住宅に分譲する目的で購入資金入用故に、バラボニータ区にあるブラ拓の土地七〇アルケーレスを直ぐ売却して代金を送金せよとの命により売却したのであった。但し商談決定直前にその土地が問題のある土地と解り商議は中止されたのである。

管理から解除された以後事務所の仕事は、サンジョアキン耕地（ノーボ・オリエンテ橋のある所）五〇〇アルケーレスの牧場造成

と経営、及びペレイラ・バレットの町に接した中央牧場五〇アルケーレスの経営及び両牧場を利用して肉牛を飼育し、傍ら入植者中の牧畜志望者へ種牛や雌牛の分譲並びに地券の譲渡事務等に従事した。

一九五四年にはペレイラ・バレット市のブラジル街大通りとシロ・マイヤ街の角の土地の街路に画して四六四平方メートルの建物を建築し、角の部分を南米銀行支店に、シロ・マイア街の端の所をブラ拓事務所にあて、その他の部分を商店、州税務署などに賃貸した。又この建物の裏に住宅二棟を建てた。同年十一月十五日のこの建物のカトリック式落成式にはブラ拓本部から加藤好之理事と阿部弥門氏が来植され、中央牧場でシュラスコを催して祝賀した。

一九五七年九月にはチエテ産業組合が計画した、養鶏村に当てるため中央牧場の一部約二十アルケーレスを小面積の地区に分割分譲した。

かくして、一九六〇年三月三十一日ブラ拓チエテ移住地事務所を閉鎖し、四月一日にジャミック移植民会社へ市街地建物一棟、市街地の住宅二棟、中央牧場約三十アルケーレスとその施設物、サンジョアキン牧場五百アルケーレスとその設備、カミニョネッテ一台、乗用馬十数頭及び飼育用肉牛三千頭余を引き継ぐことが出来たのであった。

チエテ産業組合とブラ拓との関係

ブラ拓は創立当初からの計画であった、入植者による産業組合

の組織を奨励して産営施設を組合に引き継いで、経営させ組合員即ち入植者の福利増進を計る趣旨に従い、一九三四年五月十二日にブラ拓の仲介慫慂（しょうよう）により、全入植者を組合員とした農業組合を組織し、ブラ拓の産業施設を利用、収益を上げ入植者の生活向上に資することにして、チエテ産業組合が結成された。爾来組合が入植者の経済活動の基礎となって活躍し、常に農界の推移に応じて、適切に活動、棉の好況時にはブラ拓銀行部とタイアップして、信託業務を開始、組合員に棉作資金の融資と便宜を計ったり、養蚕好況時には蚕種製造所及び乾繭場の経営、養鶏が勃興すれば種鶏飼育を又牧畜指導部を設けるなど組合員の福利のために尽くしたことは、当然のことながら特筆に値するものであり、ブラ拓は移住地生みの親であり産業組合は育ての親と言った形である。現組合長によれば、現在チエテ産業組合は組合員三六一名で、組合活動の範囲は広く南マットグロッソ州に迄及んでおり、組合員の土地所有面積は小は四分の一アルケール、大は七千アルケーレスに及んでおり、十数名が百アルケーレス以上の土地を所有していて、ミーリオ、米、ソルゴ、カンナ、棉、大豆等を生産しており、永年作物は柑橘類、ゴム樹の栽培がある。養鶏は成鶏三十五万羽あり、組合員の生産物の比率は牧畜(肉牛)七五％、乳牛五％、養鶏五％、雑作五％となっている。組合員のトラットール所有数は約五〇〇台で、乗用車、カミニョン類も約五〇〇台であり、牧畜を主とした機械化農業を経営している。

組合は組合員の生産活動に関するあらゆる援助協力組親を有し、最大限の便宜を組合員に供与している。

ブラ拓製糸工場のこと

ブラ拓では養蚕を奨励する目的で、一九三一年一月にミナス州のバルバセナ農事試験場の桑苗を注文し、一九三二年には養蚕家に貸地をし、チエテ産の繭を聖市本部に送っている。同年十月には製糸立場の建築を開始し、同年十一月には日本から蚕種を輸入するなど着々とその準備を進めたが、チエテ移住地は地味が良く、棉作に適していた為と棉には金融の便があり投機的事業が可能で、日本人の気質にあっている為と、養蚕は施設を要する上に、仕事が面倒で、最後の上蔟前に病気が発生して全滅する危険があることを恐れた為か、棉作者は増えたが、養蚕家は増えなかった。

記録によると一九三七年四月から一九三八年三月までの間にブラ拓製糸工場が購入した一三五トンの繭の八二％はビリグイ地方産である。

戦時中外国から絹糸の輸入が止まったので、絹糸が暴騰した為製糸業は盛んであったが、戦後は安価な外国絹糸が輸入されるに至り工場は閉鎖解体されたのであった。戦時中の最盛期にはブラ拓製糸工場の外に個人経営が五ヶ所あったし、蚕種製造所もブラ拓と産業組合の二ヶ所、乾繭場はブラ拓、産業組合及び一部養蚕家共有の物とで三ヶ所あったが何れも閉鎖し解散した。現在は養蚕家は皆無である。

ブラ拓事業に就いての感想

チエテ移住地はアラサツーバ市から一二〇キロの遠隔不便の地でしチエテ河に接している為、瘴煙蕃雨の地として、頗る世に恐れられていた。

その魔の原始林に開拓の斧を入れ幾多の障害を克服しつつ数多くの必要設備を開拓に支障なきよう、タイミング良く設けつつ、最初の計画通りウルブプンガ耕地九・六九九アルケーレス全部を僅か十年足らずの間に入植者に分譲し終えたことは、日本政府の後援を受けていた、ブラジル拓殖組合であったからこそ可能であった。その為に可成の無駄な出費をしたことは否定出来ない。個人事業であったら開拓初期で既に破産していたと思う。然し大局から見て移住地の事業は成功したと断言し得る。

現に移住地は人口四八・〇〇〇人のペレイラ・バレット郡の役所所在地であり、ペレイラ・バレット市の人口は二二・〇〇〇であり、日系家族は左の通りである。

日系家族の分布	全家族	商業	アポゼンタード	SESPに従事	農業
市内居住	二九〇	二六〇	一五	～	一五
市周辺に居住	六五	～	～	～	六五
イリャソルティラに居住	一一〇	一〇	～	一〇〇	～
その他郡内に居住	八〇	一五	～	～	六五
計	五四五	二八五	一五	一〇〇	一四五

註―この家族数は一九三四年にチエテ移住地入植以来同地に居住、農牧畜業を営みつつペレイラ・バレット市にガソリン・ポス

トを経営している、チエテ連合日本人会長の小松盛幸氏の推定された数字であるが、信用に値すると思う。

かくも多数の日系家族がペレイラ・バレット市を中心に活躍していることは頼もしく、チエテ移住地入植者がその原点となっていることは明らかである。

ノーボ・オリエンテ市街地が起点となって、周辺が開発されたし、ノーボ・オリエンテ橋の落成とルッサンビーラから同橋を経て、アララクワラ線の最終駅ポルトタボアード駅を繋ぐ州道の開通で、聖州のノロエステ、パウリスタ両線地帯を遠くゴヤスとミナス両州との交通物資の流通を容易にし、奥地の開発発展を十数年早め、計り知れない貢献があったことは明白である。又ペレイラ・バレット市はイーリャソルティラのダムの建設工事従業員のベッドタウンとしても、大いに役立ち、工事を容易にしたことは衆知のことである。チエテ移住地在植日系家族数については、一般に多いときで千数百家族と言われているが、その統計はなく、「チエテ十年史」によると一九三六年が最高で一・〇七三家族で、その後は激減している。終戦後日本の実情を認識した以後は永住目的で各家族がその志望し選んだ道に進む為、発展的に急速に減少したのであった。現在は前表のごとくペレイラ・バレット市に二九〇家族、その周辺の五六家族を併せて三五五家族が在住しており、この家族数を移住地の残留家族と見なすと、ずっと以前聖市で発行されていた「昿野の星」誌の主幹岸本氏が、各地の植民地を訪れて記事を書くに当たり質問していた、植民地の日系家族の移動状態を基に私がそれを統計的に調べた結果によると、植民地の残留家族は奥地では最盛期の一五％、大都市近郊では二十％

となっている故、これに比すると、チエテ移住地の歩留まりは三〇％強で良い部に属するようである。但し文化の進んだ工業国では、都市人口が増え、農村人口が減少するのは通例である。

ブラ拓では全体に地理地勢の良いウルブプンガ耕地を入植者に分譲し、アラサツーバ耕地は所々に地味の良い土地が散在するが、その他の部分は地味が劣る故、将来牧場にする計画であったが戦争のため敵国資産として没収されるかも知れないことを恐れ、急ぎ売り払ったのであった。

若しこの戦争がなかったらブラ拓は、巨大な資本の企業になっていたことは確実である。アラサツーバ耕地は現在スドミヌーシ郡々役所の所在地になっている。アラサツーバ耕地が地味が劣ると言っても、ウルブプンガ耕地のそれに比してのことであって、戦後日本政府が南マットグロッソ州で買ったV耕地に比べると、比較にならない程、地味地勢の良い土地である。V耕地は面積一五・〇〇〇アルケーレスで、全体が地味が悪く、俗にテーラロシヤ・サンゲ・デ・タツーと称する土地で、一見良い土地に見えるが、作物は生育しない土質である。まだその上に約六・〇〇〇アルケーレスの広大な白砂の不毛地帯があり、植民者に分譲できないが、植民者を入植させる為に買った土地故、植民者を入植させない訳に行かず無理に僅か数十家族を入植させたのである。私はジャミックの上役末永昌介氏と二人で同耕地の牧場計画を立てる為、現地に一週間滞在し当地を踏査したのでこれ等のことを知ったのである。尚セントラル線のロレーナ駅近郊にも地味地勢が悪く植民者に分譲出来ないジャミック所有地の土地を上役の命により実地踏査した。

一九四七年一一月二八日加藤好之理事が銀行支店巡察を兼ねて来訪された。

一九四九年八月十一日移住地入植二十一周年祭に加藤好之理事が井久保治氏、芳賀定一氏、アロイジオ・マルケス氏及びワルデマール・リベイロ・ド・バーレ氏等と同伴来訪されサンジョアキン牧場で休息閑談の一時を過ごされた。

一九五二年二月一六日に宮坂国人専務理事が伊久保治氏を同伴戦後初めて来訪され主立った入植者と懇談された。

一九五八年八月一五日移住地入植三〇周年記念祭に宮坂専務理事が出席された。そしてペレイラ・バレットの市民権を郡会から受けられた。

一九六九年一二月六日加藤好之公園落成式に宮坂専務理事と故加藤好之夫人ます子様が出席された。

備考

▽サンパウロへの距離

空路　五七一

陸路　六二五　リオプレット経由

▽地理的位置

緯度　S　20°　−35′

経度　W　51°　−6′　−35″

▽地理的位置

緯度　S　20°　−35分　−43秒

経度　W　51度　−6分　−35秒

▽標高　三五三メートル

▽平均年降雨日数　八九日

▽平均年降雨量　一三九四ミリ

▽温度

最高　C四一・五度　最低　C〇・五度

最高の平均　三五・七度　最低の平均　一一・〇五度

▽チエテ移住地地券面積

アラサツーバ耕地　三五・三三二アルケール

ウルブプン耕地　九・六九九アルケール

パラナ河左岸飛地A　五六三アルケール

パラナ河左岸飛地B　一・〇九六アルケール

計　四六・六九〇アルケール
サンジョアキン耕地
チエテ橋所在地　五〇〇アルケール
合　計　四七・一九〇アルケール

▽チエテ移住地責任者の変遷

年代	任期	責任者
自一九二八年九月	一年四カ月	輪湖俊午郎(アリアンサ在住)
至一九三〇年一月		主任代理　中島一男
自一九三〇年一月	一年七カ月	主任代理矢崎節夫(本部理事聖市在住)
至一九三一年九月		(主任代理事務取扱　中島一男)
自一九三一年九月一年二カ月		支配人矢崎節夫(本部理事聖市在住)
至一九三二年一一月末		(支配人代理　中島一男)
自一九三二年一二月一日	三カ年	支配人　斎藤　幸
(一九三五年にブラ拓がガット運動開始)		
至一九三五年一一月一五日		
自一九三五年一一月一五日	一年二カ月	支配人代理　古関徳弥
至一九三七年一一月		
自一九三七年一月	四カ年	支配人　古関徳弥
至一九四一年一月		
自一九四一年一月	一年二カ月	支配人　阿部弥門
至一九四二年三月		

自一九四二年三月　九年四カ月　警察管理人アロルド・フエレイラ伯国政府任命のブラ拓管理清算人
至一九五一年七月一五日　現地駐在員イザルチーノ・ボテリオ、フロリアーノ・ロッペス
自一九五一年七月一五日
至一九六〇年三月三一日　八年八カ月　支配人　湯朝信助
備考・開拓初期の多事多端の時期に移住地の責任ある支配人が責任ある測量に従事している人に、尚重責を任し、その上に支配人が短期間に再度交替したことが開拓初期の仕事を混乱させた一因となったと思われる。尚係長となった人がその担当する仕事に就いて知識がないにも拘わらず、何ひとつ部下に任すことなく、自分一人で切り回す、権力主義者であったことも禍いしたと思う。

チエテ河とバンディランテ

岡井　二郎

我がチエテ移住地を語るに際して、チエテ河を無視することはできない。

もともと、移住地そのものの名前からして、この河から由来したものであって、移住地の南境を流れる川幅二〇〇～三〇〇メートルの水量豊富なこの河が、交通上言わずもがな、この地方の気候、風土、或いは産業上に与えていた影響は少なからざるものがあって、長年に亙って移住地住民に重大な関係を及ぼしていたこ

とは否めない。

今でこそ、リオ・プレット街道やサンタ・フェ街道が通じて、交通至便になったが、入植後の三〇年間というもの、移住地から他への唯一の出口として、最初はチエテ河を渡るのにバルサで、その後はノーボ・オリエンテ橋を通って、ルッサンビーラへ出たことは衆知の事実である。

かように移住地民とチエテ河とは、何十年間切っても切れない関係にあったが、今般、はしなくも筆者は香山栄一氏の依頼で、USP大学図書館保存の文献「パウリスタ・バンデイラの歴史」及びその他歴史書を読んで、図らずもこのチエテ河が昔、如何に多くのバンディランテたちの活躍の舞台になり、ひいてはそれが如何にブラジル奥地の開発に貢献したかの一端を知り得たので、私なりに、その理解したことのあらましを、ここに述べてみたいと思う。

バンデイラの発生理由

バンデイラとはブラジルの初期、即ち、未だポルトガルの一植民地としてあった時代に活躍した探検隊の一つであって、この外にエントラーダと言うものがあった。

二つともその目的は同じようなもので、専ら奴隷化の目的でのインヂオの捕獲や鉱物資源の発見などであったが、たまには行き着いた先での土地の占有や、植民地の建設と言ったようなことも行われた。ただこの二つの間の違いは、バンデイラは主に民間人によって組織されたものであるが、エントラーダは公的なもので、

時の官憲指揮の下に組織され、その費用は官費であった。従ってこの公的性格のあるエントラーダは、その奥地侵入に際しての行程でも、かつての西葡両国間の取り決めであったトルデジーリャ子午線を尊重して、滅多にこれを越えることはなかった。

トルデジーリャ子午線とは、ポルトガル領のアソーレス島を起点として、その西方三七〇レグワ（一レグワは六・六キロメートル）を通過する子午線のことで、これより東側に位する新発見地は全てポルトガルのものとし、西側はスペインン領土とする、一四九四年の両国間の取り決めであった。ところが民間人によるバンデイラは完全にこれを無視し、自由自在に奥地を踏破していったが、これが後年条約改正の際、一つの既成事実として認められ、以後ポルトガルの占有地と目されるようになった。これは要するに、結果としては、バンデイラの方がブラジルの領土発展に、より多く貢献をしたことになる。

探検隊と言っても、ブラジルのバンデイラは他国のそれのように、地理学的なものは稀で、専ら私欲から発した企てが多く、一大冒険ではあったが、どちらかと言うと、一攫千金を夢見た射幸心に富み、すべての点で野心に満ちた人々の集まりであった為、その道中は殺伐を極め、しばしば奴隷やインジオに対して無情な振舞いや、残忍な行いがあったようである。バンデイラの規模は様々であって、少は数人から、大は七〇〇～八〇〇人に至るまで、婦人子供は言うに及ばず、数人或いは数十人の奴隷まで引き具して、何十日、何百日の冒険に挑んだものであった。

バンデイラの発祥地がサンパウロであったことは異論の余地がない。

では何故バンデイラがサンパウロに起こったかと言えば、それには二、三の要因があった。その一つは当時このブラジル西南部に属するサンパウロ地帯は、東北部バイアやペルナンブッコに比べて頗る開発が遅れていた。東北部では一六世紀末期、既に砂糖黍栽培による製糖業の発達で賑わっていたのに対し、南部では未だこれと言った目ぼしい産業がなかった。

このサンパウロの開発の遅れたことの一つに、その地理的条件の不利が災いしていたことは確かであった。東北部からみると、本国への距離も遠く、交易上劣った立場にあった上、なんと言っても海抜八〇〇メートルの高台に位置していたので、海上への出入りに困難を極め、これが産業上大いに影響したものと思われる。

かように定着した産業に乏しかった南部に生きるパウリスタは勢い投機的な気持ちにはしり、多少冒険的ではあるが手っとり早いインジオ捕獲、そしてこれを奴隷として転売することによって得る利益や、その他の目的でバンデイラを組織しはじめた。又その頃頻々として入ってくる情報の中で、近隣のアルゼンチンやペルーでの盛んな金銀の発見は彼らパウリスタを刺激して「何んじょう彼らのみにあって、我らになきと言うことがあろうぞ」といった気概を育成し、これが益々バンデイラ組織の増大に拍車をかける結果になった。然し、かような意気込みの多くのバンデイランテの活躍にも拘わらず、ブラジルでは一七世紀の終りまで、詳しくは一六九三年、アントニオ・ロドリーゲス・アルゾウンがミナスで金鉱を発見するまで、目ぼしい金山は見つからなかったが、これを契機にして、ブラジルは金産業の黄金時代に突入するのだった。

バンデイラの始まりは定かでないが、記録に残っているところでは、一五八五年に最初の一隊が南へ向かったとある。以後一八世紀の後半まで、大凡二世紀以上にわたって、ある時は頻繁に、ある時は間断的に継続されたものと思われる。

一世紀余りの奴隷狩の目的のバンデイラの活躍は、大体一七世紀の終わりを境に下降の一途をたどり、一八世紀には皆無になると言ってよかった。その理由の一つは、より収益のある新たな金銀宝石の開発産業の台頭ということもあったが、それよりもインジオ自身の商品としての価値の下落であった。もともと野生育ちのインジオは、奴隷としての強制労働に不適当で、生来の怠け者の上に、不柔順なところや遁走の癖があって、常にその使用者には疎んじられてきたが、それでも最初の一六世紀時代には、絶対的な労働力の不足もあって、不承不承それに耐えてきたが、その後の急激な産業膨張によってアフリカから大量の黒人輸入が始まると、奴隷としてのインジオの価値は暴落し、もはや危険を冒してまで彼らを捕獲する必要がなくなったからであった。ちなみに参考のために述べると、一人のインジオ奴隷の相場は、アフリカ黒人のそれの僅か五分の一であったという。

然し、その最盛期、即ち一六〇二年にベーリャ川の辺りで、ロッケ・バレットによって、一度に三〇〇〇のインジオが捕獲されたことが記録に残っている。それが上記の理由以外にこの期間、ブラジルのジェズイッタたちがその宗教的、また人道的見地から盛んにインジオの奴隷化に反対し、徹頭徹尾バンデイラのインジオ捕獲を妨げ通してきた所以もあるという。

こうして一時さしも猖獗を極めたインジオ狩りも、一八世紀に

は終焉を告げたが、それに代わって、金銀宝石を追って奥地へ向かうバンデイラが急増した。クヤバを中心にしたブラジル西北部の黄金郷からの絶え間のない金発見の情報は、サンパウロのバンデイランテを狂喜させた。

大小様々のバンデイラが旅の準備もそこそこに、日夜チエテ河を下って行った。中には途中で食糧不足、暴風や時化、悪疫流行などの言語に絶する苦難の末、目的地を目前にひかえながら、不運にも最後になって獰猛なインジオに遭遇し、全滅の憂き目をみる者もあったようだ。多くのバンデイランテはそういった悲報にもめげず、我こそは…とばかり、一種の黄金熱にうなされて、一夜の百万長者の夢をみて、西北へ、今日も明日もと狂奔したのであった。

まさにバンデイラは、その冒険的な目的において、桁外れの規模の大きさにおいて、かつ又、その形態の特異さにおいて、まったくブラジル独特のものであって、世界にその類を見ないと思われる。

チエテ河の沿革

チエテ河という名はインジオの言葉で、大河若しくは曲がりくねった河という意味である。その水源地は遠く、海岸地帯を走るパラナピアカーバ山脈の一頂点、イタイアーバに発し、サンパウロ州を横断すること延々一三〇〇キロメートル、その間、イツー、アバニャンダーバ及びイタプーラの三大瀑布を経て、最後にパラナ河に合流する。

一説によると、一七三〇年代までは、チエテ河とはその水源地からイツー滝までのことを言い、それから下、即ちイツー滝から河口のパラナ河まではアニェンビー（河の母）河と呼ばれていたという。

チエテ河の全貌が明らかにされたのは意外に早く、一六二八年、パラグワイのドン・ルイス・デ・セスペデス将軍のアラライタグワバ（現在のポルト・フェリース）からクヤバまでの公的探検による。これはその当時、ポルトガルがスペイン王のフィリップ四世の治世下にあった所以であった。このことは、むしろアマゾンやサン・フランシスコ河などより早かった。

又一八二七年、ドンペドロ一世の招聘でロシアの貴族で、自然科学者のラングスドルフが、同じくポルト・フェリースからクヤバまでの学術探検旅行を二二三日に亙って行ったが、その時随行して行った画家のヘルクレスによって、その長期に亙る道中に画き残した膨大な数のスケッチ画は、実にすばらしい唯一無二のものであり、その繊細な筆致で描かれ、数多くの河景色や奥地の風景はブラジル風物誌や河川誌にも貴重な文献を提供するものである。これらの複製は全てパウリスタ博物館に保管されている。

ブラジル北西を目指すバンデイランテにとって、チエテ河は最も適した出口であったが、その最大増水期には主な難所としては僅かにアバニャンダーバとイタプーラ滝の二ヶ所に減ずるが、減水期の甚だしい時には大小二〇〇近くの滝や浅瀬が現れる。

従って満水期にはわずか一五日位で河口まで下れる道程を、乾燥期の最中には四五日もかかった。チエテ河を運航する最適の時期は未だあまり減水していない、気候的にも恵まれた三月か四月

であったというが、増水期には多分にマラリアにかかる恐れがあるので、多くのバンデイラは六月以降に旅立ちしたようであった。

一七二〇年代のチエテ河畔には未だ住民は少なく、比較的開けていたのはポルト・フェリースまでの上流地方で、それより下流は未だ人跡未踏の地が多かったというが、それでも数度、チエテ河を下ったことのあるアザンブージャ伯爵の見聞では、アバニャンダーバ滝近くの無人の原始林のなかで、たわわに実った蜜柑の樹や、クヤバ河畔の見事な野生の稲をみて驚いたという。

当時のチエテ河近辺には既に凶暴なインジオは見当たらず、わずかイタプーラにカイヤポース族が現れたことを、カブラル・カメーロが証言している。

然し、これはその当時のことで、その後の年月の推移や種族の移動と言うこともあって、やはり何百年の間には、インジオとの種々ないざこざが各所にあったことは否めない。

現に、アラサツーバの歴史について述べられた書物に、一九一〇年代、ノロエステ鉄道開設の際、それを妨害せんとしたカインカングス族によって、コロラード付近で、数回に亙って幾人もの白人が惨殺されたことが書かれている。真にこの当時、鉄道敷設に当たって最大の悩みの種は、マラリヤ病とインジオ襲撃とであったと記されている。

これと異なった種族にツピー・グワラニーと言うのがある。

歴史書によると、彼らは主に海岸地帯に分布せられていたとあるが、やはりその後の移住で、これもある程度、ノロエステ方面にも入り込んでいたのではないかと思う。海岸にいた所為で、白人との接触が最も早く、その上ゼズイッタたちの懸命な教化の関

係もあって、他の凶暴なインジオに比較すると、割合穏やかなものが多かったらしい。

次のツピーグワラニー族に関する記事は転載である。

インジオの生活を見る

☆ノロエステ沿線の中、土語でつけられている都市名がかなりある。

バウルー、ピラジュイ、アラサツーバ、グワララペスなど。かく地方の名に、山や河に、土語はおびただしく尚いきている。

☆ブラジルの土人ツピーグワラニー族が、バウルーから奥ノロエステ一帯に、かなり住んでいたことが、森林伐採とともに判明した。彼らは原始林の中でどんな生活をしていただろうか、その生活状態を誌してみよう。

☆ツピーグワラニー族の家屋は「オカ」という掘っ建て小屋式、椰子の葉で屋根を葺いた、雨露を凌ぐ粗末なものであるが、四〜五家族一棟に共同生活をしていた。

☆土人の家族の大きなものになると、長さ二五メートル、幅七メートルもあるカマボコ形屋根に建てられ、一軒に十数家族も共同生活をしていた。

☆こうした家屋を六〜七軒互いに向かい合わせに建て、みなの中央に広場を設けた一種の部落を作った。部落のあるものは、周囲に塞柵を作った。とげ椰子の幹を並列して、その隙間は粘土を叩きつけた。

☆その外囲に木の矢来をめぐらした部落もあった。もちろん外

敵を防ぐ要からであった。この部落の出入口はただ一カ所であった。

☆小屋の中にはみな焚火場があった。そこには水瓶、土壷、土鍋、竹又は葛蔓で編んだ籠などがあった。包丁は骨、亀の甲羅で作った。石の斧もあった。釣綱床と椰子の葉敷の床座敷があった。

☆候で矢を、バクの腰皮で盾を作った。背負袋は藤で作った。筏はアペアバの軽木で作り、カノアもえぐった。帆は茅で編んだ。

☆耕作はマンジョーカとミーリョであった。食事は地上に円座した。

食物は粉にして作ったマンジョーカ団子、野獣類、魚類、野生果物で、肉や魚は遠火にかけて、彼ら独特の皮や鱗もとらずに料理した。昆虫も動物も食べた。蜜はとくに好んだ。酒も作って飲んだ。

☆ツピーグワラニー族は大抵真っ裸であったが、女は腰部を手織りの粗布でチョポリを隠したのもあった。その腰巻に鳥の羽根や、椰子の小粒実を珠垂で飾ったものであった。土人は青年になると、二枚の木葉で棒をしめたり、蔓紐で珍宝の包皮を結んでいた。

☆結婚は両親が幼時より許婚した。女性は一四才になると髪を切られた。そのときは部落で大宴会を張った。一夫多妻であったが、父と娘、母と子息との結婚は許されなかった。従兄弟は結婚を許された。一般は女性は男性に従服したが、男は女をいとしんだ。

☆土人の宴会は酋長の吹く土の素焼きの警笛に屋外の焚き火を囲んで、マンジョーカ酒をふるまう。飲み終わったところで総立

ちして、女は手に手に若葉の枝をかざし、男は彩色した杖を振り上げて踊り狂う。

☆出産の時は妊婦は家の近い川、又は渓のある森林に隠れて一人で生んだ。生まれた赤子は流れの水で洗い清めて家に帰った。

☆土人は朝早く起きた。先ず流れに行って沐浴した。朝食後仕事に出掛けた。耕作に魚取りに、狩猟に、部落の食料補給である。婦女子は家屋で働いた。

☆土人は病気になると、その病人をインベの木皮網で縛り上げ、床の下に臥せていぶすかたわら、一人の老人が息を吹きかけて呪いをやる。

死ぬと骸は粗布で包み、木皮の網で縛り墓地に運ぶ。墓穴は長さ一メートル半、幅半メートル、深さ八〇センチで懇ろに葬る。☆同族間は真の共同体で、その名称ツピー（祖先）グワラニー（闘志）の現すがごとく、同族尊重偏重であったため、異土族との間によく戦いが行われた。敵を多くほうるのが勇者と称えられた。

☆ツピーグワラニー族の神話は、神というものの意識を全能的に不思議がらぬまでになっていた。太陽はその象徴であった。社会秩序は部落長老尊重の習慣で保たれた。経験ある老人の言葉は尊重された。

バンデイランテの出発

バウリスタのバンデイランテたちがクヤバ遠征に際し、何故わざわざサンパウロから百数十キロメートルも離れたアラライタグワバ（ポルト・フェリース）をその拠点に選んだか理解に苦しむ

ところであるが、或いはその時分、この地方に、遠征に対して不可欠であったカノア製作に適した巨木が豊富にあった所以ではないかと思われる。記録によると、バンデイラの出発間際は村中大変な騒ぎであったという。

なにしろ、再び生還をきせるか分からない運命にある人々のことである。多くの人達は心残りなきよう、牧師を前に告白や懺悔を行い、遺言を書き、親戚知人にその後事を託し、最後に水盃を交わし決別の宴をはって別れを惜しんだ。

バンデイラによって、その構成人員は多種多様に亙った。屈強な男子を主体に、看護卒、大工、農夫、商人、鉱山師、宗教家、いかさま師等々、それに婦人子供はおろか、ある程度の家畜まで積み込まれた。特に鶏は病人用の栄養食として欠くべからざるものであった。又ときにはバンデイラ自身が特別に、警備の目的で数十人の兵隊を雇ってゆくこともあった。従って出発に際しての荷物の積み込みは実に大事であった。ありとあらゆる用具、それも長期に亙っての多量の日用品や生産用具のほかに、少なからざる武器弾薬が積み込まれるのが習わしであった。食料そのものは、その舟にある種の特権階級のものが乗っていないかぎり至って粗末なもので、フエイジョン、豚油、マンジョーカ又はミーリョの粉、塩などが主なものであった。しかし、これだけ用意しても大抵の場合、途中で病人が出て、それが悪化して、もはや隊と同行不可能になると、本人の意志如何にかかわらず、後は天命を待ってその地に捨て去られるのがオチだった。

その時分、ある外国人がバンデイラの出発を評して、「小さな町

の移動である」と言ったというが、真にむべなるかなである。
いでたちの時刻がせまると、牧師が川岸まで出頭して、すっかり準備を整えたバンディランテや大勢の見送り人を前に、懇ろな祈祷を捧げて、一同に対する神の加護を乞う習わしだった。それが終わると出発が始まり、カノアが一艘ずつ岸を離れはじめると、それに対して一発ずつの祝砲が鳴り渡り、人々の歓声が沸き立って、それが最後の一艘になって、森のかなたに消え行くまでなり止まなかった。
バンデイラには元々、軍律に似た峻厳な規則があって、大抵の場合、バンデイラ編成のおり隊長によってそれが告示されるが、それによると、隊員には如何なる場合も自分勝手な行動は許されず、すべては隊長の指示命令に従って行われ、バンデイラの責任者は全員に対し生殺与奪の権を有していることを認めさせたものだった。
多くのバンデイランテが、こうして大勢の人々の期待の下に華々しく出発していったものの、その成功率は極めて低く、たとえ生きて帰れても、経済面ではむしろネガチーブになったという記録が多い。こうした中で、経済的な勝利まで勝ち得て、無事光栄ある一人のバンデイランテとして、もとの出発点へ戻ってくることのできた者は、果たして全体の何十分の一であったろうか。真に僥倖の極みと言わねばならなかった。

バンデイランテの行路

バンデイランテは奥地侵入に際し、インジオによって、長年踏

み固められて出来上がった、森の中の細い通路か、若しくは水路を利用した。

何十日、或いは何百日にわたっての生活である。河は生活に必要な飲料水や炊事用水をたやすく供給してくれる。それに何しろ大勢のことである。携帯できる食料には限度がある。でき得る限り現地での調達が望ましい。その点大抵の場合、河には色々な魚族が住んでいる。その上付近の野獣類が河へ水を飲みに現れる可能性が多い。これらを仕留めて貴重な食料の足しにすることができる。

次に河は舟を利用することができるが、陸での運行は大事である。なにしろ何百年前のブラジルのことである。大部分が密林や雑木林に覆われていたか、それでなくては沼の連続であったに違いない。それを彪大な荷物を携えて、毎日々々ピッカーダを開けながら進んだのでは、行程が捗らないこと夥しい。ここにバンデイラは水路を選んだ理由があったと思う。ただ水路の場合、困難なことは、滝、渦巻き、暗礁、浅瀬の岩石や狭い急流を流れてくる樹木との突然のぶっつかりなどであった。こんな場所での舟の操縦は特殊な技術を要求し、場数を踏んだ老練な船頭やカコ（舟乗り）が一心に取り組んでいったが、時には間一髪の危機をも乗り越えて行ったものであったという。

また、落差の激しい滝や瀬では、荷物共々、舟まで岸へ引き上げて、陸地伝いに滝の下方まで運び、再び舟を河にもどして、人や荷物を積み込んで運航を続けた。

これらのことは皆、同伴の奴隷の手を主に、また人々もそれを手伝って行ったが、時によると、一つの滝を越えるだけで、丸一

日費やしたという。また何かの都合で陸地を行かねばならないときは予め用意してあったカレッタに、カノアや荷物を載せて、これを二〇～三〇人の奴隷に引かせたものだが、時にはこの哀れな人夫達の一人が空腹に耐え兼ねて、人の目を盗んで、積んである食料の幾許かを口にすることもあったと言うが、若しこのことが露見でもすると、その制裁は厳しく、場合によってこの人夫はその場で追放の憂き目にあうこともあった。これはその時次第で、一袋、一包の食料の方が一人のネグロより価値があると認められたからだった。

さてこのカノアのことであるが、その製作法はインジオから伝授されたもので、太い丸木の材木を適当な長さにきって、斧や手斧、それに火を使ってくりぬかれたものだった。このカノアの側は厚さ二インチ程であるが、それをなお補強する目的で、外側に厚い板を張り付けることが習わしであった。カノアの大きなものは、長さ十数メートル、幅一メートル二～三〇センチに及び、重さも数トンというものだった。その形は舟首が細くなっていて、舟は機織りの杼(ひ)状に筒形になっており龍骨も舵もなかった。舟の両端に各二～三メートルの空き場所を作って、それぞれ四～五人の漕手が乗り組むが、舟首の先端には舟頭が突っ立って、後方の舵子と間断無く連絡をとりながら、巧みに舟を操っていった。

荷物は舟の中央部に積み込むのだが、雨水や滝のしぶきを避けるため、そこへ屋台の骨組みのようなものを作り、その上を厚いローナで覆って、降雨のときは人もその内へ避難するようになっていたが、なにしろ限られた狭い場所であったから、十分なことでなく、多くのものは雨に打たれたまま旅を続けなければならな

かった。
漕手の櫂は一様に同じ大きさだったが、船頭と舵子の持つ櫂は特別大きなものだった。これは舵の取り付けていないカノアのことであるから、その操縦は専ら船頭と舵子の櫂の微妙な動きに左右されるからであった。
また急な流れを溯るときは、もっぱら水竿を使って、川床を突っ張り、突っ張り、前進したものであったという。
サンパウロのバンデイランテが選んだ行路としての、ポルト・フェリースからクヤバまでの距離は、直線にしては一二〇〇～一三〇〇キロメートルに過ぎないが、当時の水路では三五〇四キロメートルに達したという。そのうちチエテ河が一〇〇三キロ、パラナ河が一九一キロ、パルド河が四九五キロ、カマプアン河が一一二キロ、コシン河が二六四キロ、タクワリー河が五九四キロ、パラグワイ河が二五八キロ、ポルッド河が一六五キロ、最後のクヤバ河が四二二キロであった。その行程はチエテ河を下ること二〇～三〇日、パラナ河が五～六日、次にこの河の右側のパルド河へ入って、これを上ること五〇～六〇日、次にカマプアンと言うちょっと開けた村で食料を補給して、カマプアン河に入り、コッシン河を経て、タクワリ河にはいるが、この間一四～一五日、このタクワリ河を下ること二〇日余り。次にパラグワイ河本流を上ること八日間、そこからポルッド河に移って、これを上ること五日間。最後のクヤバ河が一五日位で、総計一三〇～一四〇日費やしたものだったという。

チエテ河下航記

次に記すのは、一七六九年、テオトニオ・ジョゼ・シユカルテ軍曹が七〇〇人余りの植民者を率いて、パラグワイとの国境、マット・グロッソのイグワテミへ向かった時のチエテ河下航の日誌の一部の抜粋である。

四月一三日（一七六九年）

午前八時、ついにアラライタグワーバ（ポルト・フェリース）出発。

船首に大きな旗を翻した親船を先頭に、かねて取り決めておいた順番通り、三六艘が規則正しく粛然と進んで行った。この親船には、この航路に十分経験のある船乗たちが乗り組んでいて、他の舟はすべて彼らの指示に従うことになっていた。

出発してから幾度か、うねうねした河を曲がって行くと、アバラマンヅアーバという滝にぶっつかった。これはインジオ語で「僧が落ちた所」という意味で、昔、ジョゼ・デ・アンシエッタという一人のゼズイッタ牧師が、この辺のインジオ相手に熱心に伝導していたが、ある日、ここをカノアで通過したとき、誤って水中に落ちた。しばらく経っても、水面に現れない僧を訝ったインジオが、水中へ飛び込んで潜ってみると、件の僧は、河床の石の一つに腰を下ろして、祈祷書の上に手をおいて、一心に祈っていたという伝説からきたものであった。

この滝には岩石が多く、所々に水流の渦があったりして、危険な所で、数多くのカノアが転覆したり、人が溺れたりしたというが、幸い我々は全部の舟が無事にここを通過するのを見届けるこ

とができた。全員通過するのを待って、一同集合し、食事をとった。

時刻は一一時半、出発点から四レグア（一レグアは六・六キロメートル）の所であった。一二時半、ここを出発、下ること数時間、ピラポーラ滝の近くでカノアを岸に着けて、今夜の宿泊の準備をする。人々を上陸させ、適当な空き地を物色、そこをロッサさせて夕食兼宿泊の場とさせた。

寝床は各自携帯してきた、ハンモックを適当な木の枝間に吊って、それを蚊帳で覆うのであるが、この蚊帳は地面までたれ下げて、絶対に昆虫が中へ侵入しないようにする必要があった。そうしなければ奥地では大抵の場合、蚊やブヨの襲撃がひどく、夜昼を通じて悩まされるので、せめて夜だけでも十分な安眠をとらないと、昼間の疲れと昆虫相手の悶えとが重なって神経に異常をきたし、数日も続くと、大抵の人間は半狂乱になってしまうからであった。

この日の航行距離は九レグア半であった。

四月一四日

夜が明けると同時にピラポーラ滝を越える準備をする。先ず舟の重量を半減させる目的で、大部分の荷物を陸揚げさせ、大勢の人夫の肩に担がせて、一〇〇ブラッサ（一ブラッサは二・二メートル）近くも開けた狭いピカーダを木の根に躓いたり、穴に落ちたり滑ったり、茨で着物を破いたりしながら、滝の下まで運び、一ヶ所に集めさせた。

一方舟団を集めて、一艘ずつ一人の場慣れた水先案内人と、数人の船乗りを乗せて、この協力一致の下に、滝の中の一番穏やか

そうな水路をさがして下るという方法だった。
　こうして一艘のカノアを滝の下の安全な場所まで届けると、この乗組員たちは、陸地伝いに上流へ戻り、再び次のカノアを操って下流まで運ぶ。これを最後の一艘まで繰り返し、これが終わると再びカノアを着岸させて、運んでおいた荷物を積み込んで出発したが、この仕事に手間をとって終わった時は正午過ぎだった。それから四時間位下ったころ、強い暴風雨がやってきて、もはや航行不可能となり、急いで舟を、ひどい雷雨の中にも拘わらず岸へ着け、大木の幹に鉄の鎖でつないだ。不幸にも、そこは両岸が崖になっていて、上陸不可能だった。台風は益々荒れる一方、引っ切りなしの落雷の後、近くで大木の裂ける音もする。人々は恐れおののいて生きた心地もせず、カノアの上で抱き合い、びしょ濡れになったまま、各自大声でそれぞれに信ずる神の御加護を唱えるより仕方がなかった。
　この日の航行距離は、わずかに五レグアであった。

四月一五日
　恐ろしかった一夜が明けると、皆は、一人の幼児の息が絶えているのを発見した。これを原始林の片隅に埋葬したが、この時、全員は昨夜からの疲れでへとへとになっていた。全身びしょ濡れの上、ひもじさが身に染みた。さしずめ、マンジョーカ粉を分配してみたが、本当は一時上陸して火をたいて、体や着物を乾かし、十分な食事をとる必要があった。
その心積もりで両岸を一二時頃まで物色していったが、適当な上陸場所が見つからないので、仕方なく舟を岸辺に集めて停止させ、

ここで午後の半日を休憩することにして皆を上陸させ、各自自由に猟や漁に赴かせたが、夕方になって、分かったところによると、雇って来た三〇人の兵隊の中の一人が、いつまで待っても戻ってこない。捨てておく訳にもゆかないので、そういうことの経験のある者を募って、二隊にわけ、一隊は徒歩で森の中を、他の一隊は舟で川伝いに、それぞれ爆竹を間断無く揚げながら探し求めた結果、その甲斐あってか、森の奥で人の叫ぶ声が聞こえてきたので、それを頼りに近づくと、くだんの兵士が木のうえで震えていたという。

木へ登ったのは物凄い山豚の大群に追われたからであって、その上大きなオンサの徘徊も目についたので、恐ろしくなって、今夜はこの木の上ですごし、明るくなってから皆のもとへ帰る積もりであったという。

本日の航行距離は、五レグア半であった。

四月二〇日

朝は八時に出発、最初にエスチロンという瀬に出くわしたが、これは全員乗舟のまま通過、次のイバウルグワスの滝は浅瀬で岩の上を通るので、積荷の軽減を目指して、人や荷物の一部を陸揚げさせて、森の中の昆虫にさいなまれながら、ピカーダをあげて川下まで運んだが、それから二つ目のバルエリ・ミリン滝でもやはり荷物を陸揚げして運んだ。この時ピカーダを通行中ひどいダニの襲撃にあって閉口した。何百という羽風のような小さなダニが木の葉の端に、団子のように固まってぶら下がっていて、それが人の通行で木が揺れるとバラバラと体中に降りかかってきて、

ところ嫌わずくらいつく。痒いので掻くとそこが傷になる。皆は裸になって、お互いに背や腕に煙草のエキスや蝋を塗りあったものだ。出発してしばらくするとバルエリグワスーという滝まで行き着いたが、ここも危険な場所なので、荷物を陸揚げする必要があったが、すでに時間もなく、ここで寝泊まりすることになった。

本日の航行距離は、六レグアであった。

四月二一日

夜が明けると同時に、人数を二手にわけ、一方で荷物を岸伝いに滝の下方まで担がせ、他方、舟乗りたちを呼んで、一人の指揮者の下に、舟を一艘ずつ操って滝を下る算段をした。ここでは経験ある水夫が裸になって河へ飛び込み、河中の大きな岩の上に立って、滝のしぶきを浴びながら、舟を操縦してゆく船頭たちに、隠れた岩石のない水路を、微に入り細にわたって指示し続け、最後の一艘まで安全にそこを通過させることができた。この仕事に九時頃まで費やしたが、それから再び積荷を終えて出発、夕方の五時半頃まで航行したが、その途中二度も落差のある浅瀬を通過した時、何度も舟底が河床の岩石に突き当たって、ドカンドカンと音をたてたので、肝を冷やしたものだった。

本日は七時間半、航行し得た距離七レグワ半。

四月二三日

朝六時半出発。夕方近くになって川岸の開けた所にきたので、ここで舟を止めて上陸、それぞれ鉄砲を抱え、犬を率いて猟に出

掛ける。間もなく三頭の鹿と、一頭のアンタを仕留めて、意気揚々と引き上げてきた。
これらの捕物を料理し、皆に分配、各自スープにしたり、煮たり、焼いたりなどして十分に食べ、特に病人には十分にあてがった。有り難いことに、このアンタは、小さい牛ほどの大きさがあった。この日はここで寝る準備をする。本日の航行十時間、航行距敵一一レグワ。

五月一日

夜が明けると同時に人々を乗舟させ、下ること数時間で三つの滝を通過、最初がバリリツーバ、次がアラサツーバ、これはアラサの実ということで、最後がアララクワンガミリンと呼ぶ大きくて危険な滝で、人々は舟を捨て、陸地のピカーダを下流まで下る。舟乗りたちは裸のまま水しぶきを浴びて、水中に隠れた岩石に用心しつつ、一心になって舟を操って行った。この滝のすぐそばから、長さ大凡半レグアもあろうかという島が細長く横たわっていたが、その水際で一匹の大蛇が寝ていて、人の声に驚いて、するすると水中へもぐり始めた。一人が鉄砲で、三発撃って仕留め、その長さを計ってみると三ブラッサ半（七・七メートル）もあって、その太さは二パルモ（四四センチ）もあった。そこを出てしばらくは穏やかな水面を走り、やがてアララクワンガー滝に着く。ここで夜を明かすことにする。本日の航行距離は七レグワ。

五月四日

朝八時に出発、一レグア半も下ると、非常に危険な滝の連続し

たイツビルー滝に出た。この滝の名は「乾いて低い」という意味で、総体に流れが浅く、石が多く、曲がりくねった水路のうえ、真ん中に島があり実に危なく、航行しづらい場所である。勿論人や荷物は陸上を行くことになり、ピカーダを開けはじめたところ、大きな蜂の巣に接触、怒髪天を衝いた蜂の大群が、どっと人々に襲いかかった。女子供は泣きながら右往左往、走りながら布で顔を覆うやら、慌ててもっている荷物をほうり出すやらで、しばらくは大混乱。あげくの果て、新しく別の場所へピカーダを開けなおすことになった。実際こんな場合、蜂に刺される数の如何によって人は死に至ることもあり得るという。この騒ぎで本日の航行距離はわずか一レグワ半であった。

五月五日

朝八時半出発。最初のイタイピランガ滝では荷物を人手で河伝いに運ばせたが、次のトレース・イルモンスの滝では、両岸の地勢がわるく、荷物の陸揚げができなくて、舟は積み荷したまま滝を越えることになったが、慎重を期して、予め水先案内人を浅瀬の水中に立たせておいて、その細かい指示の下に一艘ずつ渡っていったが、それでも時々舟底が岩にぶっつかり、すごい音を立てたりしたので、皆は戦々兢々の思いであった。次のイタプーラミリンでも、同じような方法で渡り切ったが、それから少し行くとついにあの名高いイタプーラグワスーの大瀑布が現れた。イタプーラとはインジオ語で「石の先端」ということで、グワスーは「大きい」ことを示す。

我々はこの瀑布の手前、五〇ブラッサ位のところで舟を岸に着

け、積み荷は勿論、全部のカノアまで陸揚げさせることにし、今日はここで宿泊する準備をする。

本日の航行は五時間半、航行距離六レグア。

五月六日

夜が明けると直ちにすべての荷物を陸揚げさせる。正午から最も手間のかかるカノアの陸揚げである。できる限りの偏平な岸を選んで、地面に木のローラを敷き並べ、その上へカノアを乗せて滑らせながら大勢の人力でそれを引っ張るわけである。結構この仕事のために夜になってしまう。このイタプーフ滝は落差が五ブラッサ内外あって、全体として円形をなし、中央に垂直に切り立った大岩石があり、その足元には数個の岩石が横たわっていた。上方から巨大な水の塊が落下してきて、この岩石台に当たって微塵に砕け、無数の飛沫となって周囲は白い霧の幕で覆われ、あまつさえその上方にはくっきりと虹がさすこともあった。滝の下手の水の合流点では大きな滴が巻いていたが、そこは広々とした湖になっていて、驚くほどの魚類が棲息していた。ためしに人々に釣らせてみると、一アローバもあろうジャウーや半アローバにも及ぶパクーやドラードが次々と面白いように釣れたので、隊の食料調達には一役かったが、それが数日続くと、さすがの人夫たちも食傷気味を訴えるようになった。

四月七日

夜が明けると同時に、荷物を積み込んで早速出発。皆は休息をとったせいで元気溌剌、それにここから河口までは僅かな距離で、

大した難所もなさそうだ。しばらく下って大きな曲がり角をでると、そこはもうパラナ河であった。そのとき午後二時。本日の航行距離僅か一レグワ半、この日までアラライタクアーバ出発後二五日。チエテ河行程一三〇レグワ半、乗り越えてきた滝の数は実に四六であった。

バイアグワス族の襲撃

バンデイランテが奥地遠征に当たって、最も懸念したことは、疫病の発生とインジオの襲撃との二つであった。

このうち、凶暴なインジオとの遭遇は、多分にその時の運不運に左右されたが、疫病の方はある程度各人の心掛け次第で予防することができた。当時パラナ河は年をつうじて不健康地帯の一つに数えられ、マラリヤその他の悪疫発生の巣窟になっていた。パラナ河の水そのものが汚染していたので、人々の間では絶対に生水は飲んではいけないことになっていた。従って飲料水の補給には、河水を一度煮沸して用いるか、パラナ河に注ぐ小さな支流を捜し求めて、それをある程度溯って、清冽な水を汲んできたものであった。

多くのバンデイランテが、クヤバまでの途中で悩まされたインジオの襲撃は、大抵の場合このパラナ河を過ぎて、マット・グロッソ州に入ってからのことで、主にその舞台はパラグワイ河やポルッド・タクワリ又はクヤバ河などであった。

一七三〇年、五月一五日、ランニャス・ペイショット判事引率の下に、サンパウロのアラライタクワーバ向けの帰還隊が二三艘のカノアに分乗してクヤバを出発したときのことであった。

クヤバ河を下ること六日間、レジストロ・ベーリョと言うところで、一行はバイアグワスー族がパラグワイ河で彼らを待ち受けていることを知った。その日は既にポルッド河を下ってきて、パラグワイ河に入っていたが、その前夜、あたかも翌日の凶事を前触れするごとく、ひどい暴風がふき荒れ、そのうえに両側のパンタナルは折からの増水期で上陸かなわず、人々は狭いカノアの上で夜を明かした為、みな疲れ切っていた。

朝の一一時頃であった。突然河の右側から唸るような大きな咆哮が空を圧して響いてきた。見るとそちらの入江の木陰に潜んでいた五〇艘あまりのカノアに溢れるばかりに分乗したバイアグワスー族の一隊が喚声を揚げて突進してくるのだった。一艘のカノアに頑強そうな赤銅色の肌を赤や黄色で塗りたくって、体中を鳥の羽根で飾った蛮人が一一～一二人、それぞれ手に武器を持って喚いてくる。と同時に一時に何百という矢が射ち出され、天地も陰らんばかりになった。

これを見てびっくり仰天したのは土人や黒人たちであった。白人の必死の制止も聞かばこそ、我れ先にと何もかも捨てて河の中に飛び込んでしまった。困ったのは残された人達であった。漕手は失うし、銃をとって戦うにもその弾込めを手伝う者もいない。インジオたちはそれにつけこんで、引っ切りなしに矢を射ながら手槍や棍棒を振りかざして当たるをさいわい、誰彼の差別なく殺戮してしまった。

この戦闘に立ち会って辛くも生き延びたカメーロと呼ぶ判事の一従者の証言によると、この時のペイショット判事は文字通りただ一人になりながら、実に勇敢に奮戦したという。「判事殿は、舟

には自分の外に大病で舟底にうっぷせている一人の若者以外には誰も居ないのを知ると、やにわに手元にあった四丁の火縄銃を差し替え引き替え発砲して、インジオ相手に戦ったが、それを再び弾込めしてくれる者のないのを知ると、こしの長刀をひきぬき頭上にかざしながら絶望的なこえで「カメーロ」と助けを求めた」という。

だが、残念なことにこの時、他のカノアでインジオ相手に戦って居たカメーロは、声を聞きつけてその援助に向かおうとしたが、その時不運にも一艘の主のないカノアが流れてきて、判事の方への通路を邪魔した。

それを避けようともたもたしているうちに蛮人の一群が判事の舟に殺到し、それきり判事殿の姿は永久に見ることはなかった。

一方カメーロの舟には彼の外に三人の白人と数人の黒人の漕手がいたが、これはカメーロの冷血的ではあるが、彼らを引き留める唯一の手段としてとった脅し、それは若し逃走の場合は死をもってこれに酬いるという冷厳な宣言が功を奏したからであった。

こうしてこの四人の中の二人の漕手を監督し、残る二人がインジオ相手に戦闘を続けたが、もっと戦況を有利に導くためには上陸する必要があったので急遽カノアを着岸させた。舟を木陰におき、今度は白人四人で絶え間無く銃撃することができたので、インジオ達もたじたじとなり、退却をはじめた。そこへもう六艘の味方が帰りついた。彼らもやはり漕手を脅かしてこれまで連れてきたのだという。

これで火縄銃が一三丁になった。我々はこれを機に逆襲に移った。一同隠れ場所から出て、船体を一列にそろえ、インジオの中

へ突入していった。味方の中には百発百中の銃手が居たりして我が士気大いにあがり、形勢不利とみた敵は、捕獲した一六艘のカノアに一一アローバの金や武器、着物その他の戦利品を積み込んで、二列に並び意気揚々と引き揚げていった。

驚いたことに彼らの酋長舟と思われるあたりから、一人の若い白人がポルトガル語で我々に向かって罵詈誹謗の言葉をなげてきたことであった。これは多分一七二七年このパイアグワスー族の捕虜になって、その後彼らの部落に居着いたローボ某の息子か何かであったろうと思われる。

この時くだんの酋長の傍らで、一人白人の女が立ち上がって、去り行く我々に最後の別れをしようとした如く、片手を空高く打ち振る身振りをしたが、傍らのインジオに制止されてしまったのが見えた。しばらくしてこのパイアグワスー族の船隊はパラグワイ河の下流に姿をけしてしまった。

後日分かったことだが、これはリスボン人の夫婦で、夫はこの戦闘で惨殺され、彼女は捕虜になって連れ去られる時のことであった。

この時の惨劇を締めくくってみると、死者は統率者のペイショット判事も含めて、一〇七人、生き残った者は八三人、その内白人は二三人であった。

かようにバンデイランテには悲惨なことが屡々あったが、たまには愉快なことも無い訳でもなかった。

次に記すのは一七五一年、アザンブージャ伯爵が、サンパウロからクヤバまでの旅行中、パルド河で経験したエーマ狩のことである。もともとエーマは駝鳥に似て、身体が重く、空高くは飛べ

ないが、その逃げ足はすこぶる速く、二つの羽根を全開してその飛翔力を利用し、地上すれすれに疾走するので、その速力は他の追従を許さず、たとえオンサが必死で走っても、それに追いつかなかったという。ところがこのエーマにも間の抜けたところがあり、これを仕留めようと思う猟師は、大きな葉のついた木の枝を前に、己の姿を隠して近づき、ほとんど面前までいって、油断をみすまして難なく捕獲したという。

バンデイランテに関する挿話

さて最後に、バンデイランテに関する二つの挿話を紹介してこの稿をおくことにする。

その一

フエルナン・ジーアス・パイスは一六七四年、一族郎党を引き連れてサンパウロを出発した。彼の目的はエメラルドの発見にあった。すでに年老いていたが、常に不撓不屈の精神をもっていた。

サンパウロのグワラチンゲタをはじめに、遠くミナス・ジェライス全域の高原を、八年間にわたって隈なく探検して歩いていたが、宿望の宝石は容易なことでは見あたらなかった。そのうちに資金が尽きたので、大至急サンパウロの妻のもとへ使者をたてて、残りの全財産を処分し、その金額を届けるようにと伝言した。また、この八年間の旅先で、身内の間にいざこざが起き、あげくの果てフエルナン・ジーアスは、彼に対する反逆罪を理由に、彼自

身の実子の一人を絞め殺してしまったという。
かような悲惨の末、ようやくそれとおぼしき緑の石を発見した。彼は長年の辛苦が報いられたと小躍りした。それで待望の百万長者になったものと確信して疑わなかった。彼は衰弱がもとで赤貧のうちに病死した。彼が八年間の苦労の末、発見した緑の石は殆ど市場価値のない、単なるツルマリンにすぎなかったという。
かくてフェルナン・ジーアス・パイス自身の努力は徒労に終わったが、このバンデイランテとしての足跡は不朽のものとして今に伝えられている。

その二

一七二〇年代の頃、バルトロメウ・ブエーノ・ダ・シルバという一人のバンデイランテがゴヤス方面を探検した時のこと、ある部落でインジオの女たちがその身体を豊富な金で飾り立てていることに気づいた彼は、インジオにその金の出所を尋ねたが、彼らは口を閉ざして言う気配がない。色々手をつくしてみたが効果がないので、一計を案じた彼は、部下にピンガ樽をもってこさせ、酒の一部を皿に注ぎ、これに火をつけ、燃えるピンガを指さして、「見ろこれを、わしらは魔法使いで何でもできるんだ。これをこの通り水さえも焼くことができるのだ。もしお前らがわしらに金のありかを教えないならば、わしらはこのように、お前らの大切な川の水に火をつけて焼いてしまうぞ。そうなれば、もうこの世の終わりだ。恐ろしいことになるぞ。それでもお前たちは未だ強情をはる気か」と大見え切ってみせると、あわれ無知のインジオはそれを信じて、恐ろしそうに震えだし、バルトロメウはこの奇計

のお陰で、難無くその目的を達することができた。以後インジオたちは、彼のことをアンニャンゲーラ(老悪魔)と呼ぶようになったという。

この度我々にゆかりのあるチエテ移住地の近辺に、ウルブプンガ発電所が建設され、それに伴って方々にダムができ、チエテ河の水位も上がり、近い将来にはこの河も船舶用の水路として利用され、サンパウロの奥地の交通発展に一役買って出ることになると思う。また我が移住地の所在であるペレイラ・バレット市を取り囲む、広大な人造湖の出現は、この町にある種の転換をもたらし、今後は水の都の観光地として、又水陸交通の一要衝地として、新たな発展への道を歩まれんことを期待する。

或いはこれらのことは、間接的ではあるが、その昔、このゆかりあるチエテ河を下っていったが、こと志を得ず、目的半ばに何らかの事情で、森の奥深く倒れてゆかねばならなかった多くの先人、バンデイランテたちの霊への、慰めの一助になるのではないかと思う。

追　憶　編

チエテ移住地の思い出

河　合　武　夫

三菱系東山銀行の出資で、南聖パラナ州境に近いアピアイ部落を拠点にして鉱山事業に関係していた私は、国際情勢の緊迫と共に聖市本社に招致され、やがて四十一年末日米開戦となって失業する。

妻の親父がチエテ移住地に雑貨店を経営していたので、当分情勢観望ということで妻子と共に居候となった。前年、妻の母は聖市の私の宅に高血圧で休養中死去し、親父は身辺孤独を感じて居た故もあったろうが、私たちを招くのにも熱心であった。

「人生でこの様なチャンスは滅多にあるものでない、腰を据えてゆっくりするのだナ」と慰めてくれる彼の言葉に甘えて度胸を据えた私は、全く何もせずにまる一年彼地で過ごした。

彼はもと海軍の志願兵で、日露戦争に参加の経験があり、この移住地には他にも海軍出身者が三人ほど居て親しく往来していた。

それぞれ下士官あがりで話題も豊富、日本の必勝を信じて居たから不安の空気はなかった。

どうせ日本が戦勝のあかつきは、占領地の何処かへ行くことになるであろうと私も信じていた。

当時はブラジルもナショナリズム高揚の頂点にあり、いちばんその触覚に触れる鉱山事業に携わって居てさんざん嫌な思いをして居た私も簡単にそのような心境にあった。

妻はソーグロ一家の台所をとり仕切り、私は持参の鉱山学や鉱物学の参考書を読む。もともとこんなものは私の専門でないが、事のはずみで関係して、吾が学力の不足を痛感していたからである。

その中、閑に任せて始めたペスカ（釣り）に凝りだし深入りしてしまった。

一九四一年の半ば、まだその頃は旧ノロエステ線ルッサンビーラ駅から移住地に向かう街道にやっとコンクリートの橋が架かり、チエテ河から三km程で移住地の市街地に達する。

早朝弁当持ちでこの三ｋｍを歩いて河に向かう。川岸には既に手に入れたカノア（くり舟）が鎖で繋いである。櫂（カイ）は釣具、弁当と共に担いで行くのである。一日一回の汽車の時間にはバスも出るが、そんなものを待っておれぬ。

カノアを操つって、橋下の深みで手釣りをやる。二、三キロのジャウ（ナマズの一種）や一キロ程のマンジー（毒針のあるナマズで頗る美味）がよく釣れた。

夕刻近くなるとソグロがシャレッテ（二輪馬車）で迎えに来てくれる。

五十余年昔当時のチエテ河は乾季に入ればよく澄んで快適であった。

時には泳ぎも試してみた。また、市街地の反対方向にサン・ジョゼ川と呼ぶ幅二十メートル程で同じくパラナ河に流入するのが

あった。幼少年期のドラードやピラカンジューバの二十センチ程のが竿にかかる。鱗のついた鱒（マス）類は高く跳ね逸逃を試みる。細竹でこれを釣るスリル感は耐えられぬ魅力で、こうして釣り三昧に幾日かを過ごした。

サン・ジョゼ川で唯一の注意はマラリヤ蚊の居ることで、その為に予防薬キニーネを服用したが、これが消化器系統の支障をもたらす。食欲がなくなり、下腹が張って通便も思うに任せぬ。某知人は、「ピンガ　コン　リモンを毎朝一パツやれば、キニーネなど不要なのを俺が保証する」と宣うた。

不覚にもこれに転向して間もなくマラリヤにやられる。高熱往来、しかも震いのこない悪性マラリヤで、ついに腰が抜けて歩行不能となる。

当時移住地には立派な病院があってブラジル人の医者にお世話になった。

パルダンの注射で緑色の小便が出る。

この様な憂き目に逢いながら釣りの面白さは吾が終生の病みつきとなった。

兎角する中に、コチア産組の招きで出聖就職することになる。一九四三年十月までまる一年の滞在であった。今思い出しても懐かしい一年である。

この釣で特に印象に残った逸話を述べる。

筆者の外に、も一人釣キチが居た。アリアンサ在住の養蚕技師で松原さん？　とか、どのような理由かチエテに引っ越して来て毎日の釣り仲間となる。夜は川上の浅瀬で、先ず餌に使うカス

クードを捕らえる。岩の間に手を入れて掴むのである。私が河べりで釣るランバリーよりは餌として遥かに効率が高い。肉が堅く容易にかじり取られないからである。
終いにはカスクードの塩漬けのようなもの迄用意していたが、その実績に就いせは聞き漏らした。
一日、この浅瀬の下あたりの深みに小舟の錨を降ろした彼が何か叫びながら櫂で水面を叩いている。何事ならんと川面遥かの彼に向かってカノアを急がせた。
漸く近づくと、彼はビショ濡れの顔面蒼白まだ息を弾ませている。
曰く「でっかいスクリー（水蛇）が頭をもたげ迫って来たので必死となって追い払うべく水面を叩き抵抗を試みた…。ついに水中に潜って退散した所だ・・・」
私も気味悪くなって彼と共に忽々に引き上げた。小舟の平底一杯たまった水を先ず掻きだしてあげてから・・・。
その後の体験から、これはスクリーではなくロントラ(川獺)の習性で、川面に人の存在を気づくと、この様な威嚇を試あてから潜って逃げ去るのであるが、その頭の形や水面すれすれに泳ぐ体は大蛇と見違えられやすい。
数日前この近くの川沿いで五メートルほどのスクリーが捕獲された噂に彼は神経質になっていた筈であるし、ロントラに出会った体験もなかったのであろう・・・。
このチエテ移住地で私の長男は生まれている。サンパウロに引き揚げる時二才半の長女は、橋の上から遥かに広がる水面を指して、「アグワ（水の意）、アグワ」と感に堪えた嘆声を漏らした。今

や年頃の二児の母である。

余談四編

その一

さきに述べたように移住地には立派な病院が建てられ、日本から医者が派遣されていたが、夙に帰国していて、この僻地の日本人集団地に開業してくれる奇特な医者など居ない(二世の医師が出現するのはずっと後のことである)。アメリカの南北戦争で敗退(一八六五年)した南部の農村貴族の一部がヤンキーの支配下に入るを快しとせず、約三千人がブラジルに移住したがこの国の気候風土に慣れず、或いは帰国したり自滅したりで、僅かにカンピーナス先のアメリカーナはその一部が残存して繁栄している件に就いて私が書いた記憶があるが、その一人である医師がチエテ病院に自薦の赴任であったと後から知った。聞くだに爽やかな一遍の佳話である。私は彼のお世話になったのである。

その二

私を悩ました悪性マラリヤも気候のよい聖市への転地により数年後に根治した。

その三

製材所のボイラーによる発電で怪しげな電灯の下で店の若い番頭さん見習三名に毎夜日本語を教えた。これが縁になってその一人と今も交友を続けている。

その四

移住地に近いパラナ河との合流地付近に大ダムが建設され数百万キロワットの大発電所が出現、琵琶湖の何倍もある貯水湖の為にあの懐かしい橋は移住地の大部分と共に水没して、僅かに市街地が孤島となって観光地として残存している由である。まさしく古語に言う「桑田変じて碧海となる」である。

木村貫一郎氏とチエテ橋工事

木村氏は昔の東京帝国大学工学部土木科を出られた一流の学歴の技術者であり、新潟県土木課長を最後に官を辞し、台湾の一大水力発電所の工事を担当された。

県の支出予算の中で土木課に充てる額が最高とされるし、信濃川改修工事のような直接中央政府のものも関連したと想像されるから担当技師の責任は大きい。

俳人としての木村氏は虚子が指導の為に新潟に出張する時は代表として県境の駅まで迎えたと聞くから、すでに俳人として斯界に名を成しておられたのであろう。

私の親しかった息子木村義臣氏（元パウリスタ新聞主筆）は台北中学出身（新潟高等学夜、東大英文科中退）の経歴から、父君の台湾駐在がかなり長期であったと推測される。

その退職金をゴム製品リノリューム製造会社に投資されたが不幸失敗に終わって、アリアンサに一家移住されたと言うのが、義臣氏から聞いた移住の直接動機のように記憶する。

既述のように虚子に師事した俳人圭石は、物質欲の旺盛な仕事

師ではなく、しかも開拓地の労働に耐える者は一家中皆無に近く(長男は牧師さん)、その営農は苦難の連続であったと想像される。

偶々アリアンサ移住地に対し、ノロエステ鉄道と平行のチエテ河を隔てて新設されたチエテ移住地は、ルッサンビーラ駅から高々十キロメートル余で市街地の中心に至るが、河幅三〇〇メートルを渡舟で渡河せねばならず、マラリアの危険もあり、移住地の担当者ブラジル拓殖組合は、是非とも橋梁の建設を考えねばならなかった。そして建設のあかつきは、これを州の道路局（ＤＥＲ）に寄贈されるという前提から、道路局が橋梁建築の請負会社から提出の設計の検討調査に関与することになり、当時マッケンジー工科大学の土木科終学年の私は、道路局の橋梁設計担当技師の好意で、この調査を見学させて頂いた。

結局Ｃｏｍｐａｎｉａ　Ｃｏｎｓｔｒｕｔｏｒａ　Ｎａｃｉｏｎａｌ　―　Ｗｅｉｓ&Ｆｒｅｉｔａｇと呼ぶドイツ系土木会社提出の鉄筋コンクリート・アーチ橋（経間一三〇メートルとその両端に十五メートル宛の桁橋）が可決され、請負工費は一千コントス前後であったと記憶する。

木村氏は、この工事の発註者ブラ拓より派遣の監督官に就任された。

即ち設計図とそれに付帯の覚書に即して忠実に施工するよう監視の役目であるが、特にあのアーチ橋の場合では川中に支柱を立てることは不可能故、両岸に設置の高い櫓を結ぶケーブルからコンクリート・アーチの型枠を吊り下げるという面倒な工事で、高度な理論と経験の持ち主木村氏の如き一流技術家を得たことは正

にブラ拓にとって幸達であった。

このコンクリート・アーチ橋は世界で七番目の大きさとか聞いた。木村氏にとってもやり甲斐のある偶然事であったろう。ただし、ブラ拓は彼の足元をみて、敢えて低給を払った訳ではなかろうが、当時四百ミルの月給は決して厚遇でないとの噂も流れた。

学校出ホヤホヤの私の初任給は七〇〇ミル・レースというのであった。

顧みれば六五年昔の話である。

木村氏は超然、言わば閑職にあるのだから、句をひねったり、後進を指導されたりであったろう。簾女などその頃のお弟子ではあるまいか。

当時ものされた随筆で日本の古典に於ける「谷の掛け橋云々」を邦字新開で読んだかすかな記憶がある。

橋が完成したのは何時か、一時帰国していた私は知らない。

一九九五年九月記

移住地の挿話

湯　朝　信　助

一　聞く耳持たぬ専務さん

ブラ拓が連邦政府の管理になり、宮坂氏、加藤氏、井久保氏が事務所への出勤とブラ拓の事業に触れることを禁じられたが、加藤氏から私と大坪薬剤師宛に私信で、「ただ今我々は何も出来ないが、チエテの病院には恩賜病棟がある故、病院を第三者へ売られるようなことがあっては困るから、産業組合へ交渉して組合の名で病院を購入申し込みをしてもらうよう了解をしてほしい、戦争が終わり平和になったら、我々が都合の良いように解決するから」との指令に接し、大坪氏と私は組合の専務理事川崎渉氏を訪問して、その交渉をしたのであったが、彼は戦勝の怪ニュースを組合員に伝えている張本人であったので頑として私らの案を聞き入れず、不調に終わったのであった。

その後間もなくドトール・エーデ氏がこの病院をブラ拓管理人から買い受けて経営していたが、後にペレイラ・バレット郡役所へ売却、群役所はサンタカーザ病院にし、今日に至っている。

二　コロコロ橋のこと

ノーボ・オリエンテとベラフロレスタ両市街地を繋ぐ幹線道路が、ペテルネイラ谷川を横断する所に長さ百メートル近い「栄橋」と称する板橋があったが、厚板を釘付けにしてある釘が緩み、静かな夜、自動車が通るとコロコロ、コロコロと音を発しそれが十

キロメートルもの遠くまで聞こえるので、いつの間にか人々はコロコロ橋と呼ぶようになった。
何故このように長い橋を架けたか判断に苦しむが、多分請負人は長さメートル当たりの単価で請け負っていたので、出来るだけ長くしたと思われる。長い橋は傷みやすい故、私はこの橋を修理するときに五メートル（「文庫」注・ママ）の橋に縮めたのであった。

三　鉄道線路のようなエスチーバのこと

新山に開設した道路のぬかる所には、直系十センチメートル位の太さの丸太を横に並べて敷き自動車がぬかることなく通過するよう、エスチーバを作るのが常識であるが、チエテ移住地で初めて高価な厚板を使った、鉄道線路のようなエスチーバを見て驚いたのであった。これも請負人任せであったため、彼が儲かるように作った結果だと思う。

四　不思議な井戸の話

学校校舎を建てて、それを差し当たり入植者の収容所に当てるべく、井戸掘人に井戸を掘らせ、井戸水が湧きでた知らせにより、受け取って代金を支払い、後日入植者が水を汲んだら、すぐ井戸に水がなくなったのでよく調べると、井戸掘人は岩盤をダイナマイトをかけて掘り下げてもほりさげても、中々水が湧かないので、名案を考え、密かにラッタで谷川から水を運んで井戸へ注入し、井戸水が湧いたと事務所へしらせたに対し、係員が実地をよく調べず直ぐ受け取って支払いを済ませたことに原因があったので止む無く、入植者への水は近くの地区に入植している人のカミニョ

ンを雇って毎日水を運んだ話である。

五　突張り（エスコラメント）のある木造建築校舎の話

ある日、私用でサンジョゼ市街地へ行った機会に、新校舎を見に行って、建てたばかりの校舎にアロエイラの丸太棒で突張りがしてあるのに驚いたのであった。請負人が建物の必要とする所にそれぞれ筋違いを入れることを怠ったからであり、生徒が授業中に事故が発生しなかったのは幸であった。

六　アロエイラ材とセードロ材の判別の出来ない先輩

アロエイラ材は腐敗せず耐久力が強く牧場の柵用ラスカ（割木）柱には必ずアロエイラを使用するのが常識であるが、先輩が開拓初期に作った牧柵にはセードロが沢山使用されているのに驚いた。セードロは長くて七、八年したら土面に接した所が腐敗するから柵のラスカには向かないが、ラスカに割り安く、軽くて仕事が容易である。この木は主として家具類作成に使用されるのである。アロエイラ材が沢山あって耕作に不便なため、焼却している時代に、かようなセルカを作ったことも請負人任せであった結果である。近来はアロエイラ材が無いため、ユーカリーなどの普通の木に防腐剤を注入して使っている。

七　ルッサンビーラ支線廃線阻止運動

ノロエステ鉄道のアラサツーバとルッサンビーラ間の支線及び他地方の欠損続きの鉄道支線を廃線にする連邦政府の指令が公布され、それら癈線の代わりにアスファルト道路を建設してそれら

地方の便宜を計るとあったので、廃線反対運動を起こし、もし廃線の場合はペレイラ・バレットが一番関係の多い、アラサツーバ市へ繋がるよう、ミランドポリス向けアスファルト道路を設けてほしい希望を述べて日本人会の協力を得て郡官憲にも了解を取り付け、当時郡会議員の故田口耕三氏に嘆願書を書いて頂き、日本人会にお願けして多数の署名と嘆願書に添附する町の写真を撮って頂き、出来上がった嘆願書を郡長を団長とし、郡会議長、郡会議員、各種団体の長、それに部長の希望により私も加わって、陳情団を組織し、リオ・デ・ジャネイロ市へ行きブラ拓の顧問弁護士で当時下院議員であった、ドトール・ジョアン・バチスタ・ラーモス氏の先導によりカテテ宮殿に参上し、嘆願書を渡し善処方をお願いしたのであった。

それは一九五七年三月二十一日のことである。

また同じ趣旨の嘆願書をバウルーのノロエステ鉄道総裁にも陳情団が持参し、善処方をお願いしたのであったが、残念ながら時代の変遷に抗し難く廃線が実現した。

八　ペレイラ・バレット市の孤島化阻止運動

チエテ河下流のトレース・イルモンスにダムを建設して、チエテ河の水をサンジョゼ河に注ぎその水量をイリア・ソルテイラのダムに利用し発電力を増す計画が発表されてしばらくしてからトレース・イルモンスのダムの満水位標高を知ることができた故、ペレイラ・バレットの町にどんな影響があるか、ノーボ・オリエンテ橋と町の近辺の要所々々の高低を測った結果はこの橋の橋床が水面下九メートルに没するし、ブラ拓のサンジョアキンと中央

両牧場の殆ど及び産業組合の製綿工場も水没することが分かり、町が馬の背のように狭い幅の半島になるので、ダムの位置をノーボ・オリエンテ橋の上側に建設し、橋及び町とその周辺のシャカラ地帯が水没から免れる策を作成してその運動を起こし、日本人会の協力と、郡官憲の了解を得て、私が資料を提供し、当時の郡会議員故田口耕三氏に嘆腰書を書いて頂き、日本人会長小松盛幸氏にお願いして、多数の署名を取って頂き、又嘆願書に添付する町の写真を撮って頂き、出来上がった嘆願書を郡長を団長とし郡会議長、郡会議員、各種団体の長、それに郡長の希望により私も加わって、陳情団を組織して上聖し、州庁カンポス・エリゼオ宮殿でアデマール知事に手渡して、その善処方をお願いしたのであった。それは一九六四年十月二十二日であった。

その結果後日、ブラジル南部電力委員会からトレース・イルモンスのダム建設はまだ決定的でないと通知があったが、結局建設が実施しペレイラ・バレット市とチエテ移住地の重要な部分及びノーボ・オリエンテ橋が水没することになり、この橋の代わりに下流に新しい橋が架設されている。

九　殺すと脅迫を受けたこと

ベラフロレスタ事務所に務めていた時、井戸の水が少ない故、掘り下げを計画。ノーボ・オリエンテに住んでいる井戸掘に請け負わせたが、掘り終わった深さについて、彼は誤算か故意かいくら説明しても聞かず、実際より多くの賃金を要求するので、支払いをせず、喧嘩別れとなったが、後日彼はその妻を事務所に出頭させて支払いを求めたが、私は婦人とは交渉しないと断り受け付

けなかった。それから何日か後に、私を殺すと脅迫状を送って来たので、万一の場合は自分も発砲し応戦する覚悟で口径３８のレボルベルを終日携帯して歩いたのであったが、ずっと後に彼が事務所に現れて、妻がアラサツーバ市へ病気手当に行くために金が必要故、あなたの計算通りで良いから払ってほしいとのことで、支払いを済ませ、以後重いピストルの携帯から解放されたのであった。

十　井戸掘請負人を移住地外へ追放した

アレグレ区入植の木村徳蔵氏が、町の洋般屋の仲介で井戸掘人に井戸掘を請け負わせ完成したが、井戸掘が法外な賃金を要求するので困り、その解決をして欲しいとベラフロレスタ事務所へ哀願してきたので、私は現場に行き、事務所監督とショフェロにサリルを回させて金槌をもって縄たぶら下がりつつ、井戸の土質を調べながら下降し、土、ピッサーラ、軟岩、硬岩と監督に伝え、井戸縄に印をつけて底まで調べ終わり、地上に戻ってから代金を計算し、これで承諾すれば支払うし、しなければ支払わない、その何れの場合も君たちはこの移住地に留まることを許さない。明日早朝のジャルジネイラ便でノーボ・オリエンテに行き直ぐ橋を渡って移住地を出て行くよう宣言、その通りにしたのであったが、今考えると随分危険なことをしたものだが、何事もなく過ぎたことを神に感謝している。

こうしたことが可能であったのもブラ拓のバックがあったからである。

十一　文章化する

入植者が伯人カマラーダに仕事を請負わす場合求めに応じて、通訳兼仲介の役を務め、その結果を簡単に書き留めて両者の署名又は指紋を取って保管しておくと、後に論争になった時に、それをカマラーダに見せると、当然のことながら以外かつ容易に解決がつくのでそれを何時も実行した。

十二　日本の家族へ文通しない入植者

日本の家族からブラ名本部を通じて、入植者M君の家族の安否をたずねて来たので実状調査にM君を訪問したら、彼曰く「長い間塩とマンジョカの生活をしている状態なので、ほんとのことを書いて手紙を出せば父母が心配すること確実であり、と言って嘘のことを書けない故、自然手紙を書く気にならず、無沙汰している」との答えに非常に同情したのであったが、これと大同小異の生活をしていた家族が多数あったと思う。無のところに有をもたらす開拓事業の困難さを痛切に感じたのであった。

十三　青年の通訳に初老が

コロニアでは戦前は帰国か永住か、日主伯従か、伯主日従かと議論されたのであったが、その裏には諦めつつも、淡い錦衣帰国まで行かなくても、帰国の夢をもっていた為老いも若きもポ語を習おうとしない風潮があったため、戦争中急に日語の使用を禁じられたので、青年の通訳を初老の私がせざるを得ない状態になり、ある日警察に青年の訴えを通訳するため、私が同道し通訳をしたら神経質の署長は「何故日本人はポ語を習わないか」と詰問した

ので私は「日本人は早朝から夕暮れ遅くまで畑にでて懸命に働くので、その時間がないこと。また仮に時間があり習ったとしても、終日畑で働いて使うときがないため忘れがちで上達しないのだ」と言い訳したことがあったが、そうした戦時中の不便と苦労を嘗めたことと、戦後の日本の実情が解り永住の決心をした結果、ポ語の習得に力を入れたので、戦後は殆ど通訳の必要がなくなり、禍い転じて福となったのである。

十四　ウニオン区の青年団

戦前全伯的に産業青年連盟運動が盛んであった頃、ウニオン青年団は教育に関心をもち、カンピーナス東山農場の牧畜を視察することになり、週報に牧畜に関する翻訳文を載せていた私は引率者に選ばれて同行し、得るところが多かった。

十五　真に永住を決心して移住した人の話

殆どの移住者が錦衣帰国の夢を抱いて渡伯したように思われるが、戦後は急に永住の決心で移住して来たと言う人が多くなり奇異に思っていたが、真に永住の覚悟でチエテ移住地に入植した人のことを少し述べてみたいと思う。彼丁氏はS県人で日本出発にあたり村の氏神、祖先の墓及び住宅それぞれの土を大切にブラジルへ持参し、それを保存し、崇め最初入植した地区を守り続け、多数の退耕者家族の土地を譲り受けて、農業一筋に努力した結果、今日では一二五〇アルケーレスの土地を所有し、その高台に耕地の本部を定め、一三〇メートルの掘抜き井戸を設け、全てを電化し、夜はペレイラ・バレット市、アンドラジーナ市及びイーリャソルテイラ市の夜景

を楽しめる理想的なファゼンダを造成し農牧畜業に励んでおられ、チエテ移住地入植者中の模範的存在となっている。

十六　臣道連盟騒ぎ

臣道連盟が盛んに活動していた時、警察から私に君は臣道連盟に狙われているから、許可を出す故、ピストルを携帯するよう勧められその通りにしたが、当時は夕方まだ明るいうちから戸締まりをして、子供らが外で遊ばないよう注意した。加藤理事が何時もスエーデン領事館発行の日本のニュースを送って下さり、戦争が終わったら又移民を入れて頂かねばならないから、在伯邦人が騒ぎ、ブラジル官民の感情を損ねないよう、入植者に日本の実情を伝えて欲しいとあったので、その通りに伝えたのであったが、その為入植者が拙宅へ来なくなったことも思い出の一齣である。

十七　かち、まけに命を賭けた男

戦後ある日、U区の入植者のD氏が来宅し、君は認識派だそうだが、それは不都合だと非難した後は殆ど無言でいたが、紙と鉛筆を貸したまえとのことで、それを与えると直ぐ「勝負（かちまけ）は捨て置けかし、日の本はもろ人訓す時ぞ来にける。道保静海」と書いて私に手渡して帰って行ったが、それから暫くして彼は自殺したのであった。ほんとうに祖国を思っていたようであった。気の毒に思い彼の冥福を心から祈ったのであった。

十八　戦勝に土地二十アルケーレスを賭けた入植者

P区に入植して土地二〇アルケーレスを所有し、すべて都合よ

く恵まれていたN君は土地を売り払い家族を連れて日本へ帰ると言い張る故、私は日本の実情を説明し、それは誤った早計である。どうしても帰国したいのであれば家長の君一人が先ず帰国して日本の実情をよく調べ、その結果君の考えているように良かったら家族を日本に呼ぶよう、もし悪かったら君がブラジルへ再渡航すれば無難であると勧めたが、彼は私の提言を聞き入れず全財産を処分して家族連れで帰国し、日本で所持金を使い果たし無一文となり、途方に暮れて訪日中の彼の知人E氏に帰伯の旅費を借りて家族連れで帰伯後E氏の耕地で働いて負債を償却した、無分別な人もあった。

十九　逃げた豚は見つからず妙齢の娘さんを発見した話

ブラ拓は「すべては入植者の為」をモットーとして事務を執っていたためか、入植者から事務所への注文や苦情は勿論、家庭の問題から隣家との不和の解決まで事務所へ持ち込まれるので、断ることも出来ず、快く応対処理したのであった。

地区の境界争いは特に多かったが、ある日など古閑支配人からU区のK君の豚がM君の地区へ逃げたが、M君が盗んで放さないので帰ってこないから事務所が中に入って解決して欲しいと申し出があった故、君が行って解決してくれたまえとの命により、私はM家を訪れて諄々話を進めたが、警察権も何もない私で解決出来る筈がなく、その代わり素晴らしい発見。その家に年頃の娘さんがあることを知り、事務所に帰り支配人に事件の解決の出来なかったことを報告し、同時に同僚のN職員にその娘さんのことを話し、結婚を纏め、支配人に媒酌人になって頂き挙式した思い出

がある。

二〇　前代未聞の結婚式

一九四一年十二月二十六日以後は日系人の集会が禁じられ、必ず警察の許可を要する事になったが、実際には禁止そのもので絶対に許可してくれなかった。阿部支配人が拘引される時、会計係富沢君の結婚に媒酌人の役を務められないから君が代わって務めて欲しいと私に言われたので、新婦の家のサーラで新郎、新婦、結婚を纏めた小平君と形式の媒酌人の私の四人で結婚式、即ち三、三、九度の杯を交わし祝福し直ちに新婦を連れてペレイラ・パレットに帰ったのであった。挙式中新婦の両親及び家族の人々はコジンニャで静かに過ごしたのであった。警察が日系人五人以上の集まりを禁じていたことと、伯人労働者の密告を恐れたからであった。

二一　真面目で努力家は恵まれる

ペレイラ・バレットとペラフロレスタを繋ぐ幹線道路は重要な道施故、常に維持管理に努めたのであった。その修理に就労していた日系青年が真面目で永年の間よく働いてくれたので、彼に感謝する意味で「お嫁さんを世話しようと思うが、結婚する気があるかね」と尋ねたら彼は、「自分のような者に来てくれる娘さんがありませんよ」と答えたので、「もしあったら結婚するか」と尋ねたち、しますとの返事。私は知人を通じて探した結果、適当な娘さんが見つかったが、相手が道路修理人夫ではと両親が承諾しなかったが、今は道路修理をしているが、真面目で人物がしっかり

しているから必ず立派な家庭を築くことを保証するからと粘って承諾を得、新郎の出身県の県人会長に媒酌人となって頂き結婚させたのであった。彼は一男三女と授かり、三〇アルケーレスの地主となり、牛数十頭を所有するに至ったのであった。ブラ拓のモットー「すべては入植者の為」に沿って私は六組の結婚を纏めたが、顧みるとそうもたことに知識経験がないにも拘わらずあつかましく良く纏めたと自分ながら驚いている。

二二　愛妻の後を追う夫に苦言を提したこと

ベラフロレスタ事務所に勤めて居る時、ノーボ・オリエンテ市街地居住のH氏から自分の義弟が里帰りして婚家へ帰ってこない故、中に入って事を円満に纏めてほしいと手紙を頂いた。私は直で本人に会い種々話し合ったが結局「君が奥さんの後を追うから彼女は高くとまり君の下へ帰らないのだよ。関心を示さずほおって置きたまえ。きっと帰ってくるよ」と戒めたことがあり、今でも思い出すと随分乱暴なことを言ったものだと汗顔苦笑している。

二三　戦時中の一家心中

私は警察の検死に通訳として立ち会って、その哀れな現場を目撃して心から死者のご冥福をお祈りしたのであった。

徳島県人M家の場合は夫人の手による遺書だろうが、一家が死を選んだ原因は主人が貨物自動車に便乗して居て車の激しい揺れで振り落とされ、後頭部を強打して以来ものの判断が十分にできなくなった為、一家は生きる希望を失ったので全員冥土へ旅立ちするとあり、遺品の主なもの、特にシンガーミシンは生前色々お

世許になった隣家の小松盛幸氏へ形見として渡してほしいとあった。一家親子五人の屍は整然と年齢順に並んで、苦しんだ形跡はなく、全員が並んで寝ているように見えたが、各々の枕元にカネカが置いてあり、夫人は死後の見苦しい姿を防ぐため両膝を紐で結び合わせてあり、なおさら哀れを誘ったものであった。

佐賀県人、H家の場合は遺書がなく原因は不明だったが、ふだんから近所となりの交際が少なかった上に、戦時中日語を禁じられた不便から外出も殆どせず、不安焦燥の生活に耐えられずノイローゼとなり、一家親子六人が哀れな道を選んだものと推測されたのであった。

ブラ拓の挿話

①梅谷専務理事にジョナス・アルベス氏がルツサンビーラ対岸に所有していた広大な土地一六・六九〇アルケーレス（以下面積は全て地券面積である）を周旋し、その売買契約の成立に、協力かつ尽力され、同事務所から初代チエテ移住地支配人に任命された先輩輪湖俊午郎氏が、移住地開発開始後間もなく、その職を去られ、慌ただしく帰国されたが、それは輪湖氏からアリアンサ移住地が資金難のため、経営困難をしていることを知らされた梅谷専務は即座に二〇万円を融通されたのが、海外移住組合連合会の総会で否決される恐れがあった故、梅谷専務の立場を擁護する為であったが、不幸総会は理事長に平生釟三郎氏を選び、同氏は専務理事にフィリッピンとペルーで外国生活に経験の多い宮坂国人

氏を選び、宮坂氏はその補佐役にペルー時代の友人加藤好之氏を選んだ結果になった。

②私は一九三三年四月一四日に、ブラ拓トレスバラス移住地事務所から、チエテ移住地事務所へ転任を命ぜられて、着任後、同移住地に、山伐賃金不払い問題で山伐人夫が起こした大騒動のあったことを仄聞した。

当時はブラ拓本部の拓殖部長矢崎節夫氏がチエテ移住地の主任代理を兼任し、中島一男氏が移住地主任代理事務扱いを、拓殖係長を杉谷茂一氏がそれぞれ務めていた。一九三二年の出来事である。原因は事務所の拓殖係が山伐の進行状態をよく調べず、請負人の言を信じて、前払いをし過ぎた結果、山伐が終わって支払いに当り、請負人は金融がつかず、支払いに窮したが、山伐人夫はその理由如何を問わず、ブラ拓事務所に支払いを強要し、事務所は勿論のこと、職員住宅にも乱入し、乱暴はしなかったが、大言壮語を吐き関係者を軽蔑し困らせたのであった。その時の混乱状態を想像するにたる中島夫人簾子様が話された一言をここに参照すべく転載した。それは田中夏子様の著作句文集の一五四ページに田中友代様が書かれた簾女様の思い出の記に「山伐人夫が不穏な行動に出ようとしたことがあったが、主人の一大事と見るや、もってもいないピストルをさも持っているような格好をして、相手を威嚇し、ついには遁走させた」と言うことで、これは直接簾子夫人から伺った話であると載っている。

その結果は同年十二月一日に、ブラ拓トレスバラス移住地支配人の斎藤幸氏が、チエテ移住地支配人に転任を命ぜられ、チエテ移住地事務所人事の革新があった。

③伯国が連合軍に参加し、対日戦を宣言した故、ブラ拓の資産を敵国資産として没収されることを恐れたブラ拓は、地味の劣るアラサツーバ耕地三五・三三二アルケーレスとパラナ河左岸の二地区五六三アルケーレスと一・〇九六アルケーレスを地勢に応じて五〇〇アルケーレス以上の大地区に区分して、実費で一般に分譲した。

④ブラ拓の指導により、初期の入植者が栽培したコーヒーは霜害で失敗した故に、ブラ拓はコーヒー樹一株に対し幾許かの弁償として土地代から差し引いた。

⑤チエテ移住地からアラサツーバ市へ、自動車で行く場合、ミランドポリス市経由で遠かった為、その距離を短縮する目的で、アラサツーバ郡と協定して、チエテ河とミランドポリス経由アラサツーバ行きとの中間に、新道を建設することに決し、ブラ拓はイデアール植民地（ルッサンビーラ駅から一一キロの地点）のコトベーロ谷川からアグワ・フリーア川までの間一〇キロ余にアグア・フリーアの架橋工事を含めて責任をもって原始林中に道路を開設し、落成式にはブラ拓の現地責任者、ペレイラ・バレットの官民及びアラサツーバ市長その他官民多数でシュラスコを賞味して祝福した。私はこの工事一切の責任をもって当たり、コトベーロ谷川畔に二日二晩野宿したものであった。

⑥一九三八年一一月三〇日にノーボ・オリエンテ市街地がペレイラ・バレットの名称で同名の郡役所所在地として発令されたが、町には郡役所にあてる建物がなく、郡としても建築する資力がない為、ブラ拓では町の中心の土地に郡役所用建物を建て、土地建物ともに年賦払いの条件で市役所へ分譲した。この設計と工事施

工を私が担当した。

⑦人心収欖が上手で、選挙に強く、二回ペレイラ・バレットの郡長に当選したシーロ・マイア氏が、彼の当選には協力したが、郡の発展には殆ど尽くしていない一耕主Ｃｏｒｏｎｅｌ　Ｅｒｎｅｓｔｏ　Ｓｃｈｍｉｄｔの名を州立師範学校と州立中学校につけたので、不快を感じると同時に責任を感じて、当時チエテ連合日本人会会長小松盛幸氏と前会長村井利三郎氏に同道して頂き郡長マイア氏を訪れて、郡の主体となった、移住地を創設したブラ拓の功績を讃え、それを後世に伝えるため、ブラ拓の理事さんの名を、郡の永久的な施設につけてほしいと交渉した結果、バストスには宮坂氏の公園がある故、ペレイラ・バレットでは加藤理事の名をつけて頂くことに了解を得て、加藤公園が誕生したのであったが、その施設の完成は一九六九年一二月に次の郡長レオ氏によって完成、落成式には宮坂専務理事と加藤好之夫人が出席され、郡役所の主催で大祝賀会があり、官民多数出席して祝福したものであった。

ブラ拓と私との関係

岡山県庁耕地整理課に勤務していた私は県内のブラジル移住熱に罹り、県の海外移住組合へブラジル事情を聴きに言ったところ、係の人は、君のように測量設計ができ、農業土木建築に経験のある人を現地で必要としている故、バストス移住地事務所に勤務できるよう手配をしてあげる故、移住しなさいと勧められて決心し、

一九三〇年三月六日に県庁を依願退職し、単独で、同年四月二十八日神戸出帆の博多丸に乗船し、同年六月二十四日サントス港着。七月一日からバストス移住地事務所測量部に約一カ年勤務した時点で事務所に働いていた他の独身青年職員六名と共に、事務所の改革案を畑中仙次郎氏に提出したが、それが容れられなかった為、全員抗議辞職をしたのであった。我々は若さの元気と、正義感及び熱意はあったが、知謀にかけていた。私は辞職後上聖して、現在ブラジル日本文化協会のある場所にあった大正小学校の寄宿舎に寄宿、ポ語の夜学に通っていたが、サントス市の日本語学校の先生、元大阪商船の無電技師が在聖市の総額事館の要請により、上海事変の無電の接受に従事することになり、日語教師が欠員となり、その後任を勧めに来たが、年末に学校が休みになったので、ポ語習得と当国の習慣を身につける目的でリオ市に行き、海軍退役将校の家庭で約六カ月間働いた。一九三二年にブラ拓がトレスバラス移住地の開拓に当たり再び採用して下さり、同地の事務所で約一カ年勤めさせて頂いた後、一九三三年四月十七日にチエテ移住地事務所へ転勤を命ぜられた。爾来ブラ拓が閉鎖され、ジャミック移植民会社に引き継がれるまで二七年間チエテ移住地事務所で務めさせて頂いた。そして引き続きジャミック移植民会社経営のチエテ移住地事務所に八年間務めさせて頂き、合計三五年間チエテ移住地の世話になったので、同地は私にとって第二の故郷である。

忘れ得ぬチエテ

未原　久開

大蛇三題　その一

一九四二年六月頃のことである。この年三月、独、伊三国人の資産がすべて凍結され、ブラ拓もブラジル政府の管理下におかれ、チエテ移住地にもインテルベントールが来て業務をはじめていた頃である。

ブラ拓の阿部支配人がチエテ移住地を河から眺めたいとのことで、イーリャ・セッカの大岩の上で一泊予定で河遊びに出掛けた。比良さんと僕がチエテ橋から字賀さん（元字賀商店主）所有の丸木舟で河を下り、阿部支配人や富沢さん（元商銀チエテ支店長）、高橋さん（現高橋会計事務所長）、飯尾さん（元ブラ拓運搬部主任）、石井君等が自動車でベラ・フロレスタ経由でイーリャ・セッカの大岩にゆくことになった。

僕ら二人は朝九時頃チエテ橋をでて釣をしながら午後三時頃大岩についた。途中ビラカンジューバ、パクー、ピアーバ、ドラード等の刺身用の魚を釣り、イーリャ・セッカの上の瀬でカスクードを捕った。ここは大小の島々や瀬がたくさんあり魚の宝庫であった。

カスクード捕りは浅い瀬の岩の下に手を突っ込み、ザラザラしたヤスリのような肌を手づかみするのである。このカスクードの小物は主に大物釣の餌につかう。なかには三十センチもある大物が捕れる。これを後頭部に包丁で傷をつけ、首を前に折れば簡単

に腸と鎧のような皮がとれるので、それをブツ切りにして河水で味噌汁にすると特別にうまい。

イーリャ・セッカの大岩の上で南国の冬の斜陽を背に渦巻く大河の流れを眺めながら、高橋炊事軍曹ご自慢の調理で鮮魚の刺身と小葱を浮かべたカスクードの味噌汁に舌鼓をうち、たわいない雑談に一同時のたつのも忘れた一時であった。

その夜は大岩の上で焚き火にあたりながら、戦争の見通しやら今後いかに時局に対処してゆくかなど話し合った。

翌朝僕のピロットで丸木舟に二馬力半のモーターを取り付けて阿部支配人、飯尾さん、比良さんの四人でファゼンダ・グワナバラ側（移住地の対岸）をチエテ橋に向けて溯った。

丁度バーラ・ボニータ区辺の瀬にぶつかったので、一同丸木舟を降り舳先に錨綱をつけて先頭が阿部支配人、次が僕で、飯尾さんと比良さんは船の横で押しながら上っていった。

しばらく進むと突然先頭の阿部さんが立ち止まり、ものも言わずに顔色を失って震えている。なにごとかと思い彼の指さす足元を見ると、胴回り八十センチ位の黄色の肌に黒の斑点をつけた大蛇が岸の薮のなかから大木が倒れたようにのびている。岸の薮までは十五メートル程あり、頭は薮の中で見えないが、凡そ二十メートル位の生まれて初めて見る大蛇だ。

僕は「蛇だっ」と叫んで舟にもどり櫂を握った。比良さんも素早く櫂を取った。僕は櫂を大上段に構えて大蛇に近寄り打ち下ろそうとしたら、阿部さんが僕の腕に縋り付いて叩くなと言う。比良さんはと見ると、彼は余りの大きな蛇にただ呆然と櫂を握ったまま立ち止まっている。大蛇は人間たちの狼狽振りをよそ目に

悠々と薮のなかに姿を消していった。
皆が舟を離れたので飯尾さんが一人大声でわめきながら瀬の流れに乗って下り始めた舟を必死で停めている。僕と比良さんがあわてて舟にもどり、ようやく皆で瀬の上まで引き上げて岸につけた。
その後僕と比良さんとで大蛇の入った薮を岸の土手を登って捜したが、大蛇はどこへ行ったのか、その姿はついに見当たらなかった。

大蛇三題　その二

これも四十二年の十二月頃と思う。宇賀さんの丸木舟と紺野薫さんの丸木舟をサンチシモ川とチエテ河の合流点の小岩につないでいた頃である。そこに行くのに本多瓦工場の後ろを通ってボヤデイロ道に出、一面の草むらをぬけてサンチシモへ毎週慣れたペスカに通っていたのである。
その日もいつもの通り手島薫さん、村田さん、紺野薫さんが一足先に対岸にでかけた。
対岸の粘度質の砂置場は小指大の長さ十五センチ位のミミズが取れ、釣餌には持って来いのものだ。一足さきに丸木舟で出掛けた彼らが河中から戻ってきた。なにも言わずにただ指をさすだけである。何事かと思いながら砂浜に行って仰天。凡そ三十メートル以上の大蛇が五十メートル程の砂浜に長々と横たわっており、その上に大は五メートル位から小は一メートル位の蛇が何百匹も纏いついて、重なりくねっているのだ。
その不気味な光景はまるで絵にえがいた地獄そのものだ。

僕も比良さんも申し合わせたように無言のまま舟をもどした。その日は釣をすることもなく重い気持ちで帰途についた。

大蛇三題　その三

大蛇を見てから一ヶ月ほど経って、サンチシモの二艘の舟をチエテ橋の側に引き上げに行ったときである。やはり五人で出掛けた。静かな流れにのって釣をしながち橋へむかった。不思議にもその日は誰もなにも釣れない。当時のチエテ河の両岸はまったくの原始林で、静寂そのものの夏の日盛りであった。

岸の大木が川中に倒れていると、その枯枝にはかならず蛇がたれ下がっていた。釣れない河下りに飽きたのか、紺野薫さんが丸木舟の梶ををそのたれ下がっている蛇に向かってきった。頭上に蛇を被った手島さんはその瞬間手にしていた櫂で蛇を打ちすえた。蛇はひとたまりもなく紺野さんの膝に落ち、頭を水につっこんだ。紺野さんはすかさず蛇を手掴みにした。後尾にいた僕はすぐ舟を岸につけ、素早く錨綱を取った比良さんが蛇の尾をそれで括った。蛇は舟を巻こうと頭を水から上げるのを村田さんと手島さんが櫂で叩きつけながら二艘の舟は流れに乗って元渡舟場のあったルッサンビーラの砂浜につき、そこで五人で引き上げにかかったが、大蛇の力が強くて容易には引き上げられない。近くにいた伯人のペスカドールが駆けつけて来てようやく引き上げ、頭を叩いて殺したこの大蛇は六メートルあった。その大蛇のものすごく生臭いこと、何度河水で洗っても臭みがとれない。

いやな臭さから逃れたかった矢先、「皮をくれたら油を取ってやる」と言うペスカドールの申し出通りに後は彼にまかせた。

後日約束通り紺野さんがペスカドールからもらってきた油は二十リットル入りの石油カンに一杯あったが、臭みに懲りているので誰も見向きもしない。そのうち片山歯科医の義父の福井さんが、蛇の油は神経痛の特効薬と言ってもらいに来たので渡したところ、お礼にとビールを何本か頂いた。これは皆喜んで飲んだ。「蛇を捕ればセルベージャになる」と話題をよんだが、それっきりで暫く誰も釣りには行かなくなった。

釣の思い出　その一

香山氏よりペスカの思い出も書けと言われ、再び重いペンをとった。

一九三六年より七四年までチエテで暮らした青春時代には色々なことがあったが、やはりペスカをした頃が一番楽しかった。今は湖底にその姿を沈めたチエテ橋の下で、あのアーチ形の吊り橋の偉容を見上げながらのジャウ釣りや丸木舟でのピラカンジューバやドラード釣り。河底の岩の下に生息するエサ用の小物のカスクードは水に浸かって手づかみにするのだが、これも楽しいペスカのうちと思われる。あれもこれも等しく懐かしい思い出である。

時は一九四二年、戦争のためにガソリンの統制があった。そのためガゾジェニオ、所謂木炭車を計画し、僕が働いていたブラ拓運搬部のオフィシーナで試験的に二台造った。

一台はブラ拓用フォルヂンニョに、一台は三十八年型カミニョンで、カミニョンの方はルッサンヴィーラ駅の荷物運びでよく稼働した。最初に造ったフォルヂンニョは、試験用である。長距離走行試験でポルト・タボアーダまでペスカに行くことになった。

当時マット・グロッソ州のアパレシーダまで週一便のミスト(荷台のついたオニブス)が通っていたので道の事情は分かっていたから、五メートルの竹竿を十五本くくりつけて出発した。竹竿はオンゼの知人の竹やぶからもらってきたもので、火であぶって油抜きをし、それに古いタイヤを焼いて鉄鋼のアラメを取り出してテグスの代わりにした上、そのアラメで「縒り戻し」を作ってとりつけ、それに細い鋼鉄線で三センチから四センチの手作りの釣り針をたくさん作って携帯した。

一行は手島薫さん、紺野薫さん、村田さんと僕の四人である。名目は木炭車の実験であるが、実際はあまり自信がなかったし釣が主眼であったのでガソリンで走った。午前二時に出発。サンジョゼ河を渡った道縁のファゼンダでは、カンテラを灯して搾乳している。「ボン・ジーア」と挨拶すると牛乳を飲めと言って搾りたての生乳をそのままカネカに入れてくれる。

生乳は飲んだこともなかったのだが、好意を無にするわけにもゆかないので、鼻をつまんで飲む。なお何ヶ所かのファゼンダを通り、そこでも搾りたての乳をご馳走になる。

まもなく泥壁の家が二、三軒あるだけのエズメラルダの集落を過ぎ、ポルト・タボアーダの四キロ手前にあるポンテペンサ河に着いた。この河の橋はサンジョゼ河の橋同様木橋ながら高さ五メートル程の立派な橋だ。河幅は五メートル余りだが深い河であり、両側は鬱蒼とした原始林ではあるが中は割に歩きやすかった。

長い竿を引きずって霧のかかっている原始林の中を歩き、一同思い思いの場所に竿をとりつけた。霧が晴れてから分かったが、その場所はポンテペンサ河がパラナの大河に流れ込む合流点で

あった。
やがて霧が晴れだして視界がのびると、茶色に濁った水面が広がり、海のようなパラナの大河が目前に開けた。チエテ河の十倍もあるかと思われる河巾で、折から朝日が明るく照り始め、形容しがたい雄大な流れのほとりである。
先刻しかけた竿が突然大きく揺れだした。魚がかかったのだ。あわてて引き上げると四キロ級のピアーバが勢よく上がってきた。それを取り上げたとたん、二本目の竿が揺れだした。続いて三本目も揺れだした。
もう夢中である。ピアーバ、パクー、ピアパラと皆四、五キロの大物だ。
つづいて六キロ級のパクーが次々に釣れるは釣れるはで十二、三匹も釣ったろうか。ところが十一時頃からあんなにものすごく釣れたのにヒキが来なくなった。
ふと見ると今まで気づかなかった目の前にサッペ葺きの小屋がある。
モレーノの男が一人おり、ペスカドールとのことである。彼の話によると「今時間は釣れなくなる。あとは夕方しか釣れない」と言う。彼は棒で叩いて捕った魚に塩をして針金に通して乾かし、それを月二度船で集めにくる仲買人に売って暮らしているとのこと。まったく呑気な生活である。なお、このポンテペンサ河の三キロ上流に二アルケール程の池があり、そこまで魚が毎日決まった時間に水面に盛り上がるほどの集団で往復するとも言った。その機に河に入って棒で叩いて捕るらしい。しかし僕らは後日二度目に訪れた折り、引き網を曳いたが一匹の小魚も捕れなかった。

正午頃釣った魚を集めてみたら何と五、六十匹、小山のような大漁である。一行大満悦で釣りの成果を語りながら弁当を食べ、ポルト・タボアーダに向かう。この渡船場はパラナ河の川幅がいくぶん狭くなっている地点て、一千メートル位と思われた。それに太いカーボ・デ・アッソが張ってあり、バルサが連結されていた。バルサは大形で牛百頭ほど入る柵があり、自動車は柵の中にのせるが、人間は柵の外側に乗るようになっている。牛が主客というわけだ。

ポルトと言っても名ばかりで、薄汚いバールが二軒、あとは草原ばかりである。対岸に牛の税金を徴収する小屋が見える。牛の渡場だからマット・グロッソ州やゴヤス州の牛がここからサンパウロ州に入り、我々のきた道を通ってチエテ経由でアラサツーバのような消費地に文字通り牛歩を進めるわけだ。現在は道路事情も良くなったので、牛の輸送は専用のカミニョシに乗せて運ばれるようになっており、時代の移りを感じさせる。

あの日の木炭車試験と言うペスカ行は豊漁にわいたが、尚これにはおまけが付いた。

昼の弁当を食べ終えてポンテペンサ河の河口を離れるとき、岸の小枝に「流し針」をしかけておいた。これを帰途引き上げに立ち寄ったら、なんと、七キロの見事なドラードがかかっていた。

釣の思い出　その二

河幅十メートル位の増水期のサンジョゼ河で、これも木炭車試験にことかりて、宇賀のおやじさんに誘われて釣に出掛けた。

当時僕のソグロがサンジョゼ河に釣に行き、乗った馬が小川を

渡るときフイに立ち止まり鼻をならしだしたのでびっくり。見ると前方を泳いで川をわたっていた愛犬が突然水中に引き込まれ、目前でスクリーに呑まれたとの話を聞いた直後である。

宇賀のおやじさんの発言で「水中釣」をしようと言うことに決まった。

「水中釣」と言うのは、パンツ一つで錨綱と餌袋を持ち、水中で竿を縦にもって水の流れにそって歩くのである。おやじさんは昔土佐の「鯨銛師」とかで、河中へ潜ってみせる。

手島さん、村田さんや僕も負けん気をだしてついて行ったが、なにしろ増水期のサンジョゼ河は急流で、竿を立てれば流されし、泳ぐのが精一杯である。もう釣どころではない。

スクリーに犬を呑まれたソグロの話が生々しく思い出され、恐怖にかられながら流れに流れて三キロ程流され、マット・グロッソ街道のポンテまで来て漸く水から逃れた。もちろん小魚一匹も釣れず、一行クタクタに疲れてしまった。

帰りは薮のなかを、長い竿を引きずって疲労困憊、綿のように疲れ果てて帰りついた。

当時のペスカと言っても必ずしも釣れるとは限らなかったが、こんな不漁も今では懐かしく思い出される。

釣の思い出　その三

赤尾さんが四代目のジェレンテとして商銀にいた当時である。六〇年頃だったと思う。

商銀のジェレンテ会議がペレイラ・バレットで開かれ、当時アラサツーバの母店長をしていたチエテ出身の安岡さんが、ビリグ

イ、ビラッキ、グワララペス、ミランドポリス等のジェレンテやコンタドールを連れてくるので何か面白いことはないかとの話があり、それでは引き網で魚を捕ろうと言うことになった。

主役はペスカのベテランの池上さんが引き受けてくれて、サンジョゼ河の新ポンテ付近の瀬に養鶏用の金網を河巾いっぱい張り、三キロ程上流からも河いっぱい引き網を張って、皆で歌など大声で歌ったりわめいたりしながら魚を追って河を下った。

網の両端は下手をすると魚がくぐり抜けるから一番肝心のところなので、そこは慣れた池上さん一族がかため、網の中程は銀行の連中がパンツ一つになって河に浸かって魚を追う。下の金網のところも要所で、魚が逃げ出さないように、また落ち葉やごみが溜まって流れを止めないように注意しなければならないので、これも池上さんの一族がかためた。

僕は連絡係で金網組と引網組のスムースな連絡をはかった。連絡の途中で河をのぞくと、真っ黒になって魚群がくだっている。魚群は下に行くと金網があるのでUターンして上ってくる。上では大勢で引き網を張って歌を歌いながら棒で水を叩いてさわいでいるので又下って行く。

ドラードなどは見事にジャンプして金網を飛び越えるのもいる。なかには金網を破るのもおり、その度に応急修理をしなければならない。しまいには僕も裸になって勢子に飛び込んだ。

そのとき、名はわすれたが、ビリグイから来たジェレンテが途中の深みで何かにひっかかった網をはずしに潜り、しばらく経っても上がってこない。これは大変なことになったと僕が潜ろうとしていたら漸く上がって来て、網がはずれにくかったと言う。「そ

れにしても良くあんなに長くもぐれたものだね」との問いに、彼は水府流とかの潜りの達人だったとのことで一同驚いた。

引き網を金網から百メートル位の所でとめて、投網をうった。捕れるはとれるは、一網ごとに魚が小山のように上がってくる。みな歓声をあげて大喜び。次第に綱を狭めていき、投網をうちつづける。文字通り一網打尽である。四、五百キロは揺れたであろう。

町に帰り、赤尾さん宅で鮮魚の刺し身で一杯飲み、皆に土産にもたせた。池上さんは大量の魚をカマボコにして売ったと言う。

後日ポンテペンサ区の人達がこの話をつたえ聞き、大勢動員して出掛けたが一匹も捕れなかったと聞いた。僕等が根こそぎ捕ったためだろうか？

後　記

今では僕等が釣を楽しんだ所は一望の湖水になり、名物のチエテ橋もサンジョゼ橋も、ポンテペンサ河やポルト・タボアードもすべて湖底に沈み、二、三軒人家のあったエズメラルダが立派な町になった。五十年の歴史を振り返ると感慨無量である。

「オーゥ、オーゥ」という牛追いの叫び声を残して通っていった牛の大群が、町中を埃だらけにした昔が懐かしく偲ばれる。

入植初期の思い出

岡井　二郎

チエテ移住地を去って、はや今年で二十七年目になる。

遠い昔、子供のころ、家族とともに、日本から直来移住者の一員として入植して以来三十五年、その間いろいろと、この移住地のお世話になった。その思い出は多々尽きることがないが、中でも特に強烈な印象となって、未だに心の底に残っていることがあるので、その中の二つをここに述べて見ることにする。

その一

私たち一家の入ったロッテはバラボニータ区の一番下で、チエテ河寄りの低地に位置し、地味は肥沃であったが、マラリアの発生地であった。

私たちが入植した時には、既にブラ拓の手で、一ロッテ十アルケーレスの中、二アルケーレスだけは伐採し、不焼けながら山焼きもすんでいた。

確か、入植二年目のことであったと思う。

正月過ぎの雨季の真っ最中、ある日、請け負い仕事を探しにきた、サンターナという黒人の親方と二、三片言のブラジル語を操っていた父は、何思ったか、あっさりこの親方に今新しく、三アルケーレスの森林の伐採を請け負わせてしまった。

当時の私たち一家は、父母の外に二十一才の長兄を頭に、一七才の姉、九才の私と七才の弟との六人家族だったが、この時、幾

分かでもブラジルの事情を旧移民から聞きかじっていた母と兄は、雨季にやまを伐ることの無謀さを説いて、父の計画に反対してみたが、生来のワンマンな性格の父は何のその、

「わしはこの一家六人の為を考えてやっとるんじゃ。第一、現在のたった二アルケールだけの面積でこの大家族が食って行けると思うか。早かれ、遅かれ、いずれ耕作地を広げなければならぬ位なら、いまやっておく方が良い。いざマットを伐りたいと思っても、かなしいかな、都会育ちのわしらには自力で伐り倒すなんてことは、所詮できっこない。とすれば、幸い今、仕事にあぶれているカマラーダの手を利用すれば、伐採賃が普通より二割も安くあがるのだ。それが出来るのは、未だ日本からもってきたお金が多少とも残っている今のうちだけだ。わしはこのまま手を拱いていて、若し家族の者でも病気になり、ついにはジリ貧になって、日本からの残金が底をついたときのことを考えると堪らないのだ。それよりも、いっそのこと、後で少々苦労するとも、伐採費の都合のつく今、思い切って畑を拡張してしまおうと言うのだ」と。

さて、それからが大変だった。

いざ請け負い仕事が始まり、十人余りのカマラーダが入り、下草刈りの時分はよかったが、十数日たって、いよいよ両手で一抱えも二抱えもあるペローバの大木が、雨上がりの合間あいまに地響きをたてて倒れる音がこだまし始めると、近所の人達は驚いた。

「こりゃどうだ！　、事情を知らない新移民が、まんまとカマラーダに騙されてこんな雨季の最中にマットを伐りよる。気の毒だ。なんとか止めてあげねばならん」

と毎日のように、次から次と、何人も、組内の人は言わずもが

な、遠く谷川を隔てた向こう側の地区の人たちまで、わざわざ、一キロメートルも、それ以上もある所から、本当の親切心で、仕事の手を止めてまでして父のところへやってきて、一同口を揃えて、いかにこの雨季に森林を伐採することの無謀さ、又それがいかに不得策きわまることであるかを例を挙げて説明し、果ては、そのために蒙るべき後日の損失被害は、到底伐採貨の割引高などの比ではなく、その数倍、あるいは十数倍にも匹敵するやも分からず、またそれが今後の農業経営にどれだけ支障を来すことになるやも知れないと、懇々と説得に努めたが、根が頑固一徹の父は、

「いや、お気持ちは有り難いが、もう仕事も大分進んでいることだし、それに支払いも少なからざる分も既に済ましてしまっていることなので、何卒この度は悪しからず・・」

と人々の諌言を容れることがなかった。

後日、私たち一家のものは、これらの人々の意見がいかに正しかったかを身をもって思い知らされるのだった。

問題の伐採は二カ月ほどで済み、それから数カ月の雨季を経て、七月ころの乾燥期を待って火を入れてみると、全然焼けない。それも道理。

永の風雨で、ありとあらゆる可燃性材料、例えば倒された木々の枯れ葉や小枝などが、叩き落とされていて、べったり地面にはりついている状態で炎が続かない。そのうえ、伐採後半年もたっていることなので、切り株という切り株からは、青々とした新芽がこの時とばかり、一斉にふきだしている。それが一層火勢のひろがりを妨げるのだった。

仕方がないので、家族総出で、再びロッサし直し、部分的に材

料を集めては、何回も何回も火を入れながら少しずつ整地を初めていったが、これが又容易なことではなかった。何しろ火の通っていないやまである。
無数に錯綜した木々や枝々の中での仕事である。捗らないこと夥しい。
普通、三、四カ月で出来上がる三アルケーレスの整地を、丸二年かかってしまった。しかもその時の後遺症としてはまだあった。
それはマットの伐採後、火も入れずに何年間も荒れるに任せておいたことは、棉作の最大の害敵たるサウーバ発生に最高の条件を提供したらしく、いざこうして、苦労の末、整地して棉を植え付けてみて、その夥しい数のサウーバの駆除には、実に一家全員に、はた又経済的に、ほとほと痩せる思いでくるしんだものであった。
やはり、先人の言は正しかったのである。
それにしても、いま思うと、あのちょっとした手違いが元で、一家はしなくてもよい、とんでもない余計な苦労をしてしまったことになる。
六十年も前の、チエテ移住地入植後まもなくのことであった。

その二

入植五年目、私達一家は義兄の勧めもあって、それまで住んでいたバラボニータ区の下にあったロッテから引き揚げて、第一市街地の近くへ移って来た。
今度のロッテは町や病院に近く、地理的には優れていたが、他面、前のロッテに比較すると、地味の点で劣っていて、棉作にい

たっては四割位の減作だった。
勢い、栽培面積を広げる必要に迫られて、兄亡き後の私と弟は学校へも行かず、父を助けて一生懸命、畑仕事に精出すのだった。とは言え、未だ欲のない、十一になったばかりの弟が、時によると、エンシャーダを手にしたまま、長い間呆然とあらぬ方を眺めていたりするのを見て、私は兄貴ぶって、それを注意してやることが往々あった。
この時分のことだった。父は私達兄弟のため、貧乏の中から発奮して、日本から「早稲田中学講義録」を取り寄せてくれた。
全十八冊が机の上に積み上げられたときは、さすがに嬉しかった。
やっぱり父には偉い所があると思った。私はこれで、たとえ、気の合った友達が居なくとも、またスポーツ一つできなくとも、この講義録で勉強できるだけで満足だと思った。
引っ越してから、二年位経った頃だった。日頃、町で顔見知りの伊木実信という青年が或る夕方、自転車で私の家を訪れて来た。この人の親元も、町の近くで農業を営んで居たが、本人自身は野良仕事は性に合わないからと、若いころから町へ出て、呉服店の番頭として働いて居た。
この伊木さんが私の父に語ったところによると、最近、この町にもめっきり伯人が増えて来た結果、それらの人々との接触の度毎に痛切に感じさせられることは、この国の正式な言語を一刻も早く習得することの必要性であると言う。我々は縁あって、この国へ移って来た、とすれば、その日常生活は無論のこと、来るべき将来への雄飛を考えても、絶対にこの国の言葉の習得を疎かに

出来ない。その意味で自分は最近になって、町の教育方面の有志といろいろ相談し、何かと、これまで種々の事情で正式に学校教育を受け得られなかった不遇の人達の為に、新しい道をひらく方法はないものかと、研究した結果、今度、町の小学校長の指導の下に、私立ではあるが、夜学の塾を開くことが可能になったと言うことだった。その入学には齢の制限がなく、卒業に際しては、直々、サンパウロ州教育局が課する検定試験に合格すれば、正式の初等教育終了の免状が下付されると言う。

ただ、この場合、塾の運営は私立であるから、毎月の月謝で賄い、その開設には、最低三十人の生徒を集める必要があった。

こういう訳で、塾の創立委員の一人であった伊木さんが、私達兄弟をその候補者の中に加えようと、父に勧誘しに来たのであった。

父は話を聞いて、趣旨に賛同し、早速私達を呼んで、諾否を確かめた上、それに参加することになった。

私は嬉しかった。夜学にしろ、曲がりなりにも学校に行けると思うと、ワクワクした気持ちになったものだった。

只、気の毒なのは母だった。それでなくとも、乏しい財布の中から家計のやり繰りをしている所へ、毎月二人分の月謝は相当な痛手に違いなかった。

今から思えば、この当時の家計が一番苦しかったようである。子供心にもそれがわかっていただけに、毎月の月謝の収納日に、母にその金額を請求するのは気がひけて、つらい思いをするのだった。

夜学は夕方の七時から十時までで、その間に中休みが一回、授

業は小学校の教室で行われた。生徒はほとんどが商店で働く店員だったが、クラスには五、六人の伯人も混じっていた。私は最初のテストで、二年生の組に編入させられた。初めて教室に入った時、その明るさに戸惑った。
長年、田舎の薄暗い石油ランプの下で暮らし慣れて居た私には、突然二百ワット二個の電球の下に晒されるのは、あまり眩しすぎたが、それでも、町はいいなぁと思ったことだった。
最初の一年間は女の先生だった。二十五、六になっていただろうか、西欧系で小柄ではあったが、金髪の色白い、丸顔の美しい人であった。
愛嬌があって皆に好かれ、こまめに教室中を走り回って教えて居た。
生徒達は、彼女のことを先生と呼ばずに「ドーナ・マリア」と呼んでいた。私はびっくりした。それまで日本の学校で、生徒が教師のことを先生と呼ばずに、その人の名前をじかに呼ぶなぞとは考えることも出来ないことだった。ドーナとは、一般に女の人に対する敬称で、名前はマリアと言うのだった。こういう所がやっぱり日本との違いだなと思った。
このドーナ・マリアは私に対して大変気を配ってくれた。
読み方の時間などに、ブラジル語に慣れない私が、変な発音で読むのを聞いて、意地の悪い伯人の生徒がげらげら笑って、野次などを飛ばすと、ドーナ・マリアは私の肩をもって、その生徒にむかい、
「そんなに笑うものではありません。ジロウは一生懸命読んでいるのです。それにあなただって、若し日本語を読んでごらんなさい。

どんな読み方をすると思いますか。ジロウにとってはポルトガル語は外国語なのです。当分の間、慣れるまでは、仕様のないことなのです」と、咎めたものだった。

授業中、私がもたついているようなことでもあると、すぐに飛んで来て、先生の頬っぺたがくっつくように近々とのぞき込んで、手に手をとるようにして教えてくれるのだった。

そんな時、未だ初心な十五才の少年だった私は、先生の艶やかな顔や、かすかにただよってくる香水の匂いやらに圧倒されて、どぎまぎし、せっかくの先生の説明も、ろくに耳に入らなかった。

ドーナ・マリア先生は、それから二、三年経って、その頃には珍しい国際結婚を選び、産業組合の事務員であった一人の日本人青年の所へ嫁いで行った。

一九九五年二月記

チエテ移住地の追憶

八木　修平

私がチエテの第三移住地、サンジョゼ区に入植したのは、未だ十三才と何ヶ月かの、青二才にもならない年頃だったので、ことさら珍しいことも、面白い思い出も少ないが、当時の思い出を目をつぶりながら、思い出しては、香山さんの要望にこたえ筆を運んで見た。

時は昭和十年（一九三五年）十一月三日、昔の明治節の昼頃に現地の収容所についた。サンジョゼの町は第三市街地と言った。第一チエテ（ノーボ・オリエンテ）の北方に在り、ウニオン街道、イニューマ街道、ノーバ・イニュウマ街道を通り、又原始林の中を数キロ過ぎた所に、十軒あまりの住宅と、二～三の商店があったで。

ブラ拓の第三事務所は中央の十字路の西南の隅に在り、東北の角には、白石某の二階屋が在り、「玉ノ井」とか「玉の屋」とか言っていた。商売は何をやっていたか、少年の私には解らなかったが、女将さんはバカにハキハキした人だったと思う。その道を隔てて正面に、菅野さんと言う、福島県出身の方が雑貨商を営み、女婿はなんでも競馬の騎手だったと言われていた。

移民収容所は、菅野商店の南方八十メートル位の所に、平飼鶏舎の真ん中に、通路をつけたような、板囲いの長屋で、家族家族の仕切りはなかった。雑魚寝の長屋であったので、隣の睦言も寝言も、夫婦喧嘩も悪口もよく聞こえた。名古屋市出身の、中村さんと言う学士さんの家族も、すぐ隣でこんなはなしもされていた。

「ブラジルて珍しい所よ。畑の中に小さな蟹が沢山いて、通ると足や手と言わず、アソコまで入り込んで食いつくよ」

「日本の蟹は、這うだけで食いつかないのにね」

向う隣にいた紺野さんが笑いながら、

「中村さんの奥さん、そりゃぁ蟹じゃないよ、「ダニ」だよ、草ダニだよ。それに食われたら、すぐヨードチンキを塗っておかないと、膿むからね」

と教えているのも珍しかった。

ブラ拓が代耕して蒔いてあった、稲や棉の収穫の済まないうち、家長だった兄健次が、重い脚気にかかり、寝込んだ為に、兄は農業を続ける自信を無くしたためか、ブラ拓チエテ本部に働いていた。辻川さんと言う同県人の方のお世話で、兄はチエテ産業組合に就職した。私は高等小学校も出ていなかったが、兄は大学の経済科を出ていたので、文句なく職員にして頂けたみたいで、私たち一家はノーボオリエンテの、旧移民長屋の一室を借りて住みながら、兄は同長屋の隅にあった、組合本部の机をもらって、働き始めた。

仕事を失った私は、組合の兄の先輩の小川敬太郎さんの世話で、新妻さんと言う、福島県出身の方の所で、農業見習いをすることになった。

新妻さんの奥さん静子さんは、敬太郎さんの妹さんで、隣の家であった。

敬太郎さんには弟さんが居られ、当時村でも珍しけ大学生であり、サンパウロより帰省したら、必ず大きな声で読書している声が、はっきり印象に残っている。その弟さんは、後日コチア産業組合の、上席職員になられた、小川靖夫さんであった。

三年したら、必ず日本に帰すと約束して、親の元から連れ出された私だから、当時兄が二百五十ミルの月給とも知らず、「約束だから、是非日本に帰せ」と、随分解らぬことを言って、兄を苦しめたが、兄はどうすることも出来ず、「ではお前が働いて帰れたら、帰ってよろしい」と許してくれた。私は農業見習いを止め、新妻さんの所を出して頂き、ノーボオリエンテの町で、発電所を経

営している、木本保さんの所に、働かせてもらった。木本さんは石川県の出身であり、熱心なクリスチャンであり、俳句も作られた。俳名は「子雷」であった。私も教会に行ったり、町の俳句会に誘われたりして、俳句を教わったのも、子雷さんの影響が多い。その予雷さんが、祖国日本の二千六百年記念に、永住帰国したので、発電所はブラ拓経営に移り、ブラ拓支配人の古関徳弥さんが、発電所の社長になられた。しかし程なく古関さんは、日本の陸軍の軍属になられ南方方面に転職され、その輸送船が撃沈され、船と共に南海にて亡くなられた。又木本保さんも石川県にて、留守中家族全部が米国の飛行機の、直撃弾で亡くなられた。私たちは戦時中も、ボイラーを焚いて電気を町に送って居たが、或るとき次のような面白い事件もあった。

月末になると永年のしきたりで、発電所の従業員が、非番になると替わり番に、電気代金集金に町を回っていた。その日は私が昼の非番で、そちこち町を歩き、昼過ぎ郡役所に廻り、その月の電気代金の請求書を出したら、会計係が突っけんどんに、

「今日は金がない」と言うので、

「金額が少ないので支払って頂きたい」

「今日はない」

「では何時あるのです？　」

「知らん、そんなことは」

「郡役所がこればかり払えぬとは変だ」

「無いものは無い、帰れ」

「じゃぁ電気を切っても良いか」

「切れれば切れ、ジャポネース」

と言いあって私は発電所に帰って来た。
間もなく警察署よりグワルダがきて、
「ヤギはおるか」
「俺が八木だ」
と出て行くと、署長がお前を呼んでいると言う、
「何故だ」
「俺は知らない」
「よし、じゃあ行こう」
そうして私は警察署に行ったら、署長が出て来て、
「お前がヤギか、お前は郡役所の悪口を言ったそうだ、今夜はカデイアに入れ」
「俺をカデイアに入れたら、電灯は点かんぞ」
「他の人に点けろと言え」
「言うから紙とペンをくれ。手紙を書く」
警官が紙とペンをもって来たので、早速私は日本語で「今夜は絶対に電気を点けるな。何を言われても、八木が今夜の当直だと言い張れ」
と書いて発電所に持って行かせた。発電所は夜が来ても、電灯を点けなかった。戦争中ではあり、闇になったので、町の中は騒ぎ始めている様子だし、警察も少し不安になったのか、私を呼び出し、
「おいヤギ、電気はどうした」
「俺は知らぬ、俺をプレンデして、電気が点くか、俺が今夜の当直だ」
とふてくさって言うたら、

「帰って電気を点けろ」と言うが、私は嫌だと繰り返し続けたが、午後の九時頃になった。この辺が潮時だと思って、発電所に帰り、電気を点けてやった。懐かしいチエテの思い出の一つ。

発電所に働きだして、四年かかって、とうとう日本に帰れる船賃が出来た。喜んで大阪商船に、何時の船に乗れそうかと、手紙を出したら、日米の雲行きが危なかしいからちょっと待てが、一ケ月もせず、真珠湾の空爆となり、帰国は又駄目となって終わった。

日本に帰れないで、金をある人に預けたり、ある友人に貸したりしたが、戦争が終わっても、どちらも返ってこなかった。

戦争が終わり、二年経って日本から手紙がきた。終戦の年すでに母は死んでいた。母も死に金も消えたので、きっぱり帰国は断念し、好きだったMさんと結婚しようと、Mさんの両親に申し込んだら、娘は未だ一七だから、二年程待ってくれと言われたので、体なおしの為にアリアンサの弓場農場に、農業実習に行った。その留守にMさんは、ブラ拓の職員Y君と結婚してしまった。

私はチエテに帰るのを諦め、アリアンサに留まったのもその為である。

後日Mさんに、何故私を待ってくれなかったと話したら、私の申し込みを全く知らなかったと言われた。

若い日のチエテの思い出の一幕、おわり。

一九九五年記

思い出あれこれ

吉井　巌

何かチエテ時代の思い出を書いてみないかとの誘いをうけて、思いつくままに綴ってみたいと思う。

私たち一家は昭和八年四月に入植した。つまり一九三三年リオデジャネイロ丸で渡伯した。

「おーい、皆集まるのだ」と父が号令をかけて家族全部あつまった。

ちょうど昼下がりの時間だった。何事かと思うと写真屋さんがきていて旅券の写真を撮るためだった。当時九才であった私はただ珍しがって着のみ着のまま撮った懐かしい写真が今も残っている。父は既にブラジル行きを決心して手続きをしていたのである。当時小さな町工場を経営していた父は昭和初期の不景気に抗しきれずブラジル行きを選んだのである。

四十五日の長い航海を無事に終えてサントス港につき、三日三晩ノロノロ汽車にゆられ、やっとの思いで着いたのがルッサンビーラ駅であった。もう夕闇もせまるころであった。カミニォンが迎えにきていて荷物とともに乗り込みチエテ河のバルサに着いたのがもう墨を流したような暗い夜だった。不気味に光るチエテ河の水面、川辺に無数に飛ぶ蛍の群れ、いまでも鮮明に思い出す。A区とイニューマ区の境に収容所が造ってあったので一応そこへ落ち着いたが、飲み水もない不便な所であった。

翌日から天秤棒で水を運び食料調達に一生懸命であった。幸いに

先着移民の好意でたすかり、ブラジルの生活が始まった。
日本で購入してきた土地を開拓すべく、先輩の土地の一隅を借りて仮小屋をたて、そこを本拠にして開拓がはじまった。入植当時の苦労と失敗は共通の出来事であり、記録に値しないけれど、当時ブラ拓が一応道もつけ電話もあり、初期の植民地としては立派な設備を整えていた。いま考えてみるとブラ拓もよくあれまで設備をしたものと感心させられる。
小学校はA区の中央にあり、桧山先生が教鞭をとっておられた。熱心なクリスチャンでよく賛美歌を歌わされたものであった。現在の齢になっても賛美歌が歌えるのもこのころの影響であろうと思っている。
特に記憶に残っているのは私の少年時代の出来事であったあの松本先輩の事件である。いまさら細かく書くまでもなく、当時のブラ拓の指導者たちの警察との交渉がどんなに大変であったか想像にあまりある出来事であった。
一九四一年第二次世界大戦がはじまって以来チエテ移住地は比較的平和なところであった。多少警官の圧迫はあったけれども特筆することもなく終戦を迎えたのである。
終戦直後だったと思う、当時養蚕国賊論がおこり私の家の近くでサッペ小屋が夜焼き打ちにあい、夜天も焦がす炎を今に忘れることができない。だれが火をつけたか知らないけれど、いま健在だったら一人どこかで苦笑している人がいるのではないか。
終戦後土地の疲弊とブラジル永住の目的から移住地の人達はクモの子を散らすように全伯に散っていった。私もその一人で、流れ流れて行き着いたのが現在住んでいるウムアラマ市である。も

う三三年住んでいてここが墳墓の地であろうと思っている。
いつも思い出すのは遠いチエテ時代のことであり、個性豊かな先輩の人達である。この機を利用してチエテ在住当時お世話になった人々に厚く感謝するとともに、在天の先覚者の霊に心から合掌するものである。

一九九五年十月記

チエテ移住地の追憶

古川知則

チエテ移住地の思い出について、と言うことであるが、私がチエテ移住地に住んでいた期間は、叔父が日本に遊びに帰ったおり私一家もつれられてブラジルに移住してきて、モジアナ線のコーヒー園で一農年働き、後チエテ移住地に雑貨店を経営している叔父に呼び寄せられ、両親とともに中央市街地の近くの製糖工場付属のカンナ園に働くようになり、そこで過ごした数年間にすぎない。と言うのは日本から来たばかりの私はブラジル語をおぼえる必要があり、幸い義兄がアラサツーバの町でバザールを経営していたので、この義兄の店を手伝いながら夜学に通うことになり、両親のもとを離れアラサツーバに住むことになったからである。一九三三年の頃であった。

その後両親はカンナ園の仕事をやめ、市街地近くのラランジャーダ区に少しばかりの土地を購入して米作りを始めるように

なり、年に何回か私も手伝いに帰ったものである。
当時アラサツーバからチエテに行くには朝八時頃、薪を焚いて走る汽車に乗り午後ルッサンビーラ駅につき、客を待っているガタガタのジャルジネイラ（オニブス）にゆられバルサでチエテ河を渡って行ったものである。現在トレース・イルモンスのダム完成にともない水没してしまったチエテのシンボルとも言うべきノーボ・オリエンテ橋は起工して間もない頃であった。
私一家がチエテ移住地に入植した一九三三年頃、ノーボ・オリエンテ市街地にはすでに雑貨店、理髪店、バール、バザール、ホテル、その他種々の職業にたずさわる店や住宅がたち並んでおり、赤土の街路は風が吹けば赤色の埃を周囲に撒き散らしていた。
当時の記録を見ると市街地の住民は四十五家族であった。
叔父の家に行ったある日、メーザに魚の切り身のような真っ白な肉が並べられてあり、よく見るとビタビタ動いている。そばにいた叔父が、
「お前、この肉を知っているか。これはジャカレといって鰐の肉なのだ。おいしいのだ。友達がカミニョンで川辺を走っていると道の真ん中にいたので、殺して持ってきてくれたのだ」と言う。その晩このジャカレーの肉を食べたかどうかは記憶にない。
私がアラサツーバの義兄の店に働き始めてから五年経ったある日、チエテの叔父からイデアール植民地に店を出すから帰ってこいということになりチエテに帰ることになった。
叔父の話では、お前の両親もいつまでも百姓をしていては苦労が多かろうと思うので、店を出してやるがら親子三人でイデアールへ行って店をやれと言うことである。このようなことで一九三

八年私一家はイデアール植民地へ移転じたのであるも　この植民地はチエテ管轄区内にあり、ルッサンビーラ駅より十一キロメートルの地点にあり通称オンゼと呼ばれている。当時は原始林続きであり、その原始林の中にただ一本の道路がつけられていた。爾来十四年間、アラサツーバ市に移転するまでこの地に住みついたのである。

私一家が着いた年、開拓六年目というイデアール植民地では二十数家族の日本人家族が入植していた。中央区ともいうべき場所があり、店はそこに建てられていた。既に飯塚さんの雑貨店があり、村の人達に便宜を図っていた。

交通は日に一回アラサツーバ～チエテ間を往復するジャルジネイラ（バス）と私の店の隣に住んでいる仲買、運搬業の並木さんのカミニョンに便乗させてもらうだけである。

開店して初めて知ったのであをが、この村の人達は、買い物の支払いは六カ月毎の収穫払いにしてほしいと言うことである。そんな習慣らしい。しかたがないのでお客さんに通帳をだして買って頂くことにした。

現在では考えられないことであるがインフラソンのない当時、生活もノンビリしていたと言うわけである。お陰で店はよく繁盛した。

さて雨季になり毎日雨が降り続くと大変である。土の道は流され交通は完全に途絶される。そうなると店は困るのである。売る品物の供給ができないのである。ある時などファゼンダの牛車をたのみ一日がかりでチエテの店から品物を運んだこともある。

第二次世界大戦が勃発し、静かな植民地の外貌は一変し、混乱

に巻き込まれてしまった。

日本語の禁止、集会の禁止、日本語のレコードや書籍は警察に持参せよ等、村は重苦しい空気に包まれてしまった。加えて昨日まで一介のカマラーダであった男が、警察のインスペトールになり、日本人の近辺をかぎ廻り、店にくる人達も買い物を終えると逃げるようにして帰って行くありさまである。

そんなある日一台のカミニョンが警察官を乗せて現れ、日本人の家々を日本の国旗を出せといって探しまわった。そんなものあるはずがないので、何かと文句をつけ中央区の日本人の家長たちを乱暴に警察へ連行し、カデイアに入れてしまった。

後で話を聞くとチエテのある場所で、日本が勝ったといって日の丸の旗をたてて祝ったと警察に密告した者があり、その余波を受けたのである。戦時中はこれに似たような事件はいずこの地にもあったのである。

あのいまわしい戦争も終わり、やっと平和にもどると何か娯楽を求めたいという気持ちが人々の間に広まり、俳句を始めようではないかという話が持ち上がり、早速アリアンサの念腹先生のもとへ走りご指導を請うと、喜んで承知して頂き、万城目金之助氏を指導員として来て頂くことになり、ここにイデアール俳句会が誕生したのである。会員は十五、六名でその殆どが夫婦である。

最初月一回の句会であったが、一回ではものたらなくなり会員の各家庭を回り持ちということで月二回となり、みな熱心に勉強した。

一九五一年念腹先生のご希望で当イデアール俳句会主催で奥ノロエステ俳句大会を開催することになり、七十数名の参加者のも

とに盛大に行われた。
　このイデアール植民地に店を開けて以来、いつの間にか十四年が経過した。子供達も段々と成長してきて、町の学校に入れる必要を感じ一九五二年、永年住み慣れたイデアールを離れ、アラサツーバに移転、そして現在に至っている。
　イデアール植民地も最盛期には五十数家族を数えるほどであったが、次々と他地方へ移転して行く家族が多くなり、現在では十家族に満たない日系人が住んでいるにすぎない。

一九九五年十月記

サンジョゼ小学校時代

小野寺　郁子

　私は、一九三九年の年末に、アルゼンチナ丸の船中で誕生日を迎え、九才になりたてでチエテ移住地、第三のピラカンジューバ区に両親に連れられて入植した。
　丁度、四〇年の元旦だったので、同県人の鶴田さんが、「よう来たなも」と、名古屋弁で迎えてくれて、焼いた餅と、胡瓜もみをもって来てくれた。サンパウロの収容所での油飯とフエイジョンに辟易していた私たちには、その饗応はことのほか嬉しかった。

こうして異国の生活が始まったのであるが、何しろ子供だったので移住地の詳しいことは知らない。また、両親が経たであろう、様ざまな苦労も、常にその庇護の元にあったので、遠い波音のようにしか感じなかった。

ただ、グルッポ四年まで通った学校時代のことは、あざやかに印象に残っている。

お世話になっていた鶴田さんの所から、出来上がった我が家に移って間もなく、私はサンジョゼの学校に入学した。当時は、まだグルッポ・エスコラールではなく三年生まででしかなかった。後に校舎が増築されて、私が三年生になった時から、グルッポ四年までとなったのである。

グルッポに上がることは、当時の学童には、中学生にでもなるように晴れがましいことだった。

さて、ピラカンジューバ区の一番奥の私の家から、第三と呼ばれていたサンジョゼ市街地の学校までは、約七キロあった。名古屋市で生まれ、都会育ちであった私には徒歩で二時間程かかる道の遠さと、日盛りの帰途の暑さとは相当にこたえた。けれど遅れると一人ぼっちになるので、息を切らしながら一生懸命に、歩き慣れた友達のあとにくっついていった。

ある日、少し風邪気味で、足の運びが鈍くなっていた私に、先頭に立っていた貞ちゃんが振り返って、

「グズグズしていてオンサに喰われても知らんよー」と言った。

ピラカンジューバ区と隣のポチー区の境に少しだけど原始林が残っていた。雨の降った翌朝など、その森の中の道には爪痕もするどい野獣の足跡が残っていたりした。そんな時、学童はいっせ

いにアルミニュームの弁当箱を取り出して、出来るだけ、けたたましくフォークで叩きながら、声の限りの奇声を上げて森を駆け抜けるのだった。つまり獣がびっくりして逃げるようにである。誰が考え出したのか知らないけれど、子供の精いっぱいの智慧だったのであろう。獣が驚いたかどうかは知らないが誰も一度も襲われたことはなかった。

帰途に道端のマモンの樹の下で、よく休んだことは以前に「コロニア詩文学」誌に書いた。子供は環境に順応するのが早いので、そのようなことにもやがて慣れた。そして、森の中のコッキンニョも、ジャトバも、どの樹のが一番甘いのかよく知っていた。

ポチー区のなかば程の所に広い桑畠があった。季節になって黒く熟れた実が枝々にビッシリつくと、私たちはそこを素通りできなかった。皆、帳面を一枚剥ぎ取ると、クルクルと巻いて漏斗のような形の紙コップを作り競って実を取り溜めて、歩きながら食べた。そして紫色に染まった手や口をお互いに笑いあって、学校の近くの小川で洗っていると、よく始業の鐘の音が聞こえてきて、あわてて駆け登ったものだった。第三あたりの土壌は、赤土がおもで、畑にもあまり石はなかったのであるが、あの坂道だけはなぜか石ころが多かった。転んでは膝をすりむいたのでよく覚えている。

私の教室は五十人の生徒がいて、中に一人小使いの子、アマリアを例外として、あとは皆日本人であった。しかし、ブラジルの生活に少し慣れてから学校に行かせて貰えるようになった子や、日本の小学校を中途退学して来て入った者、たとえば私や、同航の三才上の従兄など、または定まった学齢期に就学した子などで、

同級といっても年齢は実にまちまちであった。そのような事も、外国に来たのだから仕方がないと心得てか、誰も違和感は持たなかったようである。朝礼の時など、最後列の男の子は、一番前の女の子の倍も背丈があった。

教室内のおしゃべりも、遊びの時間も、皆おおっぴらに日本語を使っていたので、最初、ボンジィアとオブリガード位しかポ語の解らなかった私も、さして不自由はしなかった。アマリアまで仲間はずれにならない為に、セッセと日本語を覚えて、かなり達者になり「イジワルー」などと言ってケンカをしていた。

みな、算術はズバ抜けてよくでき、ポ語の作文は苦手中の苦手であった。「座った」と言うには、日本語では人も自分も同じなのに、ポ語ではそれぞれ違っていて、その上複数の時は又、語尾が変化するのだ。そして尚むつかしかったのはRとLの発音。何とややこしいことかと思った。

けれども、先生の方もまた、このような外国人の生徒ばかり受け持って骨の折れたことであったろう。女の先生は癇をたかぶらせると、よく皆の耳を引っぱった。

市街地には雑貨商が二、三軒あったけれど、青物屋はなかったので生徒は当番で野菜、果物、卵などを先生に届けた。先生たちは六、七人で宿舎で共同生活をしていた。

ある日、生徒の持って行った鶏がサッコーラから逃げ出し、コッココーと鳴きながら教室の中を駆け巡った。皆総立ちになって鶏を捕らえようとしたけれど、田舎の放し飼いにされていた鶏は元気がよくて、なかなか捕らえられない。右に左にと身をかわして飛び上がったところを、やはり机の上に飛び上がって見事に

捕まえのはコバ少年であった。さすがに組で一番の腕白小僧だけのことはあった。

彼は後に、ペレイラ・バレット行きのオニブスの経営をしたとのことであるが、熱病にかかり若死にしたと風の便りに聞いた。あんなに元気だった人が、と、信じがたかった。

だんだんと学年が進む程、生徒の欠席が多くなっていった。稲刈りが忙しいから、棉摘みの盛だから、と農業の手伝いをしなければならなかったからである。

家の手伝いの為に学校を休んだ翌日、先生に理由を聞かれると、皆、頭が痛かったとか、腹具合が悪かったから、とか言い訳をした。それが嘘であることは、無論先生も見抜いていた。

長女であった私も例外ではなく、その嘘つき仲間の一人であった。四年生の時、その前日の欠席理由を尋ねられて、歯が痛かったから、と答えると、シルベリオ先生は、

「先週、歯が痛かったのだから、今週は風邪をひくはずではなかったのか？　」と言われたので、教室中にクスクス笑いが広がっていった。子供に「学校を休め」と言わなければならなかった親も辛かったであろうけれども、休みながらでも通わせてもらった子はまだ恵まれていた。一応読み書きと、足し算、引き算さえ覚えれば、働き手一つになる為、二年位で学校を止めてゆく者も多かった時代なのだから・・・。

そのような者たちが、親を助けて一心に働き、やがて家の基盤ができ、下の者、または二世の弟妹達が気楽に上級学校に進めたのである。

日本で基礎教育を受けて来た人より、日本語が劣り、弟妹達よ

りはポ語が出来ない。しかし、一世と二世を繋ぐパイプの重要な役を果たした、準二世、または子供移民と呼ばれる谷間の層の人達である。

在学中に、強く胸に刻まれた一つの事件があった。

歩きながら食べていた桑の実が丁度なくなる辺りの、その角を曲がると、学校のあるサンジョゼの高みも見え出す所に亀岡さんの家があった。

沢山のバナナの樹に囲まれた中の家に、私達は時々水を飲ませてもらいに寄ったことがある。三、四人の男の子がいて、その長男は私と同級であった。小柄な、ごくおとなしい子で、両親も私達子供の目には普通の人に見えた。

ある朝、その前を通りかかると、バナナの樹の奥に異様な人だかりがしていて、亀岡さんの家は姿が消え、焼け跡からはまだうす煙が立ちのぼっていた。いまだに私には、その一家心中の真相が分からないでいるのであるが、あるいは移住後の挫折感からではなかったろうか？　。

葬儀には全校生徒が参列した。

アンドラーデ校長先生の声涙ともに下る弔辞が読み上げられて、教育者らしくその中には、日本人の父兄への警句の一言も含めてあった。

このように様ざまなことのあった私達第二期のグルッポ組が卒業する日も近づいて、記念に裏の校庭に果物の苗を植えることになった。ミカン、マンガ、ゴヤバなど、それぞれが持って来た苗を、農村の子供らしく馴れた手つきで植えた。終わをとすぐにはそこを立ち去りがたく苗木の方を向いて「卒業生の歌」の練習を

した。二年担当の、ドーナ・ドゥーセという美人で音楽好きの先生が教えてくれたもので、第一章は卒業の喜びと希望、第二章は先生への感謝と級友との別れを惜しむ「仰げば尊し」に似た歌詞で、曲はもう少し活発であった。唱い終わると、日頃の腕白小僧もオテンバ娘も柄にもなくしんみりとしてしまった。

シルベリオ先生が、

「もう何年かして、君達がナモラーダを連れてこの学校を訪れる時には、きっとミカンやマンカが、沢山成っているはずだよ」と明るく言われた。

ブラジル人の先生と、日本人の生徒の間にも何変わることのない師弟愛が通っていた。或いは僻地だったからこそ、その情けは一層深いものだったかも知れない。

やがて私たち一家はアリアンサ移住地に移転したので、再びあの学校をたずねる機会もないままに過ぎた。

振り返って見れば、もう半世紀にもなるのだ。しかし、私の心の中のあの果樹の苗たちは、今も歌声の中で若葉をそよがせている。

一九九五年三月二七日記

石井かず枝

グルッポ時代

私は一九四〇年二月一三日、チエテのウニオン区で父尾崎忠雄、母清江の間に生まれ「かずえが生まれた日はなぁ、おじいちゃんはひどいマレッタで四十度の熱にうなされていた」と誕生日を迎

える度に祖父（秀得）から聞きました。

幼女の頃の思い出として、初めて学校へ行くため、母が心をこめて縫ってくれた、白いもめん布に赤いレンダで花もようの飾りをつけたかばんを肩にかけ、入学した日のことが忘れられません。忙しい日常生活の中でも、母はそのとき、その場に応じて愛を表現してくださいました。

ウニオン区の学校は三年生まででした。四年生はペレイラ・バレットの町まで六キロメートルの道を馬で通うことになり、隣の佐藤早美さんの馬に座布団をしいて、私は後に乗せてもらい二人で楽しく通っていましたが、ある日、馬が何かに驚いて、急に一足飛びに走りだし、どうしても止まらず、そのうち二人は馬の首のところまできてしまい、重たくなったので馬はようやく頭を下げて立ち止まりました。二人はお座りの格好でドスンと振り落とされました。「早美さん、ヌンカマイス、あんたの馬に乗せてもらわないからね」と言って、そこから家まで歩いて帰ったのです。

次の日からは度胸をきめて、自分のうちの馬に鞍をつけてもらい、一人で乗って、二頭で半年通い、後の半年はジャルジネイラで通いました。

運転手は多田さん、コブラドールは小波のケンちゃんで、そのジャルジネイラも雨が降ると途中でひっかかって通らない日がありました。時々サンジョゼから来るカミニョンに乗せてもらったりして一年間は大変でした。

あの頃の楽しみといえば、運動会と演芸会。私がまだ幼いころ「最後の審判」という劇をして、その子役に私が選ばれて練習に行

きました。
母役が横路国美さんで、巡査がお母さんを連れて行く場面で「お巡りさん、お母さんを連れて行っちゃだめ、お母さん」と言うところで「しばらくだから辛抱してね」と言いきかせるその言葉があまりにも上手で、私は子供ながら本当に泣かされ、名子役として褒められたのも懐かしい思い出の一つです。
練習の後、みなで夜食をよばれるのが、また楽しみで、いま考えてみると年に一度の入植祭慰安演芸会は、心に残る大きな行事であったと思います。
最近、幼友達の山口ヨシユキさんと出会って、昔話に花が咲き、忠臣蔵の曽我兄弟の劇の話がでて「指導者の森屋さんからすごく叱られたぞ。
ちょっとした所作を覚えるのに何十回もやらされてな。でも楽しかったよな。それから小学校時代に、学校の屋根瓦や窓ガラスをはずしたり、勿論手下を使ってな」といろいろ大きないたずらをして区長さんや学務員を困らせた話をしてくれて、笑いがつきませんでした。

石油ランプの灯火

ジャンケンポン、アイコデショ。闇夜のサッペ屋根の小屋、そこは「皇風塾」といってウニオン区第四班が、一週間に三晩、幼少青年を集めて日本語を教えていた夜学です。当時電気もなく、みなが持ち寄った小さな石油ランプのうす暗い灯火の下で私は巻七まで学びました。勉強の後必ず先生も生徒も一緒に月の明るい

晩は「陣取り」、闇夜はジャンケン試合。そのジャンケン遊びは真剣なもので、グーチョキ・パーに身体中の力をだして勝負を決める。その応援と騒ぎはサッペ小屋も吹っ飛びそうでした。月夜の陣取りはまたまた面白く、民ちゃんをつかめ、マスミを追いかけろ、体をかわすのが上手だった兄マスミ。走るのが早く、すばしこかった満さん。夜の更けるのも忘れて走り回って、楽しかったことは、友達一人ひとりの心の中に深く残っていると思います。

この夜学は、父母たちが子孫に日本語を伝え残したいという一念からできたもので、場所は江越さんの庭先で、子供達がどんなに騒いでもただの一度も文句も言わず、情深い方たちであったことを今も感謝しています。この夜学の先生は、教育に熱心な青年で師弟のため、十数年無料奉仕して下さった福島甲子先生で、読み書きの外、面白い話、ためになる教訓など話して下さって、テレビもなかったあの頃、夜学は唯一の楽しみでした。

百姓仕事の疲れもいとわずご奉公下さった、その御恩は生涯忘れることはできません。私が今日、ここまで日本語ができるようになったその基礎は、恩師福島先生のお陰だと常に感謝しています。

その御恩返しとして一九九〇年より、大人の方々に日本語を教える勉強会を始め、生徒は私と同じ年代の方たちで、若いころ日本語を勉強できなかった人達です。

ウニオン女子青年団

「聖なる国に血を受けて、大和乙女と生い立ちし」ウニオン女子

青年団団歌です。

十四才で女子青年団に入らせて頂き、大人になった気がして嬉しかった。森屋操先生が以前からご指導をして下さって、女性としての教養のお話やペン習字も教わりました。

その当時、チエテ青年連盟というのがありまして、弁論大会に出るようにと言われ、「南十字星を仰いで」というテーマで初めて出場させて頂き、入賞してノロエステ大会へ出るようになりました。プロミッソンまで、ノロエステ線を走っていた汽車マリアフマッサで、チエテ代表弁士たちの小坪誠一、田中俊雄、後藤進、小坪つね子、榎本五月、尾崎かず枝、それに引率責任者の先生方との旅では、私はまだ少女という感じで一番若かったのです。

その時は入賞しませんでしたが、汽車の旅は楽しく珍しく、新しいお友達ができて大変よい勉強になりました。

翌年、一九五五年、やはり森屋先生のご指導で「世の母を讃えて」というテーマで出場、チエテ大会で三位に入賞してノロエステ大会がペレイラ・バレットのシネマ館で行われ、大勢の聴衆の前で力いっぱい発表でき、女子部で五位に入賞できて、感激いっぱいでした。森屋先生始め、青年団の皆様、また家族の人達に祝福され、私も大人の世界に入ってきたのだなぁ、という気持ちになり最高の喜びでした。

お友達の小坪つね子さんと福島民子さんは全伯大会に出場されて、民子さんが優勝して帰ってこられ、チエテ、ウニオン青年団の名誉となりました。青年連盟はこの年を限りとしてなくなり、森屋先生もサンパウロに移転されることになり、ルッサンビーラ

駅でのお別れはつらく母親に置いていかれるような淋しさでありました。

あれから四十年の年月が過ぎた今日、それぞれの立派な家庭を築いておられることと思います。

原始林の中の学校

十六才のとき、輪湖先生が森林の中の自宅で「優愛職業学校」を開かれて、私は第一期生として入学し、六か月間下宿、裁縫、料理、手芸を習いました。並木ヤヨイさん、小坪ミサコさんも一緒でした。輪湖様の家族の方々とも親しくなり、楽しい学校生活でした。

その後トレス・イルモンスの発電所建設のため・ペレイラ・バレットの町の付近一帯は浸水し、チエテ橋も輪湖さんの森林も水没するという話を聞いて、私が主人と故郷を訪れた時のこと、水没しかけたチエテ橋は弓の弧の一番高いところが、はるか向こうに見えているだけで昔の面影はありませんでした。

自然を愛する主人が「輪湖さんのペローバの大木をそばで見せてもらいたいね」と言うのでお伺いしました。ちょうどミツアキさん夫婦がおられ、大木の写真を写させてもらったことは良い思い出になりました。

ミツアキさんは、子供のころ、この木によく登ったものだと語られ、全部切ってしまわなければならないとは情ないと何回も言われました。

私が半年お世話になった学校も水没するかと思うと、淋しさが胸に込み上げてきて涙がでてきました。

日本語の先生に

十九才の春突然、ウニオン区の日本語学校の先生をしてほしいと父兄会からたのまれました。今までの先生が家庭の事情で辞められることになり、代わりの先生が見つかるまでという条件なので、父母と相談のうえ、学務委員の千田幹雄さんを校長として週一回、道徳のお話しをして頂くようにすれば、私でもとお引き受けすることになりました。

「若いときの苦労は買ってもせよ」いう諺がありますが、それから二年半、子供達を預かることによって、私自身が真剣な勉強でした。片時も辞典を手放さず、辞典で分からないことは父母に聞きながら努力するより外に道はありませんでした。校舎は尾崎家の果樹園のなかに建ててあったので、生徒達は休み時間にマンガの樹に登ったり、鬼ごっこ、陣取りなどをして私も一緒になって遊びました。

年に一度「父母の日」という名称で学芸会を三年続けて行いました。

学校の近くに住んでいた谷合さんご夫婦が踊りや劇の指導を手伝ってくださって、母も衣装作りや舞台裏の陰の協力をしてくれて、すばらしい発表ができたのです。お父さんお母さんへ感謝の意を表す最高の行事として私も一生懸命でした。

あのころの写真アルバムをみると、一人一人どの生徒も個性が違ってかわいらしく、三十余年過ぎたいま、どのような人生を送っていらっしゃるだろうかと思うと急に会ってみたい、懐かしい気持ちが起きてきます。

授業のとき「大きくなったら何をする人になりたいですか」という問いに「学校の先生、エンジェネイロ、牧師」といろいろ。先生になりたいと言った妹（加藤アケミ）は、明るくて皆に好かれる性質で先生にピッタリでしたが、後日希望通り先生になり、自宅で日本語学校を経営して、楽しみがいっぱいと喜んでいます。

一九九二年六月、ペレイラ・バレットでウニオン会があった時「先生お久しぶり、玉置政和です」声をかけられてびっくり。私から見上げるように背が高く、立派に成人されて、「お別れして三十年振りですね。今何をしていらっしゃいますか」という私の問いに、「ペレイラ・バレットの聖公会の牧師を務めています」との答えでした。

「子供のころの希望を実現されたわけですね。おめでとう！　、これからも多くの人達に神の愛をお伝えして行かれるよう祈っています」と、私は励ましの言葉を伝えました。

勉強家で泣き虫だった日本語学校時代の思い出話や、日本へ留学したときの事など話されて。楽しい一時でした。

想い出はつきない

チエテの想い出は泉のように次々浮かんできて、限りなくあります。

音楽研究会の水野様、川村様、角川様方にお世話になり、「すずらんクラブ」では、三沢様、米山様、鎌田様、エミちゃん、和子さん、その他の方々にもお世話になり、兄弟姉妹で喉自慢大会にいつも出席させてもらった楽しい想い出の数々がありますが別の機会に。

州境の町

作詞　角川　勝治
作曲　川村　信夫

一　生まれ故郷は　マ州と境
娘ざかりを　野山と河で
過ごして育った　河辺の町よ
ああ我が故郷は州境の町

二　州境の町は　大河と境
川岸の灯りが　ちらほら灯る
誰かを待つように　カノアが一つ
ああ我が故郷はなつかしの町

三　椰子の木陰で　遊んだ頃を
想い浮かべて　都の空を
眺めて偲ぶは　幼な友達
ああ我が故郷は州境の町

この歌は角川様、川村様が、私達兄弟姉妹に送別の意をこめて作って下さったものです。

こうして一九六二年七月三十日、チエテをお別れする日までの二十二年間の思い出はつきません。

いま私（石井かず枝）が幸せな結婚生活を送り、愛深い主人、四人の孝行の息子たちに恵まれ、生長の家の講師として、人間神の子の真理を伝えさせて頂き、多くの人のお役にたたせて頂けるその基礎はすべてチエテのような恵まれた環境のなかで育ち、体験

できたお陰です。

人の悪口は言ったことのないおじいちゃん（秀得）は、オンサやおおかみの声を聞きながら、マットの中を馬でトコトコ、法事を頼まれてお参りに行っておられました。まだ私が幼いころ「おじいちゃん、こわくないの」と聞きますと「仏様と一緒に歩くからなにもこわいものはない」と答えられ、信仰深く徳の高い、心の美しい祖父に恵まれていました。

父は事業の失敗があっても家族のため、八人の子供のために教育熱心で社会奉仕に我を忘れて、まじめにつとめ頑張って下さり、母は、「子はせめて、親よりも偉くしたいもの」といつも限りない愛を注いで下さったその後ろ姿を見ながら育った私です。

今はなき祖父母、父母、叔父善男、幸男、叔母八重子、健在の叔父才次郎に心から感謝の意をささげ、私のふるさと、チエテの人々に一言「ありがとう」と言って、チエテの想い出の一部とさせて頂きます。

一九九五年五月一日記

ウニオン女子青年団々歌

作詞　福島甲子
作曲　平岡安次

一
聖なる国に血を受けて
大和乙女と　生い立ちし
その光栄に　報国の
心は清く　花と咲く
ほこるウニオン　女子青年

二
はなれて遠き　母の国
もゆる大地の　外国に
出でて働く　家のため
十字星下に　学びつつ
尊く生きん　女性道

三
風あけぼのに　かおる時
やさしく咲ける　花もまた
高き教えに　導かれ
におい気高き　白百合の
ほこりもやさし　女子青年

四
ああたぐいなき　日の本の
尊く輝く　女性道
学ぶこの道　一すじに
真心きよく　ウニオンに
結びはかたき　女子青年

青年学校設立

前田　伊一郎

たしか昭和十二～十三年ころと思う。

日支事変最中、当時の日本は軍国主義一色のころで、青少年の訓練所も全盛時代だった。

チエテ移住地のウニオン区のウニオン日本人会でも青年学校を設立したらとの意見が出、当時の会長吉川要治氏(元特務曹長)並びに他の役員の合意で移住地支配人の希望により私がその教練の教官を引き受けた次第である。

当時同じブラ拓経営のバストス移住地にも脇山甚作退役大佐指導のもとに教練をやっていると聞き、私も大いに張り切ってやり始めたのであるが、バストス移住地の方は計画だけで実施することもなく終わったようだった。

教練は毎日曜日朝八時より午後二時まで、教えたものだ。当時の青年は日本の新兵に比べて覚えがはやく、私もやり甲斐を感じて努めたものだった。

青年団員を二十才までの少年部と二十一才以上は青年部として皆教練、体操を真面目に一生懸命習ってくれた。私としても教えるのに力が入り、これなら日本の訓練とかわらないと自信をもって教えていたが、当時リオ・デ・シャネイロの一排日紙の記事にペレイラ・バレットで日本から士官が来て軍事教練をやっているとの記事が載り、同新聞社の記者が取材のためサンパウロへ来て日系新聞社を訪れ、誰か案内してくれとのことであった。丁度日

系新聞記者会に江見清鷹氏がおり、時節柄現地に行かれては事態は悪化するとふんだ彼は、「そんな筈はない、必要ならば日系新聞記者間で調べるから」と説得して追い帰したそうだ。

早速宮坂氏よりブラ拓チエテ事務所に電報で教練を直ちに止めよとの通知があり、丁度その日サンジョゼでの野球大会で球場にいた小生のところに古関支配人が飛んで来てその旨を伝えた。小生はせっかく軌道に乗った教練なので止めたくはなかったが、一時中止という形でやめたのが、その後そのままになってしまった。誠に残念だったが、とうじの情勢では再起することも出来なかった次第だった。

リオの排日紙に通告したのは当時ペレイラ・バレットで薬局を経営していた日本人嫌いのCであったようだ。私はその後の再三逮捕未遂の経験があり、その都度やれ角力大会だ、やれ陸上競技大会だとチエテ青年団の用で出歩いていたので家には不在の日が多く、お陰で逮捕を逃れた。

その頃教練に木銃を使って本格的な軍事教練にしたらと言う意見もあったが、あまり目立ちすぎると言うことで実現しなかった。

チエテ青年連盟の発足

一九三〇年発足、A区青年会の初代会長は川崎稔、副会長藤村孫一郎、三〇年半ば頃より機関紙「草笛」後「拓人」発行。発行責任者は前田伊一郎、大坪愛児。その頃中央区、直営地、A区、B区の各青年団が合併してチエテ青年連合が発足する。その後イニューマ、バラボニータ、第二市街地（ベラフロレスタ）に入植し、連合青年団ではいけないと会議の結果「チエテ青年連盟」と

なった。
チエテ青年連盟初代役員は委員長　川崎渉（当時Ｂ区青年会長）、副委員長　前田伊一郎（Ａ区青年会長）であった。

或る日の青年の出来事

堀石　明雄

青年会から通知が来たのは午後三時頃だった。内容は町の製糸工場かち狂女が逃げだしてウニオン方面、しかも僕たちの近くに来た由、その捜査をこれから行うとのことだった。
僕も仕事を中断して管内の青年とそれに当たることにした。
秋も深まった五月末のころで、遅れたところの棉摘みを終わって抜根にはまだ間のある畑は雑草に荒れていた。僕たちは先ず真砂さんの方面から始めることにした。なんでも連絡の上では真砂さんの四本の有刺鉄線の柵を疾風のごとく潜り抜けたそうだ
恐怖心を失った狂人は鬼アラメを潜っても傷もしない。力も強く、その挙動も極めて早い故にそれを取りおさえることは普通人よりも遥かに困難なことである。
チエテはその頃棉作と同時に養蚕が流行っていた。町には大きな製糸工場があって百五十名ぐらいの女工が盛んに働いていた。四十七年頃のことで、青年会は先輩の上原萬平さん、東三郎さん時代から福島甲子、吉井巌、相原正男、香山一諸君の時代にかわって、ウニオン青年会の活動力は落ちることを知らない旺盛な時代

であった。
女工で働いていたB嬢は素直な女性で、長年の間に芽生えた恋が実らなかった内気な女性にはよくあるケースで、一方的に思いつめて悩み続け、異常をきたしたとのことだった。
女は恋に命を捨てる場合もしばしば世にある。内気な彼女は一途な思い詰めから気が狂ったようだ。いずれにしても不幸のことで、青年の我々はなおさら同情した。
真砂さんの近辺はすべて捜査したが何の手がかりもなく、暮れ早い晩秋の日はやがて夕闇に包まれた。青年会は捜査本部として道法さんの家に世話になっていた。道法さんは僕の家の川向うのロッテで、福島君もその隣であった。川隣でもあり青年会の幹部でもあった福島君と僕は、当時の青年でも理論家、いわゆる理屈家であって、話の合った仲であった。福島君はいまでもウニオン会の中心人物で、彼なくてはと思う人間である。それに吉井厳君もまた隣で、三人とも今日健在である。
何分四十年もの過去を正しく記憶することは不可能であるが、若き日の思い出はことさらに懐かしいものである。
捜査は日中にはついに目的を達せず、夜に入ることになった。僕の班は五班で川向こうで近いため夕食は家に帰って食べた。夕食後再び歩いて捜査隊に加わったが、暗いことから一層に捜査は面倒になってきた。
真砂さんの方面は断念して、井上さんの道を上に向かったとかの捜査員の情報もあって、それではと一隊は上井さんの上の横道あたりからその辺を捜すことになった。そのあたりは皆棉畑で抜根前の荒草だった。

当時のチエテ移住地の主作は棉作であり、若干養蚕が入っていた程度で、どこの農家でも最大限に棉畑を広げていた。僕のところも十五年間棉作をくり返していた。だがチエテの地質は一帯に砂質であったが肥沃であり、ウニオン区ではチエテ河に沿った方面は所謂「特等地」と名付けられて、地味は特に豊かであった。僕たちの方面は小川に近い部分は少し粘度質だったが、大半は砂質で、繰り返しくりかえしの作にさすがその頃は地力の疲弊がはげしかった。全盛期を越えたチエテ移住地は、その頃から将来への不安が見えだしていた。

夜の捜査は本当に不自由なもので、その夜は月のない薄曇の夜空で、星影も薄かった。五月末は冬には遠くいまだ寒い感じもなく、夜歩きには快適な気温であった。長引く捜査のために途中でカフェーも出て僕たちは暫く寛ぎ、ああでもない、こうでもないと狂女の逃亡からその家庭のことなどを話題に三十分ばかり雑談して、再度捜査に向かった。

歩いても歩いてもさっぱり手掛かりはない。なにぶん闇夜で視野がきかないのでどうにもならない苛立ちがあった。夜は次第に更けてゆき、青年たちも捜査にあきが出て来てもう歩き回る気がなくなってきた。

夜半過ぎ頃になると誰いうとなく捜査は止めようということになった。

全くきりがないことでもあったので、全員捜査を打ち切り、解散となった。僕もやれやれと思ってふと暗い星空を仰いだ刹那、二、三メートル離れたトッコ（切り株）の上に娘の姿を見いだしたの

である。トッコは直系一メートルもあるペローバの古株であった。
娘は長い棒を構えて不動の姿勢で立っていた。「見つけたみつけた」と叫ぶ声に、帰り支度をしていた青年たちは忽ち集まってきた。こんな場合あまり大声で騒ぎたてることは娘を逃がすことにもなる。棒を握った一寸の隙もないような直立不動の狂女には手のつけようがない。せっかく見つけたものを取り逃がすことはできないし、その逮捕方にはほとほと困った。いろいろ考えた末、「どうだろう、現場に親を連れて来たらどうか。親なら案外素直に従うだろう」と一人が言いだし、全員がこの意見に賛成した。
親の方は心配からそのとき既に町の自分の家から道法さんの捜査本部に来ていたらしく、間もなく父親が現場に駆けつけてきた。青年たちはトッコを遠巻きにして、その面接の様子を固唾を呑んで見守っていた。
父親はトッコに近寄りひたすら娘の名を呼び続けた。五声、六声・・・呼びかける悲痛な肉親の声は狂っていた娘の正常な意識を呼び戻した。
微動だにしなかった娘のシルエットが静かに動きだし、やがて娘は棒をすててトッコから降り、素直に父親の肩に担がれて行った。
僕たち青年は一同安堵感と共に改めて親の偉大さを痛感した一ときであった。

一九九五年五月記

チエテ時代の思い出

重岡・森川　光子

その一

一九三三年八月二日ブエノス・アイレス丸でサントス港着。名船長神足徳三郎（かみあし・とくさぶろう）さんのもとに一カ月半の航海をなし得たことは私の生涯に最も幸福なことの一つで、チエテとは無関係のことながらプロローグとしてこれだけは記さずには置けない。

チエテの第一歩はサントス上陸直後末妹が麻疹に罹ったので第一市街地の病院であった。チエテ河のバルサで渡った。

旧移民の末次（すえつぐ）さんという人が多くの伯人カマラーダを使役して原始林の伐採や家建ての請負をしていた。家は土壁で前方に小さな玄関？　、内部を三つに仕切り中央が客間兼食堂、左が寝室右は物置、後方に台所がつき、家の中にはドアなどはなかった。屋根はセロード材を長方形に切りこれを薄く割って瓦の代用にし、釘で打ち付けたもの。

大雨のときは多少は雨漏がした。

この家の前で写真を撮って祖父に送ったところその返事に「倉庫の前で撮ったようだが・・・」との一節があり、母はガッカリしていた。

同航者は大迫さん、鈴木さん、倉場さん、中井さんの方々であった。

その二

チエテはマラリアの巣窟として恐れられていた。事実マラリアとアメーバ赤痢で一家殆ど死に絶えた例もある。

高岡専太郎博士が移住者の家を戸別訪問して健康状態を調査したのもこの頃である。毒蛇も多かった。各区長や組長宅に血清と注射器を常備してあったので毒蛇咬傷による被害は最低限に食い止め得たようであった。

原始林には無数の山猿、山豚がいた。固い鎧を着たタツー（アルマジロ）、全長一メートル以上もある大蜥蜴、タマンドアなども・・・・。

タツーが固い土を掘って逃げるのを見たことがある。まるで地下に沈んで行くようで、あれよあれよという間に消えてしまった。後には真っ暗な穴が残った。恐ろしい爪の力である。

知人の話に聞いていた暴風雨の夜掘っ建て小屋の屋根がとんだ。屋根は幸い何本かの大きな切り株の上に乗っかかったので、その夜はそこに野宿することにしたが、一晩中蝙蝠に訪問されてまんじりともしなかったこともあった。

無数の緑色のペリキットの一団が少し大袈裟な表現をすれば、空の一角を覆う位の群になって、此方の森から彼方のもりへと啼き渡って行くのであった。

その三

わが家は同じ千葉県出身の宮野義雄（みやの・よしお）さん一家と隣り合っていた。宮野さんはお芝居はプロ級で、八月の入植祭には見事な演技を見せてくださった。彼は友人から「日本文学全集」を餞別として頂いて来ていた。私は次から次ぎへとお借り

して夢中になって読み耽った。漱石、蘆花、一葉はもとより、「舞殿」、「滝口入道」など大好きだった。

宮野さんの奥さんはお気の毒にも女の子を産んで間もなくマラリアで亡くなった。一家はやがてカフェランジャに移転して行った。入植三年そこそこであった・・・。後年、宮野さんも我が家も聖市に出てきていた。ある時アメリカの映画会社が戦争映画を製作するに当たり、彼はその見事な口髭と立派な容貌や体格を買われてハリウッドに招かれて出演した。部隊長役であったらしい。

その四

チエテ移住地の主作物は棉であった。私たちが移住する前年サンパウロ州はヴァルガス大統領の独裁に反対して護憲革命を起こしたが、衆寡敵せず敗れ去った。その結果コーヒーの新規蒔付が禁止され、主作は綿花となった。産組も出来、アメリカ系アンダーソン・クレートン会社も綿花買付に乗り出してきた。一日に二、三回も棉の値が跳ね上がってびっくりしたこともある（価格を失念）。チエテでの会社の代理人は佐藤常蔵さんであった。

棉作農家に対し生活費貸与、いわゆる青田貸しの方法もあった。

その五

入植後私はバラボニータ小学校に入学した。二教室に数十人の生徒で、一応一年生から六年生まであったが、年齢はまちまちであった。

校長室（兼応接室兼図書室、医務室）に幾らかの書籍があった。誰の寄贈によるものかデューマの「モンテ・クリスト伯（当時は

巌窟王の「脱獄編」と馬琴の「南総里見八犬伝」の犬塚信乃の活躍する部分が一冊になっていた。かなり分厚い本であった。巌窟王は面白かった。全編読んでみたいと熱望した。(全編を読み得たのは約四十年後)。八犬伝は作中の若い女性が次々と非業の死を遂げるので、少女の感じ易い心にはいかにもむごたらしく思われ、嫌悪感に囚われて八犬伝嫌いになってしまった。今でも馬琴を読んでみたいとは思わない。

その六

校長は大坪愛児(おおつぼ・あいじ)先生。スポーツ好きな先生で、放課後は必ず陸上競技の練習であった。それが済むと百人一首に興じることもあった。

翌三四年に第一回卒業生として卒業証書を頂いた。学校の大きなハンコと大坪先生の署名入りである。この証書はブエノス丸で頂いた船内小学校の精勤証と共に移民資料館に寄付したので多分展示してあることと思う。

大坪先生は間もなく子供さんの教育のために聖市に移転された。後年コロニア野球界のリーダーとなった方である。

清水百代(しみず・ももよ)先生も忘れることのできない方である。

お講義をする時の真剣な表情は今も脳裏に焼き付いている。先生は後にバウルー市の日語学校に招聘されご夫妻で教鞭を執っておられたが、惜しくも早世された。

ポルトガル語は有名なジョゼー・サンターナ先生に教えて頂いた。(但し会話は除く)。先生はこの頃既に日本語の先生も出来る

位日本語がお達者だった。難しい漢字もすらすら書き会話も流暢そのものであった。おそらくあの当時、日本語にかけてはブラジル人の中でこの先生の右に出る人はいなかったと思う。

先生は東北伯バイヤ州の生まれである。山伐人夫としてはるばる日本人植民地に来て働きながら日本語を勉強した。毎晩五つの漢字を何十回か書くのを日課にしていて、時には昼の疲れで寝入ってしまっても目覚めれば必ず予定の書き取りをしたそうである。先生はしばらくしてリオ・デ・ジャネイロ市へ行かれた。

先生に再会したのはあれから二十年後聖市リベルダーデ区の九州旅館であった。先生の淀みない日本語会話に同宿の人達はびっくりし、日本人と思ってご親戚ですかと問うた人もあった。

先生の願望は東大国文学科に留学することで殆ど決定していたらしいが、戦争のためそれが果たせず。それでも結婚もせずに戦争の熄むのを待っていたところ、気がついてみたら四十才になっていたので、これでは一生独身で終わるかも知れないと留学は一応諦めて結婚したという。

ずっと後になって三十年の夢が叶って憧れの日本に旅行された。

一九五八年日本移民五十周年記念祭典の日、森本アントニオ州議がポ語で祝辞を述べ、サンターナ先生がこれを日本語訳で述べられた。

ジョゼ・サンターナ・ド・カルモ先生の略歴

一九〇六年二月六日バイア州リアッショ・デ・サンターナ郡に生まれる。

早稲田中学講義録で勉強。

一九三六年リオ・デ・ジャネイロ日伯中央協会日語学校でブラジル人として最初の日本語教師となる。
その後サンパウロ市の日伯文化普及会（現日文連）で日本語教師を勤める。
一九三九年四月十六日ブラジル人で最初の日本語公証翻訳人となる。
一九七二年一月二九日サンパウロ市で死去。
一九八二年一月二九日先生の遺徳を偲んで教え子たちが発起人となりサンフランシスコ・デ・アシス教会で十周年のミサを挙行。
（先生の略歴は半田知雄さんのブラジル日本移民史年表とサンパウロ新聞の記事参照）

その七

あの頃の風物詩の一つにボイアーダの移動があった。何百頭、時には一千頭以上もの牛群を馬に乗った数人のボイアデイロが後になり先になりして群を離れようとする牛を革鞭を振って連れ戻す。
土煙りが濠々とあがりボイヤデイロの吹く角笛の音が大空に高く広く響きわたる。鋭い中に一抹の哀愁を帯びた角笛の音を聞くと、ああ、又ボイアーダが行く・・・と暫し耳を澄まして聞くのであった。
この牛群移動の旅は距離にもよるが二週間から一カ月も要するという。
現在では大形トラックで短時日のうちに運んでしまうので、このようにのんびりした牧歌的な風景は見るべくもない。

第一、移住地の大部分が水底に沈んでしまった。四万七千アルケーレスの大原始林が六十余年後に消えた。
向後六十年、いかに変容していくであろう？

一九九五年六月記

チエテ橋沈下惜しみて写す友

奥野　精一

一九九五年一月二十八日の日伯毎日新聞紙上に有名な短歌評論家大岡信氏が褒めている短歌に、

棺桶に片足入れし老いなれど片足でできることはしましょうと言うすごく解りやすい短歌を見て短歌の詠み方について頭をひねる。作者は野村清氏、この人の第四歌集「老年」所収の歌である。この人は明治四十年生まれ、北原白秋系の歌諒の主要同人で終始しているという。

私は今から書く文章の中に短歌を少しはさみたいと思うので、以上の事を書いた。

私は昭和八年十月に十九才で渡伯した。サントスより汽車に乗りルッサンビーラ駅からバルサに乗ってチエテ移住地に父母と兄弟八人にて到着した。その時市街地の田中ホテルにてイカの料理と言われてブッショ（牛の大腸の料理）を食べたことが忘れられない。第二市街地の学校に泊り、ジュリア・アウグスタのロッテ（分譲地）に通い、真っ黒になって片付け作業中にこの土地は分譲

できないとブラ拓事務所から知らされた。理由は叔父渡辺の家族が数カ月前に入植し、既にロッテを耕作していた。日本にて入植契約をした時に決められた供託金を払えぬために二家族で一件のロッテとしていた為であった。ロッテを与えろれなければ生活にも困るので抗議してブラ拓直営のコーヒー園に毎日二キロ位通って働いた。

構成家族の渡辺とは北海道から神戸に同時に着いたのであったが、渡辺の家にトラホーム患者が出て、私の家族が待つことになったが、次の検査にて今度は私の家族からトラホームが発生した為最初に渡辺の家族が船に乗り、私の家族は次の船に乗ったためであった。

十年後の錦衣帰郷を夢見つつコーヒー木陰に古里を恋う

コーヒー園にて一年間位汗水を流したと思う。このコーヒー園に池上さんと言う先輩も働いておられ、相撲で活躍しておられたが、その息子さんが四十才位で現在サンジョゼ・ドス・カンポスに住んでおられてカラオケのトップクラスで名を挙げておる。

長男である私は大家族で責任が重いので、農産物仲買の川又善三商店に入り、三年半働いた。そして独立して借家で小さなセッコス・モリヤードスの店（雑貨店）を開けた。話にならぬ程の売上であったが順調に進み、後年岸本さんからバール・ビリャールを兼ねた饅頭製造の店を家屋とともに買うことが出来た。そして「カーザ・チエテ」と命名した後は除々に発展することが出来た。それと同時頃に聖市のアンタルチカのビール会社よりビール、ガ

ラナを買って卸販売を始めた。その当時は四ダース入りの麻袋にてルッサンビーラ駅に着いたので販売は勿論、空き瓶の返送など大変な仕事で、父も弟も良く働いてくれたので出来たことと思う。

私は卸売配達に手押し車に六ダース積んで産組積のシリヤ人のバールまで何度も運んだので見られた人も多いことだろう。そして店のほうは食料品を主として次第に大きくなり、靴や帽子からラジオ、家庭用金物、大工左官用金物、農業用金物などと商品を増やして行った。シンガー・ミシンの代理店もした。そして現代のスペル・メルカード式にはしなかったが、今のスペル・メルカードでは売らない品物、例えばセメント、建築用石灰などは常に二百袋位の在庫品を用意していたし、水槽（タンケ）、土管、水道管なども売り、カーマ（寝台）を聖市のパテンテ会社より仕入れ、又あの当時娘さんの嫁入り道具にオーバ（外套）を聖市のユダヤ人から仕入れて沢山売った。

場所が広かったので洋服ダンス、食器棚などの家具類も一通り仕入れて、良く売れた。そして最後には反物類も仕入れて在庫品も豊富になった。これらは私の最も好きな取り扱い商品だった。

一九四〇年頃から一九五〇年前後はペレイラ・バレットの好景気時代で、店の発展したのも皆様のお陰であって、厚く感謝申し上げます。

尚一九四五年頃よりサンタフェの町に支店を開設してチエテの本店の裏の敷地に精米所を建て、籾をサンタフェの町まで買いに行ったこともあった。この私等の精米所に向かい合って、香山栄一さんの精米所と大きな倉庫が建っており、山のように籾が積んであった。

苦労して店は発展したけれど過労の為に病に憑かれし

一九五八年に医師に言われてカンポス・ジョルドンにて療養し、一年七カ月で全快したが、医師がチエテの暑い所で遊んでいるよりも、カンポスにて働いた方が体に良いと注意されたので、一九六〇年二月にカンポスにてセッコス・モリヤードスだけの店を開けた。これはチエテの支店という形だったが、チエテの店は弟二人と私の共同のものとして継続した。

話を戻して、一九四五年頃からの十年間位はチエテは活気に満ちた全盛時代だった。綿花を山のように積んだカミニォンが沢山通り、列をなして精綿工場でバランサを待つ光景は忘れられない思い出だ。

その好景気の頃にはよく東食堂のよみちゃんが跳でとんできて、ビールを大至急届けてくれと注文して、セボーラを一束つかみ、走って行ったことなどもあった。当時はビールがすごく売れたものだった。

懐かしいチエテの思い出の一つに入植十年祭の屋外の演芸会がある。

芝居、踊り、唄など盛沢山の余興があったが、当時は拡声器などあったであろうか。ブラ拓の製糸工場に働いていた娘さんたちが踊るように頼まれて、私の家内もその仲間に入り、踊りの衣装にブラ拓から十ミルレース支給され、小幅の生地を八メートル買い、四百レース小銭が余ったので大玉のバールで二本ピコレを買って

帰ったことがあった。

考えて見るとあの頃のミルレースはブラジルの現在のレアール位の値うちのあった貨幣であったように思われる。製糸工場に働きに入った最初の三カ月間の娘さんは日給三ミルレースで、食費一ミル五百レース差し引かれたようだった。工場長は谷戸さん。工場の指導員は下大迫、長田さんの奥さんたちだった。二十人以上の娘さんらの炊事一切を屋代の娘さんが一人で切り廻していたなど、私が最近家内から聞いたささやかな思い出である。当時カマラーダ賃が弁当持参で五ミルレースであったので、いかにもお金の価値のあった時代だった。

自分の土地でありながら、肥料も入れないために一九五〇年頃から収穫が減退しはじめたため、肥沃地を求めて続々と主にパラナ州に転耕して行く人らが増えて、町の景気に大いに影響した。私の店にはカミニョンがあったので、その転耕者に頼まれてムダンサを積んで何回もパラナに行き、帰りにフエジョンを買ってきたりした。可愛い少女らや乙女らがこのカミニョンの上にのって行くのを、何度も悲しく見送った。今頃はいい小母さんになって、いずこの土地に住んでいることかと案じられる。

連作し地力の衰え知りたればなだれの如く新耕地に移れり
値上がりを待つなく土地を安売りし利を急ぎて移民転耕す
収穫の稲が風に倒されて父は悲しみ土地を安売りす
不況の昔は転耕はやりしに残りし地主は豊かとなれり
集団地チエテの村を去りし人らいずこの土地に暮らしているや

チエテ橋が水没する以前に橋の前面で記念写真を撮るひとは多かったようだが、そのそばの水難記念碑に気付く人は少なかったが、私はその粗末な石碑に頭を下げて来た。

転耕する人等から実に安く土地を買って、今日までチエテに残った人はその後牧場を経営して、皆資産家になったようだ。私はペレイラ・バレットに二十五年、カンポス・ジョルドンにて二十年商業をなし、定年になって商業を止め、サンジョゼ・ドス・カンポス市にて十五年自適して居る。四人の子供は皆独立していかので、私は頭の刺激に短歌を作り、健康法として手や首を振ってカラオケの練習をしている。

私が短歌を作り出したのは一九五九年頃からで、チエテの好景気に沸いた頃はまだ作歌を始めていなかった。

チエテ入植祭の盆踊りには二、三度参加して踊った。私の年齢で踊る人は稀だったが、その少ない高齢者の中で渡辺一郎さんと東辰起さんが非常に上手であった。特に東さんは師匠級の踊りの名手と感じられた。

この盆踊りの催されるチエテ河畔、今では湖畔ともいうべき踊り場に建てられた大櫓はペローバ材の半永久的の立派なもので、それを囲む踊り場はセメント張りの五百人は優に踊れるほど広場である。このような踊り場は日本にも余りなく、ブラジルでは随一の設備と誇って良いと私は思った。多くの混血児が二世三世に混じって、五百人余りの人がハッピを着て整然と踊る眺めは壮観そのものであった。

チエテ橋水難慰霊碑沈下して湖水広がり波打ちており
移民祭八十年も既に過ぎ遺産の如く増えし混血児
四十五年努め商いて休息も遊びしことも殆どなかりし
石柱の水難慰霊碑に眼もくれず橋を横より写しいる友
米や棉桑を植えたる入植地湖囲む郷里となれり
敗戦後再興したる祖国には帰郷せぎりしわが悔一つ
低地にはダムの水が侵入し六十年経てチエテは島か
疫病に倒れ斃れし移民の墓並び原始林拓きし村潰えたり
疫病のはやりし昔斃れたる移民悼みて拓魂碑建つ
日本に遠く離れて生くわれら罅がはいりし如きえにしか
敗戦の責め苦に喘ぐ日本を諦めつつも断絶したり
疫病に斃れし移民の苦しみを言いては涙の声おさえつつ
故郷に執着断ちて六十年一世移民の一生も過ぐ
健やかに生きて終れば本望よわが残生を歌に託して

以上の最後には皆様に見苦しい十四の短歌を書き、一応終わりといたしたが、私ら現在住んで居るサンジョゼ・ドス・カンポス市の日系人社会の近況を一応紹介するのも良いご参考になると思い、次に書き足してみた。

サンジョゼ・ドス・カンポス市内には四つの日本人会があり、それぞれに会員は二百～三百家族を数えており、その四日本人会を連合してサンジョゼ・ドス・カンポス日伯文化協会を組織している。この文化協会に対して先年当地の鐘紡会社より四アルケレスの土地を寄贈して頂いたので、将来のために教育、運動、文化の

発展に力を尽くしておる。それでも何れの日本人会にも入ってない日系人が尚二千人位住んでいるらしい。

各日本大会は皆二百～三百人収容できる立派な会館があるので、結婚式、日本語学校の終業式、父や母の日のお祝い、カラオケ大会、盆踊り、音楽の発表会、運動会、敬老会、慰安演芸会、年末年始のお祝い、青年のバイレ、ゲート・ボール、ラジオ体操その他のエスポルテ等など、中々忙しい行事を行って、会員の慰安を図り、日本文化の発展になるように努めておる。

いろいろと書いて来たが、チエテ在住中は一方ならぬご交誼とお世話を賜りましたので、この機を利用して感謝申し上げたく、この拙い文を綴りました。まことに有り難うございました。

心より皆様の益々のご健祥を祈ってペンをおきます。

一九九五年六月記

青春の尊かりし頃

江　頭　末　一

私は一九三七年から約四年の間、チエテ移住地の空気を吸って暮らしたことがありますので、多少の縁故があり、懐かしい青春時代を偲びながら思い出すままペンをとりました。

当時私はアラサツーバの出利葉商店の店員を勤めていましたが、間もなくチエテ移住地のノーボ・オリエンテ（ペレイラ・バレッ

ト）支店の方へ回され、更に日ならずしてベラフロレスタの分店へ回されて、そこで三年ばかり暮らしました。

あの頃は奥地の辺境な地ではあり、日曜、祭日の休みもあったものでなく、年中働き通しで、休むのは年一回元日位のものでありました。

市街地の近くを流れるチエテ河にイーリャ・セッカという大小の島のある早瀬があり、近所の人達はよくペスカやピクニックに行っていましたが、なぜか私は一度も行ったことはありませんでした。

市街地の在住者は日系が殆どで全部で三十家族前後であったと思います。水道と電気はありましたが、電気は小さな火力発電で午後十時消灯。

ブラ拓の事務所には榛葉支配人（後に杉谷氏と交替）、診療所に木庭医師の外に看護婦二名に助産婦。商店はチエテ産組の販売部、梅里、久安、出利葉、バールの吉村、パダリアの神田、床屋兼うどん屋の矢野、ホテルの高津、写真屋の高山、大工の上田他一名、運送業の高島、送電係の小出、日語教師の谷口、それに行商人一人。この程度の住民でした。各商店の競争意識は強く、無料配達のサービス振り。

毎年八月には入植祭が催されていました。ある年の余興として宝探しがありました。これは謎の短歌を五首（つまり一等から五等まで）作り、それを当日集まった人々に配布して、各自がその謎をといて玉籤の隠し場所を探してその籤を手に入れるという趣向。

私はその謎の短歌を一首祭典係のコンクニャードより前夜、手

に入れました。（前もって手に入れるのは不正なことでありますが）、謎はその夜のうちに解きました。その歌の中に「竜神」なる二字がありました。

「竜」を水と判じ、「神」を水の総本、即ち水タンク、結局「竜神」は「水道タンクの櫓」であると判断しました。

さて翌日、開始と同時に確信を抱いて水道櫓向けて一目散。見当はまさに的中。件の宝籤を櫓の桁上に見つけるや、それを鷲掴みにしてUターン、「はい、見つけました」と本部に控える役員方に提出するや、発見があまりにも早かったので一同唖然。これはてっきり内通があったものと疑ったのでしょう（疑うのも無理はない、前記の通り、祭典委員の中に私のコンクニャードがいたものですから。そして発見が余りにも早かったので）結局、私が手に入れた宝籤は無効にされました。

私はその前日短歌を手に入れたことを悔い、がっかりしましたが、極力抗弁は避けて事は納まりましたが、彼ら委員連が疑った内通を受けていないことを神に誓って声を大にして申し上げます。ただ手に入れたのが人様より早くて判断の時間が長かったまでの事であります。

思い出のダンス

此の頃あちらこちらでダンスが盛んのようせずが、これは流行の繰り返しと受け止めます。」このダンスに興ずることは家庭の裕福と精神安定が齎す欲望の現れかと受け止め、健康上によく、特に社交には満点かと思います。

私は元来、踊り、歌謡、演劇等の華やかなことは余り好まない

方ですが。演劇とダンスを後にも先にも一回（ダンスはカルナバール期間を通じて）だけ演じかつ踊ったことがあります。演劇は百姓時代のアベニーダ植民地での演芸会で友人と金色夜叉（僕が貫一）を演じ、大喝采を受けたことがあります。

ダンスは店員に転向してチエテ移住地の第一市街地（今のペレイラ・バレット）で私の青春時代でした。ある年のカルナバールの夜同僚のMに誘われてバイレに行きました。大勢の中で本式に踊ったのは初めての最後でした。踊り子は殆ど日系で、最初のうちは慣例に従って毎回相手を替えて踊っていたのですが、何回目かの相手は日系人で特別の美人という程ではなかったが、同年配の体格のよい、表情もよく好感を抱き私の心を強く引き付けました。

今にして思えばこの慕情は紛れなく異性に対しての恋慕で、いわゆる初恋とやらではなかったかと思います。と言うように彼女は早くも私の心をつかみ、踊り続けるうちに私は夢心地に陶酔し、完全に彼女の虜となってそれっきり最後まで、いや次の夜も、その次の夜も彼女とだけ踊り続けました。

バイレは普通新婚か恋人同士でない限り、毎回に相手を替えて踊るのが建前でありそれが常識かと思います。初めてのもの同士が途中からとは言え相手を替えずに最後まで踊り続けることは常軌外れで、これをヘンな目でみた人もあったようでした。

一方相手の彼女とて初めての者に毎回同じ人に誘われてヘンに思ったでしょうが、別に嫌な顔あせず、快く相手になってくれたのは彼女とて同じ気持ちであったかも知れぬと思うのは自惚れかも知れません。

それ程まで気に入った彼女に対し、愛の告白どころか、名前や住所さえきく勇気がなく、ただ黙々として踊り続けたことは常識に欠け、その点彼女とて不満であったろうと思うのは私の小心が然らしめたことで慚愧に堪えません。

然しである。若しあのとき、愛の告白にまで発展していたならば何うなっていたかは神のみぞ知り、或いはあれで良かったかもしれぬ。

さて、彼女はいま何処に？　、どうして？　懐かしい青春の思い出であります。

一九九五年九月記

チエテの想い出

栢　野　桂　山

ペレイラ・バレットと言うよりチエテと呼んだ方が親しみがもてるのでそう言う。

僕はサンパウロ産組中央会を通じて、チエテの組合関係の多くの人と識り合った。

一九六五年頃より中央会の倉庫のあったミランドポリスの代表、後年単協になってからも代表として中央会の集会などに度々出席した。

その頃のサンパウロ産業組合中央会の専務であったチエテ産組

の万年理事長の山本正道氏、山本氏が引退されたからその地位を継がれた、同じ産組の専務の八木健次氏など識り合った。

また中山武、関保三郎、野本正教、手島薫、秋未貞、和田森憲造その他の諸氏と面識を得た。その関係でコチアの下元健吉氏、スール・ブラジルの中沢源一郎氏、堀清氏などというコロニア産業組合史上に名の残る人との面識を得たし、それが僕の生きる主目標である産業組合活動への情熱になったとも言える。

産組関係のことは他に書く人があると思えるので、俳句関係での知人のことを書いてみたい。

チエテの俳句と言えば、その神代時代の俳人、架橋工事で知られた木村圭石先生と中島簾女氏のことから始めよう。

圭石先生の句碑「籐寝椅子親しむ南十字星」と彫られたのが、アリアンサの北原公園内に建立されているので、佐藤念腹先生と同様に親しまれているが、簾女氏とは共に俳句を作っただけでなく、謡曲の仲間でもあった。

簾女氏は本名簾子（すみこ）と言い、測量技師の中島一男氏と共に昭和三年、総支配人夫人として入植し、チエテ婦人会を創立して、料理、洋裁、刺繍など教え、移住地の婦女子の生活向上に尽力した。

火蛾の群眉の高さは今宵来ず

乳吐く樹酒かもす樹や森の秋

などと言う佳句が、虚子選「ホトトギス雑詠選集」に載っている。簾女はコロニアの女流俳人の第一号と言うべき人で文学史に名が残るであろう。

他に古い俳人として「千年の夏木倒せば雲急ぐ」が、虚子の歳時記に載っていることで知られている、岡田仙友氏がいた。

この仙友氏の一族には俳人が多く吉川耕花、吉川喜美子、川崎拓人、川崎春芹、川崎明子などの有名な人がいる。

川崎春芹君は三才のとき、明治時代に写生俳句、短歌、写生文を広めた正岡子規と同じように脊髄カリエスを病み、床に伏したまま俳句に親しんだ。敬慶なカトリコ信者で、

ルカ伝の珠なす一章クリスマス

書見器は聖書をつかみ秋探し

などという名句を残している。一族の吉川耕花氏は「のうそん」誌の俳句選者として、コロニア俳句普及に努めた人として知られている。

古い俳人と言えば佐藤いさを氏がおり、仙友と同じように虚子の歳時記に「惜春の心巷のヤソを聴く」が載っている。

八木たけし氏は山本正道氏の跡を継いで、産業組合中央会の専務として尽力した人であるが、同じチエテ産組の鈴木季青氏と共に俳人として知られている。

吉原金二郎には「金二郎遺句集」があるが、これは氏の娘婿の香山栄一氏が世に出したものである。

他に坂根三珍、保田草南、保田照子、中山明子、中山幸子、横山吹雪、田中夏子、高野しげる、秋山蛙声、佐藤桃生、佐藤孝子などの諸氏がいて、かつてのチエテは正に綺羅星のごとく有名俳人がひしめいていた。

また佐藤いさを、佐藤貞子、万城目金之助（アリアンサ在住）、佐藤桃生、佐藤孝子諸氏の合同句集「きょうだい」がある。田中

夏子さんには句文集「スタンポペヤの花」があって、我々のよき指導書となっている。

僕の知っている産組関係、俳句関係の人々はこんなところであるが、過半数の方々が物故されていて寂蓼たるものがある。

一九九五年七月記

— 4 —

— 1 —

— 2 —

— 5 —

写真説明

1 チエテ橋開通式（一九三五年）
2 ジュリア・アウグスタ区のチエテ河にかかったバルサ（同年）
3 当時チエテ河でとれた魚
4 ペローバの巨木をつんだ当時のトラック、田中ホテル前（一九四〇年）
5 山焼き（一九三五年、バラポニータ区）

高山　晴郎

— 2 —

— 5 —

— 3 —

入植当時

入植当時の想い出

高山　晴郎

一九三五年一月一日家族と共にリオデジャネイロ丸にて四十五日の航海を終えてサントス港に到着、移民収容所出発の時にはでっかいパンと丸ごとのモルタンデーラ一個ずつもらい、途中それを齧りながら三日目ようやくルッサンビーラ駅につきました。

直ちにそこで待っていたブラ拓差し回しのカミニョンに乗り継

いで濁流渦巻くチエテ河をバルサで渡り、ベラフロレスタ市街地のなお八キロメートル奥にあるアレグレ区の移民収容所に入りました。途中の道路は原始林の中にトンネルのような道を開いたばかりで、上からはツタがぶら下がっていたりして、「頭に気をつけて」と呼びあいながらカミニョンの上へ便乗して行ったものでした。

アレグレ区の移民収容所は高台に建っており、トタン屋根に板壁の土間、真ん中が通路で両側が板の床になっていて、そこに十家族程の新来移民が生活しながら入植の準備を進めていました。井戸はバイシャーダにあり、水はラッタで十五メーネルもギッコギッコとくみ上げなければなりませんでした。その上赤か濁り水で、それを天秤で上の収容所まで担ぎ上げる作業は慣れない私たちには大変な苦痛でした。その水で米をといで炊いたり、洗濯をしたり、トマバニョをしたりしたものでした。

私たちが入植地に着いたときには原始林を伐採して山焼きをしたばかりの畑で、一部はブラ拓が植民者のために既に棉を植え付けてありましたが、なにしろモスキットが多く、私の小さな弟二人はモスキットで目をやられ、ショボショボ目でかわいそうでした。夜はみなで足の指先に入った蚤ビッショを針で掘り出すなどさんざんでした。

これでは大変ということになり、まもなくベラフロレスタ市街地の高津旅館の隣にロッテを買って家をたて、そこへ移りました。

その後私と父はアグワスミダとかバラボニータ区へカマラーダとして稲刈り、棉の消毒などの働きに出掛けましたが、過労のため父がマラリヤに罹り人事不省三日間。

こんな状態で生計を支えるためやむなく学校時代趣味で覚えた写真を掘りだす次第になったのです。これが私たちの写真業を踏み出した第一歩になりました。

そんなわけで、当時は誠に拙い写真ではありましたが、入植者の皆さんが可愛がってくださって、最初は、ジュリア・アウグスタ区やバラボニータ区を回って写させて頂きました。

後には電気や水道もつきましたが、一九三五年頃のベラフロレスタ市街地は電灯もなく水道もなく、一メートル半角位の暗室を家の中に作り、頗る原始的な方法で、赤ランプ、青ランプの石油ランプを用いて現像したり、又ヤキツケには壁の窓を一つ、二つ、三つと開閉して印画紙に光をあてて現像したものでした。

思えばその当時から現在まで写真を家業として生計を立てているわけですが、はや六十年も夢のごとく過ぎ去ってしまいました。

入植当時のことを思い出すにつけて皆様の暖かいご厚情につつまれて、これまで恙無くすごしてこれたと言うことは誠に感謝のほかございません。

前置きが長くなりましたが、順を追って写真について書いてみようと思います。

１は一九三五年チエテ橋の開通式当日カミニョンの上から写したもので、政府高官、斎藤幸チエテ移住地支配人、安藤ベラフロレスタ事務所職員の顔が見えます。カメラの前の人が邪魔しておりますが…。

２は一九三五年、何月ころだったか記憶にありませんが、ジュリア・アウグスタ区のチエテ河のバルサの開通式で大迫さん夫妻

の安木節がやんやの喝采で大娠わいをいたしました。梅里さん、下野さんの顔も見えます。

３は当時チエテ河ではものすごい程の魚がとれて、カマラーダが毎日のように写真に写っているような大きなドラードやピンタードを木の棒にぶら下げて売りにきました。スクリーの五メートル位あるやつも見たとか話していました。

４はペローバ材の運搬。チエテ移住地は豊饒なテーラ・ロッシャ地帯が多く、原始林のペローバ材を伐採して第一市街地の製材所へおくるべく、毎日写真のようなペローバの大木をカミニォンで運んでいました。

５、原始林伐採後の山焼きも見事なもので、これはバラボニータ区の山焼きを写したスナップです。立ちのぼる黒煙は天をも焦がすかと思われるほどです。こんな大木ばかりの焼け跡も今では低地は水没し高地は見事なパストになって、牛群が悠々と草を食むチエテ移住地ですが、当時は稲作、棉作ともに大変よくでき、畑一面真っ白に開いた収穫期の棉は見事なものでした。そんな時にはアレグレ区、ジュリア・アウグスタ区、バラボニータ区、イニューマ区と毎日のように回って、ご家族の写真をアルゴドン畑の中とか、新築の家の前とか、バナナの樹の下でとかで写させて頂きました。

こうしてまだ原始林の多い移住地のやま道を歩くときなど、よく大トカゲに出会ったり猿の群れが大樹の枝から枝へ飛びわたる姿を眺めたり、ときには巨大なアンタが目前の道を横切るのに驚かされたりしながら次々と農家を訪れました。

アレグレ区の写真写しに回った時のことですが、沢山撮影する

家族があって一日では写しきれませんでしたので、木村さんの家へ一泊させて頂いたことがありました。ちょうどその晩はアレグレ小学校でシネマがあると言うのでみな大喜び、弁当を作ってカンテラを下げて近所の人々を誘い、家族一同原始林の中に作られた道を遠きをいとわず見にいったことがあります。

夕暮れ時にカミニョンの後輪を持ち上げ、発電機をベルトでつなぎ、モトールをかけて発電する仕込みで、その電気で映写機をまわしていました。映画は弁士つきで、いろいろな声音で上手に弁ずるうちに涙をながす者、笑い声、当時めったに見ることのできなかったシネマに一同感動しておりました。

帰途はまっ暗い原始林の道を三三五五カンテラの薄明かりをたよりに、よかったね、面白かったねと話しながら帰ったのも懐かしい思い出です。

今はカラオケの大流行ですが、入植当時はラジオとかテレビなんてものは全然ありませんので、入植祭には入植者の出演で演芸大会、運動会、角力、野球などの催しが青年部、女子青年部によって盛んに行われておりました。

カルナバールといえば女子は日本着を着てカミニョンで街を練り歩き、夜は、高津旅館のサロンで一晩中カルナバールの音楽に併せて踊り狂ったようでした。

このような催しでも人々は心行くまで楽しみながら暮らしていたことが、半世紀過ぎた今でもありありと思い出されます。入植当時の思い出はいくら書いても書きたらないのですが、この位にしてペンをおきます。

一九四八年二月、私はペレイラ・バレットを後にし、サンパウ

ロに移転して今日に至っています。思えば夢のような当時の移住地の情景でした。

一九九五年八月記

私と俳句とチエテ

佐　藤　桃生（秀逸）

一九三八年九月に、アリアンサの兄に呼び寄せられて渡伯したら兄夫婦も姉夫婦も俳句と言うものをやっており、最初は負けん気でそっちが俳句ならこっちは川柳で行こう、と内緒で一生懸命やってみたがどうも思うように行かない。じわじわと周囲からの勢いでとうとう俳句と言うことになった。

早速近くに居るという俳句の先生の所に或る休みの日に兄に連れられて挨拶に伺ったが、これが入門みたいなものになってしまった。

当時アリアンサ句会には二十人程集まっていたようだ。ブラ拓や産組のオエライ人達も多かった。今は過半数の人々が物故してしまった。

同じ区内には小柳武義君がいてウマが合ってすぐ友達になった。そして第一アリアンサに出掛け、第三アリアンサに行き、イデアール句会にも出向き、そしてたまたまチエテ句会にも二人で行った。それも騎馬だった。馬こそ災難で、土曜日の午後から出

掛け、五ミルのケージョ一片、五ミルのモルタンデーラ一片にパンを馬上でかじりながら食事の代わりだった。そして大抵の場合は小田島ただしさんの家だった。

実に楽しい集いで、いつも句友たちが気持ちよく遇してくれた。

チエテの町の様子などあまり知らないまま、ただ馬を駆っては句会に馳せつけ、翌早朝にはろくに草もない所に一晩繋がれて腹の減っている馬に又ご苦労をかけては帰った。

こうしてチエテに馴染みはじめた。

二股膏薬

私がアリアンサからチエテに移ったのは一九四九年だから約五〇年前ということになる。

まことに情けないボテコの、さっぱりはやっていなかったのを譲り受けて始めたわけだが、その頃はまだ例の「勝った」「負けた」の後遺症？　がねづよく残っていたようだ。　ある日そのはやらないボテコに近くの小父さんがやって来て、ボケーッと座っている私に話しかけているうちに「アンタはどっちかの？　」との問いかけに、ハハン噂に聞いたがチエテの勝組とはこれだなと思い、知らっぱくれて「あのぅなんですか？　」、すると「判ってるじゃろが…、勝った方かい負けた方かい？　」「ああそれですか。私は特にどういうことはないんですが…」「わしゃぁ二股膏薬は嫌いじゃけんノォ」と不機嫌顔。

こんなことが先ず第一に印象づけられたことで、成程と思った。

クリンバター

チエテに移ってからはベラフロレスタ俳句会を主に、そちこちにあった句会に出掛けた。ベラフロレスタにはアリアンサ組が念腹師を擁し合同句会でイーリャセッカに遊んだりで、ペスカの猛者たちで逞しい句会であった。

ペスカと言えばあるとき保田草南君と兄さんの徳衛さんたちでさるラゴアで網を引いてもらい、凄い量のクリンバターを捕らえた。それをチエテ橋近くの岩場で料理して親身をとり、ブリッタにしたり味噌汁を作ったり、家族連れの仲間一同満腹して楽しい一日をすごし、帰りには各々たくさんのクリンバターを貰って帰ったのであった。

そのときの思い出にこんなことがあった。

桜岡かすみさんの旦那さんが網にかかったクリンバターをはずしていて、一匹のピランニャがいるのを見つけ、「この奴」と言ってポンとその鼻先を平手で叩いた途端パクリとやられて、掌のワタモチの所をポコンと穴に咬みちぎられてしまった。

死んだピランニャに咬みつかれたと皆笑ったが、ご本人は癇にもさわったろうし、ずいぶん痛かったようだ。

ピランニャの口は、とにかく物に突き当たれば自動的にひらいて、例の鋸のような歯が食い入り、身を引けばあの鋭利な歯で口に入った相手の肉片が咬みとられるのである。

恐るべき魚ではある。

黄昏の水没者

私はよくブラリとチエテ橋に出掛けたり、或いはアリアンサ方

面からの帰りのバスを途中でおりてあの橋畔をそぞろ歩きしたりして、橋上にたって上下の流れを眺める。また夕映えに染まる川面をこよなく美しいと思い、延々と流れ来って又はろばろと流れ去る水の千変万化するかたちを、また細波を立てて来ては突然渦をつくっては漏斗状の真空が深く水中に突き刺さり、特有のあの形容し難い音を立ててはは又平然と流れてゆき、瞬時も熄むことなく生きて流れる水の神秘さに独り静かに浸れるのが好きだった。

その日も夕方近くアリアンサ側の橋の袂まで行って引き返そうとすると、あの橋脚の下で水浴している者がいるのが目に入った。

着物は脱いで川岸においてあるようだ。

男はモレーノで痩せていて、東北人のカマラーダという感じであった。

彼は腰のあたりまで水に入っている。あのあたりはご存じの人が多いと思うが、流れの関係で水があたるので岸から急に深くなっていて、橋を中心に上下に渦を作っては流れており、水浴びや泳ぎは非常に危険とされていた。

何ということなしに眺めていたが、彼はずんずんと深みのほうに進んでいる。しかも泳いでいるのではなく、一足ひとあしと彼の体は水が胸に届き首にあがり、一瞬の間に頭が水中に没してしまった。

ただ呆然と見ていた私は、漸くこれは異変だと気づいた。

橋の側をかえて下流を見たが、彼は再び浮かび出ることはなかった。

思えば彼の様子では泳げるようではなかった。ただ底の流れに足をさらわれて深みに運ばれたものと思うが、ごく静かにしずか

に深みにと進み水中に没していった。両手を挙げて助けを求めるでもなく、助かろうともがく状もなかった。

私が橋をそぞろ歩いて行ってから二十分程の間だが、車も人も通らなかったので、現場を見たのは私一人だった。私は索然とした気持ちで歩を返した。

一分間にもみたない時間に目にしたことは、自殺者とは思えないし、見誤ってのことでもないことは確かだが、最後まで助けを求める仕草も見られなかったのだ。又たとえ助けを求められても施す術はなかった。

思ってみればこのチエテ河に死体となって漂ってくるものが一目についたものだけでも年間に幾つもあると言うことである。そんなときは大抵掛かり合いを避けて流れの沖に死体を押し流すという。往昔から幾多の死体がこの大河に流れ下ったことであろうか。自殺者、誤って転落した者、水泳中の事故、犯罪者による死者等々・・・。

チエテ移住地時代にもある老婆が行方不明になり、この河の沿岸をかなり広範に探索したが、ついに判らなかったことを憶えている。

清濁合わせ呑んで大河は瞬時も休みなく流れ来り流れ去る。今ではこの大河も当時と様変わりして、あの地帯は一望の湖水となっている。さまざまな思い出のあの橋もあの岩場も、又あの砂浜もみな水の底となってしまった。

この水没者のことは警察に届けたとてなす術はある筈もなく、「あぁ、そうであったか」程度のことであったろうと思う。

このことは妻に一度話したことがあると思うが、他に誰も知らないまま歳月は流れた。あの懐かしいチエテの吊橋にはある日ある時こんなこともあったのである。

凡そ三十年も昔の夏の終わりころの追憶である。

藤原健さん

俳句会ではベラフロレスタのイーリャセッカ吟行が印象にふかい。

島江に伏し万雷の滝を懸け　　金二郎

これなどイーリヤセッカと言えばすぐ思い出す一句である。そして又金二郎さんと言うと思い起こされるのは何年か続けて行われたサンペードロの句会である。

金二郎さんは後に青山と号し、しまいには藤原健と申された。この藤原健についてこんなことを思い出す。

その頃突然邦字紙の俳句欄にチエテ藤原健と言う名が見えて、仲間たちがさて誰だろうということで、チエテには藤原姓の人が三、四人いるがどうも俳句とは結び付きがいま一つ、ということであれこれと言ったものた。

そうしたある句会のとき、私が話しかけて「この頃チエテ藤原健と言う名がありますが、どなたでしょうねぇ」と尋ねると「そうですねぇ、誰でしょうかねぇ」とあの謹直な表情で申された。

その後しばらくして判ったのだが、何とご当人の吉原さんその人だったので大笑いしたことがあった。

その金二郎さん時代にシャカラのお宅でサンペードロの夜は句宿をもってくれて、庭に焚き火をし、賑やかに楽しく句会がなさ

れた。
ご長男のペードロさんのあやかりでサンペードロ句会をして頂いたのであった。そして歓談の後はポルチチリの画論など聞かされた。
奥さんもご家族の人達も皆よい人達であった。そして帰りにはたわわに成った蜜柑の夜をみながお土産に頂戴して帰ったものであった。
チエテのことは遅く住人となった私にも限りなく思い出すことは多いが、とても一度に書けるものでもない。一九五三年病を得て療養三年余にしてチエテに戻り、約二年にもて再発、一九六九年全快して帰宅し、一九七一年サンパウロに移転して今日に至っている。

一九九五年八月記

農業落第生

菅井　進一

一九三三年三月三十一日「行け行け同胞　海越えて」の合唱に送られ、十二才七カ月で叔父家族の一員として、兄姉と共に神戸港埠頭を出帆しました。送る人も行く人も涙また涙、無性に泣けました。どうしてこんなことになったのかと子供心にも憤りを覚えました。
この年の正月九州福岡におった叔父が、ブラジルに行くから一

緒に行こうという、両親亡き後の親代わりの叔父の一言で、ウンもスンもなく兄はその言葉に従う。海外雄飛、民族発展のためということでした。

こうして五十七日間の船旅を終え、五月二十七日サントス港に着きました。途中船酔いに悩まされながらも無事に入港いたしました。

丁度波止場人夫のストライキで下船できず船泊となり、目的地のルッサンビーラ駅に着いたのが六月一日でした。当時のチエテ河には橋もなく、危なげなバルサに乗って恐るおそる河を渡り、ノーボ・オリエンテの町に着き、名ばかりの収容所に入りましたが荷物は着かず、女たちは心細さのあまり泣き出す始末。それに驚いたことは予想外の寒さ。ブラジルは常夏の国というのに、何という寒さでああうかと思いました。

零下十度の北海道に生まれた私も震えどうしでした。夜具が着かないので棉袋を布団代りにして一夜は明けました。同航者の六家族も震えながら一夜を明かしたことでしょう。

叔父と兄は土地のことで一日中出歩いていました。そのうちに入植地も決まり、それぞれのロッテに移って行きました。私たちはA区の松田米太郎さんの旧宅をお借りして農民の第一歩をふみだしました。

何せ鍬の柄をすげることも知らず、万事旧移民のお世話になりました。

蒔付けにはまだ間かあるので、棉摘みに行をました。間もなく蒔付けの時期がきて、米を蒔き、棉を植え、ヤレ一段落と思っていると、今度は桑を植えると言う。養蚕をやる計画でした。これは

当時知り合いになった旧移民の方の助言です。農業経験の全然ないもの故、仕方ありません。

その年は籾九千余俵、棉百四十アローバの収穫があったと思います。

植え付けた面積は全然覚えがありません。それに籾がいくらか、棉がいくらかも知りません。

棉は私らの背丈以上に伸び、旧移民の話ではたくさん穫れるような見込みでしたが、あまり良い成績ではなかったようでした。そして桑も伸びてきたので養蚕小屋を建てました。

材料は原始林から切りだしたもので、器用な人に棟梁を依頼しまして、三日位の間に六メートル×二十メートル位の養蚕室が近所の方の協力で出来上がりました。

近所に長野県人で養蚕教師という方がいまして、指導を受けました。

最初一、二回は繭を作りましたが、三度目には不思議にも一つも繭になりません。例の教師に尋ねるとそれは「ハッキョウ蚕」だと言う。これじゃぁ人間の方が発狂しそうです。石灰を撒いたり、後片付けが大変でした。

こうして養蚕に失敗し、今度は砂糖黍を植えると言う。一九三三、四、五年の三年間にこれだけやりましたが、どうも思うような成績が上がりませんでしたので、叔父は嫌気がさしたのか転耕すると言う始末。これを幸いに私は叔父家族から脱けようと考え、兄に相談しました。兄はその時すでに叔父の所で二農年を過ごし、独立していました。私は当時「土マケ」がひどくて、包帯を巻けば足首より膝まで巻かねばならず、丁度ゲートルを巻いたようで、

大変厄介な腫れ物でした。薬局で尋ねたところ、フェリーダ・ブラーボではないようだが、血清注射をしなければ直らないと言われ、血管注射百三十本と筋肉注射四十八本打ちました。

兄は独立しておりましたがマレータにひどく冒されながら、町の木本さんの発電所で働いておりました。その頃アリアンサ方面では黄熱病が発生しており、チエテにも冒された人がおりました。それで木本さんは製氷を手掛けておりました。その氷の初めてできる夜、夕食を早めに済ませて発電所内にある製氷所に全員集まっていたと言います。その時所員の井口さんがちょっとした不注意から不慮の感電死をされました。

色々手を尽くし、数時間に及ぶ人口呼吸の甲斐もなく逝かれました。木本さんが大変期待された好青年だったと聞いています。彼は長野県人でアリアンサから来ていて、チエテ野球チームの一員だったそうです。お墓は中島簾女さんの隣の自然石の碑であります。

この井口さんの後に私が採用されました。主人の木本さんはアリアンサから来られた敬虔なクリスチャンで、仕事や行儀には大変厳格な人でしたが、我々若い者には自分の子供のように遇してくれました。

後日輪湖さん、佐藤常蔵さん、横山さん方が弓場牧師を中心に、皆様の物心両面の協力を得、今の聖公会の教会を建立されました。

その頃輪湖さんはよく木本さんと色々コロニア問題を話し合っているようでした。特に二世の教育問題に重点をおいていたようでした。木本さんは帰国論、輪湖さんは永住論と奥さんが私に話したことがありました。木本さんは十三才の長女と十才の長男に

日本語の家庭教師を付けておりました。主人は主張通り、子供の教育は日本でと決意し、戦前最後の交換船で帰国され、一時夫人の実家の名古屋市に落ち着きました。その頃米軍の爆撃が猛烈で家庭防空壕を掘ってあったそうです。軍需都市故とくに狙われたようです。

ある夜のＢ２９の空爆で不幸にも直撃弾をうけ、全員爆死の悲惨な運命に遭遇。その夜主人は戦時動員の夜勤で難を逃れましたが、家族全員を失って失望のあまり二度自殺を図ったが果たせず、母国再建のために生きると涙ながらに綴った手紙を戦後受け取りました。

私たちは皆泣きました。あの可愛い子供達が一人残らずとは余りにも無残な・・・。佳保子十四才、保羅十一才、名保子七才、弥保子四才と夫人の五人でした。護国の盾ともいうべきか、戦争の犠牲とは言えあまりにも痛ましい最後でした。

私は戦時中弓場牧師に誘われて、フォルモーザの「弓場農場」へ行きました。一九四二年だったと思います。その時初めて弓場勇さんにお会いして色々な説明や主張などを伺いました。弓場さんは特に芸術の必要性を強調されました。私は字では芸術は読めるが、恥ずかしながら芸術とは何をするものか皆目見当がつきませんでした。寒いときでしたので、六、七月頃だったと思いますが、その次が野球でした。大変熱のあるお話に感銘をうけたことが印象に残っています。とくに精神野球、チームワークは国志の野球と言う。涙を流さんばかりの熱意ある論調、随分血の気の多い方だと思いました。

その頃私は弓場野球の歴史を知りませんでした。後に或る文献

でミカド時代の野球を知りました。とにかく私は家に帰って早速野球チーム作りを考えました。

ころは戦時中なので野球はやっても良いがブラジル語でやれと言う。

これもブラジル語に強いのがいて何とか切り抜けることができたのですが、とても面白いものではありません。それでも若い者はみな退屈していたので、喜々として一日中走り回っていました。戦時中の一駒であります。

弓場さんは私にこういうことも言われました。

「菅井、本田のゴーイ君は百アルケールあるじゃないか。鶏を飼え。鶏は卵を毎日生むから、女子供でもやれる。鶏舎は建ててやる。雛や飼料も送ってやる。その代わり卵はよこせ。二家族の生活費はやる」と。

これをゴーイ君に伝えると、

「弓場さんは瓦を買いにくる度俺にも前から言ってたけど、進ちゃん考えてみな、俺が野球に行ったら千恵子（夫人）はついてくる。卵拾いどころじゃないよ。進ちゃん、君のカァチャンもそうじゃないか。ママイに苦労かけるから嫌だ」と言う。

考えてみれば五百羽の鶏が全部卵を産んでも四十ダース、この卵が幾らになるか、私にも計算できそうな額で、考えているとやる気もなくなりました。

第一回四移住地野球大会の折、弓場さんに紹介されたのが今世界的に有名な間部学画伯でした。私はユニホームを着ていてすぐ球場へはいりましたので何を話したかも覚えていませんが、後日

機会があって弓場さんの長男の哲彦さんに聞いたことで、間部さんも五百羽飼ったとのことですが、直接聞いた話ではないので真偽は分かりません。

こうして私は半生を野球で過ごしてしまいました。

尊敬する先輩の赤川さんにチエテの野球を絶やしてくれるなと言い渡されたのを守ってきた、ただそれだけのこと。名選手でもなく、名監督でもなく、人生の終着駅も近くなった昨今、ただ馬齢を重ね、農業移民の落第生として生きていることを恥じています。

最後にちょっと前述の叔父一家の渡伯について書き足し、この拙文を締めくくりたいと思います。

叔父は九州福岡の或る炭鉱の整理に沢山の人を解雇しました。そのため恨まれて一夜暴漢に襲われ、日本刀で住んでいた二階に切り込まれました。その時はピストルで防ぎ事なきを得たのですが、叔母が恐怖のあまりノイローゼになりましたので、日本を離れたのが真相です。海外雄飛の理想も、彼には海外逃避でした。

チエテからイタペチニンガ、南大河州と渡り歩き、聖市にて交通事故で亡くなりましたが、私は「土マケ」のため同行してやれなかったことをお詫びして擱筆します。

遥かなるチエテ移住地ドラード区

大　石　青　村

一九九五年十一月五日、聖市ビーラ・モラエス日本人会館で、チエテ移住地ドラード区出身者の第十八回目の郷土会の集いがあった。

その日四十一名の出身者が集まった。入植最盛期でも四十五家族だったのだから、この種の集まりでは多く集まった方ではないか。殆どが十才前後でドラード区に入植して、新築なったドラード小学校に通った者たちである。最初この集まりは広田栄一さんと升田甲子男さんの呼びかけで、先輩刈谷常利氏を中心にできた集まりで二、三回欠けた年もあったが、ずっとつづけているのである。先輩刈谷さんは惜しくも昨年逝かれたが、会は現在広田さんを中心に、刈谷一君と宮城君が会を運営しておられる。

その日は各自「持ち寄り」の御馳走を食べかつ飲みながら、栄ちゃん、武ちゃんと幼名を呼びあってドラード時代の思い出話に爆笑して時を忘れるほどだ。そのうちに喉自慢が始まる、我もわれもと舞台にあがり昔の流行歌を合唱したり、綾ちゃんと照ちゃんの踊りに見ほれて最後は盆踊りで締めくくった。みな満ち足りた顔をしてまた来年の集まりを楽しみにして帰って行くのである。

チエテ移住地ドラード区は四十五家族の小さい区であったが、移住地では異色の区であったと思う。ドラード区の有名人は広田栄一氏だ。戦前戦後の野球界に大きな足跡をのこされた。投打走三拍子そろった名選手でブラジルに野球界の殿堂があれば間違い

なく列せられるだろう。パウリスタ・スポーツ賞を授与されている。またロンドリーナの刈屋三男氏はドラードの名ショートだったが、北パラナのテニスの功労者としてパウリスタ・スポーツ賞を授与された。しかし刈谷氏は先年不慮の自動車事故で惜しくも逝かれた。

音楽界ではモジ・ダス・クルーゼスのコスモス楽団を率いる広田三郎氏がいる。また彼と御神酒徳利のように音楽をやっていた竹田政夫氏はバイオリンで名をあげたし、いまは息子さんがバイオリンの名手で父親を越えているという。また政夫君の父君は尺八の名取だったとか、親子三代の音楽家だ。その他にいま全盛の聖市カラオケ界で名をうっている鹿間氏、今井氏、宮代氏などなかなか上手が多い。彼らは先輩が上手であったからと卑下しよる！？　。

一時は盛んだったドラードの俳句会も続けているのは緑風と青村だけだ。詩檀には叙情詩で最近目立つ鹿島よし子さんがいる。才気あふれる妹のみよ子さんは如何にしそおられるだろう。

また異色の理論家蟹井君、長者の風があった蟹井敬三君、美術の町エンブーで遅咲きの画家を目指す渋屋繁華君、こう書いてゆくと、わがドラード育ちのメンバーは錚々たるものだったと思う。さすがにドラード出身者には実業で成功した話はあまり聞かない。これはどうも伝統が刈谷、富沢、広田の諸先輩の系譜につらなる人生の快楽派で、人を押しのけてまで出世しようと言うものはいなかったようだ。集まったトラード会の面々をみてもみな多難な人生を過ごしてきたことと思うが、みな一仕事を終えてきた良い顔をしていた。

チエテ移住地サンジョゼ地区ドラード区はウニオン区から始まり、ラジアード区と背中合わせで川を挟んでチエテ河とサンジョゼ河との分水嶺を馬蹄型に区割りしてあった。土地は砂質土壌であったが地味は悪くはなかった。

入植したのは一九三六年九月二日としてある。私たちが第一回移民で、八月三十一日サントスに入港したリオデジャネイロ丸でついた二十数家族である。一行はサントスに迎えにこられたブラ拓の移民指導員の高野、梶山の二氏に引率されて九月一日サントスを出発し、翌二日夜ノーボ・オリエンテと呼ばれる移住地市街地についた。暗い街だなという印象があるばかりだ。翌日ポチー区やラジアード区にゆく人達とわかれて、十二家族はウニオン区の真砂さんちかくの荒れ地に新築の板の匂いのする移民収容所にはいった。

収容所といっても長さ三十メートルの平屋で、真ん中に通路があって両側に板の床が張ってあった何とも締まりのないバラックで、神戸の収容所とは大違い。だんだん待遇が悪くなって、みなどんな夢をみてきたのか不平を言い合っている。

翌日は入植地視察と地区割りである。移民たちは神戸で仕入れてきた巻きゃはんと帽子をかぶり勇んで出かけていった。

三日前に山焼きしたという入植地にみんなビックリしてしまった。まだ燃えている立木、黒焦げの倒木、雪のように積もっている灰、この場所があなたの土地ですと言われて、唖然と途方に暮れる移民たち。生まれてから一度も鍬や斧など使ったことのない人達が多かったので、無理もなかった。行くときの張り切りとはうらはら、ションボリと帰ってきた人達を見て家族のものも不安

となり、収容所の空気も沈んでしまった。
それでも翌日は気を取りなおして出掛けていった。錦衣帰郷を誓って家屋敷を売り払って出てきたのである。
山はよく焼けていたので片付けは思ったより捗った。しかし中には開墾に恐れをなしたのか、旧移民の勧誘に負けてか、四家族が十日目ころに収容所を出て行ってしまった。残された人達はただ呆然と見送るばかりであった。
それでも一カ月後には移民たちの井戸や家もでき、早い人は収容所から移っていった。そこへ第二回の移民たちがやってきた。今度来たのは五家族であった。みな明るい人達で、また収容所も賑やかになった。
ついた次の日から収容所の空き地でキャッチボールをはじめたので、私たちはあきれて見ていた。これが広田栄一さんたちである。
こうして十一月には収容所を後に各ロッテに入植して棉の蒔きつけをした。十二月になると向かい側の土地にも入植してきたのだろう、夜になるとランプの灯がみえた。三つも四つもみえあ灯火に皆きたのだなぁと心強く思ったものだ。
翌一九三七年には区会もでき青年会も発足し、ドラード区の体裁も整ってきた。満植になったドラード区の背中合わせの奥ドラードが拓かれて、新移民たちがその年にできたドラード会館を収容所として次々に入植してきたので、また賑やかになった。
一九三八年には奥ドラードにグルッポ(小学校)が新築され、授業がはじめられた。子供達はみな誘い合わせては奥ドラードの原始林の道を通ったものである。
そのころ青年会では野球が盛んであった。広田さんの隣に市田

さんという東京出身の陸軍省のお抱え運転手で、当時羽振りのよかった荒木大将を乗せたと言う人がいて、この方が野球道具一式をもっていたので野球場もないのにあっちこっちに試合にいったのである。間もなく豊田、大石両家から土地を提供してもらい、野球場ができてグランド開きが盛大に行われた。チームは刈谷兄弟広田兄弟を中心にしてチエテ移住地の強豪第一市街地チームと拮抗するようになった。中でも広田栄一さんは入植して次の年からチエテ野球の中心選手となった。

刈谷常利さんは愛知県出身で名古屋の中学で番をはっていたそうで、退学も食った強者である。当時マージャンをもって来ておられ、家族で楽しんでおられた。広田さんもここで手ほどきされたらしい。また当時会館で夜学を始めたが、ブラジル語の勉強だけでは飽きるからと、藤原義江の「鉾をおさめて」や「走れ大地」の歌を教えてくれた。後年チエテ盆踊りの名物男になった米山君もこの仲間だった。いま考えるとあのころ棉しかできない土地でみな経済的には十分ではなかったが、結構楽しく暮らしていたのだ。

一九四〇年ドラート区に最後の入植者として後藤三四男氏がこられた。会館を仮の宿として家ができるまでおられた。後藤さんは大阪府出身で見るから知識人の風貌で、当時のインテリが憧れた武者小路実篤の「新しき村」や有馬武郎とか国木田独歩に傾倒して、ブラジルの新開地に理想郷を夢見てこられたロマンチストであった。新開地の人々に読んでもらおうと夥しい書籍をもってこられた。新開地に私設図書館を開くつもりだったと言われた。

そのころ読みたくても誰も書籍をもっておらず、あるのは「キ

ング」か「家の光」ぐらいで回し読みをして読書欲を癒していた。読書に飢えていた私たち思春期の青年たちは、むさぼるように後藤さんからお借りして読んだものだ。蔵書には文芸物は世界文学全集から日本の明治大正昭和の名著がずらちと並んでいた。歴史ものは国民の日本史に世界史の大著まであった。目録でしかお目にかかれない本がいっぱいあるのだ。

私たちは興奮した。あの当時炎天下四十五度の畑で耕馬を追い棉の消毒をして濡れぞうきんのようになって帰り、風呂も夕食もすばやくすませて、本に武者ぶりついたものだ。あのほの暗いカンテラの灯で十二時頃までむさぼり読んだ。ときには二時三時までも読み親たちに叱られたものだ。それでも私たちは幸福だった。後藤さんのお陰であの暗黒の戦争中でも読書だけには飢えずにすんだのだ。当時の日系日本青年たちの環境では、シートンの動物記やファーブルの昆虫記、H・Gウエルズの世界史大系等などは、どこの植民地でも容易に手に入る本ではなかった。

それを私たちは後藤さんのお陰で読めたのである。

先年自動車事故で惜しくも亡くなられた刈谷三男君に亡くなる二年前にロンドリーナで会ったとき昔話のすえに、「自分たちはこうして学校にも行かなかったが、どうやら人並みの人生が過ごせるのも後藤さんの書籍のお陰だったなぁ」と心から述懐しておられ、私がうなづくと、「一番読んだのは俺とお前だったからなぁ」と、当時を偲ぶようにつぶやかれた。その後藤さんも現実と理想との差異になやみ失望されて、「こんなラジオも電気もない文明から隔離された地に妻子を連れて来てしまって、これから子供達のことを思うと夜も眠れないですよ」と涙を湛えて述懐された。聞

く私たちも何とも返事のしようがなかった。インテリで体も丈夫でなかった後藤さんは終戦後祖国の敗戦を憂いながら亡くなられた。

後に残された長男の耕士君は年若くして家族を背負い養鶏に転換して父上の跡を継ぎ、後には東山農場の土地を買われて養鶏と園芸で大成し、今は悠々自適の余生を送っておられる。

美しかった母上も今は清らかに老いられ、ドラード会には必ず出席して私たちに逢うのを楽しみにしておられる。耕士君もいうのである、「うちの親父などあれだけブラジル事情の本を読み、石川達三の蒼氓も読んだはずなのにどうしてブラジルに来たのかなぁ」と笑うのである。後藤さんは本当のロマンチストだったのだ。

戦後は移民少年たちも青年団の核となり、多少のいざこざはあったが野球に陸上競技に又弁論大会にも出場したが、ドラード青年の論旨は他の区の青年達とは違うと言われたものだ。

そのころ各区では演芸会も競ってやったものである。隣村のウニオン区はもっとも盛んで毎年芝居をやって有名だった。ドラード区でも演芸会をやることになった。子供達や女子青年の手踊りはあまり苦にならなかったが、青年達が「ベニスの商人」をやるからみてくれと頼まれた。

「それは難しいぞ、舞台装置や衣装はどうする」と聞くと、いとも簡単に作るから大丈夫と自信満々だ。

見ていると、そのころドラードでは養鶏をやっていたので飼料の空き袋がたくさんあった。これを利用して染め粉を買ってきてルネサンスのベニスの商人時代の衣装をつくりあげた。そばでは

見られた物ではなかったが、舞台にたつと中々のできで、青や赤や黄のみな原色であるのがあのルネサンス時代の雰囲気がでていて、やるなぁと感心した。

ベニスの商人は後藤進君のシャイロックが熱演で、アントニオは千田耕喜君がやり、裁判官は渋谷繁幸君が威厳のある裁きをみせて大好評であった。

次の年はリア王物語と渋谷君はシラノ・ベルジュラックをやるという。

みな張り切って舞台装置から背景幕まで楽しくつくりあげた。背景はリヤ王のもシラノも渋谷君が描きあげた。リヤ王の宮殿場面などよく描けてみなを驚かせた。「渋谷君絵かきになれよ」と言うと笑っていたが、このごろやっと描く気になってエンブー公園の絵描き仲間に入ったという。

衣装作りだけでも大変だった。区会から金がでるわけでもなく、青年会に金があるわけでもない。金を使ったのは塗料と釘や針に糸ぐらいなものだ。農閑期とはいえ昼は働きながら一晩おきぐらいに稽古した。児童劇も子供達の踊りもと欲はふかい。リア王の出来はまずまずだったが、シラノはやりたい熱意でやるのだから中々の出来で、渋谷君のシラノは大熱演、ロクサーヌの明ちゃんとの舞台の場面など上出来で、会場をわかせたものだ。産業組合の文化部が照明を担当してくれて素人の手作りの舞台装置も立派にみえたものだ。

一九五四年ころブラジルの日系コロニアでシエクスピアやロスタンの劇と取り組んだ青年達がほかにあったであろうか。ドラードの青年達は演劇など見たこともないのに、世界文学全集を読ん

だだけで、やろうという情熱があった。やれば出来るものである。これも後藤さんの蔵書のたまものであった。後藤氏が蒔いた種は生えたのだ。ドラードの青年達の心の糧となったのである。

しかしそのドラードもこの年を絶頂として崩壊して行くのである。

そのころの農村不況と、ブラジル全コロニアを襲ったはやり風邪のような大移動の波にさらされたのである。一家族また一家族とそれまでにも移転してはいったのであるが、この年に私たちがパラナグワにうつるとブレーキが切れたかのようにみなサンパウロ郊外にムダンサして行き、六十年頃には三、四軒しか残っていなかったのである。

七〇年頃私たちがトラードを訪ねたときには、ペレイラ・バレットよりウルブプンガ行きのアスファルト道路ができていた。馬蹄型のドラード区の高台を行くとわが家のあった所にパストの入り口があり、入って行くと大きなフィゲーラが青々と傘を広げていた。あのフィゲーラだ。

わが家の豚小屋にそって大きなパウダーリオの倒れ木があった。その腐れかけた幹に宿ったフィゲーラがぐんぐん伸びたのだ。豚の日陰にちょうど良いのでそのまま置いたらぐんぐん育ち、四方に枝を伸ばして私たちがおった頃でもどんな暑い日でも、その木陰はすずしかった。私たちはフィゲーラの木を背景に写真を掘った。見れば広田さんがおられたあたりもマンガの樹が残っているのですぐ分かった。向こう側の岡島さんもマンガや竹やぶが残っているので分かる。ふといまだ斎藤さんがおられるのを思い出して訪ねる。歩道をおりて昔のサンジョゼ街道を下って行くとド

ラードの区道にであい、そこにまだ斎藤さんがおられた。昔ながらのポルトンを押してはいると、家のそばにあったあのカジューが見上げるような樹になっていた。声をかけると戸を押して出てきた老父が「なんだ武ちゃんでねぇか」と抱き着いてきた。嘉蔵さんだ。私たちと同船で一緒にドラードへはいった東京育ちの方で、お父さんは棟梁で家作ももっていたのを売り払って来られたのだ。お母さんは江戸っ子かたぎで涙もろかったが、よく私たちも叱られた。嘉蔵さんは徴兵前でこられた意気のいい若い衆であった。通された家のメーザもみおぼえがあった。昔のままだ。大きなパストに囲まれながら、頑固に十アルケールの土地を守りとおしてきたのだ。故郷をすてた私たちを責められている感じでいたたまらなかった。

それからまた幾年か過ぎた。ドラード会は毎年サンパウロで集まって入植当時を偲んでは楽しんでいる。月日の経つのははやく、私たちがドラードを出てからでさえ四十年になるのだ。チエテの入植祭のたびにドラード区を訪ねたが、最後の一人の斎藤さんも亡くなられ、家族の方も移っていかれた。そして今はただ豊かな牧草に牛の群れが遊ぶ牧歌調の大地となった。あのグランドに日曜毎に聞こえた若者の歓声もない。四十五家族がこの地に入植して喜び、泣き、涙して愛したドラード。それも顧みればたったの二十年だったのだ。しかし私たちには掛け替えのない貴い懐かしい生活だったし人生だった。

私たちが拓いたドラードは再び自然の大地にかえったのだ。

遥かなるチエテ移住地ドラード区よ。

一九九六年三月記

入植当時の思い出

上原　萬平

風の強い日に発電所の堤防に立って湖面を見渡すとき、はるかな湖面を渡る風とともに大波が岸に寄せては砕ける様子はどこかの海岸に立っているのではないかと錯覚する程であります。

この茫々として果てしない、人造湖の湖底にはパイオニアとしての私達父祖の、大移住地建設の夢と苦難と栄光があるのだと思うと、感無量となります。このままでは遠かちず全てが湖底に葬り去られると思うとき、香山さんがチエテ移住地の郷土史編集を思い立たれたことは真に時宜を得た神の摂理とも言うべき快挙であります。

今なら移住地の諸記録も開拓初期の存命者もあり、大変骨の折れる仕事ではありますが、これによって、ブラジルでも有数の大移住地の歴史が永遠に湖底に葬られることなく、パイオニアの苦難と栄光の軌跡が万代に保存されることの意義は計り知れなけほど大きいものであります。

存命の初期開拓者の一人としてここに思い出の記を書き綴ってみました。

同航の五家族と意気投合した二家の計七家族でチエテ移住地に希望と夢を抱いて入りましたのが昭和六年の六月でした。

私達が入植予定のＢ区は入植者は磯島吉正氏までで未だ地区割りがされてなく、私達はブラ拓直営コーヒー園全部を一ヶ年引き

受けることになりました。二年目のコーヒーで十万本以上ありました。まだ悪性の雑草が全然入っておらず、モジアナ線の旧コーヒー耕地を思うと大変らくな仕事でした。陸稲も二条間作が許容されていて、これも見事な作柄でしたが、値段があまりに安値で（一俵三ミルレース、袋代三百レース）私達七家だれも売らずに畑に藁でサイロを作り一年保管しました。次の年はこれを一俵十六ミルレースで売りました。

サイロは直径二メートル以内で、相撲の土俵のように俵を重ね、これを固定して一・五メートルほどの高さに積み上げました。こうして傷めることなく保管しました。

七家族で十五才以上の青年六人女子青年六人を含めて二十人の稼働力があり、コーヒー手入れの余力はブラ拓の道路開削、カッポエイラのロッサ、原始林伐採と大変仕事が多く、これを西河原己代造氏が代行してブラ拓から請け負い、七家族一丸となって頑張りました。

いろいろの仕事の中で一生の思い出として残るのは原始林伐採でした。

娘たちがフォイセで下草をロッサ（下刈り）をして行き、青年や男たちは二人が一組となって太い木を伐りました。大木も二人向かい合って切りますと楽に伐れます。

ブラジレイロの人夫たちが「ピカンサ」と言っていた大木の将棋倒しが痛快でした。この場合下側の木を伐りきらずに充分残しておきます。

これは「うけ、下側」を深く伐ってあれば失敗はなく、これに上側の大木を倒しかけますと次々に倒れていき、下側の木を切る労

力は半減するわけです。
巨木が倒れるとき木質部の抜ける音も物凄くググーゥと下腹に響くような音と、大木を倒しかけられた下側の木がその重さに堪えきれずググーゴォーと風を巻き起こして倒れ、ひどい埃とともに枯葉や木の皮が空中に舞い上がる。その轟音は原始林に遠くこだまして余韻を残し青空は一度に広がる。何千年を原始林に君臨した王者の雄叫びであり、断末魔の呻きとも思われる感じです。これは開拓者のみの実感する勇壮な醍醐味であったと思います。
次年度の六月頃でした。ブラ拓からの要請もあり、私たちのツルマから三人測量隊に参加することになりました。外に伯人青年三人の六人でした。エンジェネーロは古河ドトールでした。この伯人青年の一人に後年日本語研究で有名になったジョゼ・サンターナ氏がおりました。彼はバイアーノでした。
最初の本拠はB区第一号入植者の肥塚康夫氏の所でしたが、ガラージの中のカミニョンに沢山藁が積んであり、その中が寝るところでした。
ランプはなく、みな早く寝ました。次の朝は早く起こされ、まったく塩味のない食事をして、水ももたず、フォイセだけを持って働きにでました。
幹線道路予定のピッカーダに打ち込まれているピケッチ（杭）にトランシットを据えてバリーザ三本を尖らせた頂点を合わせて固定し、これを延長して行きました。バリーザは自分の目の高さに合わせて頂点をよく尖らせて作るように注意されました。
この線を延長していて面倒なのは途中で大木に行き当たったときです。

木の太さに応じて横に直角に三本バリーザを立ててこれを延ばし、木を通り越してまた同じように本線にもどします。

ブラジルは幸い猛獣のいないことは解っており、毒蛇以外は恐いと思ったことはありませんが、ピッカデーロの仕事中に二、三十頭位と思われるケッシャーダの群に行き会いました。牙をガチガチ鳴らして威嚇しました。三、四メートルはあろうかと思うジボイアやスクリーも見ました。またオンサにも会いました。これはカサッと薮中に飛び込めば決して後は音を立てなかったのは不気味でした。

飲料水はシッポ（蔓）を手早く一メートルほどに切って立てますと透明な水の出るのがあり、少し渋味がありますがこれを飲みました。

測量隊もカミニョンで移動し、藁の中に寝ることができたのはまだ条件のよい組でした。

こうして移住地は開発されていったのです。

一九九五年八月

チエテ入植思い出の雑感

土屋　一治

旧チエテ移住地入植の思い出は昔噺だ。チエテ移住地が在伯者に解放されたのは一九三一年だった。護憲革命が起こって政府軍の討伐隊と今のサンタフェ・ド・スール付近で交戦して負傷兵の

手当をチエテ病院でし、撤退したばかりの移住地にムダンサのガラクタ荷を積んで到着した昔の無鉄砲にあきれられた。まさしく現代班ドンキホーテであった。

革命の恐ろしさを知らなかった。ラジオやテレビーのなかった時代、革命軍は降伏前なのに義勇軍を集めたアラサツーバ・コンマンドに秋永忠治カピトンがいたぐらい。情報に疎かった入植の思い出にはそんなドンキホーテ的のものしか記憶がないほど年月が経ってしまった。

革命で山（原始林）伐り人夫か集まらず、私の地区は七月末というのに伐採されずにあった。七月になっても山を伐られずにあった状態なので、山焼きしても不焼山ときめていた父の重一は怒って「今年は入植せぬ。バルパライーゾへ帰る」と移住地事務所でいきまいた記憶がある。

中島一夫副支配人はあわてて何とか善処すると宥めたぐらいだ。

百姓しか知らぬ精農の父らしく、中島一夫氏に気の毒した。

後年スザノの土地の測量をたのんで拓舎で寝起き中、

「親父もチエテへ来たころ元気だったなぁ」と父はからかわれていたが、北海道の駐屯兵で日露戦争の勇士でもあった。

バルパライーゾで待機の二百家族の入植者がくると中島一夫副支配人の首はとんでしまう。

二百家族の入植者全部入植した訳ではないが、これらはアグワペ日本人連合会員で同じ耕主の耕地のカフェーの四年仕立て契約者だ。運命共同体だ。一九三一年の六月の大霜にやられて一獲千金の夢は一夜の霜でフイになった人達だ。高台ばかりの地区を請負った人はその銭を握って帰国者が二家族も出ていた。

そのころの移民で耕地の賃金では絶対帰国旅費は稼げない。カフェーの四年仕立て契約、アルゴドン、トマテ栽培が帰国者を多くだした。そのころの作物であった。誰も競ってやった。

イニューマ区、バラボニータ区入植の在伯者たちはノロエステ線の日本人移民で、とても冒険心に富んだ部類の人達であり、気概もあった。

これらが日本直来の人々の作った移住地内の諸団体を吸収してしまったので、以前の青年連合会、産業組合、チエテ会は一応解消せしめている。

そして新しいものを生んでいる。

私は終戦と共にチエテを出てしまってその生成発展を知らず過ぎて五十年ならんとしているが、私の二十四才から三十七才までの青春の地としてブラジルにおける古里のごとく思い出の地である。

植民は一朝にしてならず、随分犠牲を払った上に電源の町、水路の町として発展を約束されている。

私共は年齢的にその成果を見るをゆるされぬが、せめてこの地は日本人移民によって拓かれたと後世に言い伝えられれば満足である。

ペレイラ・バレット

みず底に眠る沃土を拓きます移民吾が名を知る人ぞなし

うつそみの限りある身におもえるはとわにさえゆく名のみ望まむ

くすしくも己が幼名呼びとめし君の童顔記憶しいたる

墓石のまろく小さき君の墓移住地の外知らぬ人ぞなし

一九九五年三月記

思い出あれこれ

広田　栄一

奇しくも戦後五〇年と同じ金婚式を子供達に祝ってもらったのがつい先日でした。思えばカロッサに乗って一三キロ、若夫婦が結婚届けのためペレイラ・バレット市のカルトリオへ行ったのが八月一五日の終戦の日でした。

私のチエテ時代はその年月のもっと向こう側で、記憶もまばらでとても文に纏めることは書くことの苦手な私にとって無理なのですが、思いつくままに取り留めのないことを綴ってみます。

一九三六年八月は、ベルリン・オリンピックの最中で、「前畑ガンバレ」の声の中神戸港を出航。チエテ移住地に着いたのが十月四日でした。

それから第三市街地の奥のドラード区に入り、何も知らない百姓仕事はかなりきついものでしたが、それでも内地での中学校時代の野球練習からみれば軽いものだと思いました。それほどあの頃の学生の野球練習は猛烈なものでした。ブラジルでまた野球ができるなんて夢にも思いませんでしたし、到着した夜訪ねてきた後義兄となった田口繁治の話で、チエテ野球部がその年全伯大会の優勝チームと聞いて驚きました。それから戦争が終わるまでの九年間、チエテ野球部の一員として青春時代を過ごしたことは何時

までも忘れるものではありません。
私の家では父が野球好きで、遠い昭和の初期六大学野球のファンでした。私が九才のとき父からキャッチャーミットを買ってもらったのが私と野球との出会いでした。
入植当時のチエテには日本で農業をしていた人が多かったせいか、日曜も祭日もなく働いた人が多く、私のように日曜日には休み、また全伯大会に備えて長期の合宿をしたりもするので、かなりバガブンド視されていたようです。
当時交通機関といえば、第三市街地から第一市街地（ノーボ・オリエンテ町）へ一日一回のジャルジネイラで、日曜日は運休。それで他区へ遠征となると騎馬で出掛けるのですが、選手の多い家があって馬の足りないものは皆歩いて行ったものです。遠いところは往復約二〇キロもあって帰り道は夜になり、暗くて原始林のなかは歩けないので、途中知人の家で月の昇るのを待ったこともありました。今から思うと今昔の感にたえません。
戦前チエテの青年達にとって楽しみといえばスポーツぐらいなもので、弁論大会はありましたが、相撲、陸上競技、野球などがチエテ青年連盟の主な行事で、中でも陸上競技が一番盛んでした。毎年六月二九日のサン・ペードロの日が大会日で、我がドラード区も入植三年目の一九三九年から参加しました。私も出場しまして、当時一八才の若さは自分でも驚くほど記録がのびて、チエテ大会、ルッサンビーラ大会、そしてノロエステ大会と入賞し、終に全伯大会に出場するということになりました。
南部忠平さんがブラジルに来られたころ、私はガララペス市での一週間、ノロエステの精鋭とのヘドの出るほどの合宿訓練は私

の青春時代の最も懐かしい思い出です。しかしサンパウロの全伯陸上競技には、野球大会と重なって出場できませんでした。

いま孫たちはもとより若い連中に、俺はむかし足が速かったんだよと言っても、腹の出た私をみて彼らは信用できないという顔付きでいます。

先日恒例のドラード会がありました。当時の家長の人は亡くなられ、青年でも私が年長組になってしまいました。ドラード会は聖市の郷土会としてはチエテ移住地内のいずれの区よりも早く始まったと思いますが、この会で思い出すのは発起人の升田甲子雄君のことです。彼は私より四年ほど後から入植したのですが、既に両親はおらず、伯父さんの家族と一緒に来て二人の妹さんと住んでおりました。僅か四年の差ですが何かと意見が合わず、一種の異端児として青年団の持て余しものでした。その彼とサンパウロ市へ出てから長い交友が生まれるとは人生面白いものです。彼が出聖した当時はジュケリー産業組合、後のスール・ブラジル産業組合で働いておりましたが、結婚と同時に退職して洗濯屋になり、何年かして独学でＵＳＰの歯科に入学し、卒業して歯科医になった変わり種でした。その彼と一杯飲んでいるうちにドラード会を作ろうということになり、カンポ・リンポの彼の家からジャバクワーラに住むドラード区の長老格の苅谷常利、通称ツネちゃんの家に夜中の一二時頃ジープで訪れ、そこでトラード会が誕生したのです。一九六三年のことでした。

嬉しかったことの一つに奥ウニオン区の人達には大変お世話になったことです。百姓仕事のことで何か足りないものはないかと色々気配りして頂き、ときには留守中野菜を戸口においてもらっ

たり、今になってもほのぼのとした嬉しい思い出の一駒です。

チエテ移住地と産組

原田　寛

昭和十年十月三〇日に私らマニラ丸一行六家族は、航路二ケ月の最後の地のチエテ移住地サンジョゼ収容所に落ち着いた。収容所の中央はコレドールの土間、両側に寝所、休息所、奥にコジンニャ、薪のかまどがあった。市街地中央より一〇〇メートル位下方の小川の少し上に井戸、便所があった。

中央市街地にはブラ拓事務所と職員住宅四軒、薬局、個人の食料店が二軒、ペンソン一軒、ジャルジネイラ（バス）業者二軒、これは毎日第一市街地（ノーボ・オリエンテ町）まで交番で二五キロの道を往復していた。

その外に精来所、発電所と付属住宅二軒、合計十数軒の集落であった。

高いところにグルッポ（小学校）と教員住宅、周囲は原始林、墓地はノーバ・イニューマ区の道路の山中にあり、埋葬者は子供二人（伯人）ときいた。

ノーバ・イニューマ区に五家族入り、私の家族だけがポチー区第二組坂本氏の二地区の内一地区を分けてもらって入った。この地区の人は五家族共コロノより転住してきた人ばかり、多少ブラジル事情も解り、私らの為に便宜を計ってくれて助かりであった。

十アルケーレスの原始林の内一アルケールは既に伐採して焼い

てあったが、不焼けの為に後片付けに苦労したものだった。
住家をバッシャーダに、十日くらい収容所から通って建てた、屋根はコバ葺、壁はヤシの縦割りを並べたものである。夜になると鹿、アンタ（獏）、ケッシャーダ（山豚）、オンサ、猿の足音や泣き声で恐ろしい思いをしたものだ。
市街地より六キロ程の所の移住地の境界に幅二〇メートル位のサンジョゼ河があり、魚の宝庫であった。産卵期には川面が真っ黒くなるほどクリンバタが瀬を上り、絶えて味わえなかったブラジルの資源の大きさには驚いたものである。
このサンジョゼ河もイーリャ・ソルテイラの発電所の為に現在はダムになっている。チエテ河、サンジョゼ河もパラナ河がせき止められて、ノーボ・オリエンテ町が今ではペレイラ・バレットと改名されている。
今は有名なノーボ・オリエンテ橋も水面下一五、六メートルの所にあるとか。私が勤めていた製綿工場も水没している。勿論私が住んだ住宅もである。私が見る限りこの発電所計画はパラナ河、チエテ河、サンジョゼ河が合流した地点の変化は昔を知る人にとっては驚きである。
国家発展の為には自然破壊も尊い犠牲の一つであることが分かるし、人間への被害もさることながらである。実に感無量とはこのことかと思う。
自然破壊もさることながら、ここらでチエテ産業組合の過去を振り返って見よう。
私は一九四一年から一九四五年まで棉花部に働いた。ブラ拓は一九三五年に斎藤幸支配人から古関支配人になり、第三（サン

ジョゼ)地区が私が入植した一九三五年から三六年に満植になり、ボチボチとブラ拓の事業も植民者への委譲期になっていたので、一九四〇～四一年の産業組合総会の時に古関支配人の業務委譲の手続きで組合の総会がチエテ会館で招集されたのである。

今までの組合の理事の顔触れは理事長小山三郎、専務理事多田吉三郎、会計理事川崎渉の三氏で、常任として三氏が出席して連営されていた。

一九四〇年の総会で役員改選の結果専務理事の多田氏が引けて佐藤永三郎氏が入り、武田龍太、中山武、白土の三理事が入り六人の理事。大成、大内、小林諸氏が幹事となる。

それぞれ理事の事業部門も決定して、左の通り小山理事長、佐藤専務、川崎会計、八木補佐。蚕種部（竹田理事）、畜産部（菊地軍平）、運輸部オフィシーナ（中島正主任）、販売部（斎藤慎六主任）、精米所（中山武理事）、薬局（橋田、木原）であった。現在存命者が何人残っているか、私が知る限りでは川崎渉理事（九〇才）、武田理事（八四才）と評議員の中に上原、川上、原田（八四才）と古い写真の中から五、六名の人が見える寂しい限りである。

この時代のチエテの産業は棉が主作、それに畜産、蚕種が将来性あるとして始まる。何故かというと世界情勢が、日本が東南アジア方面において殆ど植民地の独立を助けて連戦連勝の時で、物資は世界全般的に需要が大きくなり、輸出が大きく伸びて、いくら作っても衣類、食料、住宅、所謂「衣食住」の必需品が不足したのである。

一九四四年度の棉花部の繰棉工場の成績を見てみよう。実棉入荷一〇〇万アローバ、その中七〇万アローバを製綿し、三〇万ア

ローバ転売。製綿一万ファルド（一ファルド二〇〇キ市内外）で、実棉は倉庫に入れきれずに野積の山が五つ六つと、工場は十一月まで昼夜兼行の操業。この年の利益はサンパウロ産業組合中央会の内でもコチア、南伯、バンデイランテを抜いて第一位となる。佐藤専務理事も大多忙でアラサツーバの銀行まで現金受け取りに汽車では間に合わず、シボレー車の中古品を買い運転手付きで私が護衛してよく行ったものである。つかの間の好況ではあったが、アリアンサまでの山道は当時危険地帯でもあったから、もちろんピストルを帯びて同伴したものであった。これも四六年の世界大戦となり、いよいよ日本の敗戦が近づいてきて組合の仕事も伯人の理事たちが入り、全てが終末を迎えたのである。折角作りかけた蚕種、畜産部も事業半ばで中止となったのである。

栄枯盛衰は世のならいで、上がり下がりもあり、母国日本もあの敗戦から這い上がり、現代の経済大国となることを当時誰が予言できただろう。

戦後の組合員たちの辿った道は三つあった。先ず移転する人達の土地を買い集めた残留組。次に多少資本のある進出組で、これはパラナかサンパウロ郊外に土地を求めた人。それに無資本の人、この人達はは大都会に出て洗濯業、キタンダ、パステラリヤ、フェランテ、シャカラの管理人等を始めた。

六〇年後、チエテ産業組合の一世たちの約八〇％は故人となり、二世、三世の時代となって、今では反対に海を渡って日本に出稼ぎに行く時代、あの当時誰がこうなることを予想しただろう。生き残った私たち高齢者は、手を出せば何でも得られる現代の文明社会で、物質文明の落とし子にならないように精神教育（徳育）を

忘れず、子孫へ伝えていくべきである。
六〇年前の原始林時代から現代の社会を見るときに、つくづくと感じるこの頃である。
古い回想ゆえ、人名、時代などに間違があると思うが、その点ご了承願いたい。

一九九五年九月記

チエテと私

工藤・輪湖政子

一九四七年頃の私の家の状態はとても他の町に出て勉強するなど考えも及ばないことでした。当時一四才の私の頭の中では何かこの町の為になりたいと言う考えが止みませんでした。教会で教えられた聖句の中に「汝ら世の塩となれ、また光となれ」と言うお言葉がいつも繰り返し浮かぶのでした。
その年の九月一四日、父母の許しでサンパウロに出て職業学校に入ることになりました。目的は農村女性向上のために学校を開くことでした。
それからの私の心掛けはただ倹約して、一分間のむだもなく勉強することでした。
九月に入学して、十二月にみなと一緒に試験をうけましたところ、幸いに通ることができて三カ月だけ一年生を学び、次の年から二年生になりました。いつも先生方に可愛がられて一九五〇年に卒業いたしました。

学校は終わったのですが未だ齢が足りないので開校は許されませんでしたので、その間を利用して五二年に佐藤割烹学校で検定試験を受けて料理教師の資格をとりました。

その外アルファイアッテの男物も四ケ月ロンドリーナで修業し、生花、手芸、日語教師の検定試験なども受けて、開校のため色々準備をしました。こうして開校後少しでもよいクルソを皆様に利用していただきたいと願ったのでした。

一九六五年にいよいよ目的の学校を開くことができました。校名を友愛職業学校と父が選んでくれました。時にシャカラの自宅の食堂を利用して六人の娘さんで始めました。

初めての仕事故、経験のない私にはわからないことが多く、授業がおわると部屋に入っては次の日の用意をしたものでした。その頃の娘さんたちは一般に遅れていましたので、どうして説明して良いか色々の方法を考えました。そして計算のできない人にはメートル尺を二つ折三つ折にして教えたものでした。

とにかく愛をもって気長に見てあげるのが一番大切だと思いました。

そしてこの方法で続けました。一週間のうち五日間は自由に縫物をして、金曜日午前中は一同一つのモーダを紙縫いする。午後からは料理の授業で、手近にある材料でおいしく作り、材料を無駄にしないこと、これを目標に六ケ月続けました。高価な材料を使っても無駄なく利用すれば贅沢にはなりません。

私の学校の中で一番大切な科目は料理だと皆様に教えたものでした。

なぜかと言いますと、食事を一緒にしてネゴシォをきめるとか、

又食事を共にして友人と昔を語るとか、何事にしても食事が先立つのです。当国のたとえにあるように「プレンダ・セウ・マリード・コジニャンド・ベン」などとも言います。また一家の主婦は料理ができるばかりではなく、少しは使う材料の栄養価とか家族の健康状態によって食事を作る心掛けなど必要だと思いました。恥ずかしいような話ですが、毎日食事を共にしていた皆様には知らずしらずの内におぼえてくれました。

六ケ月で一組終わりとなって、年に二度の卒業生を送り出したのです。

その中で遅れた生徒には時間外にも見てあげたのですが、それでもプローバのときの成績が悪いときは、自分の教え方にまだ足りない所があったのだと、くやしくて泣いたこともありました。そして次ぎからもっと注意するようになりました。

こうして一年後生徒も多くなり、食堂の利用では狭くなりました。それで町(ペレイラ・バレット)に家を買い、少し直して、ゆっくり使いました。今度は一〇メートルもある大きなサロンで、二〇台のミシンが並べられました。田舎の学校ですので各自ミシンとカデイラを持ってきたものでした。

寄宿生も一五人受入れました。この人達とはともに寝起きして、それぞれ朝から当番で掃除、片付け、花の水かけと仲良く六ケ月を過ごしました。

土曜日の夜はいつも茶菓子を作って楽しくゲームをしてあそびました。

そして気のついた癖をなおすために私が新聞のようなものを書き、名前を伏せて面白く読み聞かせたものです。みんな面白おかしく

聞きながら自然に癖をなおして行ったものです。中にはコンプレックスのある娘さんも居ましたが、六ケ月後にはみんな同じように明るく過ごせるようになりました。六ケ月の寄宿生活の間に色々直され、帰るときには全く変わって行かれました。お父さん方には喜ばれ、本当に言葉では表すことのできない感謝でした。

毎年十二月には二組の生徒の作品展覧会を行いました。その時には十メートルのサロン一杯に展示される品々、ノイバの服から子供服、男子服、また美しいボルダードの数々。その日の縫物メーザは生徒達の手作りの多種類の食品で溢れていました。

開会式にはプレフェイトを始め、学校の先生方、一般市民の人達で身動きも難しいほど大勢が見にきてくださいました。

これらの方々により、どの作品が良くできているかを選んでいただき、三番まで当学校より賞品を上げました。私は少しでも外の学校とちがった事をするのが夢でした。

それから五、六年過ぎた頃は町にも高校、大学ができて、農家の娘さんたちも皆町にでて勉強するようになり、裁縫など習っている間がなくなったのです。それでも少数の生徒で続けていましたが、全く来る娘さんたちの心掛けが違ってしまい、習いに来るのではなく、ただ物を作りに来るような感じになりました。私に裁ち切らせて、縫ってみせるのでもなく、勝手に持って帰るのでした。その時「あぁ、もう私のなすべき仕事は終わったのだ」と思い、子供も次第に大きくなって行くので、止めることにしました。

一四年の経営期間でしたが、それまでの卒業生は四〇〇人位だったと思います。あれから二五年経ちますが、あの頃の可愛い

娘さんだった人が、みな良いお母さん又おばあさんになっておられます。

時々なにかの折りに外の町で突然「先生」と言葉をかけられて、懐かしく昔話をすることもよくあります。この昔の生徒の中で何年か経った後、家の写真館にノイバを連れて記念写真を撮りにきた一人のブラジル人がありました。私を見て突然「先生」と抱きつかれ、誰かちょっと思い出せずにいましたところ、名乗られて言うことが「このノイバの支度は自分が作ったのです。先生のおかげで今はコスツレイラをしています」と言われ、まったく驚きました。

この人はメートル尺を二重に折って教えた一人でした。立派にできたドレスを見ると思わず瞼が熱くなりました。心を込めて導いたときには必ず実るのだと深く感じました。本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。

サンパウロに住むようになってからも時折昔の生徒に会う機会があり、色々な思い出を時間の過ぎるのもわすれて話すのです。父の意志をついで奉仕できたことを今なお感謝しているものです。

一九九五年十月記

チエテ移住地の三重殺人事件

藤堂　光義

昭和九年（１９３４年）と言えばまだ私が小学校の二年生（八才）で、あいにく父義男は訪日中であった。

留守番をしていた青年達は従兄の春岡、同居していた大石清、吉田亀三郎、柿木某などで、そのときの重苦しい彼らの表情を今も思い出す。

この殺人事件のことが、Ａ区内（その頃まだウニオン区になっていなかった、Ａ区とＢ区の合併は昭和十年）に回覧板で知らされたかどうかは良く覚えていないが、すでに薄暗くなっていた時刻で、従兄の寺岡と吉田亀三郎が家にあった古い猟銃を肩にかけ銃弾数個、ホイセ一本、それに手提げランプをもって、警戒本部となっていた校舎に出掛けたことは今も鮮明に私の脳裏に残っている。

当時のＡ区区長は芦内氏であり、青年団長は今も聖州アチバイア近郊で健在でおられる東喜三氏（八十六才）だった。

この殺人事件の記事を書くにあたり、東氏を訪問、事件を確認しながらはるか六十年の歳月の流れを思い起こし、ともに語りながら纏めたことを記しておく。

多くの先輩諸氏の開拓の苦労をしのび、改めて先没者に敬意を表するとともに、今なお健在の東喜三氏のご健康を祈ってやまない。

記

チエテ移住地の開拓史は一九二八年九月一日から始まっている。

事件が起こったのは一九三四年四月一七日だから、まだまだ熱帯病のマレイタ、アメーバ、フェリーダ・ブラボの闘病生活に植民者は悩まされていた時期だった。

この事件は「チエテ十年史」にも書いてあるので詳細を略するが、発生は左記の通りであった。

発生日時は一九三四年四月一七日午後三時すぎ。被害者はイニューマ区六十九号地点の佐藤辰之助寄留者佐野金次の妻ウメ（二十五才）。

現在のサンパウロ市では、このぐらいの事件は日常俗事として取り扱われている殺人事件だが、当時はだれも想像もしなかった、しかも三重殺人が生じたことはブラジル国内、また遠くは日本でも大ニュースとなった。

佐藤宅に寄留していた佐野ウメは当日午後三時すぎ、伯人カマラーダのフランシスコ某なるものから強姦未遂で左胸及び頸を数箇所凶器のファッカで刺されて殺された。

主人の佐野氏は百姓よりも本業を井戸掘として不在がちであり、殺したフランシスコも既に佐野氏のアジュダンテとして働いたこともあり、夫人も顔見知りではなかったかと思う。しかし当時のフランシスコはもう他所に移っており、事件のときはＡ区の瀬尾宅で働いていた。

フランシスコはペルナンブッコ州出身、白色、中肉中背、年格好は二十三才ぐらい、すごく目付きが悪く、いつもファッカを持ちあるいていた。

事件発生後緊急連絡網によって各区に伝達されて、家長及び青年団が招集され、（約百五十人）犯人の逃亡脱出を防ぐため、各要

所要所に警戒人員を配置した。
殺害者のフランシスコは夜半ペデルネイラ川沿いの長野氏宅の地域警戒線にひっかかったが暗闇に乗じて逃走した。

翌一八日早朝より足跡を追って、ペデルネイラ川を渡り、A区入りの形跡があったので十メートル間隔で山狩りをはじめた。
A区十三号〜十五号地点にて午後二時すぎ加害者のフランシスコを発見した。ペデルネイラ区より山狩りに出ていた松本政信（二十才）青年は前列より駆け出し逮捕せんと進みよった瞬間、またもフランシスコのファッカで左胸を刺され、致命傷となって絶命した。　現状に唖然となった警戒の一同は、一斉に射撃して数弾を浴びせかけ、フランシスコは射殺された。
銃殺された後全員積る恨みにより、突く刺すの乱行でフランシスコの遺体は目をそむけるほど顔かたちも変わり、両足くびは切り落とされていたようだ。
この三名の殺人事件は早速「ブラ拓」（ブラジル拓殖組合）の弁護士を通じて、チエテから二百キロ離れているモンテアプラジーベルの警察署へ届け出をした。またフランシスコの射殺に対しての殺人責任者は何回かの協議の結果、判決後刑に処せられる場合も考慮して独身者が良いということで、各区間から青年を選出し、総勢十五名が加害者となった。
第一回目の検事局からの召喚は事件発生後二ヶ月目（七月）に全員十五名がカミニォンに乗って出頭し、一晩モンテアプラジーベルの留置場ですごし、翌日調書をとられ、チエテに戻っている。そのまた二ケ月後（九月）法廷での裁判になり、前回と同じくカ

ミニョンで出掛けたが、今回は留置場にはいらず、モンテアプラジーベルのサンタカーザに泊まった。

特筆すべきは、このときブラ拓本部の総支配人をしていた矢崎節夫氏が青年達を思い、遠路サンパウロ市より慰安訪問されたことである。

公判は予定通り全員無罪となって血なまぐさい殺人事件もこれでおわり、再びチエテに平和がとりもどされた。

もう二年すると七十年の歴史的チエテ開拓を迎える。昔の夢のような穏やかで平和村の初期開拓のチエテにも、残虐きわまる殺人事件があったことを忘れることはできない。

木村先生の思い出

前田　樸

約五五年以上の過去になりましたが、私が第二アリアンサに入植致しました時には、第二移住地内には五ヶ所も日語学校がありました。中央区には鳥取あつかいの学校があり、生徒は二五名位いたと思います。木村貫一郎先生は、毎週日曜日には第一アリアンサからジャルジネイラで来られ、教室の横のサーラで泊まり、土曜日には帰宅されていました。

私の知っている当時の生徒で現在まで生きているのは、前に「ブラジル生花協会」の会長を務めて居りました田村ワルテル幸雄君、

ペレイラ・バレットの牧場主伊木実信君、サンパウロでスーペル・メルカードの経営者藤井謙一郎君、モジ在住の前川嘉子さんと私位で、後は分かりませんが、未だサンパウロ市内に健在の人があるのではないかとも思います。

当時の学校は移住地事務所の横で、トタン屋根の板壁の昔の寺小屋のようで、朝学校へ行きますと、机の上には鶏がとまって糞があると言った状態でありました。

木村先生については怖い人だという印象が残っています。シャンとした態度で教えて居られましたが、私たちはこの先生が全伯的に俳句で有名なことも知りませんでした。

当時アリアンサには佐藤念腹先生がおられました。

木村先生は時々歌を作って、私たちに唄わせておられました。それは当時流行していた「波浮の港」のふしで、大霜害で打ちのめされた人心を奮い起こされたものでした。

その歌は、

珈琲咲いたか　匂いは梅よ
霜にゃ枯れても　また芽を出して
枝をたわわに　ヤレホンニサ
実るやら

又当時の先生のお詠みになった俳句から、その心情が伺えます。

学童に交り遊びて木の実独楽
春暁や日本の夕のラヂオ聞く
霜に焼けし珈琲芽立たず春盡る

木村先生は昔気質の人で、生徒が言うことを聞かないときはエスケンタして、教室の隣のサーラに入って出てこられない。それが先生の悪い癖でありました。

教室に残された生徒はちょっとの間静かにしていますが、先生が居らなければ困るわけで、毎度のように謝りにゆく役は藤井君でした。サーラに入り「先生、すみませんでした」と言うと機嫌が直り、又思い直したように教えておられました。ですから先生が怒ってサーラに入られると、皆で藤井君に早く行け早く行けと言ったものでした。

その頃、第二アリアンサにも大きな新しい学校ができ、一ヶ所に生徒が集まるようになり、先生は辞められました。

当時はチエテ移住地に行くのにはバルサを利用していたのですが、新しく橋ができるようになり、その現場監督技師として木村先生が着任、工事が始まったわけですが、当時としては大工事であったと思います。

出来上がった橋は吊り橋で、スマートな姿をみせ、その橋を通るごとに木村先生を思い出しておりました。

最近になりダムが完成し、その橋が水の中に没することになり、水位が一日一日と上がり、橋が水の中に隠れるようになると、毎日のように大勢の見物人が、橋とのお別れに集まっておりました。

今あの地帯は一望の湖水となり、何処に橋があったか見当もつかない状態ですが、一人ひとりの頭にはチエテ橋のあの姿が浮かんで、消えることはないでしょう。

一九九五年十月記

追憶記

坂中憙旭

渡伯の動機

私が高等小学校当時、世界地理の講義を受けたときに、日本の真反対側にブラジルという国のあることを教わり、その当時僕も一生のうちに一度は彼の地に行って見たいと言う希望を持ったのですが、中々実現が難しかったのです。足掛け二四才のとき妻帯してから、大阪市に森嶋静雄という伯国移民取り扱い周旋人がおりまして、私は二、三回たずねて行き種々の事情を聴いたのです。

その時目の病気、つまりトラホームの有無が喧しいとのことでした。

そこで私は和歌山県庁に行って、伯国へ移住したい旨を述べると、係員が言うには、いましばらく待ってくれないか、ただ今ブラジル拓殖移住組合という組織が出来ることになっているので、それに参加して行ってくれと言うので、その手続きやら和歌山赤十字病院で目の検査だの、又その他重大な資金の問題など幾つもの事情があって、三ヶ年位経過したのでした。そして漸く昭和四年五月一一日神戸港出航のサントス丸に乗船、伯国サントス到着は六月二六日になり。実に四七日間海上に揺られてやってきたものでした。そして当チエテ移住地へは、七月一日午後やっと到着したものです。

いよいよ到着

その晩は移住者の収容所に泊まり、そこで先日来伯した同胞の竹内、大成、吉村、石田、藤村の諸氏の奥様連中の用意した晩飯にあずかるのですが、それも未だ井戸掘り直後の水で炊事するので、握り飯に砂をまぶしたような有様でした。

それから夫人連がやれオンサだの蛇だのと言うて外の便所に行くことを恐れ、夜は床下へもぐって行き用を足すようなことでした。又一方男子連中も同様、戸口から外へ向けて砲をはなすというエピソードもありました。

又その翌々日の朝、立嶋様の奥様アヤノ様がちょっと蟻にかまれて一日中痛がっており、皆がこんな恐ろしい虫が居るのかと驚いたものでした。それを天理教の方々が「お手振り」(天理教の儀式)をしてお祈りをしたものでした。

仕事始め

最初は共同で寝泊まりしていたのですが、数日経つといよいよ自分の住居の必要を切々と感じることになり、早速事務所にかけつけて農具を用意しなくてはと皆が勇んでホイセ、エンシャーダ、エンシャドン、等々、又必要欠くべからざる食料品を買い入れ、仕事にかかりました。

我々が日本内地で思っていたのとは違い、中々広い原っぱには驚き入りましたが、希望はそれなりに膨張してきたのです。

いざ仕事にかかって見ると、私は元からの百姓ですのでさほど応えませんでしたが、他の人達、立嶋真一、大竹忠二郎、新宅儀助、空地光太郎諸氏は天理教布教師、川崎稔氏は会社員ですから、会社の月給取りや宗教家にはこうした荒仕事は向かないとみえ、

仕事が中々捗らないのでした。私は幸か不幸かはしらないが余り難儀もしないで漸く住宅建築も終わり、移ることになりました。住居と言いましても、そこらの木で柱をたて、屋根はトタンで葺くだけの簡単なものでした。

失　敗

私は先々と仕事が進んでいましたが、当時の原っぱは再生林と言いますか、前年原始林を伐採してあったものですから、いわゆるカッポエイラになって居り、それをロッサして火を放って耕地にするのですが、多くのブヨなどが顔や首を刺してどうにもならないので、あの豚の糞のような縄煙草をくゆらしては仕事をしていたのです。ある日昼飯時がきたので吸い殻の煙草をすてて帰ったのですが、それが火を出して近隣の今までロッサした場所までがすっかり焼けてしまったのです。どうせ火を放して焼くわけですが、近所の人が仕事に遅れていたものですからロッサ中であったので、ワイワイ大騒ぎでした。私は失敗したことを痛切に感じ、謝りに歩く次第でした。

蒔　付

その後耕地の整地もでき、又よい雨も降りましたので珈琲植え付けの段取りになり、植付穴を測量して定め、三メートル五〇センチ角の正方形ごとに三〇～四〇センチ角に深さ四〇センチのコーバを一つずつ掘って植え付けました。そして珈琲の間作として米を四条蒔きつけました。

この蒔きつけは大体十月半ばから始め、十一月初旬には終わりま

した。
なお空間を利用して西瓜なども蒔きつけました。この西瓜は私が日本から持ってきた種で、種類は「アイスクリーム」といい中が黄色のもの。
それから大和西瓜との二種類を蒔きました。作柄は誠に素晴らしいもので大喜びでした。ところが食べた後種を其処ここと畑一面に投げたものですから、翌年は黄色と赤色の交配種ができて、味は変わりませんが、色合いがゾッとするような物ができて失望しました。畑中どこへ行っても西瓜スイカで、カルピーに行っても昼飯時になると西瓜を割ってそれで手を洗い、ご飯を食べるといった調子でした。
稲は割に順調に育ち、珈琲もうまく発芽して、希望は益々ふくれ上がりました。その外にマンジョーカの茎をブラ拓の事務所の方が持ってきてくれたので、家の前の道端に深い穴を掘って植えたところ、発芽、発育は立派だったのですが、余り深すぎて芋を掘り取る時かなり苦労しました。とにかくブラジルの作物は初めてのものですから、失敗の連続でした。それからバナナの苗も事務所から持って来てくれたので、これも深く穴を掘って植えたのですが、これは誠に当を得たものか、良く育ちました。

衛生及び病気

チエテ移住地はマラリヤの巣窟と言われたそうです。私達が来る途中汽車の中や宿屋で色々な噂をきき、その上大地主らが自分の耕地へ呼び込もうとして、彼の地へはマラリヤが多いので行くな、僕の方にこないかなんて、新来移民とみて盛んに誘うのでし

た。

そんな訳ですから、移住地事務所としてもコレゴ辺は危険ということでしょう、一番高い所を住宅地として、エスピゴンの原始林を伐採して、住宅の道幅も六〇メートルと途方もない広い道幅をとってありました。

そして事務所のお達しでは、この道幅内に作物は植えないことと言うことでした。それでもミーリョとか大豆、フエジョンなどの短期作物は植えさせたものでした。それから魚釣りはなるべくしないようにと言うことでしたが、好きな人は仕様のないもので、早速竿を担いで出掛けました。ところが案の定マレッタを釣ってきて、数日後震いがはじまりましたが、好きな物はやめられず、又してもマレッタを釣ってくるのでした。

一家全員がかかった所もありました。私は幸か不幸かペスカは嫌いな方でしたので行きませんでしたが、家族で二、三人軽いマレッタをやりました。

今ここに特筆すべき事が起きたことを記します。私達の同航者サントス丸組の一人の新宅儀助氏宅にチブスが発生しました。そして儀助氏の妻オセイ様が死亡、ついで儀助様も三日目に死亡しました。それから一軒おいて隣の空地光太郎氏宅の祖母が、一週間位のち死亡しました。その間に儀助氏の弟敏治氏、空地光太郎氏長男の光秋氏が罹病したのです。

これは平生親密に交際しており、何か料理など作ればお互いに贈りあっていたので、感染したのではないかと思います。可哀想に儀助夫婦は二才位の長女を残して死んだのです。ところが、この人達は天理教の布教

のために渡伯してこられた様でしたので、病気だと言っても医者にもかけず、「お手振り」だけで助けようとしたのが間違いであったのではなかろうかと、当時の噂でした。信教もホドホドにと思いました。

尚、同航者であり同県人でああ川崎稔氏がその後町へ出て商売をしていましたが、彼の妻がフォルミシーダを呑んで死亡、次に自分も呑んで自殺という忌まわしい出来事がありました。

悪　態

私は日本では余り酒は呑みませんでしたが、ここへ来てからはピンガを嗜み、最盛期には毎日一リットル位やっていたので、呑み仲間の悪友も多くいました。主な呑み仲間の名をあげると、大成、藤村、空地、野中、瀬尾、道保、黒木、岩下、野田などと言うお歴々でした。入植して四、五年後と思いますが、砂糖黍を四アルケール位植えた人がいて、それを近所にあったピンガ・製糖工場へ馬車で運んで行き、帰りにはピンガ百リットル入りの樽を積んで帰るというような豪勢振りでした。またそれを目当てに悪友共が「おい坂中、これに一杯つめてくれ」とか何とか言って、三リットル入りのガラフォンをもって来て注がせたものでした。そんな場合たいてい「おい君、一杯やっていけ」と声をかけるので、相手は待ってましたとばかり座り込み、朝から夕方の五時頃まで呑んで帰って行くのです。それから私の馬車馬にアリアンサと名付けた騾馬がいましたが、これが又利口な名馬で、町に行きますと必ずバールの前で止まり、どうしてもそこから動かないのです。こうした訓練はどうやら私が仕込んだものらしく思われました。

イヤ、ドウモ。

米の収穫

ようやく米の収穫ができたのですが、私の籾種はアグリャ・ブランコと言うものだそうで、これは丁度日本の水稲のような品種でした。他所の人はビッコ・プレットとか言う稲株のよく張る実りの良い品種でした。

その当時のチエテには精米所がなく、アリアンサ移住地まで精米に運んで行ったものですから、その籾を精米もて戻るまでは毎日食べる米が無くなることがあります。そんな時近所に行って事情をはなし、少しばかりの借用を申し込むと「よっしゃ、一俵もって行け」という具合に、とても大ざっぱなものでした。初年度は私の仕事が進んでいたために、米も一番多く収穫があったものです。初年度の収穫高は米四〇俵でしたが、それでも小遣いができて大変嬉しかったので、ピンガを買って来てお祝いをしたものでした。

スポーツと娯楽

川崎稔氏が提唱して野球チームを編成して野球を始めたのです。それでアリアンサ及びバストス両チームを迎えて戦ったこともあり、一方陸上競技も追々盛んになってきたものでした。全伯の競技にも時々出向いたし、小学校生徒の運動会も始まったのでした。陸上競技は良い選手がでました。とくに東篤介氏のような砲丸投の名選手もでまもた。

移住地には適当な娯楽機関がなく、事務所あたりが時々映画の

夕べを開催する折りには皆がこぞって出掛けたものでした。また好きな人は碁や将棋にうつつを抜かしていたものでした。それでピンカを余計に飲むようになったようです。

教　育

当然のこと最初の頃は言葉が全然わからず、収容所にいたころ一度伯人が来て何か喋ったが全然わからない。その時は仕方なく隣の三、四年早く渡伯していた瀬尾義隆氏の妻君を呼んできて通訳してもらったのですが、ただ水汲用の石油カンを貸してくれという話だったのには、何とも言いようのない恥ずかしさでした。

児童は満七才から、最初は川崎稔氏の義母にＡ区の学校で日本語を教わっていたのですが、まもなく教員経験者が赴任されて来て続けられました。後年Ａ区とＢ区が合併してウニオン区となってからは立派な校舎も建ちましたが、その後次第に伯国官憲が喧しくなり、日本語は夜学で青年達が隠れるようにして教えていました。

天　災

一九三二年六月に大霜に見舞われて、折角大事にだいじに育てた珈琲が人の背丈位に伸びていたのですが、見るみるうちに葉が萎れてしまいました。あれだけ期待して、全生命をこれにかけていたのが、一瞬のうちにこのような結果になり、一同悲痛に暮れてしまいました。事務所の方から高橋という技師がきて、これは早々に切らねばと言うことで、涙を呑んで切ってしまったのでした。入植以来いままで希望に燃えて懸命に育てたのにと思い、モ

ハヤ何をなす気持も失せてしまいました。その後切った珈琲の株から芽を出してきたものですから、芽かきをして、どうやら元の樹になり、五年目に初めて収穫をしたのです。珈琲実の皮ごと乾燥したものが一俵が僅か七ミルレースにしか売れませんでした。当時は各方面で珈琲耕主が破産したと聞きました。私達が日本を出るころは伯国の珈琲栽培は土地から金が湧き出るようだと聞いてきたものですから、これは大きな失望でした。よく自殺もせず耐えてきたものだと思います。先見者は珈琲樹を起こして、棉作に切り替えていました。

市街地の構成

私達が入植してから三年目あたりから除々に家が建ちはじめたものです。それまでは市街地として土地を残してあったものでした。

チエテ河の渡河はバルサでした。それは大きな鉄の缶を四つ並べ、それに板で床を敷いて、五、六トンの荷を積んだ貨物自動車を積んで河を渡していました。

ブラ拓事務所も板作りの粗末なものでした。測量師の湯朝様が市街地内の地区割をして、現在の病院や学校、町筋などを定めたようでした。

最初に店を出したのは福島国喜というアラサツーバの出利葉洋造氏のクニャードの福島県人で、饅頭屋を開店しました。そして田中元吉氏の荒物屋、間もなく斎藤真平氏の雑貨店と次第に店が増えて行きました。

おめでた

一九三〇年一月十日、妻が次男アントニオを生んだ翌日のことでした。

その日は晴天で百姓日和でしたが、私は家のまえでウロウロしていたのです。そこへ突然梅谷ブラ拓理事様と当時の移住地の代理支配人中島一男氏が騎馬で現れ、「おい坂中、こんな天気のいい日にポカンと家に居るとはなにごとだ」と中島支配人が文句を言うのでした。私は憤然として昨日二世が生まれたので妻の守りをしていると答えると、二人とも「やぁー失礼、」と言って後に「おめでとう」と言ってくれました。それがA区で二番目の出産でした。第一番目は川崎稔氏の次男坊の拓児という子でした。

結婚の第一号は私の隣家の新宅宝作氏の娘タカ子嬢で、一九三五年頃でした。新夫の名前は安吉でした。

購買組合

A区の植民者たちが日常品をブラ拓のアルマゼンや町の商店で買って居ましたが、案外に値段が高いので何か考えなければならないと、だれ言うとなく語りだしたのです。それで共同でサンパウロまで行って、かためて買ってくると幾分安くなるのではないかと、唯一の言葉の分かる人である瀬尾氏に話し、嫌がる彼に頼み込んで、金を集めて持たせて送り出しました。これがチエテ産業組合のそもそもの始まりでした。

まだ色々と思い出は尽きないのですが、今回はこれ位で止めておきます。

移住地を偲ぶ

東　喜　三

チエテ移住地開拓五十七年祭に際して、記録に余り残っていない印象的な思い出を初期の移住者として書き残しておくことも亦意義あることと思い、年代に多少のズレはあることながら思い出すままに綴ってみよう。

昭和四年四月、和歌山県海外移住組合の第一回ブラジル移民としてチエテ移住地志望五家族、バストス移住地志望三家族と博多丸で神戸港を出帆。博多丸は貨物船で蚕棚ながら、移民組合関係の者は船の真ん中の揺れの少ない四番艙を優先された。

八百幾人かの同船者と色々な思い出を残して二カ月有余の航海でサントス港に着き、汽車でサンパウロの収容所に入る。二日の滞在後移民列車にていよいよ目的地に向かう。移民列車は自由を束縛され鍵をかけられたのが特に印象を悪くした次第である。

バウルーでノロエステ線に乗り換えてアラサツーバ着、途中プロミッソン駅方面で空が赤々としているので何かと尋ねると、コーヒーを焼いていると言う。さすがコーヒーの国、どうして焼いているのか当時は分からなかった。アラサツーバの日本人の宿で一泊、旧移民の人がおってチエテ移住地の話をすると、「そこはブラジル人も恐れている魔の森と言うところですから気をつけて行きなさい」と言う。どうも余り面白くない。

アラサツーバまで来ると他の契約移民の人々は早耕地に送られて殆どおらない。汽車に乗ったのは移住組合関係のチエテ行きとアリアンサ行きの十二家族だった。チエテ行きもアリアンサ行き

もルッサンビーラと言う駅で降り、迎えに来ていたカミニォンに乗って左右に別れた。チエテ組は先着移民の広島県人大成さんに迎えられた。

チエテ移住地に入るのには橋がないのでバルサという変な渡し舟に乗ってチエテ河を渡り、移住地に向かう。移住地の入り口で既に印象を悪くした。河辺に沿って四、五キロ、高台に移住地の事務所と四、五軒の家が建っており、僻地の山の中に似合わない立派な煉瓦建ての病院が建っていたのには一驚した。

二キロ程行くと市街地の予定地という所に出る。ここもあちこちに土壁や板壁の家が建っていて、はや何か変わっている気配。それから又五、六キロ山の中を走って行くと、山焼きをした所にでる。ここが即ち我々の落ち着く土地だという。山は不焼けで誠に殺伐たるものだ。すでに草分けの広島県人の家が四、五軒みえる。それから又二キロばかりの所にトタン屋根の細長い家がある。ここが収容所だという。すでに七、八家族ばかりいた。我々もようやくそこに落ち着く。

入所して一番困ったのは水で、井戸は掘ってはあるが掘りたてで水は真っ赤に濁っている。その上三十メートルの深さで、十八リットルの石油ラッタを付けて汲んでいる。女子供には危なくて到底できない。そのままでは飲めないので、先住の人々に教えてもらって漉してからでないと使用できない。これには皆困ったものだ。こうして入所生活をしながら、抽籤で既に決まっていた自分たちの土地に家を建てて移り住んだ。

井戸は五、六家族を単位に掘ってあって、これを俗に井戸組みと呼んで区の行政上いろいろ役に立った。

家を建てて移り住んで、焼け跡の片付けやら種々と耕作の準備の最中に熱病にかかった。

当時移住地には立派な病院があるが、お医者さんが居らない。アリアンサの勝田ドトールを呼んで診てもらうとマラリヤだと言う。いや困った。

然しこのマラリヤは二日熱という奴で、悪性でないという。我々家族は叔母の家族共に十三人で、その内八人がマラリヤに冒された。親父の心中を察するに思い余りあるものがある。ブラジルに連れて来て失敗だったと思っていたらしいが、それも移り住んで二カ月位の間だった。

そうこうしているうちに彼方でも此方でもぼつぼつと発生、そこでアラサツーバで一泊したときの旧移民の言葉を思い出した。やはりこれだったのだ。

それでも一時猖獗を極めたが悪性でなかったので、当時この病気で死んだ話は聞かない。

当時治療の方法も確立して良い薬があり、悪性でなかったためああ平野植民地のような惨事を免れたのだと思う。

そしてようやく元気を回復し、コーセーも植え、やっと平穏な日を送っていたところが突然一九三〇年の七月の或る日事務所より使いがあり、「ブラジルに革命が起こり、聖州軍がチエテ移住地を通って麻州に行く」という。略奪に備えて大事なものを隠し、女子供の安全を期して二、三ヶ所に収容するようにとのこと。皆々慌てふためき戦々兢々としていた。若い者が夜も日も寝ずに警戒していたが、幸にも移住地には来ず、チエテ河沿いに麻州に向かったとの報告に皆安堵の胸を撫で下ろした次第であった。

この時次ぎのようなハブニングもあった。予め兵隊が来れば
ラッパを吹くことに決めていたのが、或る一人の青年が面白がっ
て悪戯に吹いたものを、近所のおばさんが驚きのあまり腰を抜か
したという。それでなくとも異国で寂しい思いにかられていたの
に、どんなにか恐ろしかったことだろうと同情にたえなかった。
今に思えば罪なことをしたものだ。

そうこうして二、三日過ぎてから州境近くのポルト・タボアー
ド付近の聖州軍の一中隊がチエテに駐屯し、事務所に協力を求め
てきたので、植民地から青年二人ほどくるようにと伝達があった。
それで小生と瀬尾広敏君と二人で行くことにした。広敏君はブラ
ジルに来て五年位になり、サンパウロ近くにいたので、ブラジル
語は喋られるので都合が良い。

行ってみて驚いたことに兵隊と言っても兵隊らしい者は一人も
おらず、軍服もまちまちで武器も猟銃がありカラビーナありで、
軍隊用の小銃は見当たらなかった。

日本の軍隊を見慣れた者にはカマラーダの寄せ集めのような傭
兵だと思った。我々の食事と寝泊は勿論事務所もちで、田中のホ
テル。駐屯軍の種々の費用も事務所もちだったと思う。それで協
力を要請したのだ。

広敏君は言葉が解るので彼らと色々話をするが、こちらはチン
プンカンプン、ただ一緒におり行動を共にするだけ。斥候にたっ
ている者で報告に行く時など我々が一緒に行かないと駄目なよう
だった。ジャポネース、どうか一緒にと言うらしい。このような
有様で四、五日過ぎ、夕食後彼らと一緒に雑談していたところ、夜
八時ころチエテ河近くの本多さんの瓦工場近辺の森から自動車の

ヘットライトがピカッと光った。そうすると今まで喋りながら屯していた兵隊共はワッと声をあげ蜘蛛の子を散らすように散っていった。広敏君と二人で呆然とそこに立っていると、ジープに乗った汚れ破れ軍服を着たみすぼらしい一人の将校らしい男であった。

散っていた兵隊や事務所の人達も集まって話を聞くと、この人は全滅状態だった中隊の中隊長とかで、逃げ隠れしながら漸くここまで帰って来たそうである。そして尚事務所の連中と駐屯軍の主立った者とで大西とかいう人の通訳で話を聞いた。

中々勇ましく、ブラジル人特有の手振り身振りで駄法螺をふいているらしかった。所謂敗軍の将兵を語っているのである。「日本だったら切腹ものだがなぁ」と、広敏君と笑いあったものである。今でも瞼にあのときの光景がやきついている。

そして広敏君と二人で十日余りの任務を終わって帰った。これがブラジルで兵隊の飯を食った初めてで最後の経験である。

その頃家長会も青年会も既にできて学校も建ち、ようやく何もかも慣れて落ち着いたが、郷愁は移民の常、運動会をやり相撲もやり、今度は芝居をやろうということになり、喜劇と人情劇の二本立て。お師匠さんは喜劇の方は芦内良造さん、芦内さんは大阪の喜劇役者「ごて樂」の弟子であったとか。人情劇の方は野中源市さん、この人も故郷で去年まで教えていたベテランで、共に和歌山県人。役者は青年会の人達で、みな芝居なんて初めての連中、烏合の衆で二カ月ばかり稽古しなければならない。学校を稽古場にして夜稽古をする。家長連中が相談して井戸組でもって毎晩夜食を交替で稽古が終わるまで届けることにしてくれた。皆これで

芝居の稽古に励みができた。芝居の稽古より夜食の方が楽しみだったようだ。

第一回目の年月は詳らかでないが、八月の入植記念日に催し、大変な人気であった。町から大勢見物にやってきた。たしか二、三年行事として続き、チエテの名物になった。

二年目だったか町の人達の要請で一晩町の学校で芝居をしたことがあった。中々評判が良かったのでアラサツーバの日本人会からも是非と請われたが、実現しなかった。百姓だから何日も暇を費やすことができなかったのである。

時の流れと共に名物のチエテ移住地A区の青年芸能も自然と消えていった。そしてその後移住地を震駭させた所謂三重殺人事件がある。小生が直接最初から最後まで責任があって関わった事件だが、記録に残っているので細かいことは割愛するが、的確なものが余り記録されていないという憾みがある。当時私はA区の青年団長であり、全ての責任者であった。事務所側としては殺人事件であるために関係したくなかったのは事実であるが、警察権がなかったために対外的に具合が悪かったのかも知れない。警察権のないのは殺してから分かったことで、移住地で起こった事件だから移住地事務所で責任をもって解決してもらいたいと種々交渉の結果、それでは青年から容疑者を十五名出せ、そして事務所側のことは一切口にしない、「青年が一人殺されたので我々でやった」と言うことにすれば全て費用は事務所側が持つという交換条件で話は片付いた。この話に当時庶務主任であった江見清鷹さんに初めから終わりまで随分とご尽力に預かった。この交渉は約一週間余り続いた。容疑者としてA区五人、B区五人、イニューマ

区三人、バラボニータ区二人が出頭した。裁判の結果十二対一で正当防衛という判決で無罪放免となった。

移住地始まって以来の大事件もこうして約二カ月を費やして終わった。

あれから六十余年の年月が流れた。十五名の容疑者のうち果たして何人が生存しているであろうか。私の瞼に一人一人の顔が懐かしく浮かんでくる。あれを思いこれを思い、過ぎ去りし人生の星霜をしみじみ感じている者である。

容疑者送り出しや事件にまつわる色々な裏話など書きたいことも沢山あるが、紙面の都合上またの機会にしよう。

移住祭雄図空しく早や八十路

一九九五年一二月記

チエテ愛媛村

田中　幸一

第一次欧州大戦後好況を迎えた一般庶民が、この世の春を謳歌したのもつかの間、いつまでも好況は続かず、その時点から目に見えて不況の風は日本列島を吹き始めていたが、神ならぬ身、知る由もなかった。

当時我が愛媛県の俵津村は、戸数五〇〇、人口二五〇〇余、農家の主作は米、麦、甘藷に養蚕、漁業は四網元より構成され、当

分の間は養蚕に漁業にと黄金時代もあったが、時代の波には逆らえず、年毎に疲弊の坂を下るのみであった。

昭和五、六年になると経済面はいよいよ行き詰まり、生糸輸出は止まり、従って繭値は大暴落、農産物も言うに及ばず、このような状況下に如何にして活を求めるかと村民は寄り集まると不況打開策の話し合いばかりであった。折しも政府は過剰人口と相俟って海外移住に力を注ぎ、大々的な宣伝を市町村の隅々まで施し、それ故に道行く人々はその宣伝ポスターに完全に魅了されたようだ。行け南米の新天地ブラジルへ、肥沃の土地が待っていると、宣伝文句もさることながら、ブラジル風景画、熱帯果樹の並木、コーヒー畠はもとより平坦な耕作地の作業風景と、見ても読んでも未知の世界にただ憧れは募るばかりの名宣伝だ。この世にいかに不況の風が吹き荒んでも、大磐石の基礎ある方々は別として、家のため、我が身のために、挽回を計ろうとする者には舞台の芝居や映画の活劇よりも遥かに熱のこもった眺め方である。

「我が俵津村は、東西の距離四キロ余、南北三キロ、港湾の延長七キロ、北部には法花津山脈系、海技四〇〇メートル位の竜王山あり、その山系が西奔し、南部わずかに海にのぞみ、両岬は天然の埠頭を形どり、風波を防ぎ、港内は常に波おだやか。東側は玉津村境界、北は宇和町、西は狩江界」これは郷土史にある中村氏の記事である。

以上の通り平野は耕作地に乏しく、段々畑は五月人形の雛段のように上へ上へと伸びている。

海抜二〇〇メートルの所までその雛段畑が続き、僅少の耕地面積とやや三〇〇〇に近い人口、数年前までは俵津織物会社、俵津

製糸株式会社などの隆盛で、村内だけでは女子工員は纏まらず、よって他地方から多人数の女工募集となり、宿舎の建設会社の拡張と、活況を呈した。同じく農産業も活気あふれていたのであったが、漸次景気も下火となり、世に不況の風が吹くころから、要所要所に前記の海外宣伝ポスターが貼られた。寄り合う人の間には次第にブラジル移住が話題にのぼり、日毎月毎に未知の国ブラジルの話に熱が加わっていった。

昭和八年の末期がそろそろ近づく頃になると一段と移住の話題が積極的になり、君が行けば俺もと、年末から年初めにかけて希望者が大多数となった。

三地区より構成される大浦区、脇区、新田区の俵津村は狭いようでも端から端になると広い。その端々より移住希望の家長方は、連絡しながら夜な夜な一ヶ所に集まって協議を続けていた。

身は在所にありながら、心は既に南米の新天地に飛んでいる。この狭い故郷がなんであろう。一旗挙げるべく見も知らぬブラジルの広野に真の開拓精神をもって一致協力突進しようではないか。一に国策線に沿い、二に我が身の為、更にブラジルの為にと、前途に待つ熱帯性風土病や悪性の病魔の巣窟とも知らず意気は至って軒昂。評議は毎日進み、善は急げと昭和九年四月出航のブエノス丸に乗船すべく諸準備を進めた。

南米移住の誘い合わせの話が身内から身内に伝わり、知人から知人へと輪は広がり、ここに渡伯希望者家族が絞めて二五家族と決まった。

団体編成となり宇都宮紋次郎氏が団長に、宇都宮庄太郎氏が副に選ばれた(その後紋次郎氏の家族の発病により乗船延期となり、

以後庄太郎氏が団長代理)。なお若干の役員を選出し、県庁より移住前及び移住後に関してのパンフレットを取り寄せ、数日間諸事情を詳細にわたって机上で練り合った。

幸に我が俵津より昭和八年にブラジル国サンパウロ州のバストス移住地へ、中井保氏、宇都宮直氏、清家平次氏、木下家治氏、網干茂太郎氏の五家族が先発されており、その人々と現地との連絡を計り慎重に調査をすすめ、家長方は鳩首談合を重ねた。後々の事柄はいずれまた現地に渡ってのことと肚を決める。

人は休むが地球の回転時計に休日はなく、月日は進み年は越す。

正月、二月の冬季もはや終わりを告げ、菜の花から花へと蝶の飛び交う三月に入れば田地田畑、家屋敷と整理を終え、後は四月の乗船出航を待つばかりになる。

出航の日は我々渡航者一同の壮途を飾るような日本晴であった。小雀は囀りながら数ヶ月前に麦踏みした麦畑の青々と繁る中から群れて飛び交う、春もうららかの卯月一二日。移住者一同は小学校の庭に集合し、県知事代理として奥様のご臨席を受け、福団長宇都宮氏が一同を代表して、村民多数校庭を埋めんばかりの人の中を上部に設けられた知事席に進む。愛媛県より一度に二五家族もの海外移住は初めてのことであり、知事代理の奥様より移住者一同へ餞の言葉として「慣れぬ国のこと、幾重にも各自の健康に注意して頑張り、発展繁栄を祈ります」との慈愛あふれるお言葉と激励の書状を頂く。

答辞として宇都宮団長代理が、県知事代理奥様、居並ぶ県移住課の先生方に、出郷までの県庁よりの度かさねての御配慮と、当日のために遠路のところ御臨席を賜り、一同にとりこの上ない名

誉と思うと厚くお礼を申し述べ、同時に渡伯後は二五家族一家となり、一心同体となって、第二の故郷俵津分村建設に全力を尽くすとの力強い意志を表明した。

それを最後として桟橋に宇和島市鶴島船舶会社より特別船として差し向けられた第一五宇和島丸に乗船すべく、一同解散した。

特別船宇和島丸は既に移住者一同の小荷物、梱などの積み込みを終了し、移住者の乗船を待つばかりの態勢。桟橋付近はもとより、海岸線の道は見送りの人々で埋まり、村民の方々は申すまでもなく学校生徒、一際目立つ白地のエプロン姿の製糸工場の女工さん方と、文字通り人の波である。一同乗船の運びも整ってエンジン始動にドラが響き、今やの決別に、白地のハンカチは船上の人も陸の人も、振り合うことよりも顔にあてる方が数多いありさまだ。とめどなく流れ出る涙にいつしか布地が重くなり、派手に振ってはいるがどれも棒状となる。丘では前途を祝し安全を祈る万歳万歳の声が天にも届けの大歓送。港湾一帯に小波をたてて波紋は広がる。

この日の状況は、我が郷土俵津の開闢以来の事であったろう。

船も人も名残りを惜しみながら一路神戸港目指して宇和海に出、一夜明けて神戸移民収容所に入る。そして一週間後の四月二〇日、大阪商船南米航路のブエノス丸に他県の人々と共に、俵津団体も異状なく身も心も張り切って乗船したのであった。

二

乗船後半日足らずで渡航者を悩ました玄海灘の荒波も、一夜明ければ嘘のようにおさまっり、人々はやっと元の姿に立ち戻る。

若干名はその余波に参り、食堂にも姿を見せない方もいたが、日時の経過に伴い少しずつではあったが慣れてきて、寄港地の上陸許可のおりた港では上陸もして手まねや身振りで珍品を求め、賑やかに歩道を闊歩ではなく、純日本式の歩き方。土に触れるただそれだけでも皆元気に帰船するのだが、船が港を出るとあの元気さが何処かに雲隠れしてしまう。

天長節を迎え、赤道祭をおくり、素人演芸会や運動会と、乗船までは他県人であったのが一つ釜の飯を食べる間柄ともなればその区別はなくなり、東北弁に九州弁、中をとりもつ四国弁と、入り乱れて船内は賑やかに笑いの渦がまく。

その陽気を繰り返す日々であれば誠に申し分はないけれども、中にはまさかと思う大事な奥さんや子供さんを失い、悲嘆に暮れあ家族の方もある。

全てが世の中の回り合わせというものの、四〇余日の旅である、その道中にかかる不幸とは余りにも神の慈悲が薄すぎる、と考えるのは人の気ままな思いだろうか・・・。

進みもならず退きもならず、船はいよいよ大西洋の真っ只中で大時化に揉みに揉まれて、かかる悲痛の心を遠ざけ、やがて少しながらも雲り後晴れの姿勢に戻り、人々の心と姿に合わすかのように、船も動揺なく南米大陸のブラジル国に近づいて行く。

下船港サントスに六月二日、四三日ぶりに着く。各々税関その他の諸手続きを終了して翌三日、我々俵津団は七〇〇余キロの目的地チエテ移住地に向かう。

サントス出発二日目に下車駅ノロエステ線ルッサンビーラに到着。特別列車のためにその駅停まり、長時間かけて各々の荷物を

トラックに積み替え、名に聞こえたチエテ大河岸まで行く。チエテ大河はその時橋梁建設中で、川向かいが目的のチエテ移住地である。川幅三〇〇メートルとか聞くその河を対岸まで筏（バルサ）で渡る。

見るも初めて乗るも初めての筏、人も車もへし合いながら一本のワイヤロープを頼りの数十分間は、雲つく男でも身が縮むおもいだ。

二五家族、一四八人を数回に分けて運び、全員滞りなく渡河し終るまではかなり時間を要した。

夕暮れ迫るころチエテ移住地第一市街地に着き、その夜は小学校を宿舎としてひとまず旅装を解く。

何はさておき水が先と、井戸水の汲み上げにかかったが深いのなんの、四〇メートルとかに一同驚きの外はない。二五家族に一つの井戸、深さは深し馴れてなし、団体がたとえ一夜泊まりというものの、洗面にも事欠く有様だ。

移住地到着の第一夜は明け、早朝より出発準備をして二五キロ奥の仮収容所向けに隊伍を揃える。行けども行けども密林の道、樹の葉隠れに見える太陽は燦々と輝いてはいるけれども、大樹の連なりに遮られて暗さを感じるような道を、トラック隊は砂塵を巻き上げてすすむ。見ると聞くとの大差にいささか心細くなり、二、三の婦人方はこんな筈ではなかったが、今更どうしょうもないとの私語が後に続く我々の車に聞こえてくる。

婦女子にしてみれば無理からぬこと、大の男でも思いは同じ、ただ胸の中にしまっているだけである。

蹋み潜ってやっと第二市街地ベラフロレスタに着く。ここも相

変わらずの名のみの町で戸数はわずか、ブラ拓事務所、旅館、雑貨店、肉屋、薬局兼医務局、小学校と周囲には労働者の粗末な小屋が点々とあるだけ。
その町の日本人旅館で昼食をとり、又その町より西方六キロ奥に向い、バラック建ての仮収容所に正午過ぎに入所した。
故郷俵津を出てより六〇日目に、ようやく第二の故郷との合言葉だった目的地に到着。やぁー着いたぞ来たぞと家長連は長途の旅の疲れもみせず、他を励ますためか、声高々と肩を叩き合って話している。
二棟のバラック建ての家には屋内の仕切りはなく、大小の家族の配置に団長、世話役員の方々が差配にテンテコ舞い。振り当てられた各々の場所に、柳行季（やなぎこうり）を重ねて境をつくり、一応の整理をする。
間もなくブラ拓事務所購買部から当座の食料品が届き、主婦方は夕飯の準備や各々も分担して荷物の再整理、室内掃除に水汲み作業と大童。
故郷出発以来、神戸収容所内での諸事からはじまって、船内における団体行動、着伯早々と、団長は身を忘れての陣頭指揮である。
日没頃までには大体整理もつき、俄作りの炊事で粘り気のないご飯に煮干の鰯で夕食を済ませ、これから数カ月過ごす仮収容所の第一夜を暗いランプの下で迎える。
ブラジルの六月は冬と言っても名のみで、内地とは比較にならないが、もっとも常夏の暑い国とばかりに思い込んでいた故か、宵屋外に出てみると体がそれとなく冷えるような感じがする。見

上げる中天には一片の雲もなく、教えられた南十字星がやや傾斜し、他の星とともに射るように輝いている。

地平線は暗黒に、大密林が続くのか一際線をえがいて目立ち、共同炊事場から多くの燃え残りの薪の煙りが、無風の庭にさながら夕霧のごとくその一帯を白煙となって取り囲む。 時々宵の静寂を破って、野鳥の奇声が遥か密林の彼方より尾を引くようにして伝わってくる。

団体一同長途の疲れで、行水後は思いおもいに寝につく。いかなる夢路をたどるのか、吉と出るやら凶とでるやら、丁半の骰子は畳ならぬ板張りの床に伏せられた。

航海中夢にも予期しなかった二名の犠牲者を出して同志共々に悲嘆にくれ、二五家族一四八人の健在を祈り、願わくば一人の同志も支障なく、あの日校庭で誓った俵津分村建設に初志を貫徹できるようにと偏に念じて、団体の長は一同の寝静まったころに身を横たえたことであろう。

到着第一夜は次第と更けて行き虫の音もなく、仕切りなしの広間からは熟睡した人の鼾がもれてくる。

日用品の不足をきたしたので、翌日はみな諸荷物を解いて再整理をする。後刻ブラ拓から所員の来訪があり、見るも聞くも初めての我々に対し、衛生をはじめ食生活その他いろいろと詳しく注意を与える。

僅かに開墾された場所以外は大密林に覆われ、町まで出るのに六キロの山道である。交通の便はなにもなく、所員の話を聞けば聞くほど、前途の光明希望が一時に吹き消されたような面持ちとなる。

しかしどのような話や説明を受けても、事ここに至っては一同肚を決めるしかない。どのような知恵を絞っても他に方法はない。バラック建ての収容所付近は大石小石が露出していて、その地下は一枚岩盤とか、井戸を握るにも掘りようがなく、それでもダイナマイトを使用すれば可能ではあるが、それには莫大な費用がかかりブラ拓事務所でさえも施しておらず、個人ともなれば尚更のことである。そんなことから飲料水は専ら小川の水を利用した。ただし川水は川上でそれぞれ汚物を洗い、不潔はいうまでもなく、特にアメーバ赤痢菌の恐れあるために必ず一度沸騰させてから飲料水とするようにとの注意があった。初めのうちは忠実に守っていたが、そのうちに生水を飲むようになり、ために多くの犠牲者を共同墓地に埋葬する結果になろうとは、その時点では想像もしなかった。

三

我が団体の入植地は収容所の川向こうである。八月の乾燥期に山焼きをするために目下その地域を幾組もの請負師の手によって伐採中である、大木を伐る斧の音や、倒れゆく大木の音が地響きをたてて伝わってくる。

起伏に沿って倒木は長々と連なり、古里では到底想像もできない大密林の伐採風景である。

収容所内に多くの日本人家族が居ると伝え聞いたのか、町から肉屋が隔日に一キロ宛に計った牛肉をうす汚れの米袋に入れて売りにくる。馬の背に結び、馬の汗が袋に伝わって地面に大きい雫となって落ちている。

一キロ二ミルレースと言って声を張り上げてはいるが誰も買おうとしない。後日その袋入りの肉を買って食べるようになったが、その折りは見慣れないし、第一不潔な感じと二ミルレースの伯価は当時の五〇銭である。在所にいたときの一日の労働賃金がその肉一キロと換算すると、簡単に買う気になれない。

ブラジルは暑く、日々の重労働の続くことであるから、渡伯間もなしでは無理かも知れないが、努めて早く動物蛋白や動物油、植物油とかなり豊富に摂取するようにと指導員より教わっていたが、上記の通りの次第で日も浅くなかなか慣れず、専ら油抜きの日本食一点張りであった。

四ケ月位この収容所で共同生活をしなければ各自の地区に入植できないとの話なので、みな内地より持参した野菜種を大石小石を避けて蒔き始める。収容所そのものが水の便を考慮して小川の近くに建っていたため、野菜畑への潅漑は至って容易であった。この間の野菜代用に旧移民宅を訪れてマモン、マンジオカ、その他少量の大根などを求めてきたものである。

一〇日、二〇日と日時の経過に伴い、旧移民の方々とも接触度が頻繁となり、主婦の方々はその宅より当国料理や味付けなどを教わって、肉料理に豆の味付けと多少慣れてくる。牛肉は元来おいしいものと思っていたが、それは日本の話で、こちらの牛肉ときたらまるでゴムを噛むようで味も劣り、大陸だけあって肉まで大味だとピンガを飲みながらの夕餉、筒抜けの屋内で家長さん方は談笑している。

昔から郷に入れば郷に従えと言うことがある。まずはお互いが慣れることよと話合い、日々の出来事や見たり聞いたりのよもや

ま話に強いピンガの勢いを一時借用し、古里の話や現地の話を取り混ぜて次から次へとお喋りに花が咲く。

下戸も上戸も普段の姿には別に甲乙はないように思っていたが、一度酒が体内を走ると話題は豊富になり、姿恰好も他を引き付けるような愉快さが見え、我が父もせめて小の小でもいい、その仲間に入れるならさぞや気分も身体も、明日は明日の風が吹くの姿勢になれるのにと思いはするけれど、下戸も下戸の大下戸、酒屋の前をゆっくり歩いたら酔うという父には、到底この上もない無理なことだったろう。

渡伯前に流行した古賀政男作曲の「酒は涙か溜め息か」、その歌詞にある通り、一口の酒によって心の憂さの捨て所となるのに、侭ならぬこの世の仕来りと思う。

閑話はさておき、七月下旬ころ渡伯後はじめての降雨があった。派手な雷鳴にど肝を抜かれ、トタン屋根を打つ大粒の雨に皆が縮みあがった。

七月の乾燥期には比較的雨が少ないというのに、このような降り振りだとブラジルの雨季に入ったらどのような降りかたになるかと、先を案じる。

八月の山焼き予定日が近づく。その頃より悪性病魔が忍び寄り、医者よ薬よと果ては家族を悲嘆の縁に追い込む羽目となる。

いよいよ山焼きの日が来て、最後に伐採した場所は未だ青々としているにも拘わらず、植え付け時期を遅らせないように大山焼きに移る。

この作業はブラ拓側から数十人の人を差し向け、日本人の頭の発砲合図で火付けする。午後の最も気温の高い頃、合図とともに

一斉に火付けが始まり、燃え行くに従い風が風を呼び黒煙沖天を焦がすとはこのことか、まさに一大壮観である。煙りに巻かれて逃げ遅れた鳥類は右往左往、広い伐採地区に水を求め餌をあさっていた多くの野獣も焼け死んだことであろう。その証拠には、若干名のブラジル人と旧移民の慣れた人々は、各々米袋をさげて、焼死した野獣狩りに地面も熱く燻るなかを探しに行く。見慣れぬ我々からしてみれば、焼死した獣類の肉を食べるとは如何にも滑稽のように思えたが、慣れるとは恐ろしいものでもあり又強いもので、後には我々もその肉を食べるようになったものである。

その時期はこれと言った作業もなく、若手の家長さんを始め、青年、女子は農業実習を兼ねて旧移民宅に分散して稼ぎに行っていたが、この山焼きの日は各地方から皆帰り、初めて見る山焼きを見物した。山焼き後は直ちに一〇アルケールス（二五町歩）に測量し、各自の地区を抽籤によって決める。決定と同時に先ず小道を開き、家建ての場所作りに取り掛かるのである。

ブラ拓事務所の指示では、なるべく住家は高いところに造るよう、さもないと健康に関わるとのことで、皆が高所を選んで場所造りを始める。

家の位置は大体皆と揃うように建てた方が後々何かと好都合だとの相談により、その様に進める。なるほど家並みを揃えれば隣近所の連絡も容易になる。

さて山焼き後は本格的な整地作業に入るため、それまで買い入れていた大鋸、大斧、大鉈と農耕用の唐鍬などを慣れぬ手つきで磨き研ぎ揃える。どの道具を見ても手にあまる代物ばかり、国より持参した斧と比較して見ると当国のマッシャードの太いこと、

まるで大人と小人の比だ。
山焼き後の整理には欠いてはならないものだが、このような代物を一日中振り回したらと思うだけでも気力が半減する。皆も同じ思いだろうと思いながら、それぞれの鍬の柄、斧の柄、鉈の柄作りに教えられたり教えたりで汗を拭う。
川向こうの焼け跡は白い煙が点々と見えるが、何よりも急ぐ家建ての場所をと即日より行動開始する。運のよい人は誂え向の焼け方の場所に当たるだろうが、我々はこの辺と見当をつけて立ち入って見ればひどい不焼けで、予定とはまるで逆の手の施しようもなく足の踏み場もない始末。伐り倒された大木の枝が未だ青々と葉を光らせ、涼しい顔をして昼寝の姿だ。何一つ残らずに土まで燃えたかのように見えた大山焼きだったが、見ると現場との大違い、不焼けも夥しい。この辺はと思う場所は規定線より遥かに離れ、思案投げ首であったが、団体の意向を守り、立山にも等しい不焼けの場所に挑む。
当国の九月から十月にかけては収穫を左右する植付期とか、遅れても十月末までには棉、米、その他の作付けができるようにと、各々一馬力を二馬力にして慣れない大木相手の作業に取り組む。
不焼けのために夕刻山作業から帰れば、身体やゲートルの中に喰い込むダニ退治が大変だ。山から身につけて後生大事に持ち帰るそのダニが、留守をあずかる婦女子、子供らを責め、その咬み跡が化膿して熱を出す者もある。ダニだけではなく、小蝿に小虫その他あらゆる虫害にしばらく悩まされ通しだった。
山焼き後の木灰に皮膚を冒され、皮膚の強い男子は別として、婦女子は手足より薄茶色となった滲み出る水を絶えず拭きとらな

ければならない。

一五〇名の集団移住といえば、知らぬ周囲の人々は驚異を感じて派手に驚いたかもしれないが、その中には渡伯を嫌い、主人にすがって移住を断念させようとした主婦もあり、結果不承不承に付いてきた二、三の方もある。その方々から見ればこのような山の中の生活、文化とは程遠い上に、見も名も知らぬ虫害のこわさ。今更この身が虫に責められるように主人を責める訳にもゆかず、日々を懊悩にくれたことかも知れない。

入所当初はブラ拓事務所から川水は生で飲むなとの注意を固く守っていたが、沸かした水だけではこと足らず、知らずの内に生水を口にするようになり、ついに恐れられていたアメーバ菌の攻撃となり、日ごとに蔓延を辿るようになったのである。

医者よ薬よと走ったが病には勝てず、尊い人命が柩となって共同墓地に運ばれる。どの家もどの家族も、だれかが同病に冒され、体力の乏しい幼児ほど死亡率が高く、大人も栄養失調からくる衰弱気味の方にいち早く罹病する伝染病で、油断も隙もできない。

その頃は薬局通いが頻繁となり、病人の看護や炊事洗濯と、男手の少ない家の山作業は遅れるばかり。仕事は次々と重なり病人は絶えず、事この事態に至れば山作業どころの騒ぎではなく、妻への看護、子供らへと、薬局通いと医者呼びに行く人が毎日のように、どこかの道で出会うという話はこの頃の出来事である。

医者を呼び、処方される薬によって、妻なり子供達が日ごとに快方に向くものと思っていた所、日を追って益々病人の容体は赤信号、悪くなっても快方には向かわない。内地だったら患者を一人一人隔離して方法を講じるのだが、普通の人も患者も一つ屋根

の医療設備も何もない町里はなれた山のなか、病人は苦しみ、家族も同じ・・・。日ごとに罹病者は増え、患者は悪化を辿るばかり、昨日に次いで今日も葬式、医者薬局通いは常のこと、唐鍬をもって共同墓地へ埋葬場作りに通う。入植後わずかに三、四ケ月たらずに二二名の犠牲者を出し、一同悲嘆の渦にまかれる。

呼べど叫べど母国は遠く、ホームシックは募りゆくばかり。妻を失い子を亡くした多くの人は悲嘆の明け暮れ、団長氏も同じく子供さんを喪い悲痛の中にあったが表にも見せず、各々の家族に対し労り励まし、多くの犠牲者の霊を無にせず、これを乗り越え、残った我々がなお一層一致団結ことに処してゆかねばならないと温情をもって力説。遺族は等しく団長の「私」を切り離しての行動と言語愛に頭の下がる思いであった。

四

九月に入って各自割り当てられた地区に家建てを急ぎだし、やっと月末ころから点々と赤い屋根が見えはじめる。

最初の計画は各々自力で建てる予定だったが、遅れに遅れたので大きい出費を覚悟し、大工を雇って急ピッチに建てる。誰しも早く家に移らないと通い作業では十分な仕事もできず、病人の看護をしながらではあったが、それぞれの自分の土地の家に移って行ったのは十月も中旬であった。不焼けのために障害物が多く、隣近所の見通しは不完全ながらも、一列にのぞめる赤瓦の屋根は、何となく心強い感じである。

家移りはしたというものの名のみで、室内の造作はできておらず、家の方は程々にして焼け跡の整理から始める。大斧を振り上

げて大木の枝払いや切り離した大小の枝を積み重ねる。大斧、大鉈と使い慣れぬ代物で真っ黒になり、人の姿は見えないが隣近所から斧の音が伝わってくる。

右も左も懸命に精をだし、開拓の鬼となる。日常は無理の重ね、身の保養も返上しての活動、第一線に立つ家長さん方の頑張りは筆や口に言い表せないほどだ。その結果数百年もたった大木の枝々が取り払われて、山を畑と化粧する。

日ごとに不焼けの山の相が大分変わってくる。

水は同じくその川より汲み上げ、大木の切り株を避けて通りながら三〇〇メートル程の距離を天秤利用で食事休みに一荷又は夕刻にと、皆の家族や大人たちが川通いである。雨水も取るために椰子の木を半分に割り樋を作って見たものの、年中雨が降るわけでもないので思うように水が得られない。暇々に井戸を掘ってみたものの、一枚岩盤にあい、鑿で掘ってはみたが素人の腕には及ばず、断念しなければならなかった。川水に禍いされての経験で飲む水は必ず沸かしてと用心する。牛歩のような焼け跡作業だが、日を重ねることによって大体蒔付けもできるようになった十一月の夏の気配を感じるころから、又しても招かざる熱病が襲ってきた。

標高が低く周囲が無数の川に囲まれた奥地の未開地にも等しいこの開拓地は、マラリヤ病の絶好の発生地とは夢にも知らず、マラリヤにとっては活動の時期、この世の春が来たとばかりに、一族眷属ひきつれて我々の世界へ侵入する。

何の因果かこの数カ月前まで、アメーバ赤痢に多くの犠牲者をだし、いまだ涙も乾かぬうちにまたしてもこの熱病マラリヤと戦

わねばならぬとは、これ又神ならぬ身の知る由もない。因果は巡るなどと言ってはおれない。

ある日ブラ拓農事部から農事指導員が来て、「早く作付けしないと収穫に影響する、特に主作の棉は何よりも早くに蒔付けるように」と促され、

「追って指導するが、植付け間隔や種の粒数はこの程度で後日二本に間引きする」などと教えて回り、馬に揺られて帰って行く。なんと言っても棉は生命線、一俵でも多く収穫をあげるには、指導員のおっしゃる通り早く蒔付けせねばならないと気はあせる。

体力に自信のある方は、又々早星夜星の活動となる。しかし未だ慣れきらぬ気候や食事事情、心は張り詰め自信はもっているのだが次第に体力は弱ってゆく。暑さは暑し日は長し、弱り目に祟り目とはこのことか、病魔の食い込む好条件である。ついに一人、二人とマラリヤに罹り病床に横たわる。棉を始め一斉に他の作物を蒔き付けねばならぬ折も折、何処の家庭も誰かがかわるがわる床につき、家族も心配顔で顔色も話し振も冴えない。

マラリヤ病特効薬キニーネはよく効果があるようだが、その反面副作用が強く、胃腸や肝臓を冒す。元来丈夫な人でもしばしば消化器を冒され、虚弱者は忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずの重盛の姿、これ又難渋である。

畑は人を招き、人は医者を招く。団体同志の間柄なので、作付の遅れた家には加勢にゆき、病人方を安心させるように努めた。

このマラリヤはアメーバ赤痢と違い、三日熱とか七日熱で、一定の期間がくれば納まり、再発はあるが、人命をと言うほどの心配はないようであった。たとえ三日とか七日とか言っても、四〇

度を超す高熱で喘いでいる患者にとっては生やさしいものではない筈である。その患者を見る家族の方もまた同じで、暑い真夏のただなかに重ねた布団を被って震える有様は、体験者でないと分からないであろう。

この十月宇都宮紋次郎氏の家族が後れながらアレグレ区に入植したが、間もなく次男の幼児をアメーバ赤痢で亡くす。

とにかく主婦三名、子供一九名、合わせて二二名の犠牲者を出したことは、いかにアメーバ赤痢が猛威を奮ったか大凡見当がつくであろう。

さて筆を元に戻し、日々に強まる灼熱の太陽は容赦なく照り続いたが、疲れ果てた人々の心を引き立てるかのように、蒔付けられた作物は威勢よく夏の光線を、スコールを浴びて好条件の中に発育は良好であった。

革の労働靴が直射日光で焼け付くとき、マモンの木陰にしばしの憩いをとり、生ぬるいお湯にも等しい水を飲みつつ、地球の皮を掘り返す。

酷暑の十二月もようやく終わり、チエテ入植初の昭和十年（一九三五年）の正月を迎えた。所変われば品変わるとか、正月元旦、団扇片手に雑煮に向い、西瓜を供えて御神酒をあげ、心ばかりの新年を共々に祝う。国では松の内とか言って三日間は正月気分で、酒は飲まなくてもその雰囲気に酔うのだが、こちらでの正月は農繁期でもあり、来て初めての正月と、なにぶんに気分そのものに焦りがあるため、ゆっくりと腰を伸ばすゆとりもない。当国人や旧移民の方々のように、日曜だ祭日だと言って休む気分になるのは未だほど遠い。着伯七ケ月位では現地の風習にも馴染めず、専

ら故郷の習慣の延長である。二日からこの畑も噴霧器を背負って棉の消毒作業が始まる。

まえに記したように、小川近くは水の便はよいが、健康を欲するならば通風の良い高所に家を建てるようにとのブラ拓事務所よりの忠告もあって、我が団体はかなり高いところに家があり、小川までは遠い。その遠い川から水を天秤で運ぶのだが、緩傾斜の土地もあれば急傾斜の土地もあり、棉の消毒時期になると水運びが大変である。青年でさえも夕方になると悲鳴をあげかねるのに、女子の方は何程か骨身にこたえたことかと思う。

噴霧器を背負えば、棉畑の中には無数の大木が横たわり、跨ぐに跨がれず、バックしての作業は中々はかどらない。山は新山、手入れは上々？　で作物は見事な出来栄え、それは良く発育したものだったが、余りでき過ぎて結果は不調に終わった。と言うのは、茂り過ぎて通風わるく、油虫の発生に伴い雨量過多、結果実の止まりがわるく、徒に木を見て喜ぶに過ぎなかったが、消毒中は無我夢中、従って水の使用夥しく重労働となる。

渡江村出身の酒井鶴市氏は、畑の要所要所に亜鉛製長方形で五〇〇リットル位の容積をもつ箱を配置し、テント布で雨水を溜める方法を教え、氏はその方法で他人よりも数倍の能率をあげていた。

第一遠い川からの水運びの手間がはぶけ、時間と労力は比較にならず、人はやはり頭を使わねば何事をしても遅れを取るばかりと考えさせられ、見て教えられもした。

正月二月は雨季中の雨季、不焼けの山の切り株からは脇芽が、どちらが主作が判然しがたいように青々と伸び、本作と背伸び競

争をしている。
三月に入れば陽の強さも幾分やわらかく、下旬ころには朝夕初秋の色を示してくる。
四月の声をきくと俄に秋らしくなり、諸作物の収穫が始まる。陸稲や他の雑作物を収穫し、引き続いて棉の収穫も始まる。
少しでも秋の気配を感じるようになると、あれ程猛威をふるったマラリヤが途端に影をひそめ、羅病者はけろりと嘘のように元の身体にもどる。
こう書き綴ればしごく簡単のようだが、その当人にしてみれば着伯早々風土病と戦い、その病治るころ次のアメーバ赤痢に苦しみ悩み、体力があったお陰で一命をとりとめたが、また次に襲いくる熱病マラリヤと、誰も好んで身を近づける病ではないが、次から次ぎへの重なりで、痩せ牛にダニと言うか蝿と言うか、当時そのような言葉が日常の挨拶代わりのように親しい者同士で取り交わされたものだった。
五月に入れば愈々本格的な棉摘みになり、気候は良し体調も良しで、久しぶりに各自の棉畑から昔の歌や流行歌が風に乗って流れてくる。作業中にも何かの折りに話の種が生まれて、爆笑の伝えが耳に入り、こちらも釣られてその方向に顔を向け綻ぶ気分になる。
六月一杯で棉の収穫もおわり、九月までの乾燥期の間に次年度への整地作業に没頭。前年度は荒作業だったために捗りは見られなかったが、一年後ともなればさすがの大木も半腐れとなり、小木は完全に枯れ、火のお陰で片付けは半分以下の労力ですむ。
一同入植初の収穫を終わり、同志の健康状態もはるかに良くな

り、活気も見られるようになった。一年後となれば多少なりと風土気候や油食生活にも慣れてきて、自家用の卵や農作物に大被害を加える野豚を落穴で捕獲し、その肉を塩漬けにして日常の食卓にのせ、動物蛋白、動物脂肪と共に果物や野菜もできてくると言ったように食事情も好転する。

何はともあれ、健康な身体に勝る宝なしだ。病んでみて初めて知る健康の有り難さ、だが何と言ってもノロエステ線の最奥、諸病の巣窟と知っては例え肥沃な土地でも永住の決心はにぶるのであった。

二農年目は各自半アルケール又は一アルケールと伐採して拡張を計る。

陸稲は雨が多ければ幸となるが、天候に左右されながら心配して作る物よりもやや乾燥を好む棉作の方が心強くもあり、自信がもてると言うところから、二年目は殆ど棉作に転向した。米作は川縁に適当な土地のある方のみに限られた。

こうした二農年目も前年と変わりない結果となり、夏に入ればマラリヤが同じように猛威をふるう。

この頃各家々で井戸を掘ったが、前に述べたように一枚岩盤に合い、皆がサジを投げて井戸水は飲めないと諦めていたところ、中浦氏宅のほうで浅く井戸を掘り当て、飲料水用として四方より列を作って汲みに行った。酒井、西岡両氏は共同で井戸を掘り、水脈には当たったが地層固く、中途半端でストップ。水量は乏しかったようだが、それでも飲み水には事欠かない様子だった。

水やマラリヤに悩まされながらもその年も暮れて昭和十年を迎う。

この団体のチエテ移住地入植は多大な犠牲者を出したので、県庁の方に連絡をとり、県移住課より主事山下利久氏を招き、一日井戸水豊富な中浦氏宅の庭に幕を張って俄あつらえの会場を作り、団体一同その労を犒って歓迎会をひらいた。その日の主事氏の団体への思いやりの言葉、犠牲者を出した家族へも、我が身に降りかかったかのような心情を以て悔やみ言葉を述べられたことは、忘れられない思い出である。

この日の歓迎会の折りは、矢野宗馬氏家族は旧耕地イニューマ区に移転しており、続いて宇都宮庄太郎氏、坂本甚平氏、西本範一氏、宇都宮富男氏、坂本藤次郎氏の五家族は地質条件が伴わず、親戚知人の招きもあってバストス移住地に転住していたので、山下主事を迎えた者は、アレグレ区在住の団体家族数の一九家族であった。

昭和一一年（一九三六年）十二月、郷土俵津から伊勢善吉氏、池田国太郎氏、中浦仲三氏三家族が着伯し、サントス港まで尾下仲枝氏が出迎えに行った。一時この三家族の方は親戚の家に身をおき、数カ月後に各々独立農に入る。

昭和一二年（一九三七年）三農年を終わり、入植以来の絶えずの病人続出と、主作の棉が土地の良い割合に良い成績があがらず、加えて定期的に襲ってくるマラリヤと、以上の事情に悩み考えると入植者の不安は尽きない。

広いブラジルのこと、どこか理想的な健康地がある筈だがと、諸氏寄り合って話し合う。ぐずぐずしていたら来年度にひびくし、転住希望者も多いので方々調べた結果、一〇〇キロ先のアラサツーバ近くの方に、英国系植民地があると分かった。代表者の視

察結果、標高もよし健康地と詳しいことが判った。契約条件も悪くなく、転住希望者も決定し、その心組で整理がはじまる。

なにはさておき第一にブラ拓事務所の了解を求めるべく、三名の団体代表者が赴き交渉に当たったが、ブラ拓支配人は容易に首を縦に振らない。

日を改めての再交渉も同じ結果となり、転住は一日を争う焦り気味の折、いよいよ三度目の折りは代表者を若手家長に交替、口角泡を飛ばして激論となったが、それでもブラ拓首脳部は面子を重んじてか、一度に一〇数家族の退耕となると後続部隊への不信を感じるのか、機嫌よく首を縦に振らない。そのようなブラ拓相手では埒もあかず、この上は実力行使と打って出る。即ち人聞きは至って悪いが、昼と夜を間違えた逃げかただ。勿論その梟組はブラ拓に負債のある者だけであったが・・・。

以上の次第でノロエステ変更線アグワ・ペイ駅の英人耕地へ次の諸氏が転住した。児玉、北原、中村、田中、山下、西岡、三好、伊勢、池田、尾下、宇都宮善節、中浦、大谷、浦田、中浦仲三の一五家族である。アレグレ残留家族は宇都宮、酒井、高岡、上杉、中野、宇都宮一の六家族であった。

翌年、宇都宮紋次郎氏、酒井亀市氏の二家族も英人耕地に移った。

我々は遠く英人耕地に移ったが、その後多くの犠牲者が永遠に眠る第二市街地の共同墓地の各々の十字架の建つ墓場へ、一一月のお盆には必ず手桶の水をそそぎ、線香を供えて多くの同郷者の霊を祀り、草が繁ってくれば除草し、常に周囲をきれいにして護って下さった方は宇都宮紋次郎氏を始め残留した同郷の方々で

あった。

こうして俵津村分村の夢を描いて入植した二五家族の希望は潰え、多くの家族はチエテ移住地を後にしたのであった。

一九七七年十月記

ベラフロレスタ初期の句会を憶う

倉内　孝一

回顧すればいつの間にか半世紀が夢まぼろしのごとく過ぎ去った。

その当時先輩の丸山兄から、たまたま俳句の話がもちあがった。趣味と勉強も兼ねるから始めてみないか、と薦めてくれる先輩の方がおられるからと勧誘をうけた。百姓の私にはお門違いのような気がしないでもなかったが、ともかくこの話を隣家の坂根清吾君に持ちかけたら、我が意を得たりとばかり、彼は双手を挙げての大賛成だ。

坂根君はつとに詩文学を好み自由詩や俳句まがいの作を沢山もっていて、無関心の私のところに持ち込んで来たことしばしばだった。このような彼にしてみれば双手を挙げるのも当然である。

そこで早速同年代の知友四、五人に件の話を持ちかけたところ、みな乗り気一杯である。ここに至って一夜集会を得て、わからずながらも未知の世界へ向かって句会を始める切っかけとなった。

とは言え、みなズブの素人の集まりで暗中模索するばかりなので、丸山兄がチエテ産業組合に在勤の俳句に熱意をもって薦めてくれた鈴木季清氏に依頼し、指導を受けることになった。鈴木氏はこころよく承諾してくださり、私共句会のために労をいとわず率先指導をしてくださった。

こうしてどうやら農村の奥山の一角から小さいながらもベラ・フロレスタ句会が呱々の声をあげる切っ掛けとなった。当初の句友は以下のとおり、丸山凡土、保田草南、保田渡南、中村蘇拙、坂根三珍、倉内邱土、みな血気にはやる若者であった。週一回木曜日の夜の句会の集会には鈴木氏の指導よろしきを得て、句作意欲は漸次募り、欠くことができない楽しみの一つとなった。日を経ずして宮地耿葉、和山素描に次いで秋山蛙声兄の参加を得て我が句会は盛会を極めつつあった。折しも鈴木季青氏の斡旋でアリアンサ移住地在住の佐藤念腹先生の添作指導を受けることになった。間もなく佐藤念腹先生は俳句の普及を目指して交通不便の当時、遠路をかえりみず直接指導に度々きてくださった。ときには激励のため先達の万城目金之助氏や、或るときは聖市から大河内製薬会社社長武骨氏を同伴して見えられたこともあり、私ども新人は句作の意欲をかき立てられた。特に三珍君は三度の飯より俳句を好んだほどの御仁、生来の素質に拍車をかけて名句をものにしはじめた。物事をとらえる彼の視点は明確であった。

今朝の道胡麻は刈られてありにけり　　三珍

オームがうたうカルナバルの一節を　　三珍

これが三珍君の初歩ころの句ではなかったかと思われる。
歳月の経過とともに丸山凡士兄は或る事情により止む無く中止されたが、句作熱はいよいよ燃え上がり花盛りの観を呈しっつあった。或る年の新年会にはチエテ開拓当初の大先達吉川耕花氏居において句会を催して頂き、私ども新人は大いに啓発された。
開拓当初の第一市街地（現在のペレイラ・バレット市）には当時の俳句会の大御所中島簾女女史を筆頭に木本子雷、小田島タダシ、横山吹雪、吉川耕花、鈴木季青氏等錚々たる俳人が句会を保って頑張っておられたと聞いていた。このような大先輩の吉川耕花氏が快く私ども若輩のために新年句会を開催して下さったことは嬉しいことだった。
時を経て第二アリアンサ移住地においてチエテとの合同俳句大会が開催された。その折りには目黒ハルエさんから心のこもった接待を受けたことは感激だった。この大会において初顔の坂根三珍君が特点を得てわが句会の顔を保ってくれた。
さて、話は少し前後するが、私どもベラ・フロレスタ俳句会発揚の地区はチエテ移住地第二市街地管轄で、チエテ河沿岸イリャ・セッカに接近した地帯であり、区友の草南、蘇拙、渡南の諸兄たちは折に触れてペスカに出掛けていたそうだ。蘇拙兄はペスカが高じてペスカ専用のカノアを作ったほどである。原始林から丸太を切り出してエンシャドンで挟って仕上げたカノアは立派な出来栄えで、名付けて「タヌキ号」と称していたようだ。私もたまたまペスカに誘われた折進水間もない「タヌキ号」に試乗することになり、居合わせた四、五人が蘇拙兄の注意も聞かばこそ、一度に乗り込んでしまったのは良いがカノアは重量に耐え兼ねて

左右に揺れた。瞬間、クルリと転覆、舟底を青空に向けてしまった。

途端に私どもは水中にものの見事にほうり出されたが、幸いにして水は首までのところで足が川底に着き、私は労働靴の片方を失っただけで難をのがれ、すっかりタヌキに化かされ気分で岸にはい上がった思い出は珍談の一つと言うところだ。

イーリャ・セッカは乾燥季には千畳敷の岩畳ができ、俳句探勝地として好個の場所であり、折々露天句会の会場となった。所々の岩間には一、二メートルのアナコンダの子もよく目につき、豪胆な若者は捕らえて逆さまに吊り下げて衆目をあつめて楽しんでいた。チエテ河のアナコンダは案外性質が温厚のように見受けた。序でに申せば私は入植当時第一製糖工場内で目にしたことがある。これは皮革であったが一五メートル余あると言われていた。アナコンダの皮が二百リットル入りの大樽の中に保管されていた。ペスカドールの伯人がイリャ・セッカ付近を遊泳中のものを猟銃で仕留めたものを手にして、ブラ拓の中村誠技士が鞣して日本に送る段取りをしていたものであった。

ここで今一つ思い出したのは、句友草南兄弟の武勇伝の一つ。これは戦前の紀元節の二月十一日だった。ペスカの最中に打ち取ったアナコンダは優に八、九メートルはあったと言われた。思いがけぬ大捕物だったので街から写真屋を呼んで親子兄弟四人でかつぎ上げて写真に収めた話は開拓史に残る逸話の一つに値するものでなかろうか。

さて余談はおきベラ・フロレスタ俳句会は歳月とともに隆盛に向かっていたが、この時点にいたって私は諸般の事情から聖市に

転住の止むなきに至った。この頃は秋山蛙声兄は農から足をあらい第二市街地産業組合に勤務されていた。私の転居を知って句友諸兄は一夜蛙声居において送別の句会を催して下さった。しかして各自得意の句をしたためた記念写真帳を賜った。四十八年前のこの記念写真帳は往時を物語るがごとく今でも書架の角にひっそりと控えている。

私は出聖後は句作から遠のいてしまったが、ベラ・フロレスタ句会の句友たちは止むことなく懸命に励まれて、斯界の機関紙には月々その名を連ねて注目されていることは誠に喜ばしいことであるが、惜しむらくは当初の句友中の三名は早逝されたことである。句作に人一倍の意欲を示していた三珍君は齢四十半ばで繁れ、次いで草南兄と素描兄は五十代の半ばであたら無情の風に誘われるごとく逝かれたことは惜しい極みであった。　現在頑張っておられるのは蛙声、蘇拙、秋葉の諸兄三名である。秋山蛙声兄は先年訪日の折りにたまたま全国俳句大会に出会い出場して入賞され、文部大臣賞を獲得されたことはまことに名誉なことであった。

蘇拙兄は啻に俳句のみならず往時陸上競技でも活躍し、ノロエステ線の跳躍部の花形選手であった。後年カンピーナス近郊に転居して果樹園を営み、新種の大形ゴヤーバに花を咲かせて句作に励み、悠々自適の生活、句作三昧に耽っている現在である。

いまやブラジルの俳句界は花盛りの観を呈している。ひとりホトトギス派にとどまらず、斯界の文芸誌、機関誌のページをくれば盛りたくさんの句が掲載され、妍を競っていることは見るものをして楽しませてくれる。しかして往時の紅顔の句友たちも七十の坂を越えた昨今は子孫にとりまかれて、人生街道はなお春爛漫、

顧みて今昔の感に堪えないものがある。

一九九六年七月記

歌人志津野華繪と「寄生木」

藤田　朝寿

戦前のチエテ移住地を代表する歌人、志津野華繪(本名花恵)はチエテ十年史を見ると岐阜県の出身で、昭和九年九月三日にチエテ移住地に入植している。

私は同年の十二月四日に入植したので、華繪より百日遅かったことになる。

歌人華繪は昭和十二年頃から、当時発行されていた聖州新報の歌壇に盛んに作品を発表して、一躍チエテ移住地の閨秀歌人として名を成していた。

昭和十四年、華繪は愛する夫をこの国の風土病プラスト・リコーゼで亡くした。夫亡き後は姑と共に四人の遺児を養育しながら時夫（姑の甥）と二人で慣れぬ畑仕事に励んだ。馬耕もやれば噴霧器も背負って棉の消毒もする華絵の姿を私は家の畑からよく遠望した。月の晩は衣類を洗濯する音が夜おそくなるまで聞こえたものである。

私は縁あって十八才の時（昭和十七年）華絵に短歌の手ほどきを受けることになった。　私と短歌との最初の出会いは、ある日

曜日、友人の家で机上にある古い婦人倶楽部を手にとって、何げなくめくっていると歌壇が目に止まった。

太田水穂選

入選一位

オールドスの雪をそめけむ吾子（あこ）の血のその紅が熱く目に沁む

二位、三位と読み進み、佳作の部も全部目を通すと、最後に選者詠として「内蒙古へ赴任して行く弟子に贈る」と詞書がついて、

今日よりは西さしてゆく鳥影もかりそめならぬものとなりぬる

身にしめて斯の道ひとつ守るかぎり亜細亜の奥も花のふるさと

この三首の作品を初めて読んだときの感動は今も忘れることができない。

私は一位入選の歌と、選者詠の二首を何回もくりかえし読んで、しっかりと暗記した。それからは仕事中でも(忘れないために)前記の短歌を口ずさんで独り楽しんだ。特に「身にしめて」の短歌に心ひかれるものがあった。

ある朝棉畑の除草をしながらいつものように口ずさんでいたが、まてよ、この短歌「亜細亜の奥も」をブラジルの奥もと置き換えたら、最も私の心に適うのではないかと気付き、それからは「身にしめて斯の道ひとつ守るかぎりブラジルの奥も花のふるさと」と口ずさんで得意になっていたが、そうだ！　日本語勉強のためにもなる短歌を作ろう、と思い立ったのは一七年の四月に入って

間もない日であった。
　四方の原始林には早咲きのパイネーラが咲き初めて、吾がアレグレの里にも秋がおとずれ、棉摘みに入るのも間近い季である。棉摘みが始まったら忙しくなる。善は急げとばかり月の晩、私は馬を駆けさせて志津野家へ向かった。道は迂回して行くので約一キロメートルの距離である。
　一年振で訪れた私を見て、華絵は喜んでくれた。「実は今夜お伺いしたのは他でもありませんが、短歌の手ほどきをして頂きたいと思ってお願いに上がったのです」と私が言うと、「まあぁ、短歌の手ほどきを・・・」とびっくりするような大きな声を出して華絵は美しい瞳で暫く私を見つめていたが、「そうねぇ、短歌を作ると一口に言っても、読むのは易しいけれど、いざ作るとなると中々大変なのよ。最初一、二年の間はだれでも張込んで作っているけれど長続きしないで、途中から止めてしまう人が多くて、折角楽しみにして教えていた私の方が気落ちするんですよ」と言われる。ここで負けてはいけないと私は下腹に力をいれて「日本語勉強のためにと考えた未決心したのですから、絶対に大丈夫です」と力強く言うと「そぅ、日本語勉強のためと言われるのであったら考えなくてはねぇ」と華絵はしばらく思案していたが、「それでは私と二つのことが約束できますか」と問われる。二つのこととは？「一つはねぇ、一生短歌をもち続けると言うこと、いま一つは俳句には手を出さないと言うこと、同じ短詞型文学でも、短歌と俳句では発想と表現が異なるのです。短歌をつくり俳句も作ったりでは、どっちもつかずになってしまって上達は望めないのです。二兎を追う者は一兎を得ずと言う諺をしっていますね・・・、ですか

らね、最初に言ったように、一生短歌をもち続けること、俳句には手を出さないこと、この二つのことが堅く約束できるのでしたら及ばずながら手ほどきをしましょう」と言われるのであった。私は即座に「大丈夫です堅く約束します。短歌一筋に勉強しますから、どうかよろしくお願いします」と言って頭を下げた。

こうしてとうとう短歌の手ほどきをして頂くことになった。私は喜びに胸をふくらませて馬に乗って帰途についた。

その翌晩から机のうえに白紙をおいて指を折りながら三十一文字に取り組んだものの、何と言っても小学校中退の身には三十一文字にまとめあげるのに非常な苦心と努力を要した。一カ月ほどかかってやっと五、六首まとめることができた。

私は喜び勇んで志津野家へいった。

華絵は作品を一首一首声を出して読み上げ、ここのところは重複しているからこう直して、ここのテニヲハは間違っているから二に直してとか、わずか十分そこそこの間に作品は一読して誰にでも分かるようになる。私は魔法にでもかかったような気分になり、感心して歌稿に見入った。

華絵は部屋から一冊の本をもってきて「この歌集は聖州新報社が出版したコロニアでは初めての「合同歌集」です。貸しますから持って帰って読みなさい」と言われる。手にとって見ると表紙に「移り来て」とある。一人二十首の出詠で歌人の写真入りで中々凝った装丁であったと記憶している。

短歌は添削して頂いた。歌集も貸して頂いた。私は大喜びで何度もお礼を言っておいとました。

翌晩から合同歌集「移り来て」に読み耽った。華絵作品は特に

心を込めて繰り返して読んだ。「移り来て」の中に今でも記憶している短歌が一首あるので左に記す。

金子秀雄

原始林に今落ちてゆく太き陽よぽさりぽさりと蟻は棉切る

私の家の棉畑は奥のはうが片側原始林添いであったので、夕方になるとサウーバが幅広い道をつくって大名の行列まがいに出て来ては秀雄の短歌のごとく棉を切るのであった。短歌ができると私は志津野家に行った。つぎに貸して頂いた本は小田切剣の自筆自選の歌集「蟷螂」であった。「蟷螂」の中に私好みの短歌が二首あった。今でも記憶しているので左に記す。

夕雲の朱くなびける牧原を一人行きつつ物思う身は

君住める西空遠く雲焼けて一人の我の今日も旅ゆく

この甘美とも言える短歌が好きでよく口ずさんだものである。小田切剣は筆名で、本名は清水美貴雄、日大の法科卒で最初バラボニータ区に入植、間もなくチエテ移住地を去った歌人である。戦後の一時期南米時事歌壇の選者でもあった。私も何回か投稿したことがある。

小田切剣は、戦前改造社が発行した新万葉集に四首、昭和五四年講談社が発行した昭和万葉集に三首、それぞれ収載された優れた歌人であった。左に一首宛記す。

小田切剣

行きずりに礼して通る村人のネグロは町に勤めもつらし　（新万葉集）

国遠く子にしたがいて移り来し嘆きは母の一生もちけむ　（昭和万葉集）

華絵について短歌を作り始めてから知らぬ間に二年の月日が過ぎ去った。そのころから華絵はコロニアで唯一の短歌結社誌「椰子樹」を貸してくれるようになった。

坂根総領事が「椰子樹」の生みの親であり、岩波菊治がアララギ派の歌人でコロニア短歌会の大御所とも言うべき存在であることが初めてわかった。

華絵は秘蔵の色紙や短冊も見せてくれた。草書の文字は当時の私には読めよう筈もなかったが、宝物に触れるような気持ちで手にとって見たことを今思い出す。「それからこれはねぇ、私の先輩で故郷の郵便局に勤めている方の短歌です」と言って渡された二つの折りの和紙を開くと「山吹き」と題して一連の短歌が行書で達筆に記されている。記憶している一首を左に記す、

遠山五郎

雨にぬれて咲くが美し山吹きの花の雫を傘にうけつつ

わたしは若しかするとの万に一つの期待をかけて、昭和万葉集二十巻の作者略歴索引を調べあげた。あった、遠山五郎、明治四十一年生、会社員～郵便局員を経る（華絵の言ったことと符合する）。巻六、百十二頁、逸る心をおさえて百十二頁を開く。一首掲載されている。

遠山五郎

面会に来たれる妻が刻おしみまなくひまなくもの言うを聞く

紙面に喰い入るように暫く凝視していたが、しずかに黙読、そして声に出して二回読み上げた。

はからずも昭和万葉集によって五十数年経った今日、再び遠山五郎の作品を見ることができた。この喜びは大きい。

短歌を作り始めてから三年経った。私一人で作っているよりも仲間を増やして、共に作歌に励もうと思い立ち、同じ組（八組）に住んでいる鈴木千代吉、鈴木品次、吉川順丸、同八十四、同範子兄妹、それにノーボ・パライーゾ区の山田実等に話しかけて同意を得、一晩みなで志津野家を訪れた（吉川範子、山田実欠席）。皆その場で弟子入りをした訳である。

仲間が増えると競争心が湧くので作歌に励みがついた。その頃バラボニータ区の富岡芳子、君子、美津子姉妹も華絵に短歌を送って添削を受けていることが分かった。ベラフロレスタの産婆井上豊乃も華絵門の一人であった。ペレイラ・バレットの松島末野と言う方も華絵に短歌を送っていることが分かった（末野は岡山の高等女学校卒と華絵はもらしたことがある）。

メンバーが揃ったので短歌の回覧誌を出しては、と言う華絵の提案に一同賛成、誌名は「寄生木」と華絵が名付けた。

「寄生木」第一号誌は原稿用紙を二つ折りにし、華絵のペン書きの行書で書いて出された（昭和二十一年の秋であったと思う。記憶している歌だけ記す。

志津野華絵

棉の芽は未だ幼し降る雨の激しくなれば気がかりて来ぬ

しめやかに雨降る夜半をちろちろと床下に鳴くこおろぎの声

飯島　清

まぎらせどままにはなちぬ玉突きのなおいらだたし紅白の玉

吾妹子（わぎもこ）の小指の傷を見てやりつつほのかに通うぬくみうれしも

富岡芳子

この年も変らで桜咲きけると故国の友の便り待たるる

富岡美津子

墓守りに四百レース、ブレゼントして墓の扉の鍵を借りけり

鈴木千代吉

滝落つる水の飛沫のぬれ岩に昼日のさして苔青く見ゆ

藤田朝寿

五彩（いついろ）の虹を孕みて落下する滝の水の音天地震わす

パラソルをさして乗りたる処女らの独木舟（カーヌ）は岸をいま離れゆく

去年来し時に飛びいし白鷺よ今年は見えず何地（いずち）去（い）にしか

千代吉作の「滝落つる」の短歌は、華絵が激賞した作品である。千代吉は現在もモジのコクエーラ九キロで悠々自適な生活を送っ

ている。彼の妻の姉が文協サロンの俳句のメンバーの一人相場道子である。千代吉と私は今でも兄弟同様の仲である。

華絵の都合上「寄生木」は第二号から私が編集を受け持つことになった。

第二号は飯島政夫の追悼号となった。政夫は闘病のため作歌を中断していたことが分かった。私にとっては兄弟子である。マアちゃんの愛称で多くの人に好かれていた。音楽にも才のある人でその死は村の人に惜しまれた。

藤田朝寿

飯島政夫兄の死を悼みて

もろこしの穂の出でそめし夏半ば君は帰らぬ人となりたり

逝きましし君を想えばもろこしの葉ずれの音もうら寂しかり

追悼号には吉川順蔵（家長）も出詠した。順蔵は俳人であった。青年達に刺激されて投稿、作品の追悼歌は華絵も激賞したが、思い出すことができない。

戦前（昭和十二年頃か）チエテ産業組合が組合の標語を募集したときに、吉川家では応募した作品三点がみな入選して村の人を驚かせた。

大海に航路あり、我らに組合あり

人はいさ何と言わうと我が家は組合利用で鼻は高いぞ

右の作品から推して順蔵の詩才の程がよく分かる。また彼は蔵書家でもあった。主に古典物が多かった。源氏物語、伊勢物語、徒

然草、平家物語、頼山陽の日本外史、高山樗牛の滝口入道、藤村詩集、土井晩翠の天地有情、九条武子の無憂華等々の良書ぞろいであった。どういう訳か順蔵は私には本をよく貸してくれた。分からぬながらも古典を借りて読んだことは、作歌上非常に為になった。

鈴木品次も二号まで出詠したが、どうしても作品を思い出すことができないので電話で問い合わせたが、当時の短歌は一首も記憶していないとの返事であった。ところがこの稿も終わりに近づいたとき、一首だけ思い出した、と電話で知らせてきたので貴重なる一首と思われるから左に記す。

鈴木品次

口にこそ出しては言わね兵士（つわもの）となりたき思いは我のみならず

この歌で思い出したのだが昭和一九年太平洋戦酣のころの彼の詠である。当時の青年品次の真情を吐露して余すところがない。品次は毛筆が得意であった。

品次の兄初司は吐月峰の号で俳句をよくした。長男出生の名付けの祝いに招かれたとき(私の家とは一の隣であった)「一句できました」と言って披露した短冊には、

吐月峰

嬉しさや一子生まれし棉の秋

と達筆で書かれてあった。

能書家であると共に蔵書家でもあった。渡伯する折、静岡市の書店で三百円を投じて購入したという本は、良書ぞろいであった。金沢圧三郎の大広辞林、簡野道明の字源、同道明評釈の唐詩選上・下、釈宗演評釈の菜根譚、西田幾太郎の哲学、新渡戸稲造の内観外望、内観外憂、トルストイ、鶴見祐祐輔のバイロン伝、ジスレリー、岡本かの子の世界に摘む花等々の良書が石油の空き箱を積み重ねた中にギッシリと並べてある。

私は驚嘆した。どの本を見ても喉から手が出るほど欲しい本ばかりである。品次はそれを気持ちよく貸してくれた。彼は現在聖市のビーラ・マリアナに住んでおり、私とは今も昔どおりに親しく交際している。

「寄生木」二号を出して間もなく、バラボニータ区の富岡家はスザノに移転した。続いて鈴木品次はアンドラジーナに移転、吉川家の聖市移転で「寄生木」は三号誌で終止符を打つことになった。

戦前戦後の僅かな期間ではあったが、チエテ移住地のドンづまりのアレグレ区で志津野華絵を師として、二十代に入って間もない男女青年が短歌に情熱を燃やして作歌し、回覧誌まで出したと言うことは世に知られていない。

一九八一年、椰子樹社が発行したコロニア万葉集の戦前の部に華絵作品は二十首収載されいてる(一人二十首の限定)。他に二十収載されている歌人は岩波菊治と酒井繁一だけである。このことから見ても華絵が如何に秀れた歌人であったかよく分かる。

昭和初期のチエテ移住地で、開拓に明け暮れた移民妻の哀歓を叙情豊かに歌い上げた華絵の作品は、二十代の作品であることを想うと、華絵がコロニア短歌界に残した足跡は大きい。

椰子樹編集長の清谷益次は近年日伯毎日紙に、特に華絵短歌を取り上げて三回に亙って歌評したことは、まだ記憶に新しい。

私に一生短歌をもち続けることを約束させた華絵は、何故か戦後再刊した椰子樹誌にも新聞歌壇にも作品を発表せずに亡くなった。何が原因で作歌を断ったのか？　、私には今もって解けない謎である。

コロニア万葉集が発刊されたとき、私は一本を携えて聖市のサンターナ区に居住する遺児志津野豊を訪ねた。あれからもう十六年になる。

「芸事」では弟子の芸が師に勝ったとき、初めて師に恩返しができたと聞く。私の短歌作品はまだ華絵作品に及ばぬかもしれない。移民七十年祭の折、祭典委員会が募集した「移民祭の詩」に投稿した私の作品が入選して曲までついたことは、亡き師華絵にいささか報いるところがあったと心に思う。

何一つ資料もなく、古い記憶を呼び起こして書き綴って来た。五十年前、「寄生木」によって共に作歌に励んだ歌友の一人一人に思いを馳せて感無量である。

この度、イビウーナ市在住の香山栄一が「思い出で綴るチエテ移住地の歴史」を編むにあたり、私にも発表の場を与えて下さったことに深く感謝する。

亡き師華絵との約束を守って私は今も短歌を作りつづけていることを心の誇りとしてペンをおく。

一九九六年六月記

コロニア万葉集所載歌

藤田朝寿

▽一九五九年

行進の列見守れりこの中に二人の吾子も加わりている
大統領にジャニオが当選せし朝妻は白百合の花を活けたり

▽一九六〇年

旱魃に牛馬の牧草も絶えたれば椰子を倒してその葉を喰わす
間作のミイリョは今年も良く出来て馬車の轍を軋ませて引く

▽一九七三年

父母が諍う夜を開拓の山赤々と燃えつづくなり
山焼きて十日過ぎたり灰の上に太き蜥蜴の尾を曳ける跡
見透かせるばかりに焼けし原始林余燼くすぶる中に入りゆく
パン窯に火入るる娘北欧の貌して旅行者我に礼（いや）せり

▽一九六七年

北欧の貌まだ失せぬ娘等のいてオランダ村に鳴る風車
玻璃戸より冷えしんしんと伝わりてラジオは寒波北上を告ぐ

▽一九六七年

音に出でて水は噴きくるたわしもて暗き井底に岩盤洗う
今日の空ブラジル晴とう友の声暗き井の底渫えつつ聞く

▽一九七八年
移民資料館シンボルマーク切り取りて妻は新しきアルバムに貼る
原始林を伐り拓きたる双の手に友は勲記をおし戴きぬ

▽一九七九年
娶りたる妻が初めて手取りせる餅つややかに搗きあがりたり
暑き日に除々に馴れゆく態にて樹皮脱ぎてゆく庭のユーカリ
霧深き夜とし思う庭椰子の葉ずれゆ雫の音絶え間なし

故　志津野　華　絵

▽一九三六年
明日はもう働けぬかと思う程疲れつかれて夕支度する
日曜はせめて子等と共にいて遊びてやらんと切に思えり

▽一九三七年
山を捨てて聖市に行きし人の皆妻や娘を女給になせり

▽一九三八年
月光をまともにうけて浴する原始の女のごと恥じらはず
月の夜の野風呂はうれし日焼けせし我が肌さえも真白く見えて
薄紅の小貝の如き子の爪に黒くたまれる土のかなしさ
カフェ時子等は違えず遠くより草笛吹きて帰り来たりぬ

▽一九三九年

巡回の教師招きて我が村もひそかに小さき学校始む

暮れなずむ棉畑の道ぬいめぐり亡夫を乗せ行く自動車は走る

悲しみが人事のごとうつろなる心にひびく棺つくる音

此の土に夫死なしめて入植の記念日今日は切なきものを

指先に軽き疲れを覚ゆなり棉の芽掻きにひと日過ごせば

病窓録と夫が名づけて送り来し日記は悲し我を泣かしむ

▽一九四〇年

当然の事のごとくに再婚の話すすむる人と居対う

珈琲を炒る香漂う朝霧の冷たき中に棉摘み急ぐ

起き伏しを喪に籠らいて過ごし来し夫の忌日の一年を迎う

▽一九四一年

吾がひと世ついに農婦となりしまま過ぎ終わらんか悔ゆるにあらねど

亡夫に代りて家を興てむと鍬とりてかにかくも経ぬ二年の日を

風よけて子等の遊びの日蔭にと亡夫が植えたるパイネーラ咲く

君がみ骨抱きて故郷に帰らなむ願いもいつか失せゆかむとす

ベラフロレスタ俳句会の句友達

秋山　蛙　声

それは多分、戦争が始まって間もなくの頃であったと思われるが、チエテの一角、田舎のベラフロレスタで二十才前後の若者が俳句を作りだしたのであるから、世間の注目を浴び、驚かしたものである。

これら当時二十才前後の青年はみな幼時父母に伴われてブラジルに渡り、小学校も十分に修められなかった準二世たちである。その後お互いに励みあい、切磋琢磨し、全伯の俳句界にその高名を馳せるに至った念腹先生に師事して作句にはげんだ。その頃の思い出を思いついたままに紹介してみたい。

残された句稿を調べてみると、第一回の句会は一九四六年四月。雑詠。添削は一三二句。念腹先生入選句は一九句で約一四・三％の入選率。

第二回目は一九四六年五月。雑詠。添削は一七五句。入選三〇句、約一七・一％と少し増している。この第一、二回は以前からできていた句を纏めて投句、添削を受けたもので、第一回は宮地耿葉が入会、第二回には和山素描が入会している。

第三回目は更に栗山芳水、秋山蛙声が入会しており、句会で作句した句を投句、添削を受けている。

第一回入選句

古案山子繕ひ申ししやんと立て　　蘇　拙

春宵や夜店に青きペンを買ふ　耿葉
帰国論永住論と夜永宿　渡南
春山我を迎ふる如くあり　失名
水底をころがり流る木の実かな　草南
草じらみ取るふりをして来る娘待つ　三珍
火を焚いて島のすそなる夜釣舟　耿葉
花嫁を迎えし門の月朧　邱土
蚊火煙引いて小島に移る舟　耿葉
雨滴れに少しはなれて蟻地獄　耿葉
干物の大きな縞や秋日和　耿葉
新涼やかたづいている針子部屋　草南
声落しつゝ話し居る夜寒かな　草南
兄弟の心ちりぢり家の秋　耿葉
霧の虹立ちつゝ晴れて行きにけり　草南
行き違ふて忽ち霧にかくれけり　渡南
一抹の霧流れをり牧の月　草南
秋風や年々増える芒原　三珍
春眠の夢美しく醒めにけり　邱土

第二回入選句

水鳥の遥に翔ける陽にきらら　邱土
泣き止んで一人遊ぶ子鳳仙花　耿葉
山鳥の声に暮れ行く綿をつむ　草南
笑声影ふみらしき良夜かな　素描

枯野駅降りて旅宿を探しけり　草南
春雨や向かい合して暇な店　草南
皮の如き干肉並べ冬の店　三珍
イツ果つるともなきろ辺の話ける　渡南
娘等行きぬ春雨傘をさしつらね　渡南
うすのろの開きし口に秋の風　渡南
川の人山の人来る春の町　三珍
主の背なに頬すり寄せる馬肥ゆる　邱土
肩凝りの老につかへて夜なべ妻　邱土
肩車して居て木の実取つて居り　素描
州境の鉄橋長し春の月　草南
雲出でぬ日向ぼっこをやめにせん　失名
大流星七星の柄をたちにけり　蘇拙
埋火や灰かむりゐる大薬缶　三珍
好物に蜥蜴料理のありにけり　三珍
煙突の煙吹き下す野分かな　蘇拙
豹吼へて樹海に冬日落ちんとす　邱土
雨やどりしてゐる小屋の蟻地獄　素描
霧深き夜を密輸のカヌー着く　草南
石原に立つ十字架や秋の風　草南
ポ語署名習へる父や秋灯　草南
岸焚火して投網を繕へる　草南
夕陽の枯草ごしに古城かな　三珍
蜜柑買う当番きめて針子部屋　蘇拙
ピストルをさげし人来る枯野汽車　草南

泳ぎ子の浮草抱いて流れをり　　失名

一九四七年の入選句抄　六月二九日

狐火や戸を押し開けて犬来る　邱土
馬の屁に咳にうまやのこだまして　蘇拙
狐火や近づき来るは煙草の火　邱土
狐火に戸毎出ている人の影　芳水
逃げて行く猿に啼き居り罠の猿　草南
牛を奪る黒豹とかや狩り入りぬ　渡南

七月一〇日　於草南居

水鳥の飛んで水路の違ふらし　蛙声
日曜に次ぐ祭日や日向ぼこ　草南
水鳥や魚を干せるが渡舟宿　蛙声

七月三一日　於蛙声居

電線をまたひで通る火事場跡　蛙声
杣小屋も霞の中や山眠る　失名
牧場となり行く村の移住祭　蛙声
残り棉摘む後より棉根抜く　草南
移住祭奥聖州に住み古りて　渡南
転耕の足止芝居ありにけり　蛙声
鍬先にからまる蔓や棉根抜く　草南
草の実の飛び散る棉木抜きにけり　草南
建てなほす多角農法春を待つ　蛙声

一一月　於蛙声居

紐つけて歩かせてをり大蜥蜴　三珍
酒あれば肴が欲しく蜥蜴狩る　三珍
鶏舎近く居て太りゆく蜥蜴かな　邱土
客迎ふ牧の扉開ける裸人　三珍
衝突の汽車を見に行く雷雨の夜　蛙声
牧草を助けん草を取ってをり　蘇拙

イーリャ・セッカ縦横談（座談会）

一九五〇年十月九日奥ノロエステ俳句大会イーリャ・セッカ吟行も無事盛会に終わり、その夜宿舎保田草南居においてこの吟行地イーリャ・セッカについての縦横談が念腹先生を中心に催されました。

イーリャ・セッカの場所、ベラフロレスタ句会員の活躍などが面白く語られていますので、当時の句会員およびあの時代の状況を知る良い座談会ですので紹介いたします。

イーリャ・セッカ縦横談

念腹、蘇拙、草南、渡南、三珍、徳衛、いさを、蛙声、季青。

念＝今日の奥ノロ俳人親睦会のイーリャ・セッカ吟行は非常に愉快でした。この吟行に活躍された諸君とこうして晩餐の卓を囲んでおりまして、今日一日の行楽を楽しく回顧して見まするとと、草南、蘇拙、三珍、渡南という諸君が、このイーリャ・セッカを股にかけて我らのために大いに活躍してくれたことが、強いそして嬉しい印象となって残っているのであります。

例えば、カノアを操って我々大勢を川中島へ運んでくれたり、或いは新鮮な魚を我々の席へ齎してくれたり、その活動振りはさすがにこのイーリャ・セッカのヌシとも言うべき、これ等四俳人とその指導者格たる草南の兄君徳衛さんとを中心にして、我々俳人にとって縁故浅からぬものがある。このイーリャ・セッカをめぐり、珍談奇談というようなものを縦横に試みたいと思ったのであります。

蘇＝今日は大変不漁で十分御馳走できなかったことを残念に思います。二、三日前の大雨で俄に増水したのが悪かったのではないかと考えています。

○＝大増水があった年は不漁だということですね。

徳＝そうかも知れませんね。然しここでは年々魚が減って行くのです。漁をするものが近年激増したせいかと思います。

蘇＝昔は日本人でカノアをもっている者は一人もありませんでしたが、今日では猫も杓子も立派なヤツを持っていて、盛んに河を荒らしているのです。

草＝イーリャセッカも初めはここの地元の者たちは覗いても見なかったのですが、隣のバラボニータ区の人達が時々遊びにくるので、私たちも真似て出掛けるようになったのです。

徳＝漁をする瀬があるのです。一番瀬、二番瀬、三番瀬、それに飛行場前の瀬と大体四つです。二番瀬は私たち兄弟の発見したもので、十年も前のことになりましょうか。

草＝よく捕れる瀬は皆秘密にしていて誰も明かさないのです。彼奴どこにあんな良い瀬を持っているんだろうかと、お互いに探り合ったものです。

蘇＝昔は釣でなくて投網一式でした。今のように簡単に懐中電灯が手に入らない時代でしたから、洋燈やカンテラを提げた上に網や魚入を持ち歩くのですから中々大変でした。

徳＝そうやって最高二十キロの獲物を持って歩いたことがありました。

大概十五、六キロで参ってしまいます。そんな風にして一晩に三十や四十キロは捕ったものでしたが、この頃は全く駄目になりました。

○＝投網は外人もやりますか。

草＝やるのもいますが、稀ですね。なんと言っても日本人のものですね。

蘇＝飛行場前の瀬は河向こうの耕地の伯人が撒餌をして魚を集めてある所なのですが、カザメントやなにかでどうしても魚が必要な場合に、不漁で困った時はそこをこっそり荒らしにゆくのです。見つかったら最後、鉄砲をブッ放されるのですからとても危険です。ある晩闇夜を幸いにその瀬を漁っていたのですが、ひどく煙草が欲しくなってうっかりマッチを擦ったのです。途端にドカンと来たので、吃驚して逃げて帰ったことがありました。

○＝実際に撒餌をしてある所を他人にウロウロされるぐらい癇

に障ることはない。
蘇＝舟がその上を通っても不愉快ですからね。
○＝大きなものを捕ったレコードは？。
蘇＝投網では十五キロのピンタードです。長さ一メートル二十センチありました。釣の方では矢張りピンタードでしたが四十一キロありました。
念＝それは凄い。僕にも十一キロのバクーを釣った記録がある。（一同びっくりして先生の方へ視線を集める。先生ちょっとテレて軽く笑う）実は腹抜きのものを買ったもんですが、写真で見ると矢張り凄いものですよ。
蘇＝スルビンもそうです。
徳＝パップラッタ、あの腹膜に赤い斑点のあるヤツですね。私も網を打つと必ず二匹一緒に入ります。
蘇＝魚といっても中々力のあるものですよ。大きいのはスポンスポンと網を突き破って飛び出します。あるとき突き貫いて飛び上がったヤツが私の胸板へぶっつかって来たのです。あわてて抱き付いて捕りましたが、こんなことを幸運というのでしょう。また十五キロのピンタードを捕ったときも苦心しました。普通に網を絞ったのでは逃がしてしまうと考えたので、網をギリギリ巻いて捩上げて捕りました。四分の三は体が外へはみ出していましたから、すんでに危ないところで、これも幸運の部類でした。
○＝ドラードがお誂え向きに舟の中へ飛び込んでくれて思わぬ拾い物をしたことがある。
蘇＝よくありますよ。カノアを岸に寄せようと思って押して行くと、岸で遊んでいたヤツが不意をくって驚いたのでしょう。二

匹も飛び込んだのを押さえたことがありました。
渡＝支那に魚を飛び込ませる舟というのがあるそうです。ある種の色を船体に塗って魚をゴマカスらしいです。支那人の発明の中では最もなるものだと或る本に書いてありました。
念＝三珍君は何が得意でしたか。
徳＝三珍は毒流しの専門家ですよ（笑声）。
三＝あんまり大きな声で言わないでください。一メートルばかりの小川で子供みたいに遊んでいるんですからね。デリス流しは一時間も経てば、魚はみな蘇生します。だから罪は軽いもんですよ。クリンバター十五キロというのが記録でした。
念＝何か怖ろしかったという話はありませんか。
蘇＝本流の滝壷の傍らにある岩の上で釣っていた時のことでした。強い手応えがあって大きなヤツが懸かりました。ところが立っている岩の下は深く抉れているのですが、奴さんその下に逃げ込んでグングン引っ張るものですからたまりません。竿はたちまち逆立ちになってしまい、こちらの体諸共にたぎる渦巻きの中へ引っ込まれそうになるのです。竿を離せば何でもないのですが、ただ夢中でその時は竿を取られまいと一生懸命に支えていたのです。しかし力は愈々加わってくるものですから、最早これまでと竿を肩にかついで渾身の力をあげて岩の上を走りました。十一キロのジャウーがかかっていました。その時の怖かったこと、今も忘れません。
季＝あの凄い渦巻きの瀬の中にもまれている岩にそれぞれの名があるということじゃありませんか。
蘇＝その岩に一番乗をした人の名がついているのです。喜六岩、

鈴木岩、保田岩などがあります。
蛙＝私の亡くなった父が徳衛さんの豪胆なのに呆れていました。よく釣針が岩に引っ掛かって取れないときがあるのですが。そんなとき、徳衛さんはその凄い渦の中に飛び込んで行って釣針をはずしてくるというのです。
徳＝あの真ん中の岩で足を滑らせて壷へ落ちたことがありました。いやぁ、肝を冷やしましたね。この爪が岩の一角にやっと届いてそれを引っかけたとき、ヤレ助かったと思いましたが、そのとき程自分の命というものをはっきり考えたことはありませんなぁ。
草＝喜六さんも鈴木さんという人も古くからの漁仲間ですが、この二人がどう誤ったものか、この滝壷の真ん中で舟をひっくり返したことがありました。喜六さんは泳ぎが上手でしたが、鈴木さんは大したものでなかったので、喜六さんは「俺にかまわずお前早く逃げろ」と怒鳴ったそうです。鈴木さんは夢中で岸へ逃げたそうですが、喜六さんはどう思ったものか舟に取りすがっていたのです。然しそれも危険と感じたのでしょう、舟から離れると必死になって渦を泳ぎ抜けたということです。
蘇＝大変だ早く来てくれと注進を受けて僕が現場へ馳せ着けたときには二人は岩の上で固く抱き合って嬉し泣きに泣いていました。
草＝そしてその時の舟は岩に打ち当たって真っ二つに見事に割れていました。
念＝今日もスクリーを見ましたが、スクリーについて面白い話を何か。

草＝私達が捕ったスクリーで大きかったのは六メートル半のでした。胴中でソッパの皿ほどの太さがありました。

蘇＝スクリーに爪のあることを知っていますか。鳥族の嘴のような格好のものです。肛門の両側についています。

徳＝岩などに巻き付いたときに止めになるのではないかと思います。

草南、あのスクリーとの格闘談を申し上げてみなさい。

草＝今年の初めのことでした。取り入れ前の陸稲畑は折からの増水で水浸しになっておりました。その畑の所有主である伯人の息子に当たる二少年が、稲を荒らしにくるペリキットをゴム鉄砲でうちながらその畑の中をジャブジャブ歩いていますと、突然兄の方の尻に噛みついたものがありました。アッと振り返って見ますと大きなスクリーが噛み付いているではありませんか。びっくりしましたが、気丈な兄でしたから弟に鉄砲でそれを撃ち殺すように命じました。弟はすぐ近くの住居へそれを執りに一散に駆けて行きました。スクリーは尾をトッコに巻き付けて少年を引き寄せようとするのです。少年は鮮血に染まりながらも、そうはさせまいと前へ引き戻す。丁度綱引きのようなことを繰り返しているところへ弟が馳せ戻ってきました。二発胴中へ撃ち込みましたが、蛇はビクともしません。これは困ったと思っている中に、ふと腰にさしているファッカに気がつきました。早速それを抜いて暴れる蛇の首を抉りとってしまったと言うことです。

徳＝外人の子供でも中々気丈なものが居るものだと舌を巻いたことでした。

渡＝スクリーが魚を追う姿は凄いです。螺旋状を描いて走りま

すとドラードなど飛び魚のように水の上を飛んで一生懸命逃げます。

○＝スクリーは鳴かないかな？。

徳＝鳴かないようですね。

○＝肉は食べられないだろうか。

徳＝食べた話しは聞きませんなぁ。肉はあまり珍重されませんが、油はリウマチに効くというので大切にされています。

○＝サンジョゼ河で見たのだが、五十メートル程の長さの溜まりに何千という魚が群集していたことがあったが、何ともいえない凄いものであった。ここでもそんなことがありますか。

蘇＝見たことはありません。だが、魚が群をなして瀬を登るのはよく見かけました。大きな魚は体を平に横に寝せて落ちる瀬を登るのですが、日光にきらめいて本当に見事なものです。

蛙＝滝や瀬を登るのは季節があるんでしょうね。

○＝滝登りがあるのは慰霊祭前後でしょう。産卵期に当たるのです。

念＝漁をしていて好い句が生まれたと言うような話はありませんか。

草＝サァ、それがさっぱり無いんですよ。むしろ漁や釣りの句では門外の蛙声さんにしてやられているんですからおかしなものですよ。

蘇＝どうも不思議ですね。慣れ過ぎてしまって肝心の良いところを逃してしまうからでしょうか。ここの仲間では誰も成功したものはいません。

念＝イタプーラはどうですか。

季＝発電所ができてからすっかり変わってしまいました。俗っぽくなったとこぼしている人もあります。

徳＝その代わり便利になって毎日乗合自動車が通うようになりました。ここから三十キロ余りですから、ペレイラ・バレットから約五十キロ位になりましょう。宿屋もできたそうですから一晩泊まりの遊びは最適です。時期は五、六月ころが一番面白いと思います。

念＝ではこの辺で打ち切りましょう。どうもご苦労様でした。

一九五〇年十月九日の夜季青筆記

イーリャ・セッカ解説

チエテ移住地を訪れんとする旅人は乳色の虹とも言いたいような大吊橋に目を見張るのであるが、イーリャ・セッカはそのノーボ・オリエンテ橋から凡そ十三キロ下流にある。地図を広げてみると三キロ位の間に大小の島々が十二ほど散在していて、最も大きい島は長さ四百メートル余りある。第二移住地の中心をなすべラフロレスタから南下して五キロ程でその沿岸に達することができる。

昔はバルサがあってこの地の交通の要所となっていたが、ルッサンビーラ以西のノロエステ鉄道が廃線になってからは、悉く寂れてバルサもいつの間にか廃された。近年は近隣に聞こえて川遊びの客が一時絶えない程になった。川遊びには最も減水している

七、八、九月頃が適期である。一般に本流の滝と称されている凄い瀬もこの減水期が壮観なのである。アリアンサとチエテが連合して耕花氏の送別句会をここで催して以来奥地俳人とイーリャ・セッカは浅からぬ縁を持つようになった。

イーリャ・セッカをめぐる俳句

竿先の鈴鳴り出でし夜釣りかな　耿葉
夜雨中かくもやさしく鰐鳴くか　耿葉
蚊帳吊ってバルサの上の外寝かな　草南
船底を打つ魚あり毒流し　草南
渡舟場のありたる岩の根釣かな　草南
弾少し小さしと思ひ鰐狙ふ　草南
獏の糞小石の如し川涸るゝ　三珍
島蔭に霧の起れる良夜かな　三珍
毒流しすみたる川に泳ぎをり　渡南

剣道に情熱を燃やして

山田　実

去る六月二十二日の夜、突然スザノ市の藤田朝寿君から電話があり、「実はイビウーナの香山栄一君の希望なのだが、チエテ移住地在住時代の剣道のことについて何か書いてくれないか」と言う

依頼をうけ私は困惑してしまった。
藤田君と電話で話し合ったとき、物を書くなど手紙さえ何十年も書いたことはなく、恥をかいた方がまだましだと、まして剣道のことなどとてもではないが書けないと一度は断ったが、たっての頼みなので「剣道に情熱を燃やして」と題して、思い出すままに書いてみることにした。
私がチエテ移住地に入植したのは一九四〇年で、十八才の時であった。
移住地に入植する前から剣道には関心はあったが、基本から指導してくれる師が身近に居なかった。
入植して間もなく、私は病気で倒れ半年ぐらい床についたが室の板壁には剣道道具が掛けてあった。それも私のではなく、師の防具であった。
この剣道防具を身につけることもなく終わるのではないだろうか、と病床の私は心細い思いで防具をみて残念でたまらなかった。その時、心の底からこの防具を身につけて稽古ができるよう元の丈夫な身体になろう、病気などに負けておれるか、とむらむらと身内に闘志がわいて来た。
それから壁の剣道防具を睨んでは養生に努めていたが、見るだけでは物足りなくなって竹刀をとり胴をビシビシ打っていた。
それをある日父に見つかり「お前そんなことをしていたら、何時までたっても病気は治らないぞ」と叱られたものである。
養生の甲斐あって四ケ月過ぎたころから庭の周りを散歩できるようになり、又半年ほど経って軽い仕事ならボツボツ出来るようになった。

丁度そのころ、区内（ノーボ・パライーゾ区）で剣道の稽古試合があると言うので見に出掛けた。青少年の試合も終わり、最後に大関長一氏と国平賢治氏の模範試合を見ることができた。

両氏は共に段位は初段と聞いていたが、その両氏の試合が驚くほどの豪快な竹刀さばきと、進退の見事さに呆然となって見惚れてしまった。

初段ともなれば、これ程豪快な竹刀さばきが出来るかと、この模範試合を見てから私の剣道熱はより一層高まった。一日も早く全快して自分も皆と同じように稽古をしたい、と楽しみにしていた時第二次世界大戦がはじまり、在伯邦人の凡ての行事は当局から禁止された。病気になった時はそれ程気落ちしなかったが、このとき程がっかりしたことは私の生涯に二度とない。

それから四年の歳月が過ぎ終戦となったが、邦人の集会、行事などはまだ禁が解けず、当分剣道の稽古は出来そうにない状態が続いた。そうこうしているうちにある月夜の晩、夜気を震わせて気合の声が聞こえてくる。「あ、やってるな」と胸を躍らせて気合のする方へ駆けつけて見ると、二、三人集まって国平家の前庭で稽古をしている。早速国平氏に私も仲間に入れていただくように頼むと、まだ情勢はよくないし、大勢集まるとよくないと思って、二、三人でコッソリ稽古をしているのだと言われる。それを無理にお願いして仲間に入れていただき、その晩は稽古を見るだけにして、翌晩から国平師に稽古をつけていただいた（あの当時は月明かりで稽古をしたものである）。

又、自分より年少の者にポンポン打ち込まれ、さまのないこと…、これではならぬと闇の夜は庭に出て木刀を振り、打ち込み

の練習をしたものである。
防具をつけての稽古には国平師に死に物狂いでぶっつかっていった。
勿論大関氏にも同様である。師は小柄な人であったが面を打たれると頭にジーンと響き、小手を打たれると腕が痺れてあやふく竹刀を落としそうになったものである。あの力は一体どこから出てくるのか、当時の私には理解できなかった。
そのうちに大関師は喘息の発作で稽古をつけて頂くことが出来なくなったのは何と言っても師のためにも残念であった。
しかし稽古の後では打ち込みとか、間合のとりかたとか、かけ引きとかを熱心に教えて頂いたことは、竹刀を持っての稽古同様に為になったと思っている。
今でも思うことは両師に稽古をつけて頂くとき、一本でもいいから打ち込んでみたいと必死になって頑張ってみたが、ついにモノにすることは出来なかった。
一九五〇年、私はチエテ移住地を去り、サンベルナルド・ド・カンポ市郊外に移り、ここで約一年程稽古をした。一年と言っても仕事の関係上時折にである。稽古を始めた時「貴方は何段ですか」と聞かれて面食らったことがある。
私の両師は共に初段であり、私は級もなく最後の稽古の日も国平師から一本も取ることの出来なかった未熟者の私に、何段ですかとは、それこそ面映ゆい思いであった。
こちらで稽古してみて感じたことは何となく重みのない、一口に言って気迫のある剣道とはお義理にも言えなかった。
打ち込みをやっても面、面、面とただ早く気合ではなく、掛け

声と言ったようなものであった。
大関、国平の両師からは、いつも打ち込み稽古と言っても一本、一本を確実に腹の底から出る裂帛の気合でやれと言われたものである。
サンベルナルドでは一年位の間に二回の昇段試合があり、私は最初の昇段試合で初段の免状を頂き、二回目には日本から来られた中原実達士（九段）から二段の免状を頂いたが、その時君は続けて稽古したまえ間もなく三段を貰えるから、と励まされて恐縮したものである。
それで思い当たることは大関、国平の両師のことである。共に初段とは聞いていたが実際には三段以上の実力者ではなかったかと。
チエテ移住地に在住したころを思い出すと書きたいことが次々に浮かんでくる。戦後、第一回剣道大会が青年連盟主催でウニオン区で開催されたとき、私は主将で出場し、ウニオンの主将福島君の連戦連勝を破ったときは嬉しかった。
結局ウニオンが優勝し、私たちのチームは準優勝であった。又、当日の個人切抜き試合では古山君（第三）の奮戦目覚ましく、東鍛治氏の鍛えた日本刀はついに彼の獲得するところとなった。
バラボニータ区の滝内君、近藤君、ピラカンジューバ区の栗田君、半谷君、第三の松本君と次からつぎへとあの剣士この剣士と思い出されて懐かしさ一入である。
あれから半世紀が過ぎた。私は今年七十四才である。青年期を剣道で鍛えた身体はその後病気にもかからず達者で暮らしている。
最後にチエテ在住時代の剣友諸君のご健康とご多幸をお祈りし

てペンをおく。

一九九六年八月記

回想チエテ産組

芝　忠夫

一九三五年一月、私達一家は直来移民として、この地チエテ移住地に希望の胸をふくらませながら入植の第一歩を印したのである。当時十五才だった私はこの年竣工になったノーボ・オリエンテ大橋を六月予定の開通式を前にして渡って来たのを懐かしく思い出される。またこの年には後年私が半世紀に亙って勤めることになったチエテ産業組合が結成された年でもある。一九三五年は私にとって忘れることの出来ない記念すべき年である。

あれから月が変わり星が流れて六〇年の歳月が過ぎ去っていった。振り返ってみればそれは大変長いようであり又短いようでもあり、複雑な思いが錯綜する。今年は日伯修好百年の節目にあたる。この記念すべき時に、ともすれば薄れ行く記憶を辿りながら第二の故郷となったチエテ移住地在住六〇年、そしてチエテ産業組合在職四七年の思い出を振り返り、書き綴っておくことも無駄なことではあるまいと思う。

チエテ移住地の始まりと組合

一九二七年五月に海外移住組合法が発令されて以来、日本政府は海外移住を積極的に奨励した。この国策の線に沿って同胞の海

外発展の実を収めるため海外移住組合連合会の専務理事梅谷光貞氏が一九二八年に渡伯してバストス、チエテ等の土地を購入し、新しい移住地を建設したのである。

チエテ移住地は梅谷氏と元地主ジョナス・アルベス・デ・メーロ氏のウルブプンガ耕地四万六六九〇アルケーレス(一一万三〇〇〇ヘクタール)の売買契約が成立した一九二八年を以てこの移住地の発祥としておる。そして翌年(一九二九年)六月には大成景毅、竹内喜一、吉村権六、石田広助諸氏四家族が入植し、その後引き続き入植者があって三四家族となった。

A区の購買組合

チエテ移住地はマット・グロッソ州境に近く、交通の便も悪いが、同地方では一商業地区である。アラサツーバから一二〇キロも離れており、日常生活資材の入手にも不便があり全てが物価高であった。この不都合を克服するために植民者が協議して自分たちで共同購入のみちを拓こうと同年(一九二九年)早くも入植者一体となって購買組合を結成した。

これがA区の購買組合であって、チエテ移住地内の組合運動の濫觴である。

その後入植者も多くなり、一九三四年一月には吉川要治、近藤忠氏等が中心となって汎チエテ産業組合を設立した。この新組合にA区の購買組合を合流して新しい移住地の経済情勢に対応した活動のできる強力な組合組織に作り上げようという話し合いを進めたが、諸々の事情で直ちに具体化するには至らなかった。しかしその後ブラ拓の斡旋により、利用部門の経営を対象にして両組

合が提携し、将来機をみて全般的に合流するという申し合わせができて、同年（一九三四年）チエテ利用組合を設立した。そしてその役員には、　理事長　永富　仙太郎
専務　多田　吉三郎
が選ばれた。組合員二六〇名、出資金二六コントス一〇〇ミルレースと記録されている。
この組合は先ずブラ拓から第一精米所を借り入れ、翌年にはルッサンビーラ駅前の倉庫及び第二精米所を借り受けて事業の伸長をはかったのである。

チエテ産業組合の誕生

当時すでに当国の産業組合法も発令されており、サンパウロ州は一九三三年以来産業組合奨励局が設置されて州内の産業組合の指導助成監督の任に当たっており、これが一九三五年頃から積極的な活動にはいり、地方に係員を派遣して従来の任意組合を合法的に登録することを訓令指導した。
チエテ移住地にも監督がきて指導したが、これを機会にA区購買組合と利用組合を合流せしめる機運が熟し、移住地の全般的活動をする新産業組合を合法的に設立することになったのである。そして一九三五年十月の利用組合の臨時総会においてこれを改良してA区購買部と完全なる合併をし、新たに「有限責任チエテ産業組合」が結成され、正式に登録が行われたのである。
初代役員は次の通り選出された。
理事長　小　山　三郎
専務理事　多　田　吉三郎

会計理事　今井　寿
監事　藤堂義雄
同　吉川要治
同　吉村浦一
組合員　三六〇名

出資金三六コントス三〇〇ミルレース

初代小山三郎理事長時代はチエテ産業組合創立の一九三五年から戦前の一九四一年代までと考えられる。この時代は移住地の建設時代でもあり、同組合の生産と活動は移住者と直結してチエテ移住地の建設繁栄に連なるものであった。そして戦争前年ころから他のアリアンサ、バストス移住地と同様にブラ拓の諸施設を組合が引き受け、移住者の手で移住地の管理経営をしようという動きが具体化してきた。又生産面では一九三一年コーヒー植付制限令が出たころの移住地として米作に主力が注がれ、その後漸くサンパウロ州各地に広がりつつあった棉花栽培がとりあげられ、ブラ拓でもこの新産業を移住地内に盛り上げるべく精綿工場の建設にとりかかり、一九三五年ノーボ・オリエンテ区に引き続きベラフロレスタ区に精綿機を設置した。その後移住地内に棉花最盛期をむかえるに及ぶ。組合の事業面でも組合員の原棉取り扱いから精綿工場の経営まで行い、棉花取り扱いは組合事業の重要な地位を占めるにいたり、そのまま一九七〇年代まで続いたのである。最初は一九三六年建築のブラ拓の精綿工場を借り受けてアンダーソン綿花会社とタイアップして運転を試みたるも、期待する実績をおさめ得なかった。その頃アンダーソン綿花会社の工場はルッ

サンビーラ駅前にあり、佐藤常蔵氏が支配人で活躍されていた。そして一九三七年、三八年は東洋綿花に工場運転を任せ、組合は単に組合員の出荷原棉を取り次ぐにとどまった。

一九四〇年になって初めて組合が精綿工場を直営することになり、翌四一年には八二〇〇トンという組合扱いの最高記録をつくるに至った。

しかし同年一二月日米開戦となり情勢が急転、一時は精綿工場運転にも蹉跌を来したのである。更に一九四二年日本人取締が厳しくなり、組合幹部は事態の容易でないことを察して伯人理事長として親日家で高潔の士であるアルシーデス・アルベス・デ・メーロ氏を迎える工作が密かに進められていた。このように優れた人物が身近にいたということは組合にとって誠に大きな幸運であった。そして三月二日敵性国人を主体とする団体として警察署長の監督下におかれ、これまでの役員全部が解任され、理事長にアルシーデス・アルベス・デ・メーロ氏以下役員全て伯人が任命されたのである。

幸いにしてアルシーデス理事長は大の親日家であり、もともと農村人でもあった関係から農村組合の活動に理解をもち、戦争中の最も困難な時期に邦人組合員を保護して産業組合を守り続けてきたのである。不幸にして同氏は病気のため一九五一年九月二四日にサンパウロ市ジャサナンの病院で長逝された。その余徳をしたってチエテ産業組合及び中央会関係者の提案で、ペレイラ・バレット市の公園に胸像を建立して永く同氏を偲ぶよすがとした。今も公園を通るたびに、七年間同理事長のもとで働いた当時のことが昨日の如く懐かしく思い出されるのである。

戦争中、華やかに乗り出した産業に養蚕がある。戦争による外国生糸の輸入が停まると国内生糸の需要が多くなり、急激に養蚕業が景気付いて各地での養蚕熱が燃え上がった。チエテ移住地内においても養蚕に転向する農家が多くなったため組合でも繭を取り扱うようになり、一九四四年に乾繭場を建設した。さらに組合員養蚕家の要望を入れて、優良蚕種の配布を目的とする蚕種製造所を州蚕糸局とタイアップのもとに州銀行の融資を受けて建築した。

この年一一月、私はこの蚕種場に務めることになった。所長は大石幸一氏で温厚篤実な技術家肌の人だった。私たちは同氏より蚕種製造の手ほどきを受けた。蚕種は評判よく、地元は勿論遠くパウリスタ線より注文が多く多忙な日が続いた。ともかく養蚕全盛期で、組合蚕種場付近にはブラ拓経営並びに村井利三郎氏個人経営などの製糸工場が三つもあり、二〇〇人余りの女工のもとに操業されており、この界隈は大変な賑わいであった。

しかし養蚕景気は何年も続かなかった。翌年の終戦による蚕糸界の没落が波及して繭の値が暴落し、その不況のあほりで蚕種の販売は閉ざされ、製造は中止されたまま一九五四年蚕種場施設を州政府に買い上げてもらうまで組合の癌として苦労の種となったのである。一九四六年度決算は蚕種部の被害損失多く、莫大な欠損金を出した。これは組合員の動揺を招き、翌一九四七年八月一一日の臨時総会は荒れにあれたのである。

役員総辞職を行い、新たにアルシーデス氏を理事長に、専務理事に木村徳蔵氏を選出した。更に三二名からなる更生委員会を設置し、委員長に福田誠二郎氏を選出して組合建直しに邁進すること

になったのである。
そしてこの欠損金を補填するため全組合員による均等分担制を決議したが、そのために負担を恐れて他所に転出する者や脱退する組合員があとをたたず、次いで一九四九年度も欠損が続き、この年の総会も揉めにもめたのである。再び理事の総辞職等があって、真に苦難の積み重ねであった。

昼から始まった総会は夜に入っても終わらず、ついに夜が明け翌日に持ち越されたのである。会場は精綿工場の棉種倉庫にエンセラードを敷きつめ、その上に座しての会議だったので組合員の疲れもひどかったと思う。イデアル区の組合員の一人が夜明け前に気分が悪くなり倒れ、そのまま回復できず、翌日だったかに亡くなられたと聞いた。全く命懸けの総会であったようだ。最近のせいぜい役員ぐらいしか出席しない総会をみて、当時の熱のこもった総会が懐かしく思い出されるのである。そうして後数年間に購買部充実、農事改良委員会の結成等がなされ、増産をはかり漸くにして組合事業も常態に復そうとしたとき、苦難時代を背負って組合のために尽力してきたアルシーデス理事長が長逝されたことは、返すがえすも心痛むものである。

山本政道理事長時代

一九五二年、アルシーデス理事長逝去により三代目理事長に山本政道氏が選出された。同氏は山梨県出身で豪放磊落の人であり、人使いがまことにうまかった。幹部職員間にも大変人気がよかった。同氏が理事長に就任した一九五二年から一九六七年にその職を辞して引退されるまでをチエテ組合史では「復興時代」或いは

「新生時代」と呼んでいるが、この期における生産物の中心は鶏卵であって、養鶏関係の事業は組合事業の中核となったのである。一九五七年にはカミニョンによるサンパウロ向け鶏卵輸送を開始、五八年頃より従来の平飼いよりバタリー箱による新飼育法に改革など目覚ましい発展をみた。

一方棉花事業も一九六〇年には実棉入荷ついに四五〇トン台を割ってしまったが、一九六二年頃から再び棉花生産が年々増えてきて、三〇〇〇トンの入荷を見るに至ったのである。もう一つこの期に重要産業として牛の飼育がある。組合員の牧畜とあわせて組合直営の七二アルケーレスの飼育牧場もあり、常時一八〇頭前後の牛が飼育されており、将来に期するものが大きい。たしか最初は組合員の現物出資によって始められたものである。また一九五六年にブドウの試作に乗り出したが、一作か二作で当地での栽培は立ち消えとなった。

こうして一九六四年七月、チエテ産業組合は創立三〇周年を迎えた。

その記念祝典を二日間にわたり盛大に催したのである。式典には総領事館より中川領事、中央会より堀主事、ミランドポリス倉庫代表、アリアンサ産組代表、ミランドポリス郡長、当地郡長、同郡会議長、その他官憲、新聞記者、銀行、諸団体の代表者多数の列席を得、会衆凡そ二一〇余名に及んだ。式はコンタドール田口耕造氏の司会によって進められて一通りの祝辞挨拶が終わり、引き続き功労者の表彰が行われた。

表彰状を授与された者は次の通りであった.

前理事長—故小山三郎、故アルシーデス。組合創立組合員—今

田重太郎、真砂亀太郎、藤川栄一、手島楠弥（現在まで引き続きの組合員）。役員功労者―山本正道、八木健次、中山武、関保三郎、木下清紀、和田森憲造、筰田弥治平、後藤宅次郎、秋未貞、鈴木貴司男、鈴木正一、城倉角雄、（通算一〇年以上役員として功労あった者）。永年勤続職員―田口耕造、弓矢富之烝、鈴木案山子、長尾俊雄、芝忠夫、セルソ・ガルシーア、レイナルド・アンドラーデ、ジョゼ・ロッケ・リーマ、（一五年以上勤続者）。

以上で式典が終わり、シネマ会、演芸大会、農産物及び手芸品展覧会、そしてトラトール、カミニョン、ジープ、乗用車、計一〇八台による市内大行進が行われるなど、大変な賑わいであった。当時の役員は次の通りであった。

理事長　山本正道
専務理事　八木健次
常務　中山武
同　関保三郎
理事　野本正教
同　手島薫
同　木下清紀

今にして思えばこの山本理事長、八木専務の名コンビ時代が組合の最も充実した農協らしい時代であったように思われる。

一九六七年の総会において山本理事長は辞任引退され、新しく手島薫氏が理事長となる。そしてこの期より山本正夫（山本正道氏息）、近藤氏等の若手組合員が理事会メンバーに入り、新旧交代のきざしが見えて来

たのである。この時期の組合員は二一一名で、九一〇数名を数えた往年を思えば感無量である。またこの年（一九六七年）農協法改正により組合経営も次第に難しくなり、従来の農協組織というよりむしろ農業総合商社の体質になってゆくのである。

時は流れ五代理事長中山武、六代目に秋末貞と続き、七代目に二世理事長小野パウロに至るのである。この間、ブラジル経済の激動時代にはいりクルゼーロからクルザード、更にクルザード・ノーボと平価切り下げは続き、年間一〇〇〇％近いインフレ時代となり、組合にとっても棉花栽培の終局にともない永年閉鎖されていた精綿工場もトレース・イルモンス発電所建設により取り壊され、敷地は水面下に沈んだのである。

そして直営牧場の一部も同じく水没する等、苦しい経営が続いたのである。また人事においても惜しい人が次々とこの世を去って行ったことが悲しく思い出される。

一九七七年二月二六日、コンタドール田口耕造氏がアラサツーバの病院で死去された。

丁度この日は奇しくも組合の定期総会開催中であったが、知らせにより総会は一時休会し、出席者全員チエテ橋まで遺体を迎えに行ったのを思い出す。故人は二世で当国の法にくわしく、組合は勿論日本人のために労を惜しまなかった。長らく郡会議長として当市のためにも随分尽力されていた。その短すぎた春秋を惜しまぬものはなく、その徳を偲んで胸像が当市公園の一角に建立されている。また日本政府より勲五等旭日章が叙勲されている。同年一二月四日にはまるで田口氏の後を追うごとく八木健次氏が逝かれたのである。組合を引退されて二年位だったと思う。一九四

六年に常務理事となり、五五年より専務となり、以来三〇年にわたり組合のために尽くされた文字どおり清廉潔白の人で、決して公私混同をしない人だった。かつて同氏が当市名挙市民証を授与されたとき、その紹介演説に立ったドトール・レオ元市長が「たとえチエテ河がさかさに流れようとも、八木さんのコツコツと歩いての出勤姿を見ない日はないだろう」との言葉があったが全く言い得て妙、その勤勉ぶりは定評があり、その出勤にも決して組合の車を使用しなかった。同氏の前に専務なく、同氏の後にも専務無しと言っても決して過言ではない。組合では在職中の功績を讃え組合葬をもってこれに報いたのである。

続いて四代理事長手島薫氏、五代中山武氏、六代秋末貞氏がそれぞれ退職後数年にしてこの世を去って行かれたのである。当時、組合に長らく勤めた者は退職後二、三年でこの世を去るというジングスみたいなものが噂されていた。八木専務しかり、手島理事長、中山理事長、そして秋末理事長、職員では田口耕造氏、鈴木案山子氏の両先輩がそれに当たる。私が退職を願い出たときもその話が出て、気をつけるように注意されたものだ。

一九八九年十月二九日、チエテ移住地のシンボルであったチエテ橋は一九三五年完成後五四年にして九〇〇〇アルケーレスの土地とともに完全に水中に没したのである。こうした広大な農地の減少に伴い、農業人口の減少と農家ばなれのひどい現在産業組合の経営はまことに難しいことだと思う。ましてやあのマンモス・コチアと言われた大手産組も今はうたかたのごとく消えた時代である。軒並みに消え行く産業組合のなかに、チエテ産業組合は昨年（一九九五年）六〇周年を過ごしたことは誠に嬉しいことであ

る。今後もチエテの村のためにも永久に経営が続くことを祈念してやまないものである。終わりに現在の役員並びに事業面を記してこの稿を終わることにする。

現在の役員

理事長　小　野　パウロ（二世）

福理事長　山　本　正　夫

専務理事　池　田　健一（二世）

常務理事　伊　木　実　信

同　田　中　俊　雄

理事　金　子　堅太郎

同　岡　島　哲　司

事業面では養鶏が中核となっており、直営養鶏場経営（四万４０００羽）、サンパウロ市セアジェスペに鶏卵販売ポストを経営、他に飼料混合所、ポスト・デ・ガゾリーナ、購買部を経営、購買部はスペル・メルカードと農用材料並びに畜産用のプルデンサールの配給取り次ぎを行っている。

以　上

一九九六年一〇月記

私のチエテ入植

大　関　昭　夫

私は一九二八年サンジョゼ・ド・リオプレット地方のオンダ・ベルデ町のファゼンダで生まれ、その後同地方の常盤(トキワ)植民地を経て、一九四〇年七月諒次郎伯父、野沢さん、国平さんの家族とともにチエテ移住地ベラフロレスタに移転した。

この小さな町（ベラフロレスタ）もパイネーラの並木に、点々と電灯が灯っていた。私たちの入った仮住居は元ブラ拓職員の社宅だった。先着の人達がみなで手伝ってくれて荷を下ろす。もう夜もだいぶん遅くなっていたので、荷物は庭に下ろしたままで、明日片付けることにする。

諒次郎伯父が「ここは日本人ばかりで、絶対泥棒の心配はねえがら」とお国言葉で言ってくれる。ここで生まれて初めて板作り、床板天井板着きで、電気水道の完備した家にしばらく住むことになった。その晩は諒次郎伯父さん、野沢さん、国平さん家と分けて泊めてもらったと記憶する。国平さんの家は、斜め向かいであった。私は野沢さんの家に泊めてもらった。十一時には電灯が消えてしまうので、ランプをつける。風呂に入らせてもらい旅の埃をおとし、気持ちよかった。広次君と一緒にやすませてもらった。カーマに入っても旅行の後遺症とでもいうか、カーマが揺れているような気がして中々寝付かれない。広次君と旅行中のことをあれこれと話していて、いつの間にか眠った。

次の日は荷物片付けに忙しかった。水道の蛇口が駄目になったので電気兼水道屋の小出さんにたのんで取り替えてもらう。電気

は少しでも倹約するため、サーラと炊事場だけ六十ワットの電球をつけてもらった。
家賃は無料だったが、電気水道は有料だった。寝室などはもってきた石油ランプで間に合わせた。諒次郎伯父さん、国平さんの家はみな備え付けの大きな角風呂があってすぐ使えたが、わが家のは以前青年達がクラブに使っていた頃、湯をわかして使ったときの不注意から火事をおこし、燃やして駄目になっていたのだった。天井まで真っ黒に焦げていて不吉な感じだった。
そうしたことからしばらくの間、諒次郎伯父さん、野沢さん、国平さんなどに行って、もらい風呂だった。なによりも閉口したのは水のまずさだった。塩分が多くて、飲んでも飲んでも渇きが癒されない感じなのであった。母や姉はサボンが効かなくて、洗濯物の汚れがおちないとこぼした。前にいたトキワ植民地の、甘くて美味しい水が恋しくなった。
小さい弟や妹たちは、さっそく「もとの家に帰ろう」とぐずりだした。
小さな子供は、引っ越すたびに元の古巣を恋しがって泣くものなのである。
借りた社宅は空き家になっていたので、その周囲は草だらけ、家の中は蜂の巣だらけだった。この蜂は茶褐色の体長三〜三・五センチにも及ぶ獰猛なやつで、刺されようものなら目が回って涙がこぼれるほど痛かった。家の中の巣は、父が棒の先にボロ布をゆわえつけ、石油をひたして点火したもので焼き殺した。
このチエテ移住地は標高が低いせいか、夏になると正に熱帯なのだ。

決して気候の良いところではなかった。そうした関係か昆虫天国であって、その種類の多さは驚くべきものであった。昆虫学者であればまさに宝庫であったろう。当時は周囲が深い原始林に囲まれていた故もあったからだろう。後年パラナ河とチエテ河をせき止めて、大掛かりな発電所を造ったため、移住地の低地は水没してしまい、湖底の故郷となってしまった。

ムダンサの車に同乗してきた友貞叔父は旅先なので、すぐ帰らねばならず、皆の入植する場所を見ておこうとカミニョンででかける。幹線道路を通って六キロメートルくらい行ったところがその場所であった。ベラフロレスタから行くと右側になっていた。新しい村道に入って一キロ程も行くと、そこは新しい村造りのために原始林が伐られていた。さらにしばらく下り坂をいって右側の低みに井戸が掘ってあり、入植者の家を作るまでの間の収容所の予定地になっていた。これはブラ拓が後に日本人会、青年会の会館として使用するために作ってくれたのだった。みな喉が渇いていたので水を汲んでのんだ。井戸の周囲やバケツには、水を飲みにくるのか、様々の種類の蜂や虫が集まっていた。この低地でも井戸は二十五メートル以上と深かった。水はやはり塩分の多いうまくない水でがっかりさせられる。予想のとおり入植して、後々まで水では苦労することになるのだった。だがその後七年くらい経って上水がわき出て、柄杓でもくめるようになったのだった。そしてすぐ下側の低地は小川となり、変わって行くのだった。この水脈が上がって上水となってからは水に塩分がなくなり、あまく美味い水になるのだった。原始林が畑になって六、七年もすると、水脈が上がるのはどうした関係なのか、地質学者にでも尋

ねないと解らない。
八十アルケールの原始林の伐採は、まだ途中で大勢の人夫のかけ声やマッシャードの音、大木の倒れる音などがしていた。山伐はとうてい予定通りには終わりそうもないと言うことだった。山伐が遅れると生かわきでうまく焼けず、従って蒔きつけが遅れることになり、困ることだと父たちは語り合っていた。
狭い場所でカミニォンをまわして帰途につく。この新しい村道をみると、直系一メートルから一メートル半の大木を根っこから掘り起こして道を開いているのだ。荒山開拓がいかに重労働の難事業であるか見ることができた。
帰りついて昼食後同行した友貞叔父と長一兄はリオ・プレットへの帰途についた。本家のアンジッコ山は開拓してまだ新しく、土地も良かったので惜しいと思ったが、長一兄は元の耕地でもう一作やらせてもらうことにして残る予定で帰って行ったが、結局は間もなくこちらに移転してきた。
こうしてわが家族は小さな町で初めての町暮らしが始まった。収入のない身で、電気や水、食物類、野菜一葉から蜜柑一個まで買わなければならず、昨日に変わる暮らしであった。このチエテ移住地は、最初の入植者があったのが一九二九年度となっているから、私たちが入ったのがその十一年目ぐらいだった。そうした新開地の故か、果物や野菜がリオプレット方面に比較して、ベラボウに高かった。あちらの方面では歴史が古いだけに、大地主や小地主も多く、果物などが豊富で、一、二ミルレースももって行けば蜜柑でも野菜でも、担げないほど買ってこられたのであった。ある時近くのシチオへ蜜柑を買いにいったら、姉と、私と、妹三

人で担げるだけもって行けと言われ、欲張ってせい一杯採って担いだのはよかったが、帰りが重くてひどい目にあったものだった。大体元いたトキワ植民地では入植三、四年目頃から野菜、果物、鶏卵などは自給自足できるようになったものだった。

ここでは蜜柑やバナナなどは近くの神田パン屋さんで売っていたが、蜜柑八つか十で一ミルレース、バナナ一ダースが一～二ミルレースもするではないか。野菜なども近くのアグア・スミーダ区の中村のお婆さんが、手提げカゴに入れて一日おき位に売りにきたが、品も少なく、大根やネギの小さな一束が一～二ミルレースと高価なのに一驚したものだった。お婆さん自身が売りにくる度に「高くてねぇー、気の毒でねぇー」とことわりを言いながら売っていたものだ。私は子供心にも「高いと承知なら、安く売ればいいではないか」と思ったものだった。このお婆さんの娘が、チエテ橋完成のおり、その開通祝いを見物に行く途中、十七才の青年、無免許の池淵運転手のカミニョンに大勢の人々とのってでかけ、ペレイラ・バレットよりチエテ橋の間三キロメートルの途中、道がよかったのと若者の分別の足りなさからか、あまりぶっ飛ばしすぎてハンドルを切りそこね、カミニョン転覆、死者三人(娘)、軽傷者、重傷者多数の大事故を起こしてしまったという。その死者三人の中の一人は自分の娘だったということなどを話して聞かせてゆくのだった。このお婆さんは話し好きとみえて、商売そっちのけで母と長い間話して行くことが多かった。おかげで母は町の様子やこの地方の人々の様子を早く知ることができたであろう。

一応の片付けがすむと父や諒次郎叔父、国平さん、野沢さんなどは日雇いの仕事を見つけて働きに出た。大勢のカマラーダを

使っていた身が、いまは使われる身となった。世の中の浮き沈みである。私たちは子供で雇いてもないから弁当運びだの、薪ひろいをするぐらいだった。

父たちの最初の仕事は町中の大工、高島さんが請け負った幹線道路、私たちの村となる方へ行く途中のメデタ橋向こうの埋め立て道路工事の仕事であった。小川があってその向側二百メヘトル程は低地であるため、雨季にはぬかるみとなるのであった。材木など敷いて盛り土してあったのが沈んだので、土を運んで盛り土する仕事であった。このチエテ移住地は奥地の新開地だったせいか、カマラーダが少なく、賃金は高いということだった。それでも日当五ミルレース前後だったろう。父一人が稼いで八人家族が食って行けるわけがなかった。私たちは持ってきた米フエジョンや味噌などあったから空腹にはならなかったが、ほしいと思うものを買ったり食べたりはできなかった。野菜が高かったので私たちは近くの畑に行ってマモンの青いものをもらったりしてオカズにした。薪は近くの高津ホテルの畑や山に行って無断で一彦君や宏次君と共に失敬してきたものだ。

当時のベラフロレスタの町は色々の商店をとりまぜて十軒前後だったと思う。それでもホテル、ガソリン・ポスト、薬局、医院、パン果物店、雑貨店、飲食店、床屋、豆腐屋、博労兼肉屋まで一通り、生活に間に合うようになっていた。

ベラフロレスタ（美しき花園）とこの小さな日本人町の名は美しい。

事実ブラ拓の方針か、わずかばかりの町の通りはパイネイラの並木になっていて、花の季節に満開となったときにはその名の通り

美しき花園となるのだ。だが破産して敗残の身のようなわが家にとっては決して住み心地の良い所ではなかった。日本人商店には雑誌キングや少年倶楽部、幼年倶楽部、小学館の子供雑誌、お菓子類、玩具類、果物類と目にはつくが、私たちには高嶺の花なのだった。まだ子供だった私は、それでも時には家の現状を思い、悲しみに閉ざされるが、たいていは友一彦君、従兄和七君等と町の様子やふきんの様子などを見て歩いて遊ぶことが多かった。

あるとき宏次君が「バナナを食いに行こう」と私を誘って、高津さんの棉畑へ連れて行った。そこには穴を掘って少しばかりのバナナが隠してあった。お陰で私はうまいバナナを沢山よばれることができた。その時の美味しさは今でも忘れることができない。思えば同君もおなじで、べつにひもじかった訳ではあるまいが、目と心が飢えていたのであろう。

ママイの財布から一ミルレース失敬して買ったものだったろう。そうしたことが二度か三度あったように思う、危険をおかして食べさせてくれた同君に、今も感謝している。もうとっくに時効になったことだから、今では懐かしい思い出として記しておこう。

わが家の右隣はブラ拓ベラフロレスタ主任の梶山一五郎氏宅であった。

氏は小柄で痩身、口ひげを蓄え、乗馬ズボンにニッカ・ポッカー姿で、主任としての威厳をつくり、非常にまじめな正直な人だった。奥さんは昔小学校教員だったとかで、よくできた人だった。母とよく話し込むこともあったが、病弱であった新来者の母に対しても決して悪い態度をすることもなく、わが家の現状を同情してか、たまには裏庭で少し飼っていた鶏卵などをくれたりして、養

生になるようにと励ましてくれるようだった。
対照的に思えたのは斜め向かいに住んでいた、やはりブラ拓職員の書記、会計とかの小平氏夫人だった。役目柄金を扱うためか、給料は主任の梶山氏より上とか聞いたが、当時としては金使いが派手にみえた。毎日のおやつは神田パン屋へ長男進君をアンパンやポンドーセを買いに行かせていた。たまには矢野のウドン屋からウドンなどをとっていたようだ。心の飢えている私たちには羨ましいかぎりであった。この小平氏はその後しばらくしてからブラ拓の金を使い込んだとかで、梶山氏と大喧嘩して事務所を出されたのだった。派手な暮らしが無理を生じたのであろう。
こんなことなどもあったが、いずれにしてもこのベラフロレスタの町は、我が家にとっては辛い「美しき花園」だった。

二

或る仕事休みの日、父が自分たちのロッテを見に行こうというので、二人でホイセを持って出かけた。七キロメートル近くの幹線道路をテクテク歩いて行って、それからロッテの境界を入って村道まででることにした。原始林をやっと通れるほどに細く切り開かれたピッカーダは、所々に杭棒をたて境界線を作っただけのもので、歩きにくかった。細長く区画割りしてあるので、新しい村道にでるまでにかなりの距離があり、だいぶん時間がかかったのであった。幾抱えもあり枝下二十メートルもあるようなペローバやパウダーリョ、フィゲイラなどの大木が亭々と天をついて聳え、空を覆い、昼なお暗い原始林は、なんだかオンサでも出てきそうで、背筋が冷たくなるような不気味な気がした。だが、その

林相は私は気に入った。これほど多きな木がたくさん生えているのだから、さぞかし土地も良いだろうと思った。大分ひまどって村道に出て、腹もへったので、倒してある大木に腰掛けて、持参のおにぎりを食べることにした。蜂やその他の昆虫が塩気をほしいのか、うるさく寄ってくるのを追っ払いながら食べた。

ここでちょっと地区割の順序を記しておこう。一番地国平氏、二番地重枝氏、三番地大関本家、四番地諒次郎伯父、五番地わが家、六番地野沢氏という順になっていた。わが家のロッテは低地となっていた。帰途は外の区に移って行った重枝氏のロッテのに入り幹線道路に向かった。

村道をすこし上がりピッカーダに入り、また原始林の中を通って幹線道路にでた。こちらの方は赤土でどうも乾燥地らしく、平均して立木が小さく、たまに大木はあるが茂り具合もわるく、たしかに地味が弱いかんじだった。ところか父はこちらのほうが良いから事務所に交渉して取り替えてもらうと言い出したのであった。私や母は極力反対したのであったが、正直で一本気、お人よしだが頑固な父は終に譲歩しなかった。結果後々十二年間も人並み働いても収穫はあがらず、損をしてゆくことになるのだった。

始めに当たっていたロッテは村でも一番よいくらいの土地だったのだ。

それを取り替えた土地は最も悪いほうの土地だった。お陰で隣家の野沢氏は幸運をつかんだ。と言うのはそのわが家のロッテを引き取り、自分のと最も良いロッテを二つ手に入れたのだから…。当時の百姓の焼畑農法は、働きや技術よりも土地の良し悪しに

よって決定されるのだった。帰するところ土地が良くて、水利の良いところということになる。
父のしたことはその逆のことだった。結局せっかく当たっていた幸運をすてて、貧乏くじを選んだのだった。そうしたことでわが家のロッテはノーボ・パライーゾ区の二号ロッテとなったのであった。村の入り口だったから原始林は早く伐ってあり、八月始めころにはもう十分乾燥して、火を入れても良かったが、ずっと奥の方はまだ伐ったばかりか、未だ伐っているという始末だった。早く焼いて後片付けをしなければ、九月にはいればそろそろ雨が降る恐れがあるし、雨が降れば早蒔きの作物の蒔きつけもしなければならなかったので、気のもめることだった。
八月九日から三日間は移住地の入植記念日で、あちこちでのお祭りは盛り上がったようだが、私たちは他所のほうまで歩く余裕がなかったから知らないが、ベラフロレスタの町では大きな演芸会があった。芝居は「石童丸」とか「検事の妹」などがあったように思う。漫才、寸劇、浪曲、娘さんたちの美しい衣装による手踊り、と盛りたくさんのプログラムで、さすが日本人の一大集団地だけに芸達者の人が多く、十分楽しませてもらった。最近のような素晴らしい音響装置なとは勿論なかったから、舞踊なども、ぜんまい蓄音機で間に合わせ、知らせごとや解説などは、メガフォンを使って大声で怒鳴るという風だった。ハーモニカやギターの上手な人達も大勢で演奏した。ここでもトキワ植民地と同じように弁当持参で、それを食べながらの見物であった。
お祭り気分の三日間はたちまち過ぎていった。その後ノーボ・パライーゾ区の新入植者たちの山焼きについての合同会議がブラ

拓第二事務所で行われた。私たち手前の方のものは早く伐ってあって乾燥していたから、早速火を入れたいし、ずっと先のほうの人達はまだ伐ったばかりで乾いていなかったりで、火入れはまだ先にしてもらいたいと主張し、話し合いがつかず、延期になったと父が話す。なんといっても二十家族分、八十アルケールあまりの大面積であるから、一度にこちらからあちらの端までうまく行かない。

この町へ来てからも、母や私たち兄弟は幾度かマラリヤに罹った。末の妹は麻疹の高熱からひきつけを起こし、近所の木庭医師に診てもらった。そのとき父は西アレグレ区の田中儀一氏宅へ出稼ぎにいっており、諒次郎伯父さんが高津さんの自動車で迎えに行った。帰ってきた父は医者や自動車賃の支払いにどうにもならぬと思ってか不機嫌で、「ちゃんと注意しねえがらこんなごとになる」と文句を言った。そして諒次郎伯父さんに「ちゃんと手を尽くしてやるごとやったのに文句あんめぇ、びょうぎになっどぎはなるんだがら仕方ねえんだ」とたしなめられた。

それから「おでき」にも悩まされた。たいていの子供は変わった土地に引っ越すとこのフェリーダができて悩まされるのだった。子供はそれぞれに免疫がないせいかも知れない。この「おでき」は沢山できると痛くもあるし、体も熱っぽくなって苦しめられたものだ。しかしこれは一時猛威を振るったが、時が経てば体に抗体ができるのか、自然と治って行くのであった。

昆虫天国も我々にとって決して有り難いものではない。直接人体に攻撃をかけてくる奴でも蚋（ブユ、ブトとも言う）、蚊、ベルネ、ダニ、砂ノミ、とちょっと考えただけでも幾種類も思い出せ

るのだ。もっともこの種の害虫は元住んでいたトキワ植民地にもいたのだが、このチエテ移住地は暑い気候か未開発のせいか、その種類と数の多いのには閉口した。

蚋はとくに暑い日が多くなるほど猛威をふるいはじめ、畑で労働中は仕事の手を休めて追い払ってばかりもいられないので、麦藁帽子などの両側に細い針金でボロ布で縄をあんで取り付け、いぶしながら仕事をしたものである。これで完全とはいかないが、いくぶん襲撃が防げるのである。それから忘れられないものに砂蚤がある。奴の好んで食い込むのは足の爪の周りが多いのだ。奴が食い込みはじめた一日二日がとくに痒く、夜など仕事に疲れきって前後不覚に眠り込んでいるときでも、あまりの痒さに無意識のうちにガリガリかいているほどだ。三日もすると食い込んだ砂蚤じたいが中心となって、白く丸い袋状の巣となって沢山の卵を産んでいるのだった。こうなったとき、私たちが幼かったころは、母がランプの火で縫い針のさきを少し焼いて消毒し、丸い巣の周りの皮膚を丁寧にほじくっておいて、袋のそばを針でこじると丸い袋ごとコロリと取れたものだった。取れたあとの小さな穴にはヨードチンキなどを塗布して終わりである。

ついでだから、やはり人体に食い込む嫌な奴、ベルネについて記そう。

これは砂蚤ほど数は多くはなかったが、生体に食い込んで生血を吸い肉を少しずつ食って小指の先ほどの大きさに成長する。こ奴が人間に食い込むのは衣類とか布団、敷布など洗濯して乾かしておくと、それに親蝿が卵をうみつけ、それが夜のうちに人体に食い込むということだった。

奴のたちの悪いのは、初めのうちは痛痒を感じず、気がついた時はかなり大きくなっていることである。こ奴を取り除くには先ず油製のできもの用の塗薬を中心の空気穴に塗布し、苦しくなって少し出てきたとき、周りを強く押さえて押し出すのである。次第に大きくなると段々條のついた体に粗い体毛を生やし、グロテスクな奴になる。これが自分の体の中に巣くっていたかと思うとゾッと悪寒がしたものだった。

話を戻そう。八月の半ばすぎてもまだ山焼きはできなかった。二回目の会議がひらかれ、話し合いは荒れに荒れた。前述したように手前の人達と奥の人達の利害の衝突である。中間に火道をつくって二回にわけて焼くという案もでたが、それは飛火する恐れがあるとして実行できなかった。ブラ拓の梶山主任もとりまとめるのに苦しい立場であったろう。

結局は、伐り遅れたのはブラ柘の責任であってみれば、もうしばらく乾くのを待つ、という方に押し切られたのだったが、その後しばらくして雨が降ってしまい、わが家の山は無残な不焼けとなり、苦労と災難続きとなるのだが、すべては運のようなもので、どうにも仕方がなかった。

その頃の父は仕事のあるときはカマラーダに出ていたが、いつも仕事がある訳ではないので経済は苦しかった。末の妹がはしか熱から引きつけを起こしたとき、医者代と薬代の支払いに困り、梶山主任に父が前借を頼んだが、氏が言うには、まだ仕事もはじめていないことだし、自分には計らいかねることだから、第一事務所に行って話してくれとのことだった。父は翌日早起きして、徒歩でペレイラ・バレットに行った。すでにジャルジネイラ賃さ

え不足するほどわが家の経済は逼迫していたのだった。
当時の移住地の総支配人は古関徳弥氏であった。氏は若かったが学問もあり、度胸人情もある有能な人である、と聞いていた。父が事情を話して頼むと、ブラ拓としては今すぐだせないが、少しくらいなら自分の持ち金があるからと言って、自分のポケット・マネエーから貸てくれたとのことであった。不遇であまり見込のないものに貸すことは、たとえ相手が正直者であっても、勇気のいることなのである。父はその恩情と恩義に感激して帰って来たのであった。後に古関氏は、祖国日本が第二次世界大戦に突入する直前、本社からの帰国命令により帰国し、開戦となって南方に出張途中の船が、米潜水艦に攻撃されて亡くなったと聞いた。惜しい人であった。
その後父は私をつれて弁当をもって山に通い、切り株から出ている芽をロッサしながら山焼きの日をまったが、風雨によって倒木の枯葉は落ちてしまい、あまり焼けそうにはなかった。
山焼きの日が決まったのは九月に入ってからだったと思う。生憎その日は朝から曇りでうすら寒いような日であった。その日はブラ拓が大奮発して高津氏のカミニョンで新入植者二十家族の家長や青年をのせて、午前現場に向かう。梶山主任は例の乗馬ズボンすがたで司令官よろしく乗り込んだ。昼過ぎには火付け人の配置と手順をきめて、ピストル二、三発を合図で祈るような気持ちで一斉に火を入れた。天気がよければ最も暑い時間であり、よく乾いた枯葉などは火薬のように燃えるのだが、その日のような湿気を帯びた薄ら寒い日ではなんともうまくない。かなり先のほうはモクモクと黒煙を上げてうまく燃えている所もあったようだが、

手前のわが家の山は早く伐ってあって枯葉も落ちてしまっていたので、まるで不焼けとわかってガッカリする。ツイていないときは、どこまでもツイていないものだった。

不焼けながら一応山焼きが済んだので、明日から早起きして焼け後片付けの仕事だ。 翌日はまだ暗いうちからたたき起こされた。弁当やコロッテ、マッシャード、フォイセ、トランサドールなどを持って父と二人で夜明けの道を出発する。薄暗い道を一生懸命に歩いていくと、新しい同じ村人となる人達も、幾人もゾロゾロ歩いて行くのに出会う。ほとんど知らない人ばかりだから親しみもないのだが、父は何かと話しかけたりしながら七キロの道をゆく。現場に着くころにはすっかり明るくなっている。皮肉なことに、昨日あんなに曇っていた空が、今日は晴れわたって暑い日となったのだ。それが分かっていれば一日でも二日でも待てば、うまく焼けたであろうと思われ、残念であった。

まず最初に家をつくる場所から片付けはじめる。奥地の九月は日照りであればそうとうに暑かった。そうした中に、灰埃まう新山のトッコのかげに朝早くもってきた弁当をおけば、昼食時にはすでにいたみ始めているのだ。でもそれしか食べる物はないのだから、食べる外はない。そうした毎日を続けているうちに、私はひどい下痢をおこし、そのうち血便が出るようになり、アメーバ赤痢状態になってしまった。それでも仕事はすでに遅れているので、父の相手役として休むわけにはいかなった。

トランサドールを使うときには、どうしても二人の手が要るのだった。

三

いま、考えるとずいぶん無理というより無茶な話だが、当時の家の事情ではそうする外しかたがなかった。

仕事初めの日の午後父が「今日は良いおでんきになったがら、焼けのごりのどご燃して見っぺや」と言い、二人で火をつけて歩いてみた。焼け残ったようなところは大体燃えるものが少ないのだが、それでも天気の良い暑い日となれば結構燃えるのだった。その後家を建てる場所と、村道から家までの百メートル程の道あけをする。父は日本では百姓仕事をしたことはなかったし、私はまだ十二才の少年でマラリヤに痛め付けられヒョロヒョロの体格で、とても一人前の仕事はできなかった。飲み水を汲みに行くのも大仕事だった。下手の収容所のあるところまで一キロメートルほど下り、二十五メートルもある深い井戸からギッコンギッコンと重いクランクを廻して汲み上げねばならなかった。まだ半人前の力しかなかった私は、間で休みながら汲み上げたものである。こうして遠くから運んでくる水が塩分が多くて、さっぱり美味くなく、飲んでも乾きが癒された気がしないのだ。あれやこれやと灰埃ばかり舞立つ家もない新山仕事で気ぜわしい一日をおくり、夕闇の迫るころ空になった弁当箱を背負って七キロメートルの道を歩いて帰らなければならなかった。

幾日が過ぎたころ、家作りのためブラ拓が貸付配給の板とか瓦とかを運送業の高津さんやペレイラ・バレットの人達の車で届けはじめた。よく夕刻畑からの帰路これらのカミニョンに便乗して帰ったものだ。ブラ拓が新入植者のために造ってくれた収容所に入った人もかなりあった。

収容所はかなり大きな建物であったが、十家族位が限度のようであった。

わが家では母が病気だったため、そうした共同生活は遠慮せねばならなかった。棟木とか桁などの細材は私も父の片棒を担いで山から切りだすことができたが、柱や土台となるととても無理で、かつげなかった。そんな時には親類や近所の人達が手間を貸したり借りたりして、助け合いながら行われたものだ。また建前のときも同じように手を貸しあって建て上げたものである。わが家も桁や棟上げまで手伝ってもらい、後は父と私との二人の仕事になった。瓦をふくにしても、その頃の私の力ではとても投げ上げることはできなかったので、二、三枚もっては、梯子をのぼって父の手にわたすというやり方だった。骨が折れるわりに、仕事ははかどらなかった。そして屋根を半分葺き、寝室の方だけを板を打ち付けて囲い、引っ越しということになったのだ。引っ越しは高津氏のカミニョンで、下野さんの運転で運んでもらった。母と妹孝子と弟の剛の三人はしばらくベラフロレスタに残ることになった。母が病弱で近所の井上看護婦からカルシュームの注射などしてもらっていたのと、家がもう少しできてからと言う父の判断からだった。

家は前記のように造りかけの家だから、戸は板を四、五枚立てかけ、窓は米の空き袋をつるして間に合わせるという具合であった。水は天秤棒をつくって一キロも遠くの収容所の井戸まで行って担いでくるのだった。味噌は幸いトキワ植民地時代に母が作ったものを二樽もってきたので、みそ汁は作れるが、つゆだけで野菜がないのには閉口した。

こうして苦難の新開地での第一歩を踏み出したのが、一九四〇年の九月半ば過ぎであったと思う。

一九九二年八月記

遠い思い出

吉　原　源

ペレイラ・バレット市の西側をながれるラランジャ・アゼーダ川の下流、町から二キロほど下ったところに私たち吉原家の五アルケールのシャカラがあった。

この土地はむかし入植当時父金治郎がブラ拓から買い入れたもので、一九三五年ころから一九五八年まで百姓をしてきた所である。ペレイラ・バレットの町から南に向かってひどい砂の村道があった。この道はラランジャ・アゼーダ川との間一五〇〇メートル程の丈で平行しており、その間がチエテ河岸まで小川に直角に一〇〇メートル幅のロッテに区切られ、通称ラランジャ・アゼーダ区といわれていた。私たちの土地はその中間あたりにあった。細長い土地を下るとラランジャ・アゼーダの小川があり、向う側も同じようなロッテに区切られ、そこはラランジャーダ区と呼ばれていたようだ。

一九五四年町の中学を卒業した私は、サンパウロの大学を目差

し、義兄香山につれられて憧れの出聖をしてもう四二年になる。いまこの揺藍の地はすべてダムの底に眠っているのである。

日本を一九二四年にでた父母は、しばらくリンスの野田源行氏のコーヒー園に働いて後、チエテ移住地にわたった頃はすでに三人の幼子をかかえ、まもなく私が生まれたので、世話になった野田さんの名にあやかって「源」と名付けたという。雇われものであった父の希望は、自分の土地を買って独立し、ジャングルを伐りひらいて米、棉、コーヒーなどを植え、一儲けして日本に帰るつもりであったが、計画はかんたんに運ばれなかった。

まず川のほとりに野菜を植え付け、近くにほったて小屋をたてて住みつき、作った野菜を朝早く天秤でかついで腰にはピストルを携え、マットの細道を町のフェーラへ売りにでた。そして日用品などを町の店屋から買って帰り、一休みしてから野菜畑ではたらくのである。母も子供をつれてその手伝いをするのであった。当時私は三、四才でチョコチョコ歩きながら母につきまとっていた。そんなある日大きな木の切り株のうえで遊んでいたが、どうしたことかもんどりうってザブンと小川に落ちてしまったのである。そばで大根を洗っていた母が、あわてて水にとびこみ流れから私を助け上げてくれたのを、かすかに記憶している。

この近辺は夜になるとひどい蚊の大群がおしよせ、一家がマラリヤで寝込むということもあったが、その後父は低地の野菜作りからぬけだすべく、もっと湿気のすくない高みのほうに、カマラーダを雇いジャングルを伐り開き、ちょうど土地の真ん中あたりに少し気のきいた土壁にサッペ葺きの家をたてた。そして残りの半分の土地にバナナを植え付け、あちこちに生えていた野生の

ミカンを台木に、ワシントン・ネーブルとかいろいろな種類のミカンの芽を接ぎ木した。その頃には兄姉たちも大きくなり畑仕事も手伝えるようになったので、二キロほど離れた土地を借地してミーリョや棉を植え付けていた。

ある日この離れた棉畑に弁当をもって行く途中の村道に、黒鳥アンヌーが多数飛び回っている。みれば焼け付くような砂の村道いっぱいに、三センチもある棉の害虫クルケレーが群れているではないか。クルケレーが異常発生して食べ物をもとめて移動していたのかもしれない、忘れられない珍しい現象であった。お陰で父と兄は重い噴霧器を背負い、休むまもなくこの虫とたたかわなくてはならなかった。

下半分に植えたバナナは土地によく合ったのか、二、三年後にはバナナ園は昼間でも薄暗いほどよく茂り、子供の私にはこわくて一人では通れず、隣家の棉畑を下って小川に行ったものである。

このバナナ園には大きな房がさがっており、収穫の手伝いは一〇才たらずの私にはきつい仕事であった。五メートル近く伸びたバナナの木には、一〇キロを越える房がなっていたように思う。

先ず父が、実ったバナナをみつけると、根本を鎌で切り込み、バリバリ、ドスンと倒れるのを私が素早く房の先端を握って横に引っ張るのである。こうして房が下敷きになってくだけるのを防ぐのだが、数の中にはやり損ないもあり、房が下敷きになって父に怒鳴られることもあるのは辛かった。切りおわったバナナの房は、畑の中径まで担いで径端につみあげ、後カロッサで家のそばのバナナ小屋まで運ぶのであった。この小屋では一つ一ダースの小房にきり、箱詰めして熟すのを四、五日まち、ミカンなどと一

緒に父が週に三回馬車で町に売りに行くのであった。
ミカン畑はバナナと混植であったが、土地が肥沃のせいで良くできていた。枝がしわるほど成るミカンは大きくて一人では食べきれないほどであった。いろいろな種類のミカン、バナナ、マンガなど豊富にあったので、穫りあまって木から落ちたのはそのまま肥料代わりという贅沢ができたものだった。父がいたずらに、一本の台木に二種類のミカンの芽を接木して成らせていたのは面白かった。
毎年冬の乾燥期には三カ月も雨らしい雨も降らぬことがあり、誰がつけるのか隣の畑からよく出火することがあった。その火がバナナ畑に飛火したら最後、枯葉のいっぱいさがったバナナの木は油気があるのか、あれよあれよと言うまに丸焼けになり、一年の収穫はゼロになるのだ。
考えた父は隣の土地を買いこみ、そこにもミカンとバナナを植え付けたが、もう五年前に植えたような見事な果物はできなかった。五年間の連作で地力がおちたのである。
そこで思いついたのが養蚕である。時は終戦前の一九四四年頃、村の多くの人が養蚕をやっていたので、果樹園をほったらかして桑を植え付け、三〇メートルの養蚕小屋を建てて始めたのである。私も夜の作業にはカンテラをもたされて加わったが、毎晩一〇時の最後の桑配りが終わるともう眠くてグッタリだった。
そのころ私たちは板壁に瓦屋根のこじんまりした家に住んでいたが、問題は水であった。高いところへ移ったので、マラリヤからは逃れたが、井戸は三〇メートル掘って堅い岩盤につきあたり、ダイナマイトまでかけて一日に何センチしか掘れないのは情けな

いはなしであった。隣の角川さんから天秤で水を担いだことが何年かあった。三〇〇メートルの距離を毎日何回か、一八リットルの石油カン二つを天秤でふりわけて担ぐのは母と姉の仕事であった。水が出ぬ井戸にあきらめた父は二人のブラジル人の井戸堀を解雇して、少し下がった桑畑のなかに青年となった兄をあいてに堀りはじめ、今度は二六メートルで水脈にとどき一家大喜びであった。

無口で働き者の兄は、父とちがって小さい頃から絵が上手で手先が器用であったから、野良仕事の合間には何でも自家用品をつくった。分からないところは元大工の浅野さんに尋ねながら、少年のころから家は勿論、養蚕小屋、物置なども彼任せであった。

井戸に水が出たので、土壁であったが兄の設計でそのそばに五部屋とコジンニャ、風呂場つきの今までよりずっとモダンな大きな家を建てた。

勿論みな家族の手で、壁は漆喰でかため、石灰で着色して上塗りした立派な家であった。高い壁を空色に塗ったので見えにくいのか、たまにバタンと音がして山鳩が壁に衝突して死んでいることがあった。

第二次世界大戦中に育った私とすぐ上の姉は、とうに一〇才を過ぎていたのに全く学校知らず、これでは可哀想だと母は父や兄が野良仕事に出た後、毎朝午前中に七つから上の子供達に日本語と算術を、日本からもってきた読本の巻一から巻一二まで根気よく教えてくれた。おかげで姉と私は何とか日本語の読み書きの基礎ができたが、ポ語のほうは遅れ、私が一二才のとき弟と一緒に町のグルッポに通い始めたころは、全然ブラジル語が話せなくて

こまった。
幼友達といえば、隣家がかなり離れていたせいか、ほとんど兄弟同士で遊んだので、ただ一人隣家の八島長太郎君ぐらいのものだった。彼は一人息子であったため溺愛されて育ったせいか、小さいころから当時の子供には珍しく靴を履き、帽子をかぶり、ボール、空気銃から馬まで買ってもらってウチにきて良く遊んだものである。彼は私より一つ下で、ゲジゲジ眉毛に大きな目、太っちょで色の白い小がらの子供であった。一緒に小川でおよいだり、釣り、小鳥狩り、木登り、かくれんぼ、相撲、野球、フットボールといまの子供の知らない自然のなかで、無邪気に跳びはねていたのが今でも忘れられない。
私がグルッポに入学した年に、主力であった兄が突然リオ・デ・ジャネイロへ行って絵かきになりたいと言って父を驚かせた。兄はリオの長沢画伯が弟子を求めていることを新聞でみて手紙を送り、すぐ出てくるようにとの知らせを受け取っていたのだ。
クリスチャンであった父母は、このとき皆をあつめてお祈りをして賛美歌を歌い、母は隠し持っていたヘソクリを兄に全部わたして送り出した。
翌日から次男の私の責任は重くなった。学校から帰って昼飯を食べたら、姉二人と弟一人をともなって野良仕事だ。夕方はまだ明るいうちに家に帰ってブタと鶏に餌をやり、牧草を刈って二か所の馬小屋に投げ込み、繋ぎ飼いの馬に水を与えて馬小屋にいれた。この二頭の馬は翌朝再び牧草のよく茂ったところに長い縄でつないで、学校に出掛けるのだった。兄だけしかできなかった馬でのアラードかけは父一人ではできず、私を嫌がって食いつくあ

ばれ馬の手綱を両手で引っ張るのである。前足を挙げておどり上がる大きな黒馬に、まだ体の小さかった私は、死に物狂いでぶら下がるのだったが、二つの蹄を頭の上にみるとこわくて手を放してしまう。荒れた馬はおならを二つ三つ放しながら後足二本で蹴りあげ、掛け声をかけても何のその、アラードにしがみついた父を家へ帰る道のほうにジャンジャン引っ張って行くのであった。こんなときアラードを離し、馬と人が大怪我をした話しはよく聞いていた。馬に踏まれてはまずいと私が初めてもらった労働靴は、扁平足の父が使い古したもので大きすぎ、おまけに底ぬけで、雑草のなかを馬をひいて歩くのがやっとこさ、その辛さに仕事がすんでから陰で泣いたこともあった。

新しい家と共に板壁の瓦葺きの四〇メートルもある養蚕小屋を造りあげたのはよかったが、間もなく終戦となり、繭の値段は暴落した。働き盛の長男をリオにやった父は、養蚕を止めて、サンチシモに買った一〇アルケールの土地を売りリオに行こうかと、あちらの土地の視察と長男との相談にでかけたが、結果、むこうも大したことはないと断念した。

それでリメイラからミカン、アバカテ、ブドウなどの苗を大量に取り寄せ、桑畑をたおしてバナナもみな植え直し、土地全部を果樹園にすることにしたのである。

そのころ私と弟は中学の二年生に通っていて、学校が引けてから毎日桑の株を掘り起こすのが日課であったが、桑も五年ものになると太って一人一〇株も掘り起こせたら良いほうであった。こうして長い間かかってやっと立派な果樹園ができたころ、中学も出ていない兄が実社会の荒波にたたかれ、経験だけつんで悄然と

家に帰ってきたので、私たちは安心して中学を続けることができた。

父は以前から俳句をやっていたが、その後も何処へゆくにも手帳をポケットにいれ、花や川をみるとそこでサラサラと、その頃珍しかったボールペンで何やら書いていたのが、今では懐かしい思い出である。

一九九六年一一月記

入植当時の想い出の人々

小番哲郎

私たち一家が故郷八島町で破産してどうにもならなくなった時、五年前ブラジルに渡っていた母の従兄吉川要治氏を頼って移住することになり、渡航して来たのであった。

そんなことで一九三五年元日サントス港に着いたとき、吉川伯父は波止場まで迎えに来てくれたのであった。船の上から吉川伯父さんの姿が見えたときには、母は本当に元気を取り戻したようであった。長い航海のせいで船酔いに弱っていた日々であったので、母の喜ぶ姿をみて私たち子供も明るい気持ちになったのであった。そんなことでチエテ移住地までの長い汽車の旅も元気できたのであった。

ルッサンビーラ駅についてチエテ河を渡る吊橋はできたばかりで、イナグラソンは六月といわれた。こんな奥地に立派な橋があるもんだと感心したものであった。この移住地の開拓の始まったのは一九二八年と言われる。私たちが移住地に入植したのは一九三五年一月四日であるから、開拓をはじめて七年目ということになる。

そんなことで移住地の開拓も一応軌道に乗った頃といえる。

吉川さんの家に着いたのは午前十一時頃であったと思う。この土地はウニオン区と言われていた。元はペデルネイラと言われていたが、向かい側の地区と合併してウニオン区となったのであると言われた。

吉川一家の皆さんと初対面の挨拶を交わしたのであった。親類といっても吉川家の人は東京に住んでおられたので、私たちは一面識もなかったので、初対面ということである。吉川の伯父さん伯母さん、長男の俊彦さん、次男の次郎さん、三男の五郎さん、四男の緑郎さん、五男の豊彦さん、それに吉川さんの甥の健二郎さんであった。長女のひろ子さんは結婚して居たので日本においてきたのであった。長男の俊彦さんはマラリヤに冒されて休んでいた。次男の次郎さんは私より一つ下の十六才であったので、私を連れ立って早速マモンが熟れていると言うので取りにいって食べたのであったが、臭いのであまり好きにはなれなかった。

吉川家の家の建っている所は地形の悪い場所で、傾斜の急なこと、そして石まじりの地で、どうしてこんな所を選んだのかと思ったのであった。ブラジルには広い土地があるのに、選りに選ってこんな土地をと、私の第一印象であった。

私たちが渡伯するというのでイニューマ区のチエテ河近くに十アルケールの土地を買って、二アルケール半ほど山伐も済ませてあったので、そこに住宅を建てるため仮の藁小屋を建てたのである。そして三カ月という間吉川家に厄介になっていたが、四月はじめに移転したのであった。

入植当時でこれから新しく家を建てるという気持ちがあるので、藁小屋でも何もくよくよすることはなかった。こんなところが新開地のよいところであった。

父は早速自力で住宅を建てるため働きはじめた。労働ははじめてであったろうと思われるが、昔製材所をやっていたので、要領は知っていたものであろう。セードロの木を切って屋根を作る柾割りを毎日やっていたが、夜になると腕が腫れあがり、アルコールで冷やして一心不乱に働いているのであった。

その後家もできあがった頃、サンパウロからマラリヤ専門の博士高岡専太郎氏がこられ、「この土地はマラリヤの危険があるので、住宅を移転しなさい」と言うので、一キロも離れたよその土地を借りて移転したのであった。そして離れたところより通っての百姓ということになったのである。

父が家を造っている間、私たちは四月初めから五月いっぱいで畑の整地を済ませていたので、六月はじめから私はブラ拓直営の第二製糖工場に労働者として働くことになった。工場は吉川伯父さんの家から二キロばかりの所にあった。工場主任は倉内さんという方で、五十才位であったが独身で私たちと同じ秋田県人であった。奥さんが亡くなったのか、それとも結婚しなかったのか聞いたことはなかった。

労働者の住宅は二軒あり、食事の方は大美さんという方の奥さんが賄ってくれた。当時働いていた方は大美さん、小原の爺さん、児玉さん、松本さんと私で、外にブラジル人が五人ほど働いていた。砂糖は赤砂糖といってカンナ汁を煮詰めたものを冷やして分蜜機にかけ、分離しただけのものであった。そしてその糖蜜とカンナ汁を混合して糖度計で計ってから発酵させ、アルコールに変わったところで蒸留するためランビッキに入れて火で熱をくわえ、蒸留してピンガにするものであった。赤砂糖は一日に二十五俵作っていたように思う。ビンガの方は大きな桶に溜めておくので、桶が四つあったと思う。そして或る期間をおいてキントに移して出荷するのであった。

私たち労働者は毎日仕事が終わったときピンガを空缶にいれて回し飲みする習慣になっていた。私も一度勢いにのって飲み過ぎ、壁を伝って宿舎にもどったことがあった。まだ十七才の時である。

カンナの収穫は十二月初めのころまでであり、十二月半ばには工場は閉鎖し、来年六月頃始動するまで仕事がなくなる。そんなことで私は家に帰って働くつもりでいたところ、ブラ拓中央事務所で一月から働かないかと成富さんから話があり、父との話し合いから働くことになったのであった。

父も経済的に私が外で働いて金をもらってきた方が良いと思ったのであろう。その父は当時胃潰瘍で療養していた。

こうして私は一九三六年一月からブラ拓事務所で働くことになったのである。当時ブラ拓のチエテ移住地支配人は斎藤幸氏であったが、間もなく古関徳弥氏が新しく赴任することになったので、小間使いが要るので私にきてくれということであった。名目

は庶務係ということで、成富氏が庶務主任で、北原さん、名和さん、そして私の四人が庶務部として働いていた。

私の仕事は机に向かったときは色々と書くこともあったが、トマカフェーの時は向かいの田中旅館からカフェーを運び、第二市街地と第三市街地の事務所の書類のとりつぎなどであった。朝は事務所全部の掃除をやって、夕方は古関支配人の家の井戸水を汲んだり、にわの掃除などをやった。古関さんのお隣には中島一男氏が住んでおられた。チエテ移住地全域を天野氏と二人で外人を使って測量をなしとげられた方で、当時奥さんは亡くなられ、養子の息子正さんと二人暮らしであった。そんなことで井戸水汲みは正さんがやっていた。私と同じ井戸水を汲んでいたのである。

中島正さんはブラ拓直営の運搬部で働いて居られた。運搬部の主任は野倉さんで、その下で中島正さんと赤川重康さんも働いていた。赤川さんは運搬部の倉庫の宿舎に寝泊まりされていて、ある日古関支配人からの書面を私が届けたとき、支配人が私に赤川と話してこいと言われたので、いろいろ話したことがある。それによると赤川さんは満鉄に勤めていたが、ブラジルに大きな希望があったので渡って来たのであると言われた。彼は恰幅もよく、チエテ青年弁論大会の題目と氏名を大きな筆で書くところは一流の書家でもあった。支配人は赤川さんを好感をもって迎えているようであった。

また同じ井戸水を汲んでおられたのは岩渕さんで、ブラ拓商事部の主任で、奥さんはイタリア人、綺麗な娘さんが居られ、グルッポの先生をしていた。だから一つの井戸の水を汲んだのは古関さん、中島さん、岩渕さんの三軒であった。岩渕さんの水を汲んで

いたのは麻生さんといって二十二、三のかたで、なかなか好感のもてる青年であった。かれは商事部で働いていた。

古関支配人の裏に住んで居られたのは長谷川さんという方で、この方も商事部で働いて居られた。彼は闘鶏のシャモを飼って居られ、支配人と同じ福島県人ということもあり、支配人にシャモを飼うのを勧めるのであった。そんなことである日長谷川さんが立派なシャモをどこからか持ってきて支配人のところにおいていった。早速鶏小屋を作り、その世話を私がやることになった。卵の黄身をたべさせたり、トサカにアルコールを塗ってやったり、色々せわしてすばらしい闘鶏になったが、闘うことになると余り強くはなかった。そんなことで支配人も興味がなくなったのであろう、鶏舎をのぞかなくなった。その後鶏舎にハムシが増えはじめたので、全部壊してケロリーナで消毒して、鶏はやめたのであった。

そんなある日、古関支配人とブラ拓直営の電気の主任木本さんといさかいがあったらしいとの話があった。どんなことか知るよしもないが、夕方奥さんが何かお土産を買ってきて木本さんに届けてくれとのことで、使いに行ったのであった。「これ古関さんの奥さんから頼まれて持ってきました」と木本さんの奥さんに渡したのだが、その後のことは知らない。

あの当時電気の方に小田島さんも働いていた。小田島さんの妹がその後私たちの近くの日向さんに嫁いでこられたので、小田島さんとは親しく付き合うようになったのであった。日向さんは大工さんなので、後日私の住宅を建てたのであった。

ブラ拓事務所には拓殖部、会計部、庶務部があり、拓殖部には

中村誠技師、湯朝信助技師、千本木繁人氏など錚々たる人物がそろっていた。
また野本氏も加藤氏もおられた。会計部には辻川氏、堀氏、赤松氏、もう一人名は忘れたが、四人居られた。
当時ベラフロレスタの主任は榛葉彦平氏であった。氏は後日パラナのトレスバラス移住地の支配人として赴任されたのであった。サンジョゼの主任は杉谷茂一氏で、氏も後日ウライ植民地に移転された。
一九三七年二月末のカルナバールの催しとして、ブラ拓職員並びにブラ拓経営の製糸工場の女工さんらを集めて、ブラ拓のクルーベでダンス・パーティをやることにきまったのであった。十九才になっていた私は、一度もダンスをやったことはなかった。大体よその女の人の手を握ったこともない者がダンスなんてとんでもないことであると思ったが、古関さんの奥さんはブラジルの師範学校出で、社交ダンスのことについてはブラジルの風習を重んずるので、私にも参加して踊ってきなさいと勧めるので出掛けたのである。会場に入ってみるともう始まっている。
ブラ拓職員でたった一人のブラジル人のジャイメさんが盛んに日本人の娘さんと踊っている。私は見物のつもりでいたが、とうとうジャイメさんに引っ張りだされて、何も知らないのに二十四、五才の肉体美人の日本人の娘さんと踊ることになった。この娘さんはなれたもので、私にいろいろ教えながら踊っているうちに、調子がでてきて結構踊れるようになり、その後二、三人の日本人の娘さんと踊ったのであった。面白くなったのでカルナバールの三日間連続に踊ったのであった。移住地時代のダンスはこの時の

三日間だけで、後はやったことはない。パラナに行ってからやはりカルナバールに踊ったことはあったが、二晩だけであったと思う。その後は今日まで踊ったことはない。

一九三七年五月末でブラ拓事務所を辞め、イニューマ区で百姓をはじめたのである。私にはやはり百姓が一番生き甲斐があったのであった。

私がイニューマ区に帰ってから、お隣の高橋さんの土地二十アルケールを買い、足して三十アルケールとなったのである。

当時父は五十五才になっていたが、前年に胃潰瘍を患い、重労働はできない身体となっていた。その頃である、イニューマ区に老友会が結成されたので、父も入会を勧められて参加したのであった。五十五才の老人ということは今では考えられないことである。

姉は他家に嫁いでおり、兄徳郎は弱い体で片目は全然見えなかった。

私は十九才であったが人並み以上体格も良いし、いくら働いても翌日まで疲れが残ることはなかった。弟良治は十五才になって、結構一人前の仕事ができるようになり、妹は十三才、十一才、八才と三人いたので、母が野良仕事に出ても女の子等で食事の支度が間に合うので、一家心をそろえて仕事に励むことができる時期となっていた。そんな時代が十年程続いたのであった。だがその間に大豊作というのは唯一回であった。

天候不順並びに害虫など、そして肥料なしの連作のせいで生育がわるく、思うようにはならなかった。

父はそんな具合であったので、病気が回復してからはお隣のお爺さんの国武信彰さんと一緒にチエテ河に魚釣りの毎日となったのであった。

その頃である、七メートルもある大蛇と出会い、鉄砲で打ち殺したところ、鰐をのんでいたという。

国武信彰氏は福岡県出身の方で、慶応大学出であり誠に立派な方で、どこに出してもひけをとらない人物であった。奥さんも上品な方で、こんなところでエンシャーダを引く人ではなかったと思われるのであった。

国武さんの家には養子として憲七さんが居られた。私より二才上の当時二十一才で、朝早くから水汲み使い走りなど、感心するほど働いて居られた。芯が丈夫であったのであろう。憲七さんとの付き合いは国武さんが移転される一九五三年までの十六年間よいお隣で過ごしたのであった。

その間に青年団の陸上競技ではいつも共に出場していたし、その後パラナ州のピウナに移転されてから、一度憲七さんの家を訪問したことがある。それは雨の降る日であった。楽しい一晩を共に過ごして帰ってきたのであった。当時彼らはカフェーを植えて二年目とのことであった。その後私たちがサンジョゼ・ドス・カンポスに移ってから彼らも移転されて、ゲート・ボール大会で時々会うことがある。この憲七さんは全伯ゲート・ボール審判員二級として七十九才の齢であるのに頑張っておられる。

今年のチエテ郷土会第二十二回にも出席され、私と会ったのである。

憲七さんとの付き合いは何処までも続くのである。

国武信彰さんが亡くなられたのはモジの田尻さんの家であった。当時奥さんは元気で居られたので、私と家内でお悔やみに上がったのであった。その時奥さんは一言「人の一生ってあっけないものですね」と言われた。その後田尻さんからの話では奥さんも後を追うように亡くなられたとのことである。田尻さんは国武さんの親戚になる方で、国武さんは最高学府を出られているのに、夢を追っているような話ばかりで、本当は進む道を誤ったのであると断言された。だが原始林時代に好きな魚釣りができたのがせめてもの生き甲斐であったかも知れない。

この国武さんの土地は、私たちの土地の地続きで、チエテ河沿岸までの七十アルケール位の土地であった。実際に耕作できるところはその半分もあったか、後はブレジョンになって、川岸は高くなっていた。その沿岸の長さは二キロもあったので、チエテ河そのものが自分の河であり、ブレジョンがあるので他所の人はめったに行くことはなかった。その釣場には氏が山から大木を切って堀りぬいたカノアを浮かべ、ペスカ三昧に耽っておられたのであった。私の父も共に釣りを楽しんだことであろう。大公望で他人にはわからない極楽があったのだ。

一九九六年一一月記

思い出で綴るチエテ

田中　秋好

チエテ移住地、今ではペレイラ・バレットと呼ばれているが、チエテ移住地と言うほうが我々にはやはりピンと心に響いてくる。

四十四日の長い船旅を終え、やっとサントスに上陸し、火の粉を吹きながら走る時代遅れの汽車に驚きながら、数十時間後に着いたのがルッサンビーラ駅だった。「ヤレヤレ着いたか」と一安心したのもつかの間、汽車から今度はトラックに乗り換えて、あのチエテ大橋をわたり、さらに三十キロメートルの奥地にそのトラックは進んで行ったわけだが、行くにしたがってだんだん道は悪くなる。あたりの風景も日本で見たこともないような奇異な感じで、次第に心細くなってくる。

ベラフロレスタ（第二市街地）は町とは名ばかりで、戸数は二、三十軒しかなかった。それを過ぎて更に五キロ程行ったところが我々の目的地だ。一先ず一、二年前に入植している人達の住む一画にある、バラック建ての粗末な二棟の収容所に落ち着く。その地は東アレグレ区の真向かいにあたり、川一つ隔てたやがて我々が入植することになる地が一望に見渡せた。

私たちは愛媛団という、当時でも珍しいといわれた、全員が同村出身で二十四家族の集団であった。

前方に見える入植予定地は、見渡すかぎりの原始林で、恐ろしいような感じだった。勿論そのころには山伐りの下準備は始まっていたらしいが、各家族が実際にそこに移るのには、未だ相当な

日数が必要らしかった。六月に収容所生活がはじまり、九月ころになって引っ越しが開始されたのだから、大抵の家族が三カ月あまりは共同の生活だった。

別にその集団が利用するための井戸などはなく、毎日使用する水は程近いところを流れている小川の水だった。周囲がまだ広く開墾されていなかったし、川の両側にはある程度の木々も茂っていたので、川の水は透き通っているし、冷たかった。人々は皆、川から水を汲んできてその水を利用していた。「生水は決して飲まないように」と、ある先輩の移住者が教えてくれたのに、暑さからくる喉の渇きにくわえ、あまりにも流れている水が清冽だったのとで、次第に先輩の言った忠告も忘れ、その生水を飲むようになった。

やがて数人の幼児が、その水の犠牲となった。引き続いて次々と被害者が出るようになり、航海の中船酔いなどで体の弱り切っていた私の母も病に冒され、あたら三十七才という若さで、着伯三カ月たらずで帰らぬ人となった。私が未だ九才の時であった。

あとで聞いた話だが、日本を出る前に母は、「ブラジルへ行くのは嫌だいやだ」と反対し続けたという。ほかにも松本という人の奥さんもブラジルへ行くのを「嫌だいやだ」と反対し続けたが、主人、子供達が行くのに一人だけ残るわけにもいかなくて、はるばるブラジルまで来て、私の母同様数カ月後にあの世へ旅立っている。結局わざわざブラジルまで死ぬために来たやうなものだった。

とにかく三カ月の収容所生活で、十人をこえる人達が亡くなっている。

当時の家族をもつ親たちが、どんな複雑な気持ちで過ごしたかが

想像できよう。
　そうした悲しいことが次々に起こる中で、学齢期にある子供達は四キロも五キロも離れたベラフロレスタの学校まで朝早く起きて弁当をもち、勉強に通ったものだ。午前中は日本語、午後からはブラジル語と二つの国の言葉を覚えるために・・・。
　私のクラスには榛葉令人がいた。彼は榛葉彦平氏の息子で、彦平氏はブラジル移民初期のころ、平野植民地を創った平野運平氏の弟になる。
　楽しいことより苦しいことの方が多かったベラフロレスタの学校通いの明け暮れも、収容所生活が終わって、それぞれの家族が新開地のアレグレ区へ移ることによって、すべて終わった。ご承知のようにアレグレ区は西と東に別れている。私たちの入ったのは東アレグレで、収容所のあったジュリア・アウグスタの向い側である。西アレグレと比べれば、若干ベラフロレスタ町が近いことと、真向かいのジュリア・アウグスタ区がだいぶん拓かれていたので、目をさえぎるものも少なく、広々としていた。
　だが西アレグレの方は大分ようすが違っていたように思う。その西と東の接合点にあたる場所に、子供達の学ぶ小学校があった。
　人数は三十人たらずだったと思うが、我々は原始林のなかの、やっと車が一台通れる幅の道を歩いて、毎日通ったものである。ある朝は象の足跡のような大きな足跡にビックリしたり、大風が吹いてきたかと間違えるような猿の大群の移動するのに呆然となったり、馴れるまでは毎日がひやひやの連続であった。
　然し森の中の道を通うというのは、そう悪いことばかりではない。

ジャボチカーバの実の熟れるころは、我々はこれを山ブドウと呼んで、それこそ腹が張り裂けそうになるほど皆で食べたものだ。最初のうちは種を出して食べていたが、そんなことをしていては捗らない。誰いうとなく「おい、こうして食べれば簡単だぞ」と教えてくれたのは、種も皮もとらず、いきなり口の中にほうり込んで飲み下す。成程それだと次々にいくらでも食べられる。それこそ妊娠五カ月位に腹を膨らして、そのうえ本や帳面の入っているカバンを空にし、その中に入るだけジャボチカーバを押し込んで、フウフウ言いながら帰ってきたものだ。熟れているとはいえ、木についている間の実には、まだ青みがあり渋味がある。

友人のK君は、そんな実を腹一杯食べたのはいいが、家に帰ってから一騒動おこした。便意を催し、便所に入ったきり出てこず、オイオイと大きな声で泣いている。「どうしたか？　」と家のものが尋ねたら、「ウンチが出ないよ！　」と泣いていたわけだ。種ごと大量に食べたので、糞詰まりを起こしたのだ。笑うにも笑えない悲劇だった。

　チエテで暮らしたのは、後にも先にも渡伯後の三年だけ、それもまだ小学生の年齢で十二才までだった。勿論その三年間はずっと通学生活だったが、一旦家に帰れば「学生だよ」と威張ってはおられなかった。

あの当時の農業は、どこの家も棉作であった。家族に働き手が十分あろうがあるまいが、どこの家でも今の農業のように、必要に応じてカマラーダを使うようなことはなかった。規模も小さなものではあったが、植え付けから収穫まで、全部家族だけで片付けるしかなかった。いきおい使えるものは猫の手でも・・・、だっ

たと思う。

私たちも学校から帰るとすぐに畑へ行って、ある時はエンシャーダを握って草取り、ある時は噴霧器に少量の消毒液を入れて棉の消毒、収穫期に入ればいうまでもなく棉摘み、日曜でも家で休ませてもらうようなことは一日としてなかった。毎日がそうであったから、子供であるし辛いとか苦しいと言って逃げるのが当然だと思うが、逃げた覚えはない。

五年か長くて十年を目標にして、はるばる地球の反対側まで出稼ぎにきた父母等にしてみれば、「出るものは少しでも減らし、入るものはより多く」と考えたのも無理はなかったであろう。

いつの時代にも人間には夢があるように、今から見れば苦難続きのように見える当時の移民たちにも、やはりそれなりの夢はかけられていたのだ。不足していたのはこの大きな国での、実際の農法と経験、加えて適切な指導者だった。着伯後、最初に罹かったアメーバとマラリヤへの恐怖、苦労して山を拓き種を蒔き、やっと収穫してみれば一俵の籾が空サッコより安いという理解できない値段。これで夢が消えなかったとしたら、その方がどうかしているだろう。

我々は子供であったが、そうした悲惨な運命に弄ばれて、悲嘆のドン底へほうり込まれ、五年どころか十年でさえ、到底達成不可能の夢に破れて、帰るところも行くところもなくなった当時の親たちの心境を思い出すとき、胸は裂けるように痛んでくる。

ともあれ、ブラジルに行けば、いたる所に金のなる木が生えているような甘い宣伝に乗せられて、緑の地獄へ送り込まれた移民たちの、これが当然辿るべき運命だったと思う。悔やんでも後の

祭りだった。

事業方面の外にもいろいろと食い違いや思惑外れがあって、入植者たちを泣かせることになったようだが、追い詰められると肚が据わるようで、西と東に別れているアレグレ区が一体となり、自治体をつくり始めた。家族数では両者あわせて五十家族位だったろうと思う。

自治体内でいろいろな話し合いがなされたと思うが、詳しいことは知らない。私の覚えていることは、年に一回運動会が催されたり、演芸会のあったことだ。たしか一九三五年の四月二十九日、当時の天長節の晩に行われたと思う演芸会(当時は芝居と言った)は、志津野与善夫氏が主演ではじまった。「果てしなき涙」だった。私は昼の運動会から居残って、ずっと最後まで志津野氏の熱演を食い入るようにして見入ったものだが、四月の終わりとはいえ夜になるとやはり冷える。半袖のシャツに半ズボンだけの身には、寒さがゾクゾクこたえて、歯をガチガチ鳴らしながらその劇の終わるまでじっと座っていたことが忘れられない。外題が「果てしなき涙」だったように、見る者らもおそらく皆泣かされたものだった。この夜の芝居が、今日に至るまでに見た芝居の中で、最高によかった。今でも忘れることはできない。志津野氏、今健在ならもう八十才位かと思う。好漢百才までも生を保たれよ。かつての子供の日、アレグレ区での懐かしい思い出の一夜であった。

一九九六年十一月記

望郷

浦　旗　都家子

哀愁の余韻の遺る「湖底の古里」第二の故郷チエテ移住地は「瞼の母」の番場の忠太郎ではないが、目を閉じると今でも懐かしい姿を見せてくれる。あの、カンカン照りつける太陽の下の灼けつくような砂道さえも、消えがたい夢のように目裏に生き続けている。

一九二〇年五月二十三日に父、和田国一、母サト子の次女として香川県仲多度郡榎井村蔵中（現琴平町）に生まれ、一九三四年五月二日、養母及び実兄、和田進の家族の一員として「らぷらた丸」でサントスに入港し、税関で検査の後、収容所には入らずカンピーナスを経由、一路ルッサンビーラ駅に直行した。

兄の長男、英樹はらぷらた丸の船内で初誕生を祝ったばかりで、船内で流行っていたハシカに感染し、下船のおりにも全快していないのでチエテ移住地に着くと早速入院、兄嫁と私が付き添いのため病院に残った。

私たち一家の入植予定地は第二市街地のベラフロレスタ近郊にあるアレグレ区であるが。その当時の同地方にはマラリアが猛威を振るい、発病者の中には死亡する人まで出たので、ウニオン区に住む一九二九年から三〇年にかけて入植していた同郷の香川県人の有志がブラ拓と呼んでいた「ブラジル拓殖組合」の事務所と交渉し、香川県出身の四家族だけが、ウニオン区に入植するようになった。

家族の多い私達の一家には、寺村さんご夫婦の好意で新築間も

ない広々とした養蚕室が仮の宿として用意されて、西も東も分からぬ私達はこの寺村さん一家の外、増田、工藤、今田、真砂さんたちご一家のお世話になり、入植の第一歩をこの地に記した。今其のころのことを思い出すと温かいものが込み上げてくる。遅ればせながらこの大切な紙面をお借りして皆さん方のご冥福を衷心よりお祈りしたい。

私の一家は最年長の養母でさえも、三十八才の若さであり、兄の進が二十四才、兄嫁の孝子と後に私と結婚した重敏が同年の二十二才、その他姉が十九才、私が十四才に兄が日本で父の支店を開けていたときに働いていた川西青年が二十一才と、若者揃いで手がかかるのは甥の英樹だけという、誠に恵まれた家庭であるが、実際に鍬をもって働いた者は一人もなく、農家に生まれた主人も製糸工場や鐘紡で働いていたので、気候風土の違うブラジルの農業は大変だったと思う。

働き手の少ない家なら、私も畑仕事に従事したと思うが、生来虚弱であったため家事の手伝いや畑への弁当運びの他、英樹の子守りなどが毎日の仕事であった。

話が前後したが私達は間もなく同郷の明知さんの土地十アルケールを購入し、そこに移転した。そこには既にルビーの様に真紅に輝くコーヒーの実がびっしり付いていた。二アルケールのコーヒー園があり、宅地には各種のバナナやパイナップルも沢山植わっていたので、入植当時から果物に恵まれた生活ができた。

またこの土地はこの付近で一番の低地であるせいか、家の宅地に共同井戸があり、水運びの苦労はあまりせずにすんだ。

この地帯に住む十数家族の家では天秤棒に二個の石油空缶を吊

り下げ、朝晩水汲みに来ていたが畑仕事のあとの水汲みは大変だろうと思った。
しかし水を汲み上げる順を待つ間に交わす雑談は、一日の疲れも忘れるような一時であったらしく、笑い声の交じった声が夕焼けの中で明るく弾んでいた。
この井戸は湧水量が多く、これだけの家族が汲み上げても滅多に、濁ったことはない。
道を隔てた向かいは和歌山県人の佐藤さん、左隣は広島県人の佐東さんで、家は違うが呼び名は同じなので、誰言うとなく顔や肌色で白ザトウさん、黒ザトウさんと陰で呼んでいたことを思い出す。
その後コーヒーが大霜にあった上に、政府の植付制限などのため、折角残っていたコーヒーもすべて切り払い棉作に転じたが、コーヒー園後や原始林を伐って植えた棉も、砂地の痩せ地のせいか収穫も思わしくなかった。
私達は結婚後、一年ばかりで生まれた長男一成と共に、香川さんの隣に移転した。
今まで、大勢の家族と同居して賑やかに暮らしていた生活から、急に家族三人になったので寂しくはあったが、一面、希望のある独立生活はまた、楽しくもあった。
姉も結婚し、川西青年も独立したので兄は農業に見切りをつけ、私達に跡を任せて、イニューマ区の堀川さんの家を借り、商売を始めた。
跡を引き受けた主人も、この土地の将来性のないことで、思い

切って反対側のラランジャアゼーダ（パース区）に移り棉作を始めたが、ここも大したことがなく、増田さんの近くで養蚕を一年間することになったが、この時には増田さんのご一家にお世話になった。

パース区の隣の工藤さんも同県人で、香川さんの一家同様、隣家として大変お世話になり、思い出も沢山残っている。

その後、兄と共同でベラフロレスタ近郊のアレグレ区にある塚本さんの土地二十アルケールを購入し、常雇いのペルナンブッコ生まれのジョゼーの他、バイヤーノ、ミネイロ、セアレンソなどの伯人コロノも六家族入れ、近隣の土地まで借りて棉作をはじめ、牧場にも牛や馬を入れ、鶏や豚も飼って頑張った。

この土地は昔、私達がチエテに到着したおりの入植予定地に近く、同航者の稲垣さん一家が住んでいて、巡り合わせの不思議さに驚いたものである。

右隣は戦争中、預金を凍結された一家が全員服毒自殺した土地で、遥かな高台には一家の廃屋が見えるので、いたわしい思いに混じって不気味な感情が湧いたものだった。

左隣は田辺さんのご一家で、時々叔父さんという人が来ていたが、ノーボ・オリエンテ橋の工事監督で俳人の木村圭石師のもとで働いているとかで、圭石氏を囲む句会に出席していたらしいが、その当時の私は子育てに追われ、外出もままならぬ時代でもあり、そうした文芸の集いの話を聞いても興味はなかった。

後年、マリリアに移り一九六一年から俳句をはじめ、その後創作にも手を染めていたので武本由夫先生の知遇を得、「コロニア文学」（現、コロニア詩文会）に創立と同時に入会して今日に至って

いるが、その関係で当時パウリスタ新聞の編集長をしていた木村圭石師の御子息義臣さんとは「コロニア文学」の集会などで何度か席を同じくしていたし、後年、逝去されてからは「ブラジル俳人協会」主催で「圭石忌句会」が毎年六月に、アルジャーの日本カントリークラブ内の日本荘で「闇汁会」の呼称で催されていた頃、句会に参加いていたが、これも何か目に見えぬ一本の細い糸が、あのチエテ在住時代から繋がっているように思える。

アレグレ区では一成がグルッポに入学し、パース区で生まれた長女慶子の他に次男光敏（死後出生）、アレグレで次女千鶴子、三女ミドリが出生したが、一成が一五才の時、養母の強い要請で、せっかく頑張っていた農業を諦めマリリア市に移転することになったけれども、哀しい終戦は当地に在住中に迎えた。

コロノたちとは親しくし、病人の出たおりの手助けや夫婦喧嘩の仲裁までしてきた仲であるが、日本が勝って攻めてくるとの流言を信じたコロノの一部は、態度を急変し不穏な空気まで漂いはじめた。

また、ベラフロレスタの警察の者だと、屈強な男を連れて入り込み、目ぼしい品を物色して意気揚々と帰っていった折、それらを見ていた一部のコロノが明らさまに勝ち誇ったようすを見せたので、ふだん、どんなに親しくしていても、いざとなると敵国人として反発してくるのを知り、私たちは彼らにたいして白けた気分になるのを、どう仕様もなかった。

とにかく、当時チエテに在住した人々は大なり小なりこうした嫌な、辛い思い出があると思うが、その反面、チエテ橋が竣工され、それに続く祝祭の数々は、家庭的な哀歓や苦渋に負けそうに

なった思い出を別にして、チエテの思い出のなかで最も大きな比重占めるのではないかと思う。

渡伯当時の郷愁を癒すためにも本好きな兄たちは、毎月「キング」や婦人雑誌などを購入し畑の昼食後や夕飯のあとの、くつろいだ時に兄が小説を声を出して読む習慣があり、聞く方が望舞の念に浸って黙々と聞き入っていた。

また主人が頼まれて日曜毎に、蓄音機とレコードの入ったケースを馬に積んで、知人の家を慰問していたことがある。

あの当時、渡伯四、五年目の人達は娯楽に飢えていたので、兄のもって来た流行歌や、泉詩朗の映画説明、寿寿木米若、広沢寅造の浪花節など、ケース五個に詰まった新しいレコードの数々は、現在のテレビを見る以上に楽しみとしていたようで、主人も折角の休日を犠牲にして喜んで出掛けていた。

また、開拓地生活の無聊を慰めるために麻雀やパイまでもって来ていたので、多忙でない日曜日や大雨の日など、近所に住む徳永さんや小田島さん、肥田さんたちも招んで休日の一日をくつろいでいた。イニューマで開業していた兄は、その後ペレイラ・バレットに移り「カーザ・ソール」の店を開けた。坂出商業を出た兄だが生来の無愛想と口べたにもかかわらず、真面目な性格が信用されたようで堅実に伸びまた、文化協会などの役員にも推され、子女にも恵まれたが義姉が出産後の出血多量で急逝、遺された男の子は生後すぐに私が預かったが、その頃町内に流行していたハシカにかかり死亡するなど、不幸も続いた。

チエテの入植記念日には兄から毎年、来るように誘われていたが、八月は例年俳句大会や家庭の都合で一度も行かれず仕舞いに

なってしまったのが、返す返すも残念である。
兄は、一九八五年十月十五日に、愛し続けたチエテで死亡、葬儀は文化体育協会葬として人生の最後を飾って頂いたが、参列して頂いた人の中には、私の知人も居られて懐かしい思いに駆られたが、葬式という人生で最も厳しい儀式の中なので、声をかける刻もなかったのが悔やまれる。
チエテ橋やルッサンビーラ駅など、思い出の多い場所は湖底に沈んでしまったが、ペレイラ・バレットは牧畜を主産業として繁栄している上に、良い牛の産地として評判が高い。
それを裏付けるように、現在視聴率一位のＴＶグローボ局のドラマＲｅｉｄｏ　Ｇａｄｏ　の劇中で、主演のアントニオ・ファグンデスが、ペレイラ・バレットへ牛を買いにゆくシーンがあったが、見ていた私には勿論、十五才までチエテで生まれ育った一成も多いに誇らしく思いながら見たものだった。
予定の紙数も尽きたのでこの稿を終わるが、最後に、知人を含めた、すべてのチエテ在住の皆さんに敬意を表し、チエテの益々の繁栄と、皆さんの健康と幸福をいのり、ペンをおく。

サント・アンドレー教会の思い出

岡　井　二　郎

ペレイラ・バレットのサント・アンドレー教会はキリスト教ブラジル聖公会に属し、米系アングリカーナ派である。

その沿革は古く、一九三四年、伊藤八十二及び島貫武男両牧師によって、当時のブラ拓から、現在のアラゴアス街とプルデンテ・デ・モラエス街角に教会建設用地として、縦四〇メートル、横二〇メートルの土地が購入せられたのに始まる。

五年後の一九三九年、弓場繁牧師司式の下に、教会建設の地鎮式が行われ、ここに正式に教会としての福音活動が始められた。

当時の主な信者としては、輪湖、横山両氏一族の外に、白井、安斉、小田島、菅井、坂本、小田、山田氏などがあった。

続いて翌一九四〇年九月に第一回の聖公会婦人会、そして一二月にＵＩＭＥ（青年会）が催され、日曜学校も開設されるようになった。

当時、若い神学校出の弓場司祭は、このチエテ教会の外に、アリアンサにも受け持って居られたので、その往復の道のりが大変だったらしく、最初は専ら馬で、後にはフォード二六年型のカミニョネッテ（シャランガと呼ばれていた）で伝導に当たって居られたが、なにしろ当時の悪路である、牧師は信者の誰彼を捕まえては、よくユーモアたっぷりに、「いやー、このシャランガは実に大したものですよ。やはり多少神様の息が掛かっていると見え、道の悪いところへ来て、これは悪い、こっちへはまり込まねば良いが、あっちの縁なら助かるかも知れないがと思って、一心にお祈りしながら突っ込んでゆくと、不思議と無事に突破できるものなんですよ」と言われた。

たまたま、北米の聖公会本部からメルシェル監督が見えられた時など、この小さいカミニョネッテに苦労の末、やっとこさ、あ

の並外れた巨体を乗り込ませた時など、車体がぐらっとかしいで、見送りの皆の者から「大丈夫ですか」と気遣われたものだった。

又その頃のことであったろうか、ある時、グワインベー教会の小野牧師が、弓場牧師へ栗毛の駒一頭進呈された。ところが弓場牧師にはそれを受け取りに行く暇が無い。それを知った小野牧師はその馬を引いて、信者の一人であった野原四郎氏と共に、何とグワインベーからチエテまでの延々三〇〇キロメートルを一週間かかって到着したと言う。

これこそ神父間の真のプレゼンテであったろう。

さてこの小野健三牧師のことであるが、彼は当時、一風変わった方法で教会を運営していた。大分以前から教会の経済的自立を目指して、農牧業を基にした耕地の経営に腐心していた。即ちこの牧師の影響もあったのであろうか、このグワインベーのアスセンソン教会の援助の下に、サント・アンドレー教会も一九四二年、やはり教会の経済的自立を目論んで、チエテ河右畔のバーロ・プレートに五〇アルケールの土地を購入した。何しろ皆若かった。その上日米戦争で国粋精神が高揚されていたものと見え、例え宗教界に国境はないとは言え、敵側からの金で我が教会が賄って行かねばならないなんて不甲斐ない。ここは是が非でも自給自足に持ち込まねばならないとばかり、ＵＭＥの連中が総動員して、各日曜毎に新たに買ったシチオに出動して、煉瓦工場を作り上げ、そこで幾千、幾万の煉瓦を焼いたまではよかったが、しばらくして、マレイタに罹るものが続出して、せっかくのこの計画も取りやめとなった。

この時、この教会の企画に共鳴したラランジャ・アゼーダの青

年クラブが二頭の牝牛を寄付してくれたと言う。

この時分、既に戦時体制下にあって、日語集会は禁じられていたので、日曜毎の礼拝も各信者の家庭で個別的に行った。又この時、何かの嫌疑からか、このチエテから信者の輪湖俊午郎氏とグワインベーのアスセンソン教会の主任牧師、小野健三氏が捕らわれ、共にサンパウロの元移民収容所に監禁せられた。後年、この二人は殆ど時を前後して、即ち小野牧師は一九六四年に、輪湖氏は一九六五年に死亡され、奇しくもそのお墓まで隣同士になって向かい合っている。

この小野健三牧師は、去る一九五七年、チエテからサンパウロのサンジョアン教会へ転任せられた弓場繁牧師の後任として、一九五九年二月、グワインベーのアスセンソン教会からサント・アンドレー教会へ移ってこられた。前牧師が才能の人であるとすれば、この新牧師は人格の人であると言うことができた。少年時代から苦難と共に生きた氏だけあって、他人の苦労が身にしみて分かり、又その誠実重厚な人柄は、多くの人を引き付けずにはおかなかった。氏は大の馬好きであると共に、家畜に対する知識はすばらしく、大方の獣医など足元にも及ばなかったと言われる。

兎に角こうして、サント・アンドレー教会は小野牧師が着任されてからというもの、まるで魚が水を得たごとく、溌剌とした空気が漲って各人各所の任務が定まり、牧師夫人は日曜学校を、息女のドーナ・アンナは幼稚園を、横山治氏は教会の会計を、そして輪湖ジョージ氏は信者総代兼ＵＭＥ指導などと、かつて今までになかった程の活発な教会活動が行われ、一時は日曜学校の生徒出席数が一八〇名に達するなど、特に新しい幼稚園の落成した一

九六一年から、小野牧師が亡くなられた一九六四年までの、数年間というもの、ここの教会の黄金時代であったような気がする。

この時分のことである。復活祭を迎えると、日曜学校の生徒達を引率して輪湖ジョージ氏が郊外の氏のシチオへ連れて行き、ペローバの大木の涼しい森の中で、その日の祝典の行事が終わると、余興に子供達のパスコアのオーボ捜しが始まるのだった。

これは前もって幾ばくかの大小様々のボンボンのオーボを方々の叢やトッコの穴などに隠しておき、それを最初に見つけ出した者がこれを得るというものだったが、時にはこれらの最後の一個まで捜し出すまでには、相当な時間がかかることもあって、結構これが一つの楽しみになるのであった。

ＵＭＥの連中には、輪湖彰氏運転のカミニョンで、アリアンサの弓場農場や新生農場などの見学に連れだすこともあった。

又ナタール前夜は幼稚園、日曜学校の生徒にＵＭＥの連中まで加わって、賑やかにキリスト降誕祝賀劇が催されたものだ。この終演間際になると、上手にババイ・ノエールに扮した輪湖ジョージ氏が、巨大な袋を肩に、よろめきよろめき、舞台に現れ、満堂の割れんばかりの拍手喝采の中で、サンタクロースのゼスチュアよろしく、その日の挨拶を述べ最後におもむろに、担いできた袋の中からプレゼンテを取り出し、皆に配ることで閉会になるのであった。

この日には、必ずといってよい程、信者の中で一番年長者たる高橋福蔵氏が八〇歳にもなりながら、元気よくバイオリンで「清しこの夜」の曲を一心に奏でて皆を感激させるのだった。このお爺さんは、昼間は時分のシチオで穫れる果物を、ブーロの引くカ

ロッサに積んで、町の通りをゆっくり、ゆっくり売って歩くのが日課だったが、それを見たルアの悪童共が時々カロッサの後方からよじ上り、蜜柑やバナナを失敬して行くのだが、気配でそれと知ったお爺さんは、大して気にもとめず、時々「コラッ、駄目だぞっ」と日本語でカロッサの上から怒鳴る程度で、別に振り向きもせず、そのままブーロを急がし続けるのだった。

爾来、星霜幾十年、サント・アンドレー教会に関する思い出は尽きることがないが、これらの成果は皆、多年この教会のグァルヂオン（お守り役）としての尽力を続けてこられた輪湖ジョージ氏に負うところが多い。教会発足当初から会計の横山治氏とタイアップして信者代表として、又日曜学校やＵＭＥの指導者として、何十年間、教会のあらゆる問題に対処してこられた氏の努力は誠に畏敬に値するものがある。

又教会の万年会計としての横山治氏並びに、一九五九年以来、教会の幼稚園の先生を続けてこられた小野アンナ女史の間断なき努力など、これらの人々の面影は、教会発足当時からの婦人会の方々の並々ならぬ尽力と相俟って、決してこのサント・アンドレー教会史から拭い去ることが出来ないものである。恐らく、この人達が居なかったら、今日のサント・アンドレー教会は存在し得なかったに違いない。

現在、各方面の社会で立派に活躍している二世、三世の中のある者は、時々サント・アンドレー教会を思い起こすことがあるであろう。そして往時の幼稚園、日曜学校やＵＭＥ時代のことを懐かしむと同時に、如何にあの当時、ジョージ先生やアンナ先生の感化を受けて育ったかに思い至るであろう。

その数は全体から見れば大きいとは言えないかも知れない。けれども、この教会が今までに、チエテ人社会に直接、間接及ぼして来た影響は、決してそう小さいものではないと思うのである。

又最近、聞くところによると、これは教会とは別運動ではあるが、三年位前から、輪湖五月女史を先頭に、当教会婦人会の会員たちで「めぐみ会」なるものを組織し、主に六〇才以上の老女たちを相手に、その福祉、教養、娯楽の向上に少なからざる活躍をしていると言う。

（一九九七年一月記）

サント・アンドレー教会史年表

一九三四年　伊藤八十二及び島貫武男両牧師によって、教会建設用地として、ブラ拓から２０×４０メートルの土地、現在の場所に購入せられる。

九三九年一一月三〇日　弓場司祭の下に、教会建設を目指してその地鎮式が行われる。

一九四〇年三月一八日　サント・アンドレー教会の上棟式が弓司祭によって執り行われる。

一九四〇年九月　サント・アンドレー教会婦人会が組織される。

一九四〇年一二月　ＵＭＥ(聖公会青年会)結成せられる。

一九四八年九月一九日　教区新監督、ルイス・チェスター・メルシェル司教の当教会第一回訪問が行われる。

一九五二年七月二四日　新教会建設の為の地鎮式、ルイス・

チェスター・メルシェル監督によって執り行われる。
一九五七年九月二七日　当教会弓場主任牧師はサンパウロのサンジョアン教会へ転任せられる。
一九五九年一月二五日　新監督エドムンド・ノックス・シェリル司教の第一回訪問受ける。
一九五九年二月五日　小野健三新司祭、グァインベーのアスセンソン教会より移転して来られ、当教会の主任牧師として着任せられる。
一九六一年一二月八日　新幼稚園校舎完成される。
一九六四年一二月一日　小野健三司祭旅行中、脳溢血で死亡せられる。
一九六五年一〇月三〇日　松尾常男司祭、当教会の主任牧師として着任せられる。
一九六九年二月五日　松尾常男司祭、大司祭の命により、パラナのアプカラナ教会へ移転せられる。その後任として、アラサツーバのサント・エステバン教会のエニール・アルベス司祭が兼任せられることになる。
一九七一年一二月二二日　ハリー・ウィリャム・ハンセン牧師が全ノロエステ聖公会教区を受け持たれ、その住居をペレイラ・バレットに定められる。
一九七四年六月二九日　ハーリ・ウィリャム・ハンセン牧師一家帰国のため、送別会開かれる。
一九七五年一月三一日　ハーリ・ウィリャム・ハンセン牧師一家、八ヶ月ぶりに北米より戻られ、再び主任牧師として着任せられる。

ノーボ・オリエンテ橋

伊木　実信（岡井二郎訳）

一九八五年六月、この日は我が誇るべき、そして、愛すべきノーボ・オリエンテ橋竣工五〇周年記念にあたる。

私はこの町の最も古い住民の一人として、このことに就いて述べてみたいと思う。本当に語るとすれば、この橋の胸深くに抱かれている、数々の愛らしきロマンスや、その他の出来事、例えば、この付近で度々大きな魚を釣り上げたときの釣り好きたちの喜び、或いは何らかの理由でこの辺の流れで尊い人命を失ったときのその親戚や友人達の深い悲しみなどがあるが、さしずめこれらの感傷的なことは、他の誰か、小説本などの作者に譲ることにして、ここではごく現実的に、この橋の歴史を語ることにする。

初め、ブラジル拓殖組合（ブラ拓）によって、この広大な土地（郡内の重要分子となった四万六六九〇アルケーレスのチエテ耕地）の売買契約が締結されてからと言うもの、我が町の創立者たる梅谷光貞氏は、奥ノロエステと奥アララクワーラ地帯を繋ぎ、ひいてはマット・グロッソへ出る通路としてのアニェンビ河（現在のチエテ河）の渡河のことの必要性を絶えず、痛切に感じておられた。その時分、既にルッサンビーラに橋梁利用組合というものがあったが、これが公認許可のもとに、昔のルッサンビーラ駅前に粗末な木の橋を作りつつあったが、一九二九年から一九三〇年にかけて大水に持ちこたえることが出来ず、その残骸だけを河の左側に残して、あとは皆流されてしまった。

この組合はその時、運転中の古い一艘のバルサの外に、この河の左側に二アルケーレス、右側に一アルケール、合計三アルケーレスの土地を所有していたので、ブラ拓はこれら一切を一四〇コントス・デ・レイスで買い上げた。

当時の測量技師、中島一男氏（この町の創立者であると同時にノロエステ初期の開拓者の一人）の調査では、この場所は些細な増水でも、河の右側が全部浸水する恐れがあって、将来の橋建設地としては不向きであるという結論に達した。

その後、中島技師の綿密な調査の末、理想的な所を発見したのが現在のノーボ・オリエンテ橋の場所であった。ただ、ここへ到達するには、河沿いの湿地帯を通過する必要があり、その為、長さ一キロメートルに及ぶ埋立道路を建設せねばならなかった。この場所はミランダ・ロドルフォ氏の所有に属していたので、ブラ拓は彼から、その所有地全部か、若しくは一部の五〇〇アルケーレスを余儀なく買い取らねばならなかった。

そして終に、一九二九年、一一月一一日、この土地の売買が成立した。

これが現在のサン・ジョアキン耕地で、チエテ河の左岸に位置している。

そしてその年の一二月、ブラ拓は、当時アリアンサ耕地（ミランドポリス郡内）在住の木村貫一郎技師に、橋建設に関する仮設計及びその予算を依頼した。

木村技師は、長い間の研究と調査の末、次のごとき仮予算を提出した。

橋の形式　Ｃａｎｔｉｌｅｖｅｓ（吊り橋）
長さ　全長一六〇メートル（一三〇メートルの空間と両端各一五メートルの橋台）
高さ　二五メートル
耐久重量　一〇トン（後一二トンに変更）
幅　五メートル（後七．五メートルに変更）
建設費　一九六．四八〇$〇〇〇
機械類　三三四．〇〇〇$〇〇〇
機械設備費　二〇．〇〇〇$〇〇〇
人件費　四一九．五二〇$〇〇〇
雑費　三〇．〇〇〇$〇〇〇
合計　一．〇〇〇．〇〇〇$〇〇〇
即ち、一千コントス・デ・レイスであった。

然し最終的にはこの案は採用されず、結局建設請負会社の設計になる、鉄筋コンクリートのアーチ型の橋に確定され、予算も一千二〇〇コントス・デ・レイスに増額された。

そして、この最後の総額の三分の一、即ち四〇〇コントス・デ・レイスが州政府によって補助されるよう請願した。

この時分、既に橋の設計許可が申請してあったので、州政府はその建設場所が、果たして本当に適しているかどうかの調査団として、クロドミル・フェッロ氏一行を派遣し、この一行のＯＫを得たのが、一九三〇年、三月一〇日のことであった。

一九三〇年の六月には、ルッサンビーラから未来のノーボ・オリエンテ橋までの間の道路建設地の伐採が始められた。

一九三一年四月に、橋の建設請負業者の入札を行ったが、その結果、次の三通の密封した申し込みが届けられた。

A：　八六〇．〇〇〇$〇〇〇

B：一．二五〇．〇〇〇$〇〇〇

C：一．五〇〇．〇〇〇$〇〇〇

この時には未だ河を渡るのに、古いバルサが使用されていたが、一九三一年六月一四日、にブラ拓は、新ルッサンビーラ駅前に、新しいバルサを創設した。

橋の建設は種々な事情で遅れに遅れた。その主なものは、一九二九年から一九三〇年にかけて発生した、ブラジル国内の政治危機（ゼツリオ・バルガスの革命）が齎した経済的困難によるものであった。

然し、メンドンサ・リーマ大佐が交通長官の時（一九三一年）橋の建設が決定され、その時州政府は、北パラナ鉄道会社のウィリャム・レード技師に、橋についての再度の予算を問うたところ、その技師の予算は、かつてブラ拓が提出したものよりも、五割も多かった。そこで政府は、時のサンパウロ州の道路局長であった、アウグスト・ジュンケイラ技師にその意見を聞くと、氏は

「それは恐らく、レード技師の予算は、その材料に兎に角値の張る輸入材を五割以上も使用する所為ではないかと思う。もともと建設費の低減を図るには、鉄材を最小限度に止め、出来る限り、国産材で間に合わせることである」と忠告した。

リーマ交通長官の辞職後、フォンセッカ・テーレス氏がその後を引き継いだ。

時のブラ拓支配人だった矢崎節夫氏は、この新長官を相手に、間断無く連絡を取り続けた。そして終に、一九三二年六月一日、(護憲革命勃発前)一通の電報によって、はし建設の許可が伝えられ、地元の多くの住民たちを熱狂させた。

引き続いて、道路局とブラ拓の間に、橋及びルッサンビーラから橋までの六キロメートル(埋立地も含む)の道路建設に関する契約が締結されたが、この時政府は、この道路建設に対して、一〇〇コントス・デ・レイスの補助金を出すことを約した。

一九三二年の六月には、ノーボ・オリエンテ町(ペレイラ・バレット)から橋の建設場(チエテ河の右側)までの道路が出来上がっていた。

約束の条項の一つに次の条件があった。

「ブラジル拓殖組合は、ルッサンビーラ〜ノーボ・オリエンテ町の十キロメートルの道路並びに橋の建設の義務を負うものとする。また建設終了後、これらは一切サンパウロ州に譲渡され、州道に変換せられるものとする」。

また州政府はこの時、この橋の建設に関して、金四〇〇コントス・デ・レイスの補助を与えることを約した。

護憲革命の始まる直前の七月初め、ブラ拓は、以前に一千二五〇コントス・デ・レイスの金額で申し込んで来た、ナショナル建築会社と橋設計に関する契約を交わした。

この選択は次の理由からであった。

一、本社がリオ・デ・ジャネイロに、支店がサンパウロ市にあって、誠実堅固な会社であった上、橋梁や道路の建設に長年の経験を有し、とくにコンクリート工事に卓越していた。

二、橋建設に要する装備や機械類を十分に所有していた。
三、財政的にも堅実であった。
これを見るに、ブラ拓は単に値段のみにその基準を置いたのではなく、前記のように、あらゆる角度から検討したものと見えた。
橋の建設期間は初め一四ケ月と決めてあったが、種々の予期せざる事態が起こり、例えば一九三二年の護憲革命に伴う財政困難、大雨での河の両側の浸水による四ケ月の工事の停滞、その他、基礎工事地中からの予想外の厚い岩盤層の出現、などが災いして、工事は困難を極めたが、終に二六ケ月後の一九三四年一一月の末、多大の犠牲と苦労の賜物としてここに目出度く完成した。
然しこの時点で、州政府の言い分として、この工事完成の暁は州道として道幅が広くなくてはならないにも拘わらず、その時の道幅は僅か四メートル半であったので、車の相互交通には不十分であるという理由で、道路幅の拡張を要求してきた。
なにしろトラットールの無かった時代である。工事はすべて馬とカロッサによって行われ、翌年、即ち、一九三五年六月二五日までかかった。
そして終に、同年六月二六日、この偉大な工事の落成式並びに譲渡式が挙行された。
橋の竣工祝は、町の創立記念日に先行して、四日間にわたって行われた。
この日、宮坂国人氏はブラジル拓殖組合の責任者として、会社の名の下に、非常な満足と誉をもって州政府にこの工事の落成を告げると同時に寄贈を宣言した。
時の州統領、アルマンド・サーレス・オリベイラ氏の代表とし

て、アントニオ・レイチ長官は、州政府の名において、ブラジル拓殖組合のこの度の業績を称賛し、その苦労を犒った。

この日から件のノーボ・オリエンテ橋とそれに付随した道路はサンパウロ州に帰属することになり、その管理はジャイメ・エンリッケ・ピント・ジュニオル　(故ジャイモン)氏に委任せられた。

故田口耕三氏は橋について次のように述べた。

「この技術の権化とも言うべき橋は、この地方の開拓初期から、ノロエステとアララクワーラ地帯を結ぶ重要なる楔の役を果たしてきたので、時の経過と共にその功績は益々顕著なものがある。この橋の建設計画は一九三〇年の三月、即ちその場所が選定せられた時に確認されたが、その工事は一九三二年一〇月一五日から始まり、一九三五年の六月に竣工した。橋の落成式は同月の二六日、カペラ・ド・ボン・ジェズースと名付けられ、未だに存在する我が町最古の教会の竣工式と同時に行われた。祝典には州政府高官、その他多数の来訪者が出席した。

まことに、当時にとっては、ノーボ・オリエンテ橋の完成は、ラテン・アメリカのコンクリート業界での驚異的な出来事の一つであった。

この難事業を一九三二年一〇月一五日から一九三五年六月二五日までの、比較的短期間に仕上げたブラ拓の苦労は如何ばかりであったか、つくづく思いやられるものがある。

その上、建築費の幾分かは補助として、州政府が出してくれたものの、他の大部分の費用は、責任者としてのブラ拓の負担であった。」

この鉄筋コンクリートで出来た橋は、河幅一杯に、長さ一三〇

メートル、高さ二五メートルの大きな弧で出来ていて、その両端に各一五メートルの長さの桁（橋台）が一つずつあって、これが埋め立て道路と橋床を繋いでいる。

この橋の建設のため、河の両岸に木材で造った櫓が建てられた。これは主に多くの工事用又は弧を造るときの型枠材の吊り下げや、揚げ降ろしに使用する太い鋼のケーブルを操作する支柱として役立つものであった。

弧へ流し込むコンクリートの運搬は、前以て木材で造られた型枠の縁に取り付けられたレール上を小さいトロッコを往復させて運んだ。

最後に橋床（人や車の通る所）の工事が始まったが、この時にはもう件の櫓は利用せず、直接、既に出来上がっていた弧から、多くの型枠を降ろして作って行った。

この橋を終えるにあたって、一九三五年六月二六日の記者会見で、この工事の完成まで体験した数々の困難を自ら語られた木村貫一郎氏のことを紹介したい。

木村貫一郎氏は当時、既に七五才以上になられていて、日本では引退されていた技師であった。未だ病後の療養中であったにも拘わらず、会社(ブラ拓)の依頼をうけて工事の監督にここへやってこられた。

氏は技師であると同時に、詩人でもあり、又エスペラント語をよくされた。アリアンサの教養人であると共に、日ポ両語の先生でもあった。

私の最初のポ語の教師で、アリアンサ在住六ケ月間、即ち私が後にペレイラ・バレットという大きな郡になったチエテ耕地へ移

るまで一生徒として教えを受けた。
ここで彼が橋の竣工記念日に記者団に語ったことを引用して見よう。
「私は未だ療養中の身でありましたが、もう工事が始まっていたので、その監督（ブラ拓側の）として工事に協力するため、一九三二年一一月四日ここへやって参りました。
その時、技師長はグスターボ氏でありました。
私がここに着いた時にはすでに、電動力発生用に、蒸気機関が据え付けられていました。　この動力で、ポンプや起重機、回転鋸、それに鋼のケーブルを巻き伸ばしたりする揚巻起重機などを運転しました。
基礎用の掘削工事では、殊に河の左側で、岩盤の層（八メートル）に出くわしたので、非常に苦労しました。その代わり、これは一面、橋の基礎を堅固にするという一つの得点を齎しました。
一九三二年の十月の末には、既に河の右側で雨季に入るまでの予想で基礎用の掘削を始めていましたが、前述のごとく、私は一一月の初めになってから着いたものですから、それからと言うもの、この厚い岩盤のお陰で工事が思うように捗りませんでした。その上絶え間無い河の増水の為に、基礎工事の堰囲が破れてそこへ浸水し、ポンプもこの大量の水には如何ともしがたく、一時工事中止という羽目になりました。この状態では到底、この一九三二年内に左側の工事を始めるまでには至りませんでした。
そこで我々は、増水期の終わるまで、それに関係のない陸上での仕事、つまり、櫓の建設工事にかかることにしました。
幸い、この仕事に必要な材木一切は、河の右側のブラ拓所有の

近くの森で、ふんだんに、しかも容易く手に入れることが出来ました。三四センチから五〇センチメートル位の太さのペローバ、イッペー、アンジッコなどの丸太の良材を利用しました。それぞれ切り組みなど手を加えられた材木は、一定の寸法に切断されて、木で作られた起重機（それでも丈夫で良く出来ていた）で、五四メートルの高さまで材木を揚げました。

我々は二つの櫓を、河の両岸に一つずつ建てました。それは天空に向かって聳えたつ巨大な素晴らしい景観でした。（ペレイラ・バレット現在唯一のオルテンシア・ビルよりも尚高かった）。

河の左側は大きな湿地帯になっていて、近くに材木がなかったため、用材の運搬に非常な苦労をしました。良質の粗い砂や破砕用石は工事現場の近くに豊富にありましたが、ただそれらを川底から採取するには、余り楽ではありませんでした。又、その辺の玄武岩を工事現場に据え付けられた破砕機にかけて、粉砕して使いました。

これらの原材料は、建設費低減に大いに貢献しました。

一方、ドイツ人で組織されていた請負会社は機械類や装備類も整っており、その上、この種の仕事にたいして長年の経験を持っておりました。

グスターボ技師は、主に技術面の管理を担当し、マルクス技師は人夫指導に精力的でありました。二人とも工事現場で働く者の皆に大変敬愛され、慕われていました。会計のサルバドール氏は財政面を担当し、努力家の上に、非常に注意深い律義な人で、一レースのお金もおろそかにしませんでした。

州政府は絶えず三～四人の者を工事の検分に派遣してきました

が、その中でも特にドミンゴ・テオドーロ技師とその一行が主なもので、最後の埋立工事が終わるまで屡々訪れてきました。ドミンゴ氏は中年の技師で、実に好感の持てる人でした。他の者は皆若く、学校卒業間もなくと言った連中でした。

大体工事が終わって、あの苦労して作った、巨大な櫓を潰したとき、我々は深い感慨に沈んだものでした。又この時、少なからざる人々から「この櫓はかような難工事の良き記念として、現場に保存して置くように」と願いが出された程でした。

多くの人がアラサツーバからマット・グロッソへ、或いはその反対に、ジュピア～アラサツーバへ向かう途中、ノロエステ線の汽車の窓から、くっきりと、遠くに白い橋の弧を望んで行きました。これこそ発展の象徴、誠にサンパウロ州奥地に咲いた技術の花であります。

そして終に本日、大いなる喜びと感激をもって、この誇るに足る橋の竣工をお祝いすることが出来ました。

私にとりましても、これが最後の仕事となるかと思い、全身全霊を打ち込んで参った積もりであります。

若しこの素晴らしい橋が、我々移民を両手を広げて迎えてくれた、この輝かしいブラジルの、この地方の進歩と発展の、幾分かのお役に立つことができれば、私の満足はこの上ないものでありましょう」。

この偉大なる老師匠は、一九三八年、六月三〇日にサンパウロで亡くなった。それはこの橋の竣工日から三年と一日後であった。

この橋が出来てから既に半世紀、その間、このウルブプンガ地方の発展に寄与してきた功績は大きい。当時の建設請負会社は、

橋の健在を三〇年間保証したが、橋は未だに堅固である。

今、この歴史的な、又誇るべき橋が近い将来、トレース・イルモンスの工事完成と相俟って水没し、その結果、ブラジルの中心部ともいうべき、この肥沃な三万五千アルケーレスに及ぶ土地までが犠牲になることに就いて、私はどうしても納得出来ないのである。

進歩は、時には歴史の一部、或いは民衆の誇りの一部を巻き込む。これが結局、新しい歴史、或いは新しい誇りの創造の前提になるかも知れないが。

一九八五年記

編集後記

トレース・イルモンス発電所のダム完成で、元チエテ移住地の肥沃な低地が浸水したのが一九九〇年であった。この浸水によって多くのチエテ人は昔を偲ぶよすがを失った。

あの移住地の象徴として長年私たちの親しんだノーボ・オリエンテ橋も、開拓の希望にもえて降り立った懐かしいルッサンビーラ駅も、永久に湖底にその姿を沈め、やがては曾てのチエテ移住地の存在も、世代の交代とともに忘れられて行くことであろうと言う一抹の寂しさがあった。

このような心情から、移住地時代の追憶を多方面に散在するチエテ出身者に綴っていただき、永く後世に伝えたいと企画したのがこの「思い出で綴るチエテ郷土史・拓魂のうた」である。この四〇名を越える開拓体験者たちの生活史こそ、当時の移住地の実情をつたえる立派なブラジル移民史と思われるのである。

一時は無謀とも思われたこの企画が、多くのチエテ出身者のご理解によって滞りなく編集を終えたことに、なにか重い荷を肩からおろしたような解放感に浸っている。またこの編纂にあたって全面的に協力を惜しまなかった岡井二郎氏に心から感謝している。とくにポ訳編はすべて彼の努力によるもので、これにより多くのチエテ出身者の末裔たちに移住地のルーツを伝えることができる喜びを噛み締めている。

また、貴重な当時の写真を提供してくださった木村稲、山中三郎、高山晴郎諸氏にもお礼申し上げます。

今回の企画に寄稿者として御協力いただいた八木修平、菅井進一、土屋一治、湯朝信助諸氏が完成をみずに他界されたことは本当に残念だった。心からご冥福を祈る。

香　山　栄　一

思い出で綴るチエテ郷土史
拓魂のうた
印刷一九九七年十月二十七日
発行一九九七年十一月〇一日

編集者　香山　栄一
翻訳　岡井　二郎
発行者　「拓魂のうた」発刊委員会

発行所　日伯毎日新聞社企画室
印刷・製本パウロス美術印刷